

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第210集

讚良郡条里遺跡Ⅹ

寝屋川市

讚良郡条里遺跡Ⅹ

寝屋川北部地下河川讚良立坑築造工事に伴う発掘調査報告書

二〇一一年一月

財団法人
大阪府文化財センター

2011年1月

財団法人 大阪府文化財センター

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第210集

寝屋川市

讃良郡条里遺跡 X

寝屋川北部地下河川讃良立坑築造工事に伴う発掘調査報告書

財団法人 大阪府文化財センター

序 文

讃良郡条里遺跡は、大阪府寝屋川市、四條畷市にまたがる縄文時代から近世にかけての複合遺跡で、地表には条里地割が良好に残る広大な遺跡です。

この遺跡の周辺は、日本書紀等に記載された「河内馬飼」とよばれる渡来系氏族との関わりが深い地域であります。渡来系氏族が持ち込んだとされる文化は古墳時代以降の手工業生産や生活様式などの社会的な側面に大きな影響を与えています。

本書で報告する讃良郡条里遺跡 09 - 1 の調査では、古墳時代中期から近世にいたるまでの土地利用の変遷が明らかになりました。とりわけ古墳時代中期は竪穴建物、掘立柱建物を初めとした多くの遺構が見つかり、集落の様相を明らかにすることができました。韓式系土器などの渡来系人に関わるものや、製塩土器など馬飼を想像させるものも多数出土しております。

これまでに調査地北側を北東から南西に縦断する第二京阪道路の建設にともない広い範囲で発掘調査が行われ、古墳時代や古代の集落が見つかるなど大きな成果をあげています。そして、調査地南東に位置する蔀屋北遺跡での発掘調査では、古墳時代中期から後期にかけての大規模な集落が見つかっていません。ここでは韓式系土器、製塩土器、馬の骨や馬具なども多く出土しており、今回の調査地と集落を営んだ人々の特徴に共通性が認められます。

今回の調査地で見つかった古墳時代の集落は、これまでの讃良郡条里遺跡や蔀屋北遺跡の調査で確認された集落を結びつける成果となり、周辺地域における歴史を解明するうえで重要な資料といえます。

このような調査成果も、多くの方々のご理解があっはじめて得られるものであります。大阪府寝屋川水系改修工営所をはじめとする関係機関の方々にはご協力を賜り、また大阪府教育委員会、寝屋川市教育委員会、寝屋川市堀溝自治会、そして地元住民の皆様からは調査の実施にあたりご指導とご配慮をいただきました。深く感謝申し上げますとともに、今後とも文化財の保護に一層のご理解を賜りますよう、お願いいたします。

平成 23 年 1 月

財団法人 大阪府文化財センター

理事長 水 野 正 好

例 言

1. 本書は大阪府寝屋川市讃良東町に所在する、讃良郡条里（さらぐんじょうり）遺跡 09－1 発掘調査報告書である。
2. 調査は大阪府寝屋川水系改修工営所の委託を受け、大阪府教育委員会の指導のもと、財団法人大阪府文化財センターが実施した。現地調査および報告書作成にかかわる受託契約と契約期間は以下のとおりである。
受託事業契約名 寝屋川北部地下河川 讃良立坑築造工事に伴う讃良郡条里遺跡発掘調査
受託契約期間 平成 21 年 10 月 26 日から平成 23 年 1 月 31 日
現地調査を平成 21 年 11 月 2 日に開始し、平成 22 年 4 月 30 日に終了した。整理作業は平成 22 年 5 月 6 日から同年 10 月 29 日まで行い、平成 23 年 1 月 31 日に本書の刊行をもって事業を完了した。
3. 本事業の実施体制は以下のとおりである。
平成 21 年度 調査部長兼調査課長 福田英人、調整グループ長 金光正裕、
調査グループ長 寺川史郎、主査 片山彰一、京阪総括主査 三好孝一、技師 福佐美智子、
専門調査員 小林千夏
平成 22 年度 調査部長兼調査課長 福田英人、調整グループ長 江浦 洋、
調整グループ主幹 岡本茂史、調査グループ長 岡戸哲紀、主査 片山彰一、
京阪総括主査 三好孝一、技師 福佐美智子、専門調査員 小林千夏
4. 調査の実施にあたっては、大阪府寝屋川水系改修工営所、大阪府教育委員会、寝屋川市教育委員会、寝屋川市堀溝自治会をはじめとする、関係各位からご協力を得た。記して感謝の意を表します。
5. 本報告書作成に際し以下の自然科学分析に関する玉稿を賜り、第 5 章に掲載させていただいた。
丸山真史（独立行政法人 国立文化財機構 奈良文化財研究所 埋蔵文化財センター 環境考古学研究室）
6. 調査にあたり、種実同定等の植物遺体分析をパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。
7. 現地での写真撮影は福佐・小林が行った。遺物写真撮影は片山が担当した。
8. 本書の編集は福佐・小林が担当した。執筆分担は目次に記すとおりである。
9. 出土遺物ならびに実測図、写真などの各種資料は当センターで保管している。広く活用されることを希望する。

凡 例

1. 遺構および断面図の標高は、東京湾平均海面（T.P.）を基準とする表示である。数値はすべてメートル単位である。
2. 調査並びに本書における使用測地系は、世界測地系（測地成果 2000）に基づく国土座標第Ⅵ系である。座標数値はすべてメートル単位であるが、図中では単位を省略している。
3. 本書に掲載した遺構実測図に付した北方位はすべて座標北を示す。
4. 発掘調査及び整理事業の実施に際しては、当センター制定の『遺跡調査基本マニュアル【暫定版】』（2003年8月）に準拠した。遺物取り上げなどに使用した地区割りは、第Ⅰ区画はⅠ6、第Ⅱ区画はⅡ15である。
5. 地層および土器の色調表示は、小山正忠・竹原秀雄編『新版 標準土色帖』2006年版 農林水産省農林水産技術会議事務局 監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修を用いた。
6. 本書に用いる遺構名称は調査区・遺構面・遺構種類にかかわらず通し番号を付けた。遺構名称は番号の後に遺構種類を表記した。また掘立柱建物など複数の遺構が集合した遺構に関しては遺構種類名称の後に番号を用いた。この番号は通し番号とは異なる、掘立柱建物など遺構ごとの番号となる。
7. 各挿図の縮尺はそれぞれの図にスケールバーを付している。遺物挿図の縮尺は、土器4分の1として、金属製品・石製品などについては、必要に応じて異なる縮尺を用いた。
8. 遺構図における断面位置は任意に行い、平面図に「—」を記し、その位置を明示した。遺物実測図は調整が変化する境を1点破線で、稜線を2点破線で表した。須恵器の回転ヘラケズリは境を実線、単位を1点破線で表した。
9. 遺物番号は本文・挿図・図版すべてに一致する通し番号である。
10. 遺構・遺物の記述に関しては、以下の文献を参考にした。
平安学園考古学クラブ 1966 『陶邑古窯址群Ⅰ』
古代の土器研究会編 1992 『古代の土器Ⅰ 都城の土器集成』
古代の土器研究会編 1993 『古代の土器Ⅱ 都城の土器集成Ⅱ』
古代の土器研究会編 1994 『古代の土器Ⅲ 都城の土器集成Ⅲ』
中世土器研究会編 1995 『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社
九州近世陶磁学会編 2000 『九州陶磁の編年—九州近世陶磁学会 10周年記念』

目 次

序文

例言

凡例

目次

第1章 調査に至る経緯と経過	(福佐 美智子)	1
第2章 調査の方法	(福佐)	3
第3章 位置と環境		
第1節 地理的環境	(小林 千夏)	5
第2節 歴史的環境	(小林)	5
第3節 既往の調査	(小林)	7
第4章 調査の成果		
第1節 層序	(福佐)	9
第2節 第4面	(福佐・小林)	12
第3節 第3・2面	(福佐)	77
第4節 第1面	(小林)	85
第5章 自然科学分析		
第1節 分析の目的	(福佐)	87
第2節 讃良郡条里遺跡から出土した動物遺存体	(丸山 真史)	88
第3節 讃良郡条里遺跡(讃良立坑)の大型植物遺体同定	(パリノ・サーヴェイ株式会社)	90
第6章 総括	(福佐・小林)	101
掲載遺物一覧表		
報告書抄録		

挿 図 目 次

図1 調査位置図	1
図2 地区割りの方法	3
図3 調査区地区割り図	4
図4 讃良郡条里遺跡と周辺の遺跡	6
図5 1区南北断面図	10
図6 1区東西断面図	11
図7 2区断面図	12
図8 第4面 全体図	13～14
図9 竪穴建物1 平・断面図	15
図10 竪穴建物1 出土遺物実測図	16

図 11 竪穴建物 2 平・断面図、及び竈 平・断面図	17
図 12 竪穴建物 2 出土遺物実測図	18
図 13 竪穴建物 3 平・断面図	19 ~ 20
図 14 竪穴建物 3 竈 平・断面図	21
図 15 竪穴建物 3 竈掘方 平面図	22
図 16 竪穴建物 3 掘方 平・断面図	23
図 17 竪穴建物 3 出土遺物実測図	24
図 18 竪穴建物 4 平・断面図	25
図 19 竪穴建物 4 竈 平・断面図	26
図 20 竪穴建物 4 掘方 平・断面図	27
図 21 竪穴建物 4 出土遺物実測図	27
図 22 竪穴建物 5 平・断面図	28
図 23 竪穴建物 5 竈 平・断面図	29
図 24 竪穴建物 5 竈 平面図	30
図 25 竪穴建物 5 出土遺物実測図	30
図 26 掘立柱建物 1 平・断面図、及び 113 柱穴 遺物出土状況図	31 ~ 32
図 27 掘立柱建物 1 出土遺物実測図	33
図 28 掘立柱建物 2 平・断面図	33
図 29 掘立柱建物 3 平・断面図	34
図 30 掘立柱建物 4 平・断面図	35
図 31 掘立柱建物 5 平・断面図	37
図 32 掘立柱建物 6 平・断面図	38
図 33 掘立柱建物 5・6 出土遺物実測図	38
図 34 掘立柱建物 7・72 溝 平・断面図	39
図 35 72 溝 出土遺物実測図	40
図 36 柵列 1 平・断面図	40
図 37 149・285・348 柱穴、47・235・240・286 ピット 平・断面図	41
図 38 149・285 柱穴、47・235・240・286 ピット 出土遺物実測図	41
図 39 51 井戸 平・断面図	42
図 40 36・54・55・70・71 土坑 平・断面図	44
図 41 54・71 土坑 出土遺物実測図	45
図 42 74・78・80 土坑 平・断面図	46
図 43 78・80 土坑 出土遺物実測図	47
図 44 81・87・88・90 土坑 平・断面図	48
図 45 81・87・90 土坑 出土遺物実測図	49
図 46 93・103 土坑 平・断面図	50
図 47 181・182 土坑 平・断面図	51
図 48 93・103・181・182 土坑 出土遺物実測図	52

図 49	203・218・222・257・263・295 土坑 平・断面図	54
図 51	257・263・295 土坑 出土遺物実測図	55
図 51	330・331・336・352・353・354 土坑平・断面図、及び遺物出土状況図	56
図 52	331・352・353・354 土坑 出土遺物実測図	57
図 53	359・363 土坑 平・断面図	58
図 54	363 土坑 出土遺物実測図	59
図 55	37・38 溝 平・断面図	60
図 56	60・61 溝 平・断面図、及び遺物出土状況・立面図（1）	61
図 57	60・61 溝 遺物出土状況・立面図（2）	62
図 58	60 溝 出土遺物実測図	63
図 59	61 溝 出土遺物実測図	63
図 60	62・63・96 溝 平・断面図	65
図 61	62 溝 遺物出土状況図	66
図 62	62 溝 出土遺物実測図	67
図 63	63 溝 出土遺物実測図	67
図 64	64・67・73・75 溝 平・断面図	69
図 65	76・77・82・85・98 溝 平・断面図、及び 85 溝 遺物出土状況図	71
図 66	86・89・91 溝 平・断面図	72
図 67	64・67・76・82・85・91 溝 出土遺物実測図	73
図 68	102 溝 平・断面図	74
図 69	第 6 層 出土遺物実測図	74
図 70	第 5－2 層 出土遺物実測図	75
図 71	第 3 面 全体図	77
図 72	第 2 面 全体図	78
図 73	14 井戸 平・断面図、及び編物出土状況図	79
図 74	14 井戸 出土遺物実測図	80
図 75	5 高まり 出土遺物実測図	81
図 76	6・7・9 畝状遺構、8・12・15・17・19 溝 断面図	82
図 77	15 溝 出土遺物実測図	82
図 78	第 5－1 層 出土遺物実測図	84
図 79	第 4－2 層 出土遺物実測図	85
図 80	第 1 面 全体図	85
図 81	1 溝 断面図	86
図 82	第 2－2 層 出土遺物実測図	86
図 83	第 2 面 分析地点図	87
図 84	讚良郡条里遺跡古墳時代遺構全体図	102
図 85	讚良郡条里遺跡奈良時代～平安時代遺構全体図	103
図 86	讚良郡条里遺跡・部屋北遺跡古墳時代遺構全体図	105

表 目 次

表 1	種名表	88
表 2	大型植物遺体同定分析試料一覧	90
表 3	大型植物遺体同定結果 (1)	92
表 4	大型植物遺体同定結果 (2)	93
表 5	大型植物遺体同定結果 (3)	94
表 6	大型植物遺体の形態学的特徴	95
表 7	マメ類種子の計測値	96
表 8	遺構・地点別の大型植物遺体の産状	97
表 9	イネ・コムギ・ムギ類出土数	104

写 真 目 次

写真 1	平安時代前期の馬歯	89
写真 2	大型植物遺体	100

写 真 図 版 目 次

図版 1	遺構	1. 調査地遠景 (西から)
		2. 1区 第4面 全景 (東から)
図版 2	遺構	1. 2区 第4面 東半全景 (東から)
		2. 2区 第4面 西半全景 (西から)
図版 3	遺構	1. 1区 第4面 竪穴建物群 (東から)
		2. 2区 第4面 竪穴建物 1 (南から)
図版 4	遺構	1. 2区 第4面 竪穴建物 2 (北西から)
		2. 2区 第4面 竪穴建物 2 竈 (南から)
		3. 2区 第4面 竪穴建物 2 21土坑 断面 (北から)
図版 5	遺構	1. 1区 第4面 竪穴建物 3 (東から)
		2. 2区 第4面 竪穴建物 3 (南から)
図版 6	遺構	1. 1区 第4面 竪穴建物 3 遺物出土状況 (東から)
		2. 1区 第4面 竪穴建物 3 竈検出状況 (南から)
図版 7	遺構	1. 1区 第4面 竪穴建物 3 竈 (南から)
		2. 1区 第4面 竪穴建物 3 完掘状況 (東から)
		3. 2区 第4面 竪穴建物 3 完掘状況 (南西から)
図版 8	遺構	1. 1区 第4面 竪穴建物 4 遺物出土状況 (東から)
		2. 1区 第4面 竪穴建物 5 (南東から)
図版 9	遺構	1. 1区 第4面 竪穴建物 4 竈検出状況 (南から)

2. 1区 第4面 竪穴建物4 竈（南から）
 3. 1区 第4面 竪穴建物5 竈検出状況（南から）
- 図版 10 遺構 1. 1区 第4面 竪穴建物5 竈（南から）
 2. 1区 第4面 竪穴建物5 347土坑 遺物出土状況（南から）
 3. 1区 第4面 竪穴建物4・5 完掘状況（西から）
- 図版 11 遺構 1. 1区 第4面 掘立柱建物1（西から）
 2. 掘立柱建物1 107柱穴 断面（南から）
 3. 掘立柱建物1 107柱穴 柱検出状況（南から）
 4. 掘立柱建物1 118柱穴 断面（北西から）
 5. 掘立柱建物1 113柱穴 土器出土状況（北から）
- 図版 12 遺構 1. 1区 第4面 掘立柱建物1 完掘状況（西から）
 2. 1区 第4面 掘立柱建物2 完掘状況（西から）
 3. 1区 第4面 掘立柱建物3（南から）
- 図版 13 遺構 1. 1区 第4面 掘立柱建物5、柵列1（西から）
 2. 掘立柱建物4 312柱穴 断面（西から）
 3. 掘立柱建物5 184柱穴 断面（西から）
 4. 掘立柱建物5 191柱穴 断面（南から）
 5. 掘立柱建物5 187柱穴 断面（北から）
- 図版 14 遺構 1. 1区 第4面 51井戸（南から）
 2. 1区 第4面 51井戸 断面（南から）
 3. 1区 第4面 257土坑 製塩土器出土状況（西から）
- 図版 15 遺構 1. 1区 第4面 60・61溝、62・63溝 全景（東から）
 2. 1区 第4面 60溝 土器出土状況（北から）
 3. 1区 第4面 60・61溝 土器出土状況（南から）
 4. 1区 第4面 60溝 土器出土状況（西から）
 5. 1区 第4面 61溝 土器出土状況（南から）
- 図版 16 遺構 1. 1区 第4面 60溝 断面（東から）
 2. 1区 第4面 61溝 断面（西から）
 3. 1区 第4面 62溝 土器出土状況（南東から）
 4. 1区 第4面 62溝 断面（南から）
 5. 1区 第4面 63・96溝 断面（南から）
 6. 1区 第4面 102溝（南東から）
 7. 1区 第4面 102溝 炭出土状況（西から）
 8. 1区 第4面 102溝 断面（東から）
- 図版 17 遺構 1. 1区 第3面 5高まり、14井戸、17溝（南東から）
 2. 1区 第3面 5高まり、15・17溝（南西から）
 3. 1区 第3面 15溝と耕作痕（南から）
- 図版 18 遺構 1. 1区 第3面 14井戸（南から）

- 2. 1区 第3面 14井戸 断面（南から）
- 3. 1区 第3面 14井戸 編物出土状況（北から）
- 図版 19 遺構
 - 1. 1区 第2面 全景（東から）
 - 2. 2区 第2面 全景（西から）
- 図版 20 遺構
 - 1. 1区 第2面 5高まり、14井戸（南東から）
 - 2. 1区 第2面 6・7畝、8溝（北から）
 - 3. 2区 第2面 19溝（東から）
- 図版 21 遺構
 - 1. 1区 第1面 全景（西から）
 - 2. 1区 第1面 1溝（西から）
 - 3. 1区 第1面 1溝 断面（西から）
 - 4. 2区 東壁断面（西から）
 - 5. 1区 東西断面6層以下（南東から）
- 図版 22 遺物
- 図版 23 遺物
- 図版 24 遺物
- 図版 25 遺物
- 図版 26 遺物
- 図版 27 遺物

第1章 調査に至る経緯と経過

今回の調査（図1）は寝屋川北部地下河川讚良立坑築造工事に先立ち、立坑築造箇所及び下水管渠移設箇所を対象として実施した。この事業は大阪府の「寝屋川流域整備計画」に基づき行われている総合治水対策の一環である。地下河川とは密集市街地のように河川の拡幅や新たな河川の開削が困難な場所において、道路等の公共施設の地下空間を有効に利用し流域外の河川に放流するものである。現在大阪府では寝屋川流域の北部と南部にそれぞれ延長約11km、約13kmの2本の地下河川工事を進めており、讚良立坑はそのうち寝屋川北部の最上流部にあたる。立坑はこの地下河川を掘削するための設備の出入口であり、完成した後は周辺河川が増水した際の地下河川への放流と暫定貯留を目的とする施設である。

この工事対象地は周知の埋蔵文化財包蔵地である讚良郡条里遺跡にあたる。遺跡は縄文時代から中世の複合遺跡で、現地表面には条里型地割が良好に残存している。調査地の北側を通る第二京阪道路建設に先立つ調査では、縄文時代後期の石器製作跡や弥生時代前期、弥生時代後期から古墳時代初頭、古墳時代中期から後期にかけての集落跡や古代の掘立柱建物が検出されている。

このように、これまでの調査で縄文時代から中世まで多くの遺構や遺物が検出されている地域であるため、大阪府寝屋川水系改修工営所は平成21年3月17日に大阪府教育委員会に対して取り扱いを協議し、記録保存のための発掘調査を行うことになった。大阪府教育委員会は財団法人大阪府文化財センターに対し、平成21年3月27日に調査の実施を通知し、平成21年5月1日に大阪府寝屋川水系改修工営所・大阪府教育委員会・財団法人大阪府文化財センターは調査に関する覚書を締結した。これに

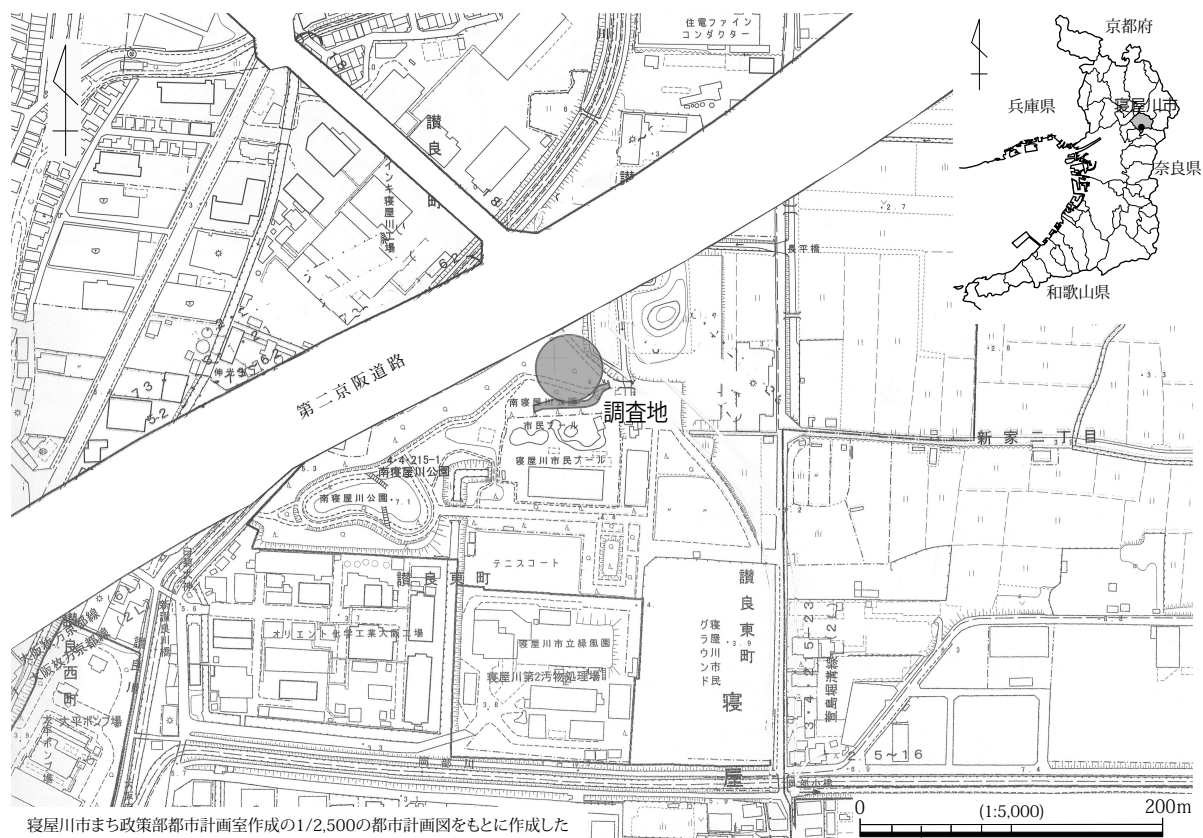


図1 調査位置図

より、大阪府教育委員会と財団法人大阪府文化財センターが発掘調査を実施することになり、文化財保護法第99条第1項の規定により、大阪府教育委員会は平成21年10月2日付教委文2234号として埋蔵文化財発掘調査の通知を行った。

財団法人大阪府文化財センターは平成21年10月26日に寝屋川北部地下河川讃良立坑築造工事に伴う讃良郡条里遺跡発掘調査の委託契約を大阪府寝屋川水系改修工営所と締結した。契約期間は平成21年10月26日から平成22年11月30日である。調査の工程は、現地調査が平成21年11月1日から平成22年3月31日、遺物整理が平成22年4月1日から平成22年11月30日とした。

その後、立坑築造区内に埋設されていた下水管渠を移設する必要が生じたため、下水管渠移設箇所について、大阪府寝屋川水系改修工営所より平成21年12月16日に大阪府教育委員会に対して調査を依頼し、同教育委員会から財団法人大阪府文化財センターに対し、平成21年12月24日に調査実施が通知され、平成21年1月15日に覚書の変更を行った。これにより、大阪府教育委員会と財団法人大阪府文化財センターが発掘調査を実施することになり、文化財保護法第99条第1項の規定により、大阪府教育委員会が平成21年12月28日付教委文2793号として埋蔵文化財発掘調査の通知を行った。これに伴って財団法人大阪府文化財センターと大阪府寝屋川水系改修工営所は委託契約を変更し、契約期間を平成21年10月26日から平成23年1月31日までとした。調査の工程は、現地調査が平成21年11月2日から平成22年4月30日、遺物整理が平成22年5月1日から平成23年1月31日である。

立坑築造区（1区）の調査を平成21年11月2日から開始した。1区の調査面積は1538㎡である。まず機械により現地表面から盛り土を約2.7m除去し、さらに近現代耕作土層を約0.2m掘削した。その後11月19日よりT.P. + 2.1mから人力による掘削を行った。遺構面は近世の遺構面を第1面とし、平安時代の遺構面である第2面において平成22年1月20日に1回目の航空写真測量及び高所作業車を用いた撮影を行った。

その後、立坑築造区に埋設されていた下水管渠を移設する必要が生じたため、調査工程を変更し1区の調査を中断し、2月22日から下水管移設地（2区）調査を開始した。調査面積は248㎡である。調査は1区と同様に、盛り土及び近現代耕作土は機械を用い掘削した。そして人力による掘削をT.P. + 2.1mから行った。近世の遺構面を第1面とし、クレーンによる写真測量及び高所作業車による撮影を3月17日に第2面、3月29日に第4面において行った。3月29日に大阪府教育委員会文化財保護課の立会を受け、2区の調査は4月5日に終了した。

1区の調査は3月26日から再開し、4月15日に第4面において4回目の航空写真測量及び高所作業車による撮影を行った。4月16日に大阪府教育委員会文化財保護課の立会を受けた。4月17日には一般市民を対象とした現地公開を実施し、第4面の古墳時代中期から後期の遺構・遺物を公開した。現地公開には205人の参加者があり、特に寝屋川・四條畷市内の方々が60.0%を占め地元の方々に多く来場していただき、盛況のうちに終えた。その後、現地での調査を引き続き行い、4月30日にすべての作業を終了した。

現地調査終了後、5月6日から京阪調査事務所において報告書作成作業を行った。台帳は図面台帳・遺物登録台帳・写真台帳の作成を行った。遺構については挿図を作成し、出土遺物については抽出や接合・復元を行った。抽出した遺物については実測図を作成した後、写真撮影を行い、本報告書に掲載した。脆弱な遺物については保存処理を行った。10月29日に作業を終了し、報告書の印刷・製本を行った。

第2章 調査の方法

発掘調査は『遺跡調査基本マニュアル【暫定版】』（(財)大阪府文化財センター 2003）に基づいて実施した。調査名は「讃良郡条里遺跡 09 - 1」とし、調査区は讃良立坑築造箇所を1区とし、下水管渠移設箇所を2区とした。

地区割り 世界測地系（測地成果 2000）の国土座標（第VI座標系）に則り地区割りをを行った。区画の設定は図2に示したように行った。第I区画は「I 6」、第II区画は「15」、第III区画は「3 K・3 L」、第IV区画は第III区画を10 m単位に区画し、「1 a」という表示になる。遺物の取り上げはこの第IV区画を基準として行った（図3）。

遺構番号 遺構番号は調査区、遺構面にかかわらず通し番号を付しており、「53 溝」のように番号の後に遺構種類名称を用いた。また掘立柱建物など複数の遺構が集合した遺構に関しては遺構種類名称の後に番号を用いた。この番号は通し番号とは異なり、掘立柱建物など遺構ごとの番号となる。

掘削 現代盛り土・近現代耕作土をバックホウによって除去し、その下から地層の掘削及び遺構検出を人力により行った。その際1区では、調査区中央を南北方向（Y = - 34,340 mライン）、東西方向（X = - 139,110 mライン）に、2区では1区での南北方向を延長した方向と東壁、西壁で地層観察のためにアゼを残し、随時断面観察記録を行いながら断面図を作成した。

平面調査は近世の遺構面を第1面とし、古墳時代中期から後期の遺構面である第4面まで、計4面の調査を行った。

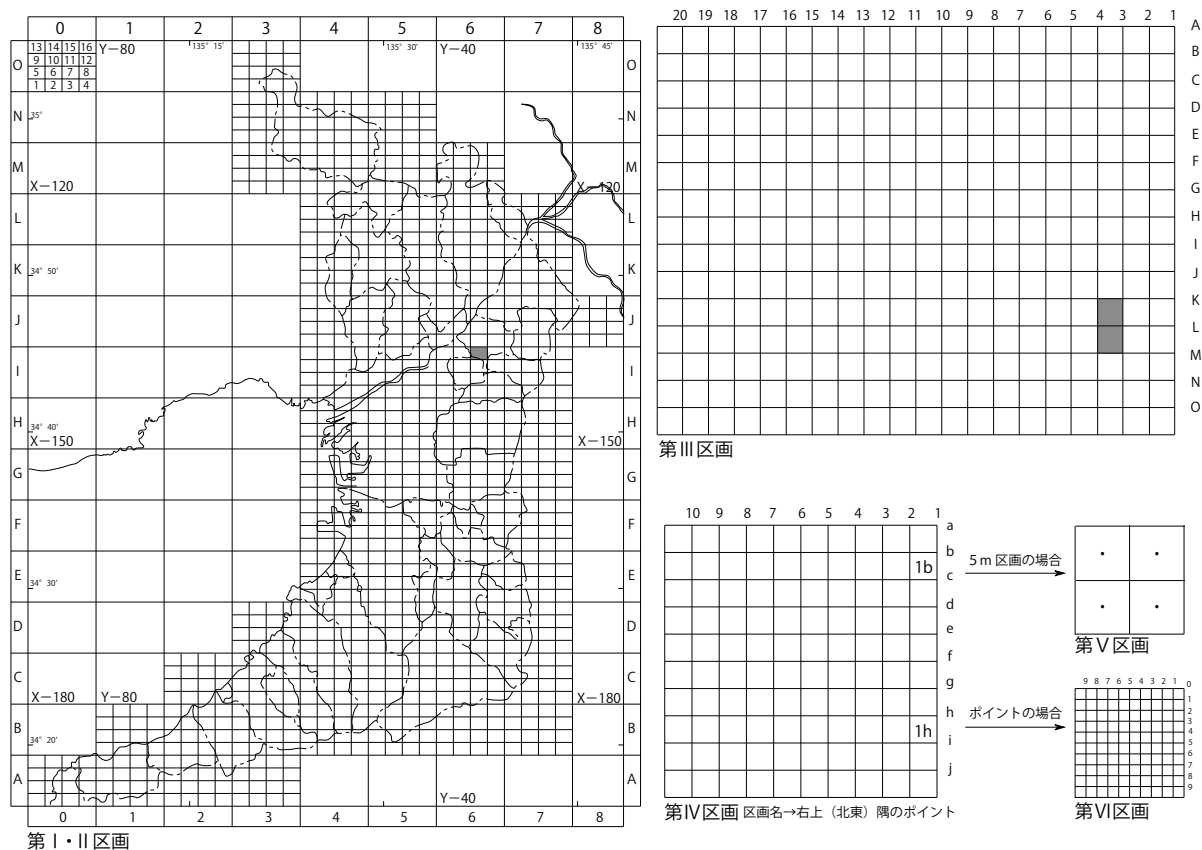


図2 地区割りの方法

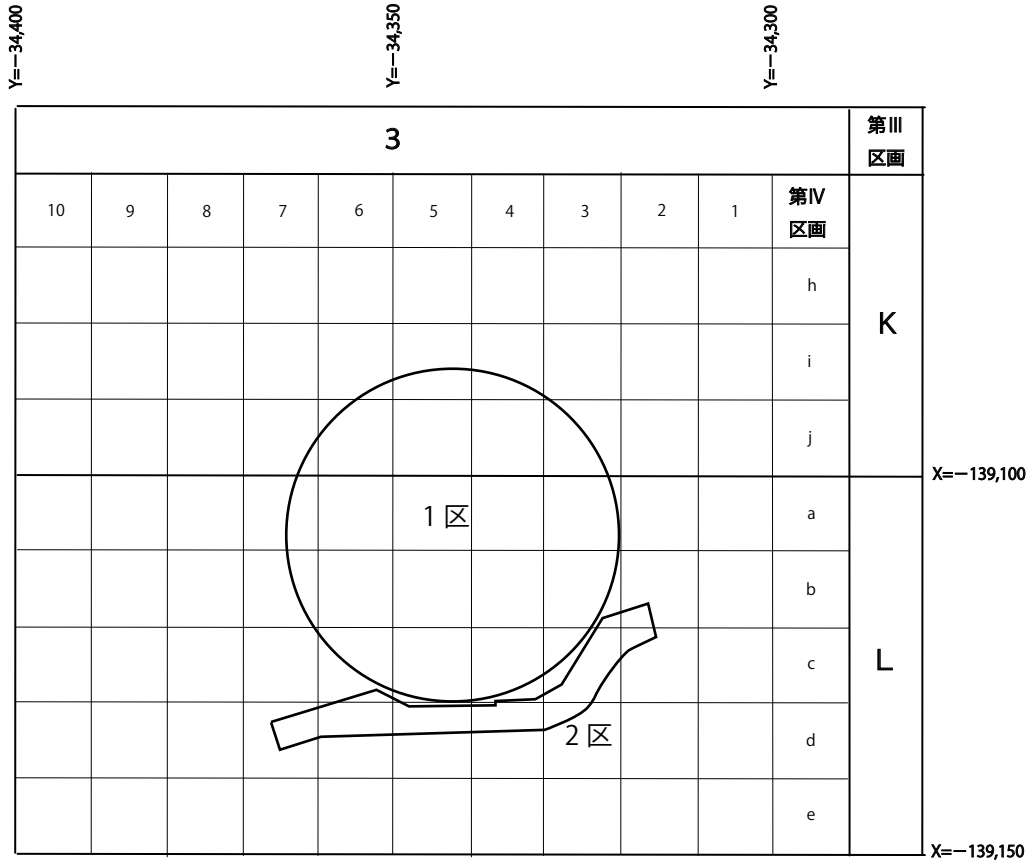


図3 調査区地区割り図

測量 遺構が良好に遺存する第2面・第4面においてはヘリコプターやクレーンによる写真測量を実施し、50分の1縮尺の平面図を作成した。その他の遺構面については平板を用いた測量を行った。各遺構面から検出された遺構は遺構平面図・遺物出土状況図・断面図を必要に応じて作成した。合わせて写真による記録も行った。写真撮影は6×7カメラ（白黒・カラーリバーサル）、35ミリカメラ（白黒・カラーリバーサル）、デジタルカメラを用いた。

土壌洗浄 第2面においては検出した遺構の耕作土を栽培植物の特定のため、種子の検出を目的としサンプリングを行った。

第4面においては検出した堅穴建物・溝・土坑の埋土の一部を微細遺物の検出のためにサンプリングし、土壌洗浄を行った。

自然科学分析 第2面から出土した獣骨と、上記の土壌洗浄により第4面の堅穴建物3から出土した動物遺体の同定を行った。そして第2面の耕作土や第4面の堅穴建物・土坑・溝の埋土からは、上記の土壌洗浄により種実が出土したため、種実同定を行った。

分析結果は第5章に掲載するとともに、本文中でも遺構ごとに記述した。

第3章 位置と環境

第1節 地理的環境

讃良郡条里遺跡は寝屋川市と四条畷市にまたがって所在し、条里制地割が良好に残存した東西約1.6km、南北約2.6kmの広大な範囲を有する。今回の調査地は寝屋川市讃良東町に所在し、遺跡の南西部にあたる。

遺跡は河内平野の北東端に位置する。枚方丘陵から西に扇状地や沖積地が広がり、讃良郡条里遺跡の範囲内は多様な地形が見られる。今回の調査地周辺は後背湿地域に含まれる。

調査地の北にある讃良川による自然堤防状の高まりは、讃良郡条里遺跡03-3の調査によって、中世末から近世初め頃以降に形成されたことが明らかになった。南に見られる高まりは、岡部川によって中世から近世に形成されたものである。これらの高まりに挟まれ、調査地は周辺よりやや低い場所に位置していた。

第2節 歴史的環境

讃良郡条里遺跡の範囲内や周辺には、旧石器時代から近世にいたる多くの遺跡が所在する。第二京阪道路の建設に伴う近年の発掘調査によって、丘陵部だけでなく沖積平野地域にも遺跡が数多く存在することが明らかになってきた。

旧石器時代 太秦遺跡、高宮遺跡、讃良川遺跡、讃良川河床遺跡など国府型ナイフ石器が出土し、忍ヶ丘駅前遺跡、南山下遺跡、岡山南遺跡での有舌尖頭器や木葉状尖頭器が出土している。

縄文時代 讃良郡条里遺跡は土器や石器が草創期から晩期を通じて出土している。遺構では中期の焼き火跡や流路、後期の石器製作場跡が確認されている。高宮遺跡は前期の土器が出土し、讃良川遺跡では中期のドンダリの貯蔵穴を検出している。砂遺跡では中期から晩期にかけての土器や石器が出土している。高宮八丁遺跡、長保寺遺跡では晩期の土器が出土している。

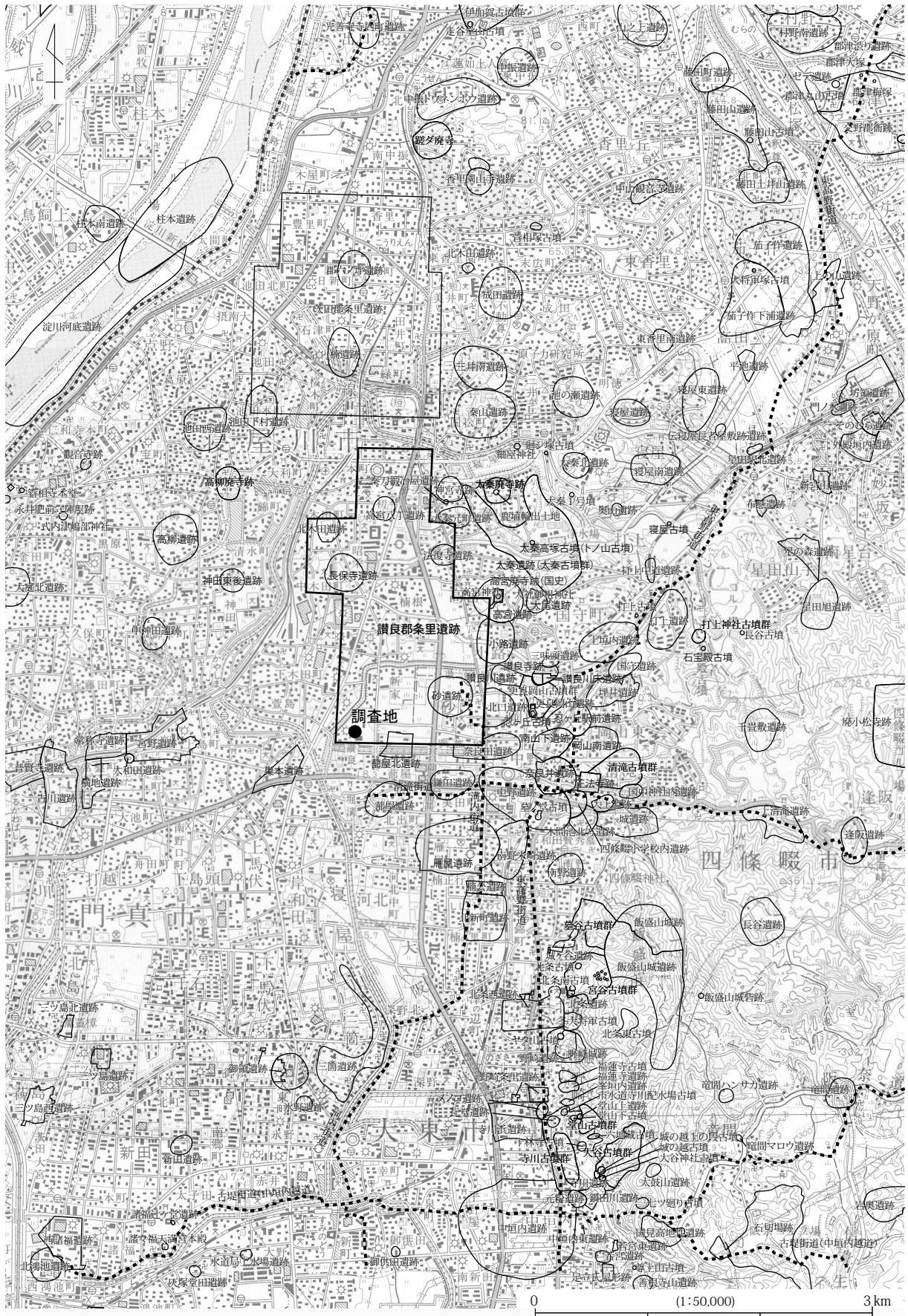
弥生時代 讃良郡条里遺跡の調査では前期から中期にかけての水田や中期から後期の集落跡が確認されている。高宮八丁遺跡では前期から中期の集落が確認されている。長保寺遺跡では前期から後期の土器が出土し、高宮八丁遺跡に続く集落の可能性もある。雁屋遺跡では前期から中期の集落が見つかる。大尾遺跡で中期後半の方形周溝墓が30基確認され、太秦遺跡では同時期の集落が確認されている。

古墳時代 前期では、全長87mの前方後円墳である忍ヶ丘古墳があり、小路遺跡で周溝墓群が確認されている。中期には初期群集墳とされる太秦古墳群や直径37mの太秦高塚古墳が築造される。集落も数多く確認されており、高宮遺跡で竪穴建物群を検出している。葎屋北遺跡では中期から後期にかけての大規模な集落が営まれている。

後期は長保寺遺跡などで集落が続くようである。葎屋北遺跡や奈良井遺跡などでウマの骨が出土していることも、この地域で特徴的なことである。後期の古墳では寝屋古墳、終末期の石宝殿古墳がある。

奈良時代 讃良郡条里遺跡では方位に合わせた主軸をもつ建物跡や水田が確認されている。坪境付近からの出土遺物から、遺跡周辺における条里地割施工の初現期は奈良時代後半に考えられている。

古代寺院である太秦廃寺、高宮廃寺、讃良寺跡、正法寺跡が建立される。高宮廃寺の南に位置する高



ベースマップは国土地理院5万分の1地形図(大阪東北部)

図4 讀良郡条里遺跡と周辺の遺跡

宮遺跡では、大型の掘立柱建物が確認される。小路遺跡では流路から墨書土器や絵馬が出土している。

平安時代 巢本遺跡で集落域と生産域が確認されている。高柳遺跡や神田東後遺跡では集落跡が確認され、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器などが出土している。

鎌倉時代から江戸時代 巢本遺跡で平安時代に引き続き集落が営まれ、輸入磁器や墨書土器が出土している。大尾遺跡で室町時代の火葬墓が確認されている。讃良郡条里遺跡では、近世の広範に水田や畠など耕作地が確認されている。

文献史料においては、「讃良」という地名は、佐良々、更荒、沙羅々、更浦、更占、佐和良、早良などと綴られる。当地域の古代の豪族に早良臣がいる。早良臣は古事記に「平群都久弥者、佐和良等祖也」と登場する。新撰姓氏録河内国皇別条「額田首、佐良首同祖、平群木兎宿弥之後也」とあり、早良臣は額田首と祖を一にする。額田首は平群郡の馬の飼育に従事する首長であったが、早良臣の詳細は分かっていない。一方で渡来系氏族の佐良々連や宇努首、宇努造が当地域に登場する。とくに百済系の佐良々連は勢力をもっていたとされ、天武紀に「沙羅馬飼造、賜連姓」とあるが、その後のことは不詳である。

平安時代から鎌倉時代には藤原定家の『名月記』などの記事から、「讃良庄・讃良新庄」という荘園が讃良郡内ないし甲河郷（寝屋川市・四條畷市南部から大東市にかけての地域）に所在していたことが分かっている。

第3節 既往の調査

讃良郡条里遺跡は、これまで大阪府教育委員会、寝屋川市教育委員会、当センターによって発掘調査が行われている。この節では今回の調査地に隣接する、第二京阪道路の建設に伴い当センターが行った03-5、03-6、06-2、06-3の調査成果をとりあげる。

縄文時代晩期から弥生時代前期の集落、弥生時代中期の集落と水田が03-5の調査区で確認されているが、とくに古墳時代中期以降の遺構が広範囲にわたって確認されている。

古墳時代中期から後期の竪穴建物や掘立柱建物などが検出され、一帯に集落域が広がるようになった。03-6の調査で検出された落ち込みからは、大量の土器、木製品、鉄製品、ウマの骨が出土した。

奈良時代は、集落と耕作地が確認されている。03-6、06-3の調査では掘立柱建物群を確認している。耕作地には水田と畠地があり、畦畔や坪境が検出され、条里制地割が施工される。平安時代末ころから鎌倉時代には広い範囲で河川氾濫に伴う土砂が堆積している。近世からは再び耕作地となり、水田が広く確認され、03-5の調査区では島畠が確認されている。

近接して葎屋北遺跡が所在する。葎屋北遺跡は、なわて水環境保全センターの建設に伴い大阪府教育委員会によって発掘調査が行われている。古墳時代中期から後期を中心とする竪穴建物と掘立柱建物、井戸といった集落に伴う遺構が多数検出されている。特筆すべき点としては、土坑からウマー頭の全身の骨が出土したことに加え、木製鞍、木製鏡、製塩土器といった馬の飼育にかかわる遺物も出土したことである。文献史料に記載のある「河内馬飼」と関連深いとして注目された。ほかにも、製鉄や玉作りといった手工業にかかわる遺物が出土している。集落を形成した集団の性格に関連する遺物が特徴的であった。

これらの成果をふまえ、遺跡周辺に広範に認められる古墳時代中期から後期における集落の範囲や性格を確認することが今回の調査の主な目的となった。また、第二京阪道路調査に伴う03-6の発掘調

査で確認された古代の集落の範囲や性格、遺跡内の環境や遺構の変遷過程を確認することも今回の重要な目的である。

参考文献

- 泉本和秀・六辻彩香編 2006『小路遺跡Ⅲ』(財)大阪府文化財センター
- 一瀬和夫・合田幸美・小暮律子 2004『高宮遺跡―遺構編―』(財)大阪府文化財センター
- 市本芳三・松下知世 2006『太秦遺跡・太秦古墳群Ⅱ』(財)大阪府文化財センター
- 伊藤武ほか 2008『巢本遺跡Ⅱ』財団法人大阪府文化財センター
- 井上智博・多賀晴司 2003『讃良郡条里遺跡(その2)』(財)大阪府文化財センター
- 井上智博 2008『讃良郡条里遺跡Ⅵ』財団法人大阪府文化財センター
- 奥村茂樹・村田昌也 2008『讃良郡条里遺跡Ⅶ』財団法人大阪府文化財センター調査報告書第182集
- 黒須亜希子編 2003『讃良郡条里遺跡、寝屋南遺跡、寝屋東遺跡、倉治遺跡、津田城遺跡』(財)大阪府文化財センター
- 塩山則之・川畑聰 1989『神田東後遺跡』寝屋川市文化財資料13
- 四條畷市史教育委員会 1984『四條畷市史』四條畷市役所
- 田中龍男・島田裕弘 2004『小路遺跡(その2)』(財)大阪府文化財センター
- 辻裕司 2008『巢本遺跡Ⅰ』(財)大阪府文化財センター
- 中尾智行ほか 2009『讃良郡条里遺跡Ⅷ』(財)大阪府文化財センター
- 長戸満男 2004『讃良郡条里遺跡(その1)』(財)大阪府文化財センター
- 長戸満男 2004『小路遺跡(その1)』(財)大阪府文化財センター
- 寝屋川市史編纂委員会編 1966『寝屋川市史』寝屋川市
- 濱田延充 1991『高柳遺跡』寝屋川市文化財資料17
- 濱田延充編 1992『高宮八丁遺跡Ⅱ』寝屋川市文化財資料18 寝屋川市教育委員会
- 濱田延充 1993『長保寺遺跡』寝屋川市文化財資料19 寝屋川市教育委員会
- 別所秀高 2006『部屋北遺跡の古環境復元にむけた自然科学的調査の実践』『部屋北遺跡発掘調査概要Ⅳ―自然科学編―』大阪府教育委員会
- 前田義明 2004『讃良郡条里遺跡(その3)』財団法人大阪府文化財センター
- 宮崎泰史・藤田道子・岩瀬透・藤永正明編 2010『部屋北遺跡Ⅰ』大阪府教育委員会
- 森本徹編 2009『讃良郡条里遺跡Ⅸ』(財)大阪府文化財センター

第4章 調査の成果

第1節 層序

堆積層（図5・6・7、図版21）は近現代耕作土を第1層、人力掘削を開始した層を第2層とし、基盤層となる第7層の水成堆積層まで7層に分けられた。

遺構面は古墳時代から近世までの4面の調査を行った。

第1層 細砂混じりオリブ黒色粘土質シルトである。層厚は0.2 mである。層中にマンガン・鉄斑が多く沈着する。近代から現代に形成された水田耕作土層と考えられる。

第2層 3層に分けることができる。第2-1層は中砂から極粗砂がかなり混じるオリブ褐色シルト質砂の水田耕作土層である。層厚は0.1～0.2 mである。

この層からは18世紀後半の肥前染付磁器の碗や筒形碗が出土している。

第2-2層は第2-1層より極粗砂が少ない灰オリブ色シルト質砂の水田耕作土層である。層厚0.2～0.25 mである。層中にマンガン・鉄斑が多く沈着する。この層からは17世紀前半の瀬戸美濃天目茶碗が出土している。この第2-2層下面を第1面として調査した。

その下には水成堆積層である第2-3層が堆積する。灰色シルト質粘土で層厚は0.1 mである。

第3層 極細砂から中砂が混じる灰色シルト質粘土である。層厚は0.1～0.2 mである。植物の腐食により所々茶色がかかり、ラミナの見られる箇所がある。

第4層 2層に分けることができる。第4-1層は細砂混じり灰色粘土質シルトである。層厚は0.2～0.25 mである。この層は土壌化しているものの耕作を行った形跡はなく、葦と見られる植物遺体が多く見られることから湿地状態であったと考えられる。また地震による地層の変形も顕著に見られた。

第4-2層は第5-1層を覆うシルト質粘土の水成層である。層厚は0.1～0.15 mである。

この第4層からは少量の瓦器が出土しており、中世前半の堆積層と考えられる。

第5層 3層に分けられる。第5-1層は耕作土である。極細砂から粗砂の混じるオリブ黒色砂質シルトである。層厚は0.1～0.15 mである。水成堆積層である第4-2層に覆われていたため古土壌が良好に残存していると考え、この第5-1層上面を第2面として調査を行った。さらに第5-1層下面を第3面として調査した。2区の西端のみ第5-1層が2層に分かれ、これを第5-1'層とした。

第5-1層からは9世紀代の黒色土器や須恵器が出土している。

第5-2層は極細砂から細砂混じりオリブ灰色シルト質砂で、第5-1層に比べ砂質の強い耕作土である。層厚は0.05 mである。この第5-2層下面を第4面として調査を行った。

この層からは古墳時代中期から後期の土器が主体的に出土したが、8世紀後半の土器を包含するため、当該期の耕作土と考えられる。

第6層 極細砂から細砂混じりオリブ黒色シルト質砂である。層厚は0.05 mである。1区北側と東端の一部のみで確認できた。2区では第5-2層段階の耕作によって失われており残存しなかった。この第6層が残存した箇所ではこの第6層下面を第4面として調査を行った。

この層からは古墳時代中期から後期の土器が多く出土した。

第7層 暗オリブ灰色粘土から中砂の水成堆積層で、今回の調査の基盤層となる。

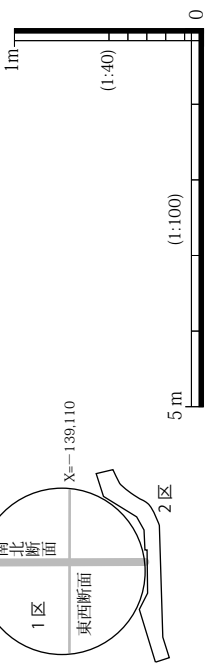
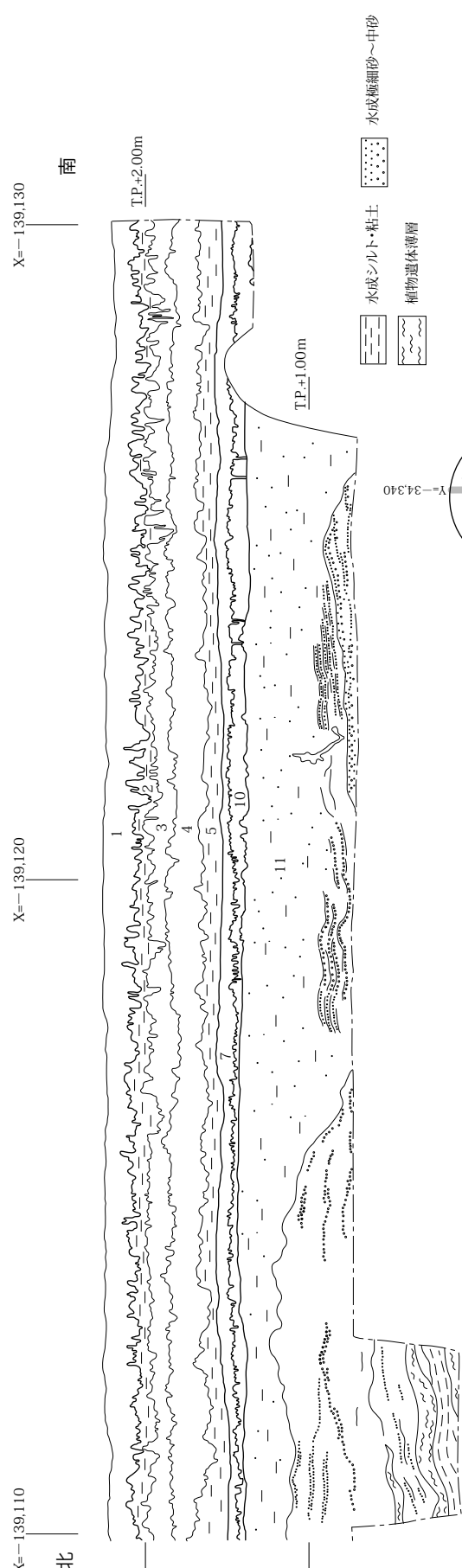
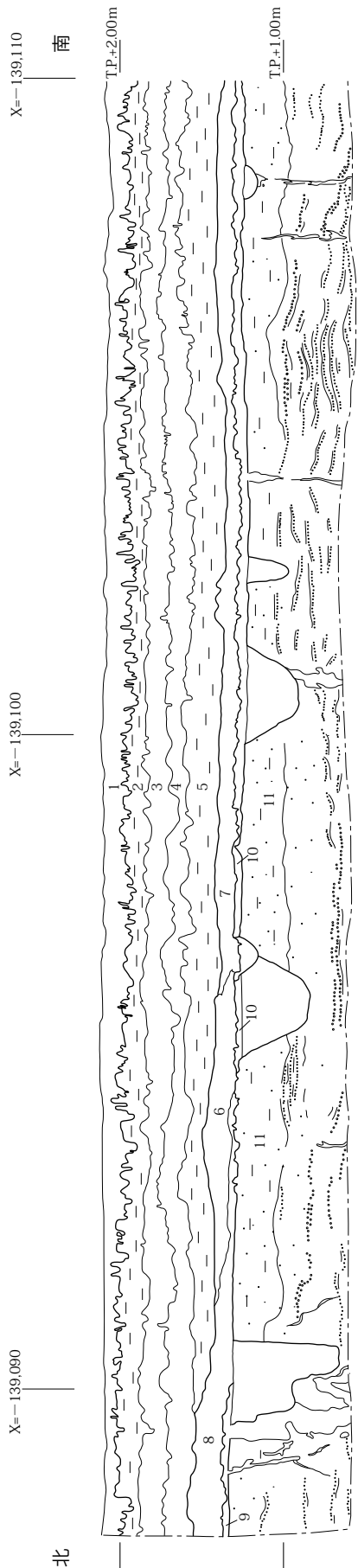


図5 1区南北断面図

- | | | | |
|-------------------|---------------------|--------------------|----------------------------------|
| 1. 2.5Y 4/3 オリーブ褐 | 粗砂～中礫混シルト質砂 (第2-1層) | 7. 7.5Y 3/2 オリーブ黒 | 細砂～粗砂混砂質シルト (第5-1層) |
| 2. 7.5Y 4/2 灰オリーブ | シルト質粘土 (第2-3層) | 8. 7.5Y 3/2 オリーブ黒 | 極細砂～中砂, シルト質砂ブロック混砂質シルト (5高まり1層) |
| 3. 5Y 4/2 灰オリーブ | 極細砂～細砂混シルト質粘土 (第3層) | 9. 10Y 3/1 オリーブ黒 | 中砂混砂質シルト (5高まり2層) |
| 4. 7.5Y 3/1 オリーブ黒 | 細砂混粘土質シルト (第4-1層) | 10. 5GY 4/1 暗オリーブ灰 | 細砂混シルト質砂 (第5-2層) |
| 5. 10Y 3/1 オリーブ黒 | シルト質粘土 (第4-2層) | 11. 5GY 4/1 暗オリーブ灰 | 粘土～中砂 (第7層) |
| 6. 5GY 2/1 オリーブ黒 | 細砂混砂質シルト | | |

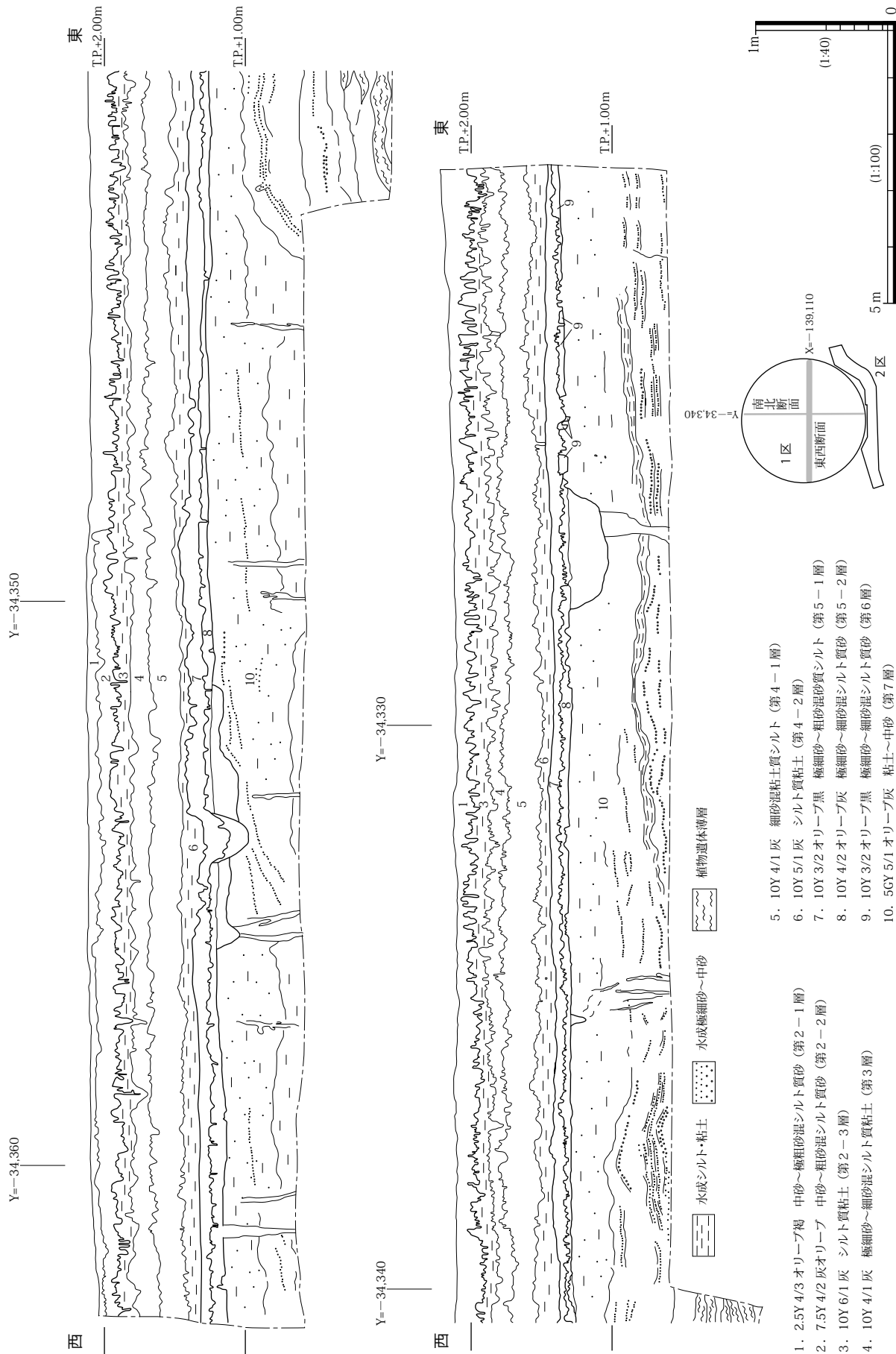


図6 1区東西断面図

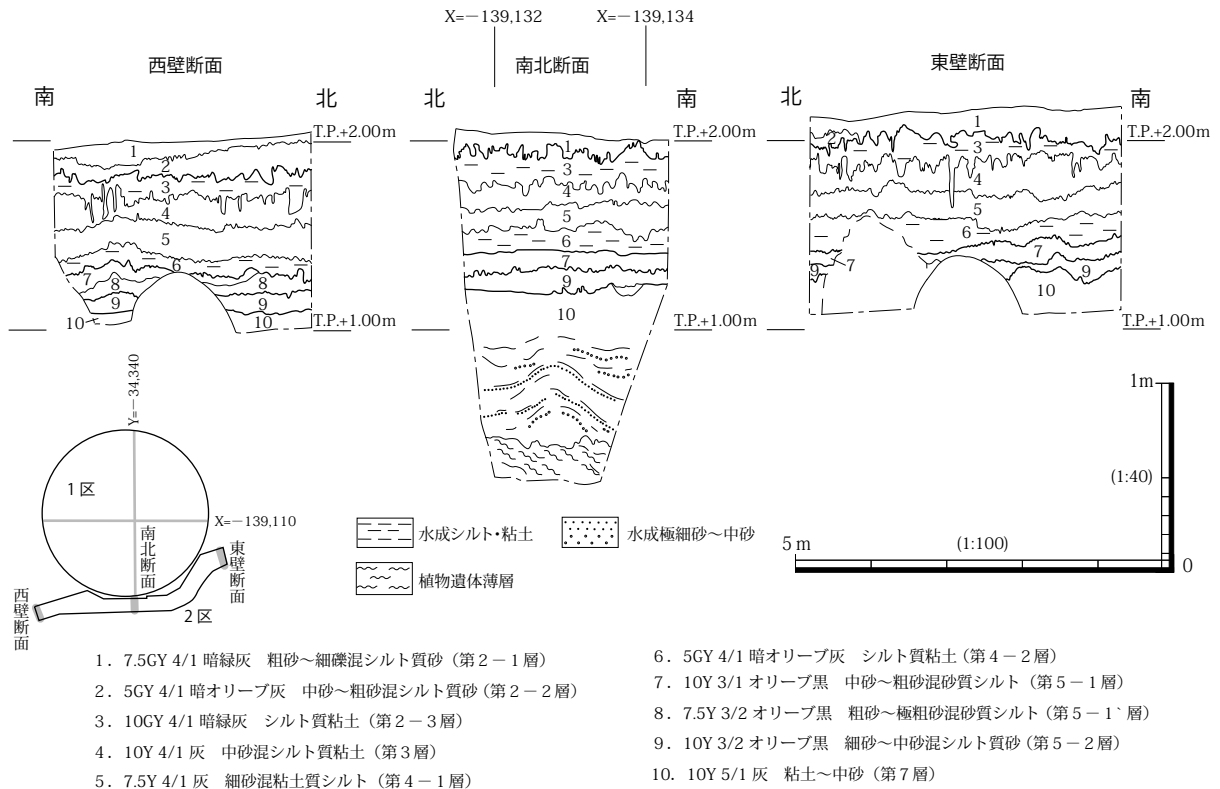


図7 2区断面図

下層確認として1区中央に3m四方のトレンチを設けT.P.+0mまで確認を行った。その結果、第7層から続く粘土から中砂の水成堆積層が認められた。遺物は出土しなかった。

第2節 第4面

第5-2層を除去して検出した、第5-2層下面を第4面として調査した(図8、図版1・2)。1区北東側では第6層が残存していたが、第6層上面ではほとんどの遺構について平面確認が困難であったため、その箇所については第6層を除去し第6層下面で遺構を検出した。

第4面では耕作土層である第5-2層堆積時の溝状の耕作痕と、第6層堆積時の竪穴建物・掘立柱建物を初めとした遺構群の2時期に分けられる遺構を検出した。第5-2層での溝状の耕作痕は一部に東西方向の例が見られるが、ほとんどが東西南北とは異なる方向である。第6層堆積時の遺構は竪穴建物5棟、掘立柱建物7棟、井戸1基、溝35条の他に、多数の土坑・ピットを検出した。

図8では第5-2層での耕作痕をアミをかけ灰色、第6層での遺構を黒色で図示した。この2時期に分けられる遺構は、新旧関係では第5-2層の耕作痕が第6層段階の遺構を掘りこんでいるが、挿図では第6層段階の遺構を優先して図示した。

竪穴建物1(図8～10、図版2・3)

2区南東側で一部を検出し、さらに調査区外南側に広がる。平面形は方形である。南北辺を主軸とするとN-27°-Wである。規模は東西5.55m、南北は検出した長さ3.85m、床面までの深さ0.16mである。周壁溝は西辺の南側で検出し、幅0.15～0.25m、深さ0.02mである。柱穴は床面を掘り下げた段階でピットを1基確認したのみで、検出されなかった。

埋土は3層(図9)に分けられ、1層が極細砂から中砂やシルトブロックがやや混じるオリーブ黒色

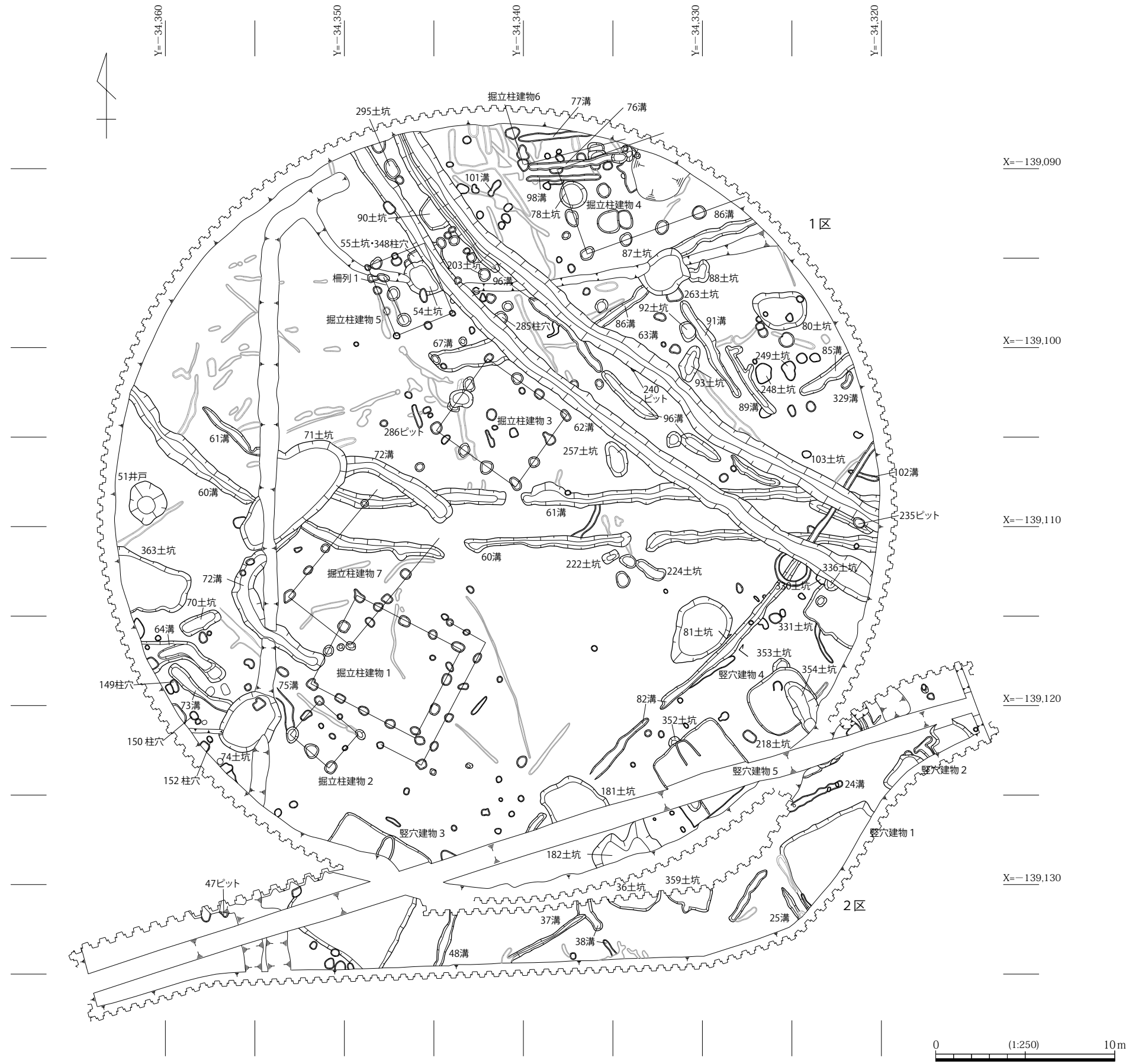
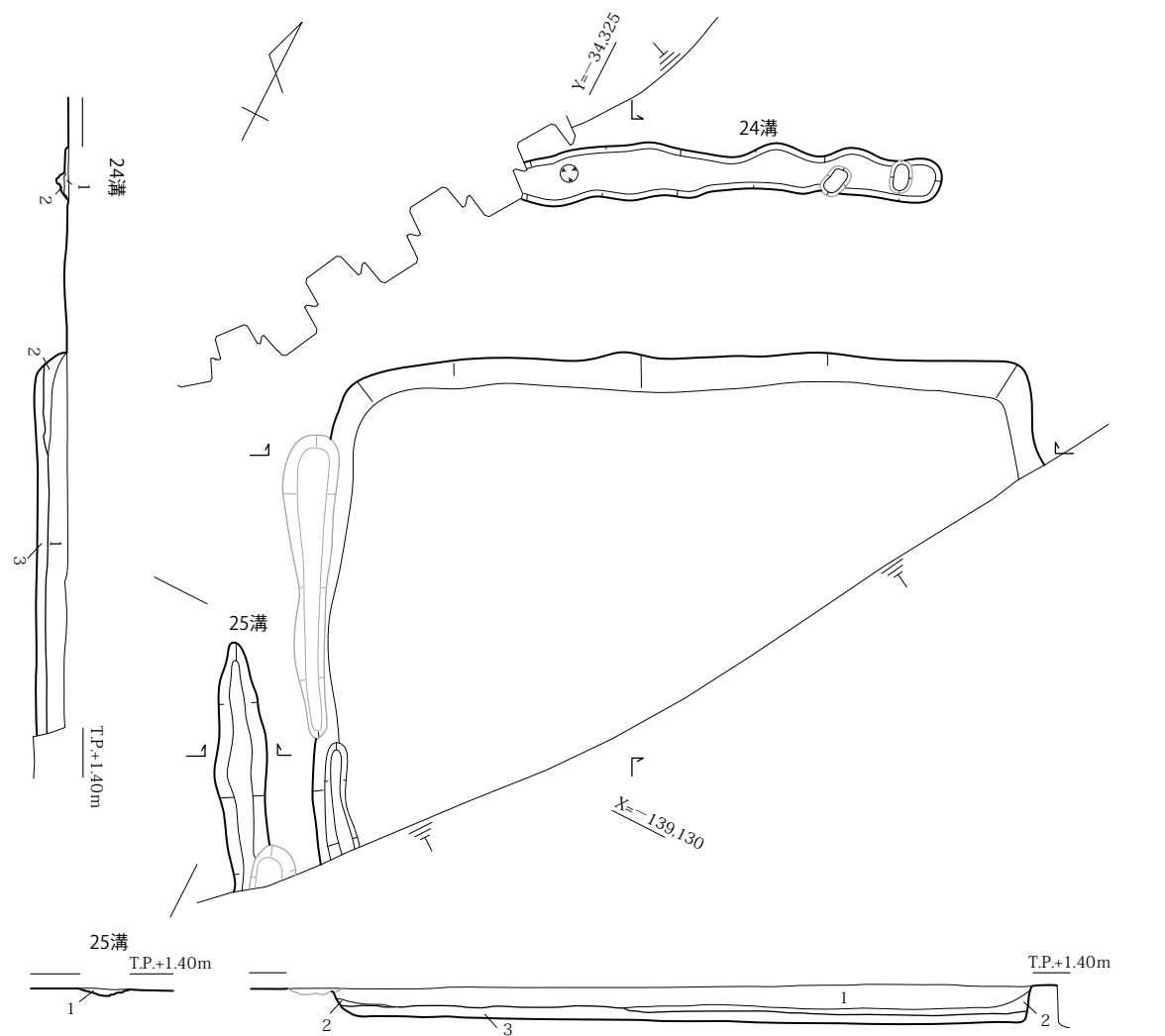
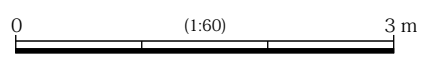


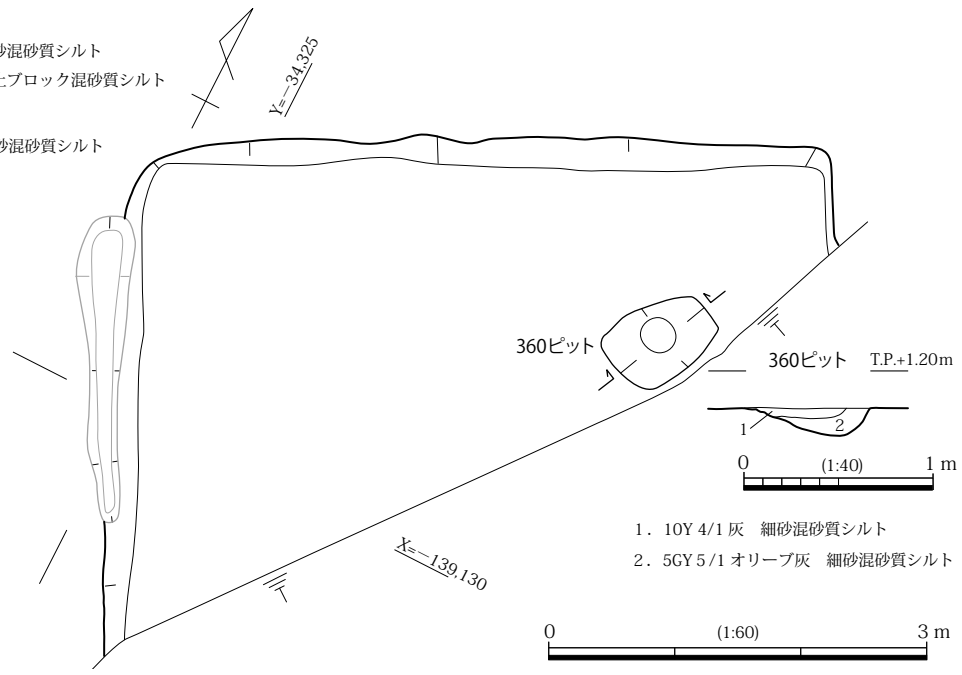
図8 第4面 全体図



- 1. 7.5Y 3/1 オリーブ黒 極細砂～中砂, シルトブロック混砂質シルト (炭粒含む)
- 2. 5GY 3/1 暗オリーブ灰 極細砂～細砂, シルトブロック混砂質シルト
- 3. 10Y 3/2 オリーブ黒 細砂, シルトブロック混砂質シルト (炭粒含む)



- 24 溝
- 1. 2.5Y 3/3 暗オリーブ褐 細砂混砂質シルト
 - 2. 2.5Y 5/1 黄灰 シルト質粘土ブロック混砂質シルト
- 25 溝
- 1. 2.5Y 3/3 暗オリーブ褐 細砂混砂質シルト



- 1. 10Y 4/1 灰 細砂混砂質シルト
- 2. 5GY 5/1 オリーブ灰 細砂混砂質シルト

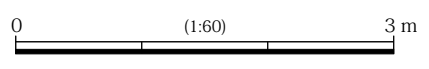
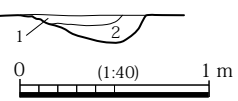


図9 竪穴建物1 平・断面図

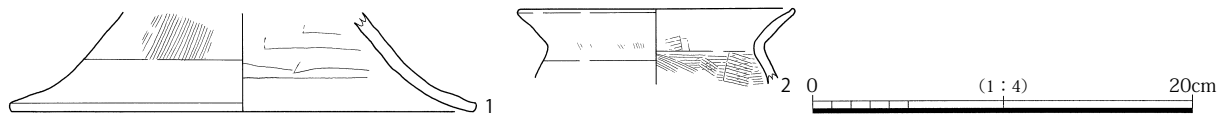


図10 竪穴建物1 出土遺物実測図

砂質シルト、2層が極細砂から細砂やシルトブロックが混じる暗オリーブ灰色砂質シルト、3層が第7層に起源するシルトブロックを多く含み、細砂が混じるオリーブ黒色砂質シルトであった。この3層の上面が床面にあたる。

建物周囲の北・西側に24・25溝が位置する。24溝は建物北辺から1.24m北側に位置し、規模は幅0.22～0.4m、深さ0.04mである。25溝は建物西辺から0.4m西側に位置し、幅0.24～0.42m、深さ0.04mである。これらの溝は建物と同軸であることから、建物周囲に掘削された溝の可能性が考えられる。

遺物は1層から土師器高杯片3点・甕片3点・甕等の体部片3点・器種不明小片3点、外面に格子タタキ調整がされる韓式系土器体部小片1点、3層から土師器甕片2点の計15点が出土した。そのうち2点を図示し得た(図10)。

1は1層から出土した土師器高杯脚部でかなり脚径が大きく、外面はハケ調整である。2は3層から出土した土師器甕である。

建物の時期は出土遺物が少ないため、特定することができない。

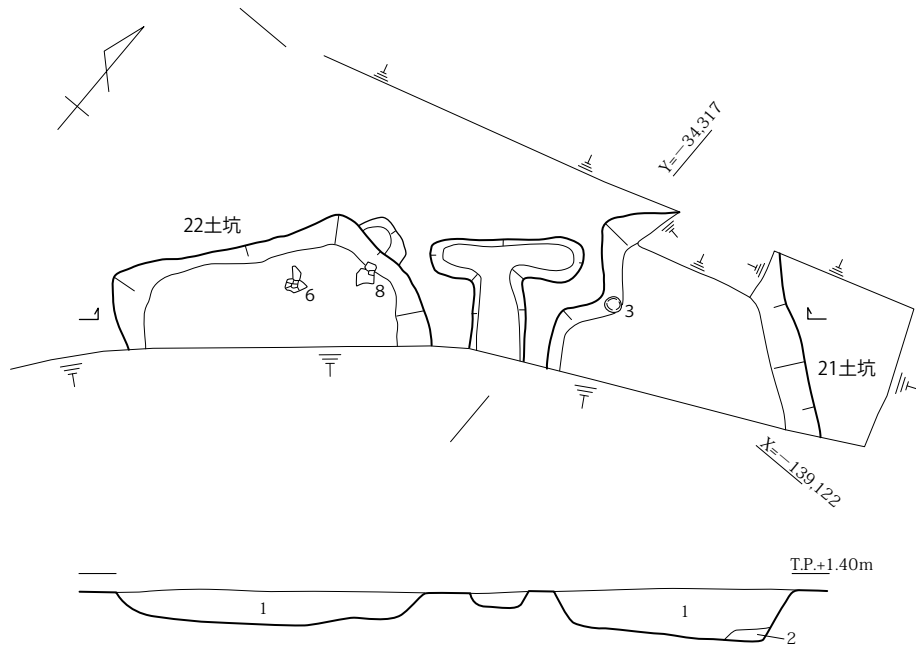
竪穴建物2(図8・11・12、図版2・4・22)

2区南東端で建物北側の一部を検出した。建物は竈と土坑のみが検出され、竪穴建物の掘りこみは第5-2層時の耕作により残存しなかった。竈の東西両側に位置する21・22土坑は、21土坑の西辺が竈の平面形と相似形になること、また22土坑は平面形が21土坑のように竈と相似形ではないが21土坑と対をなす位置にあることや、21土坑と埋土堆積状況が同じであることから、同じく竪穴建物内の施設と考えた。

検出した竈(図11)の平面形は「T」字形で、燃烧部とそれから続く煙道を検出した。袖部は第5-2層時の耕作により残存しなかった。規模は検出した長さ0.65m、幅0.4mで燃烧部から煙道までほぼ同幅である。煙道は幅1.2m、奥行き0.3mである。竈の底面は燃烧部から煙道へ徐々に上がっている。燃烧部には土師器鉢(図12-5)が支脚として据えられていた。これは燃烧部底面を直径0.3m、深さ0.05m程に浅く掘りくぼめた中に、灰オリーブ色シルト質砂を詰めた土師器鉢を逆さに置き、口縁部から頸部までの周囲を細砂混じりオリーブ黒色シルト質砂で埋め、固定していた。竈内の埋土は2層に分けられ、その下層が使用時に堆積した炭層である。支脚付近が最も厚く0.07m程堆積しており、燃烧部から煙道部へ向かうほど堆積が薄くなる。また竈内に堆積していた炭層を2.0kg土壌洗浄した結果、コムギ1点・ヒエ近似種1点(第5章 第3節参照)が出土した。

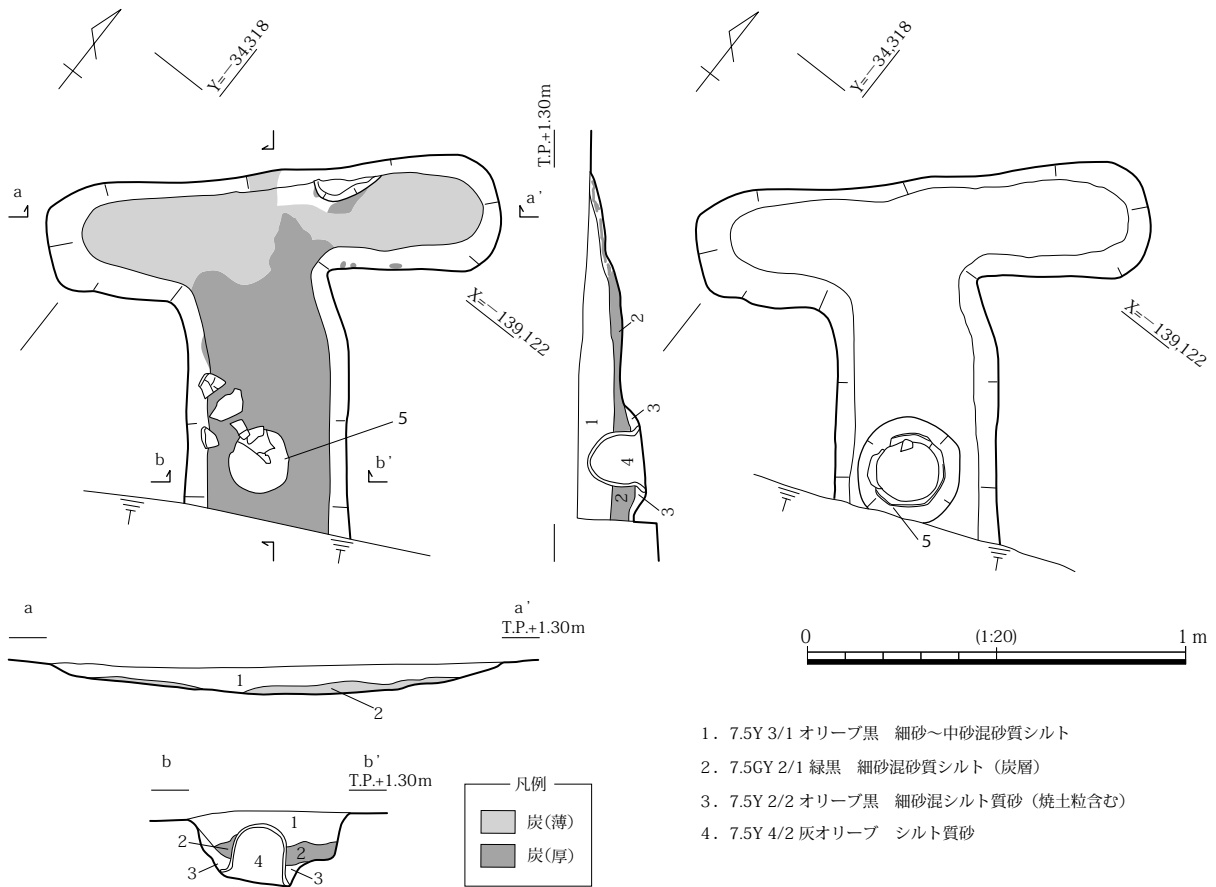
21土坑の規模は南北の検出した長さ1.4m、東西が最大2.0m・最小1.4m、深さ0.4mである。22土坑は東西2.3m、南北は検出した長さ1.1m、深さ0.27mである。埋土の堆積状況はいずれも粘土からシルトブロックが混じる埋土で一時に埋められたものである。

遺物は竈から支脚とされていた土師器鉢1点と土師器甕等の体部片5点の計6点が出土した。21土坑からは須恵器高杯1点・杯片2点、土師器甕片3点・甕等の体部片6点・器種不明小片4点、製塩土器片2点(2.04g)の計18点が出土した。22土坑から須恵器甕片1点、土師器鉢1点・甕3点・



- 21 土坑
 1. 7.5GY 3/1 暗緑灰 粘土～シルトブロック混細砂
 2. 10Y 3/1 オリーブ黒 細砂混粘土～シルト

- 22 土坑
 1. 10Y 3/2 オリーブ黒 細砂, 粘土～シルトブロック混シルト質砂 (炭粒含む)



1. 7.5Y 3/1 オリーブ黒 細砂～中砂混砂質シルト
2. 7.5GY 2/1 緑黒 細砂混砂質シルト (炭層)
3. 7.5Y 2/2 オリーブ黒 細砂混シルト質砂 (焼土粒含む)
4. 7.5Y 4/2 灰オリーブ シルト質砂

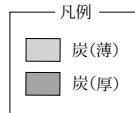


図 11 竪穴建物 2 平・断面図、及び竈 平・断面図

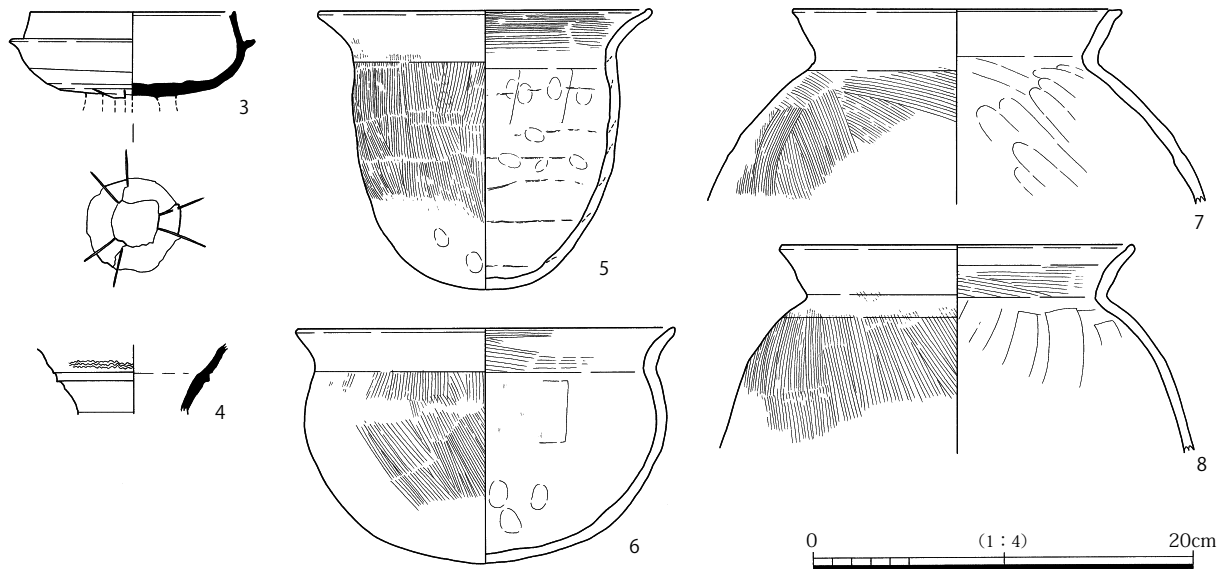


図12 竪穴建物2 出土遺物実測図

甕等の体部片4点の計9点が出土した。そのうち6点を図示し得た（図12）。

3は土坑21から出土した須恵器有蓋高杯である（図版22）。長方形3方透かしをもち、杯底部の透かし位置に刻線が見られる。受部上面に焼成の際の重ね焼きによる溶着痕が認められる。4は須恵器甕である。3条の櫛描波状文を施すが、波状文はかなり乱れている。全体に器厚は薄いつくりである。

5・6は土師器鉢である。5は深鉢形で、口縁部は強く外反する（図版22）。体部内面には粘土紐痕跡が残る。竈支脚に用いられていたが、外面に二次焼成を受けた痕跡は見られない。6は22土坑から出土した。鍋形で、頸部に使用時のススが付着する。7・8は22土坑から出土した土師器甕である。7は口縁端部が外方し、8は僅かに内湾してたちあがり、体部外面はいずれもハケ調整である。

建物の時期は出土遺物が少量ではあるが、3の須恵器有蓋高杯から5世紀第3四半期と考えられる。

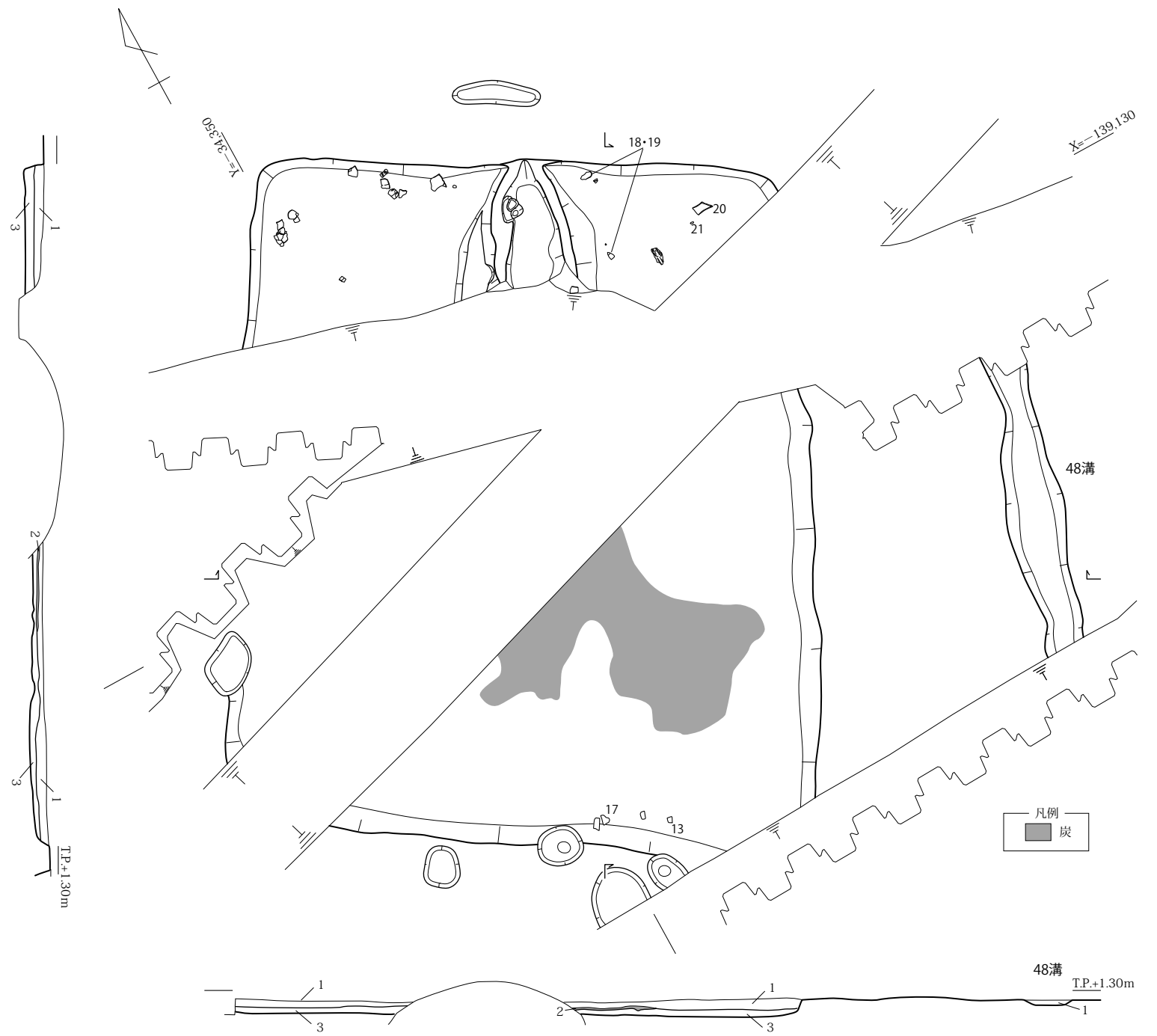
竪穴建物3（図8・13～17、図版1～3・5～7・22・27）

1・2区にかけて調査区南西側で検出した。平面形は長方形である。長辺を主軸とするとN-32°-Eである。規模は東西6.25m、南北7.1m、面積は44.4㎡である。床面までの深さは0.1mである。この竪穴建物が今回の調査で検出した中で最も規模の大きなものである。

北壁中央で作り付けの竈を検出した。床面を掘り下げ、4基のピットを検出した。そのうち56・355柱穴が支柱穴にあたり、その他の柱穴は攪乱により残存しなかったが、4本柱穴であったと考えられる（図16）。

埋土は3層（図13）に分けられ、1層がオリーブ黒色極細砂から中砂混じりシルト質砂であった。3層は第7層に起源する粘土質シルトブロックを含み、極細砂が混じる暗オリーブ灰色砂質シルトで整地層と考えられ、この上面が床面である。床面上の建物中央付近には南北2.16m、東西2.5mの範囲に炭層（2層）が堆積した。微細遺物の検出のためにこの炭層24.2リットル（40.4kg）と竈脇の床面直上の埋土31.7リットル（50.9kg）を土壌洗浄した。その結果、炭層から哺乳類の小片1点（第5章第2節参照）、コムギ4点・マメ類2点（第5章第3節参照）などを検出した。また竈脇の床面直上の埋土から骨片1点が検出され、同定の結果ナマズ目と判明した（第5章第2節参照）。

検出した竈（図14）の規模は長さ1.32m、最大幅1.5mである。竈は袖部と燃焼部を検出し、焚口は調査区側溝により失われているが、側溝際の掘りこみ（5層）は使用時の炭や焼土を掻き出した際に



1. 10Y 3/1 オリーブ黒 粘土質シルトブロック・極細砂～中砂混シルト質砂 (炭粒含む) 1. 2.5GY 4/1 暗オリーブ灰 細砂～中砂混砂質シルト
 2. 10Y 3/1 オリーブ黒 極細砂混砂質シルト (炭層)
 3. 2.5GY 4/1 暗オリーブ灰 粘土質シルトブロック・極細砂混砂質シルト

図13 竪穴建物3 平・断面図

できた掘りこみであることから、側溝際がほぼ焚口付近と考えることができ、検出規模はほぼ竈の規模と考えることができよう。

竈の検出状況は竈埋土内及び周辺床面に土師器甕・甔の破片が散乱しており、竈内の土師器甕・甔片

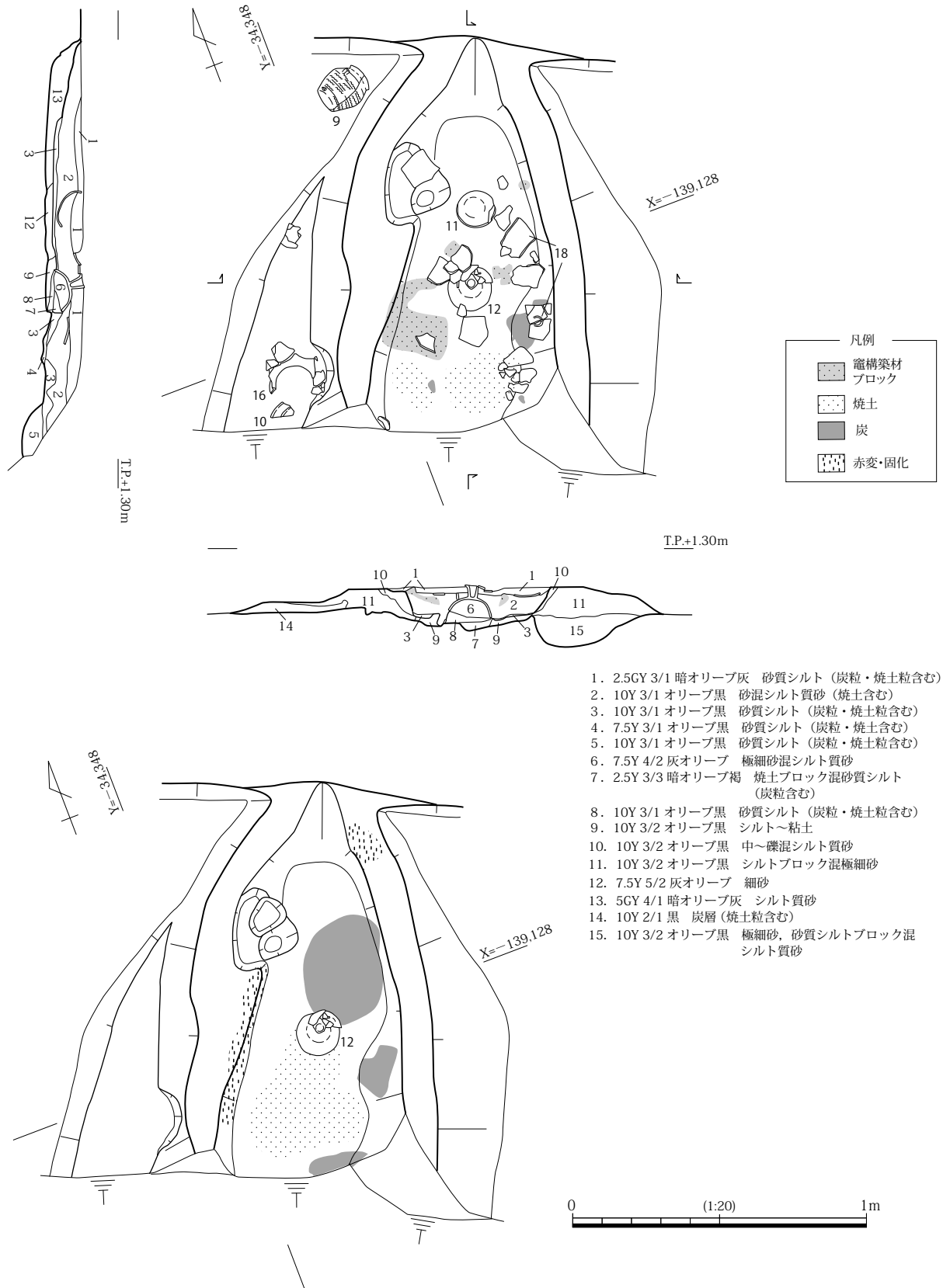


図 14 竪穴建物 3 竈 平・断面図

を取り除くと、焼土や炭層が広がる燃焼部を検出した。燃焼部内からは2点の土師器高杯が出土した(図17-11・12)。このうち12はこの竈に支脚として据えられた高杯で、11の高杯杯部は原位置を保っていないが二次焼成を受け、外面底部周辺には粘土塊も附着しており、竈の支脚に用いられていたものが廃棄されたものと考えられる。12の高杯は杯部に極細砂混じりシルト質砂を詰め、口縁部を下に逆

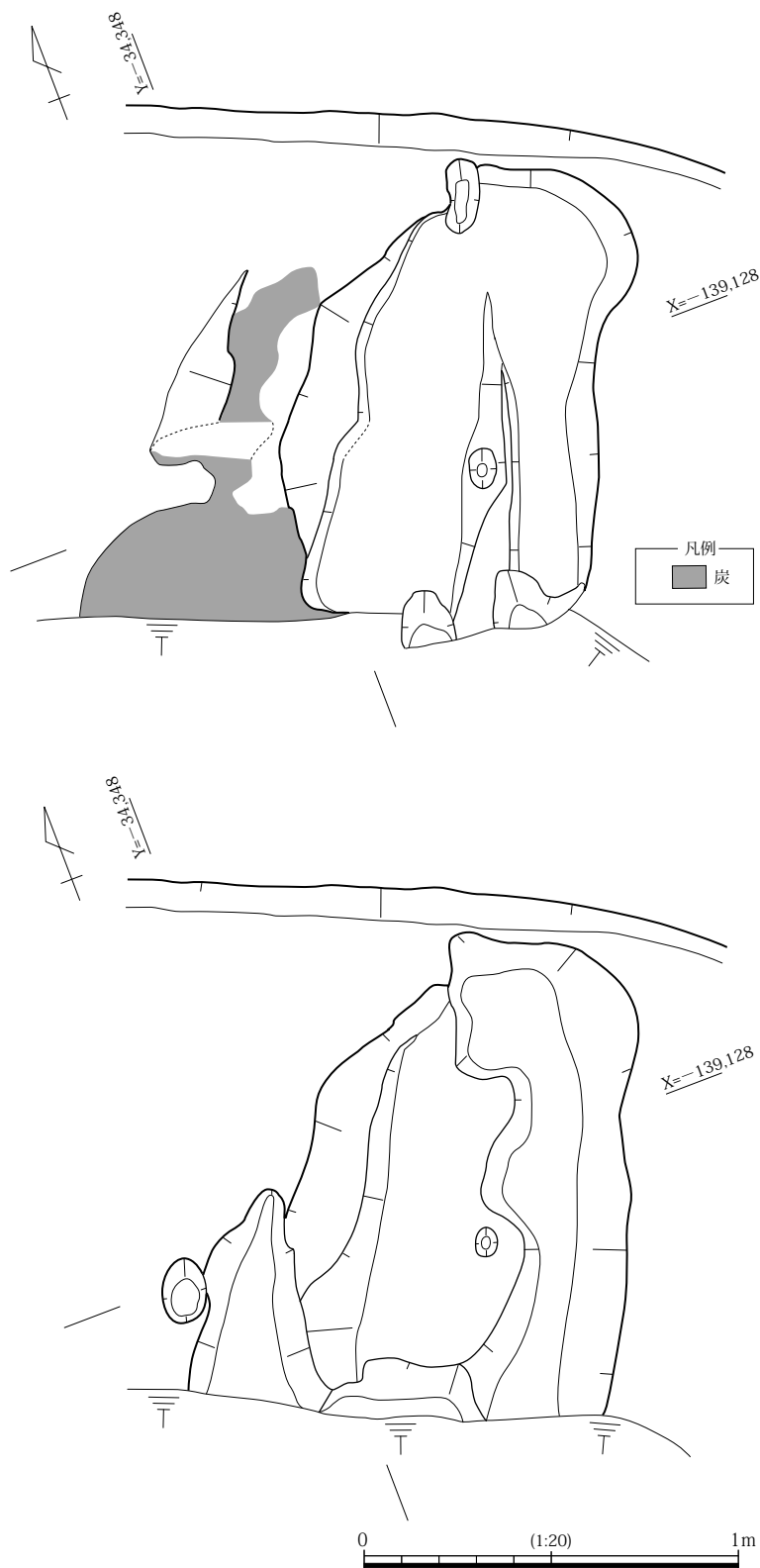


図15 竪穴建物3竈掘方 平面図

さに置き、高さを調整するためにさらに嵩上げが行われている。嵩上げのため杯部から出た土は被熱により赤変・固化が見られた。燃焼部は支脚の前面を中心にシルトから極細砂が赤色化した焼土層が広がり、その下に薄い炭層が堆積した。支脚の奥にも炭層が認められた。袖部の構築材には以前の竈構築材がブロック状に混じり、左袖部の壁面は赤変・固化が見られた。

竈左袖部を取り除いたところ、その下から炭層が検出された(図15上)。竈袖部が作られたことで以前の燃焼部が残存したものと考えられ、竈は東に作り替えられたことになる。竈右袖部下には幅0.4~0.45m、深さ0.1mの溝状の掘方を検出した(図15下)。

そして微細遺物の検出のために竈燃焼部の焼土・炭層11.0リットル(17.1kg)を土壌洗浄したところ、滑石製白玉2点、骨片2点が出土した。骨片は同定の結果ナマズ目と判明した(第5章 第2説参照)。

建物東辺から2m北側に48溝が検出された。規模は幅0.35~0.65m、深さ0.05mである。この溝は建物とほぼ同軸であることから建物周囲に掘削された溝の可能性と、竪穴建物群の北側の82溝の延長である可能性が考えられる。

遺物は床面から竈の東西両脇を中心に須恵器把手付碗1点・器種不明

小片 4 点、土師器高杯片 1 点・甕等の体部片 90 点・器種不明小片 12 点、滑石製紡錘車 1 点が出土した。1 層からは土師器高杯片 6 点・甕 4 点・甕等の体部片 11 点・器種不明小片 14 点、石製品砥石 1 点、3 層は土師器甕等の体部片 6 点が出土した。竈からは須恵器壺 1 点、土師器高杯 2 点・甕 3 点・甗 1 点・甕等体部片 24 点・器種不明小片 32 点が出土した。56 柱穴からは土師器甕等体部片 1 点、57 ピットからは土師器器種不明小片 2 点、58 ピットから土師器甕等体部片 2 点・器種不明小片 1 点が出土した。

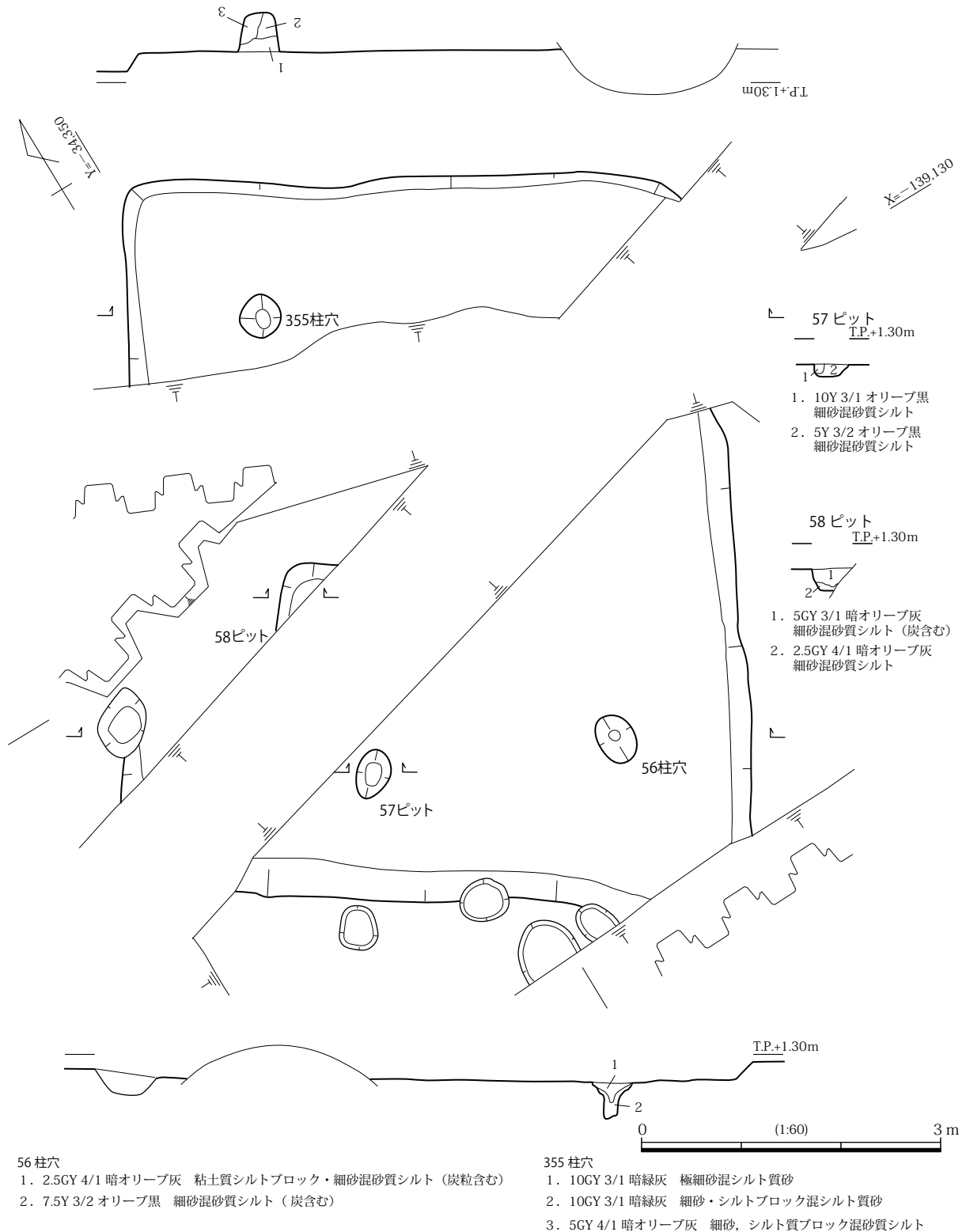


図 16 竪穴建物 3 掘方 平・断面図

出土した遺物の総量は 220 点である。そのうち 15 点を図示し得た (図 17)。

9 は床面直上から出土した須恵器把手付椀である (図版 22)。把手は断面形が長方形で、上面に粘土紐を巻き付けるような装飾を施す。体部は 5 本単位の櫛描波状文を沈線間にそれぞれ 2 段施文する。底部付近の最下段は施文後に把手を取り付けるための回転ナデ調整により、波状文が消えている。10 は竈袖部上から出土した須恵器壺口頸部である。凸帯の断面形は丸味をおびシャープでない。この凸帯を挟んで上下に櫛描波状文を施す。

11 ~ 15 は土師器高杯である。11・12 は椀形高杯である。11 は杯部で竈埋土中から出土した。杯部と脚部の接合のために、杯部底面に同心円状とさらに放射状に刻線が入れている。内面口縁部に

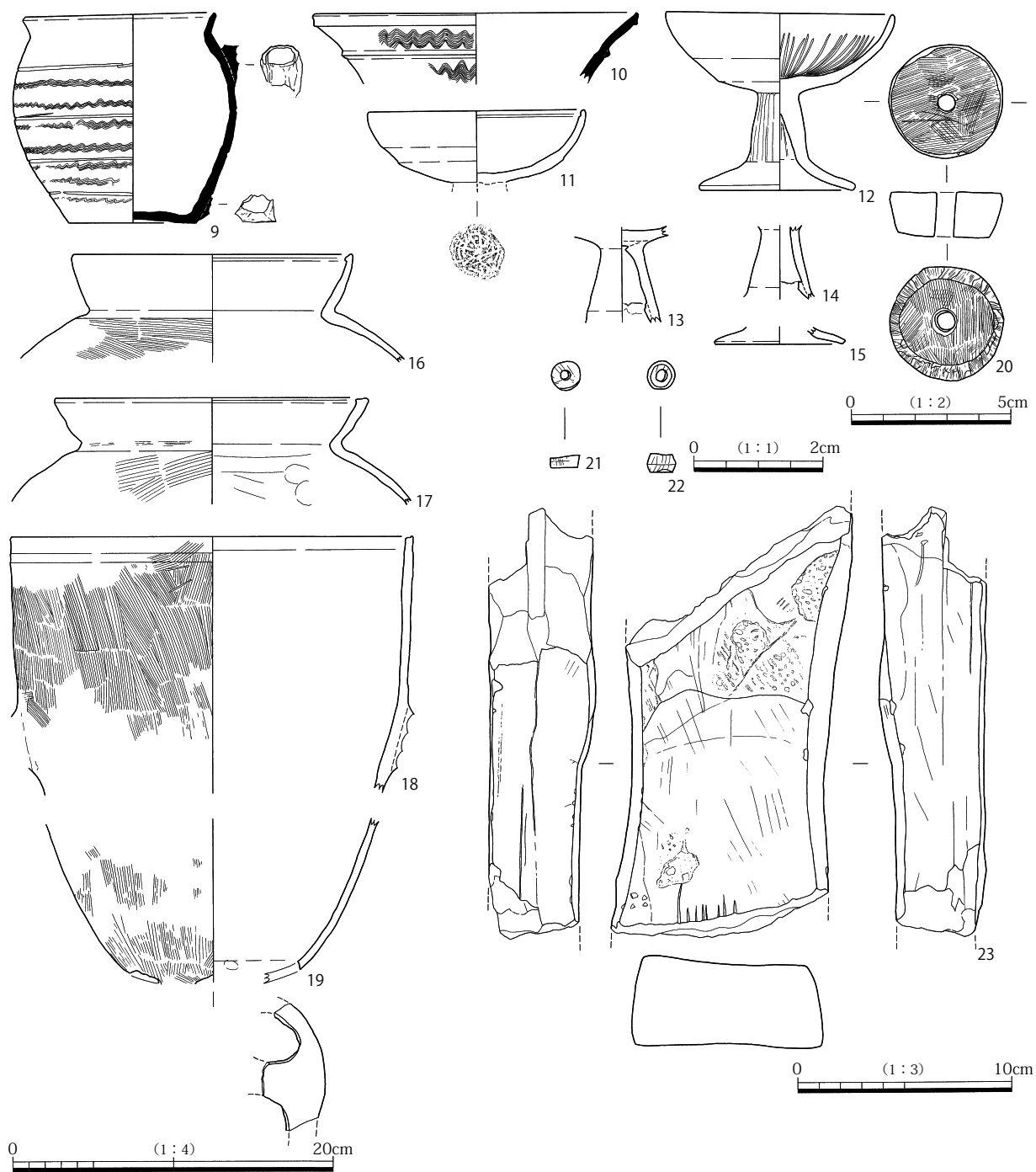


図 17 竪穴建物 3 出土遺物実測図

ヘラによる1条の沈線がめぐる。12は竈の支脚に使われた土師器高杯である。杯部内面は放射状の暗文を施す。13～15は脚部である。13・14共に内面に裾部との接合痕跡が見られる。14・15は精緻な胎土で同一個体と見られ、脚部から裾部へと大きく屈曲し、裾部はやや内湾する。14の柱状部は板状の粘土を巻いて整形したため、縦方向に剥離する。

16・17は土師器甕で口縁部は内湾してたちあがり、調整は外面がハケ、内面はナデである。16は口縁端部が肥厚し、内傾する。18・19は同一個体と考えられる土師器甕で、口縁部は体部からほぼ直立する。20は床面から出土した滑石製紡錘車である。21・22は竈内から出土した滑石製白玉である。23は砥石である。

建物の時期は5世紀第2四半期と考えられる。

竪穴建物4 (図8・18～21、図版1・3・8～10・22)

1区南東側で検出した。建物の東部分は354土坑により壊されている。この竪穴建物4は竪穴建物5と北壁の位置が揃い、2棟が平行して並ぶ。

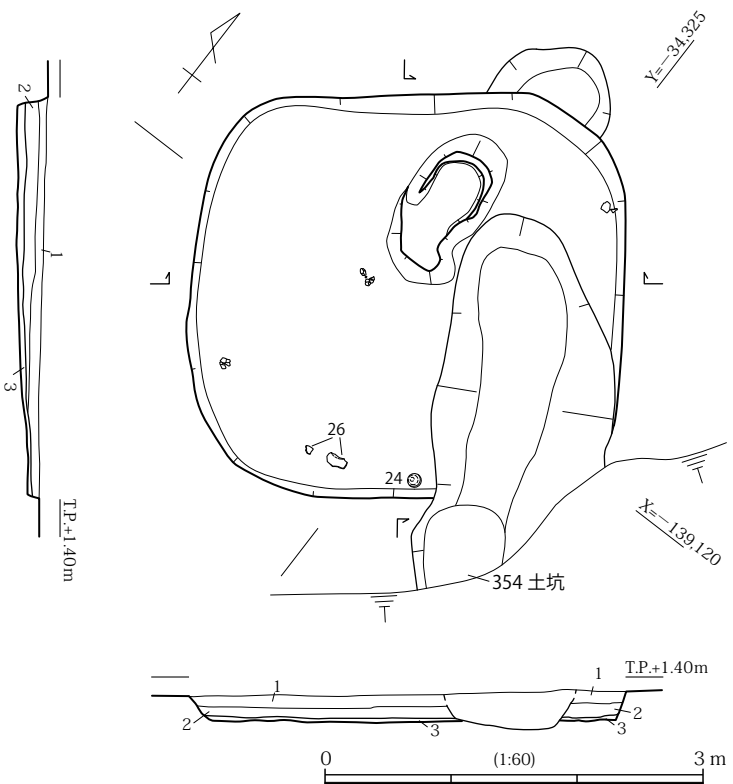
平面形は隅丸方形である。長辺を主軸とするとN-35°-Wである。規模は東西3.25m、南北3.3mである。床面積は10.725㎡である。床面までの深さは0.1mである。

遺構検出時に既に「U」字形に竈袖部が検出されたことから、上部は第5-2層の耕作によりかなり削平を受けているものと考えられる。柱穴は床面を掘り下げた段階でピットを1基確認したのみで、検出されなかった(図20)。

埋土は3層(図18)に分けられ、1層の極細砂から細砂混じり暗オリーブ灰色砂質シルトと2層のシルト質砂ブロックが混じる暗オリーブ灰色砂質シルトで埋まる。3層は第6層の砂質シルトブロックや細砂が混じる第7層に起源するシルト質砂の整地層で、この上面が床面である。

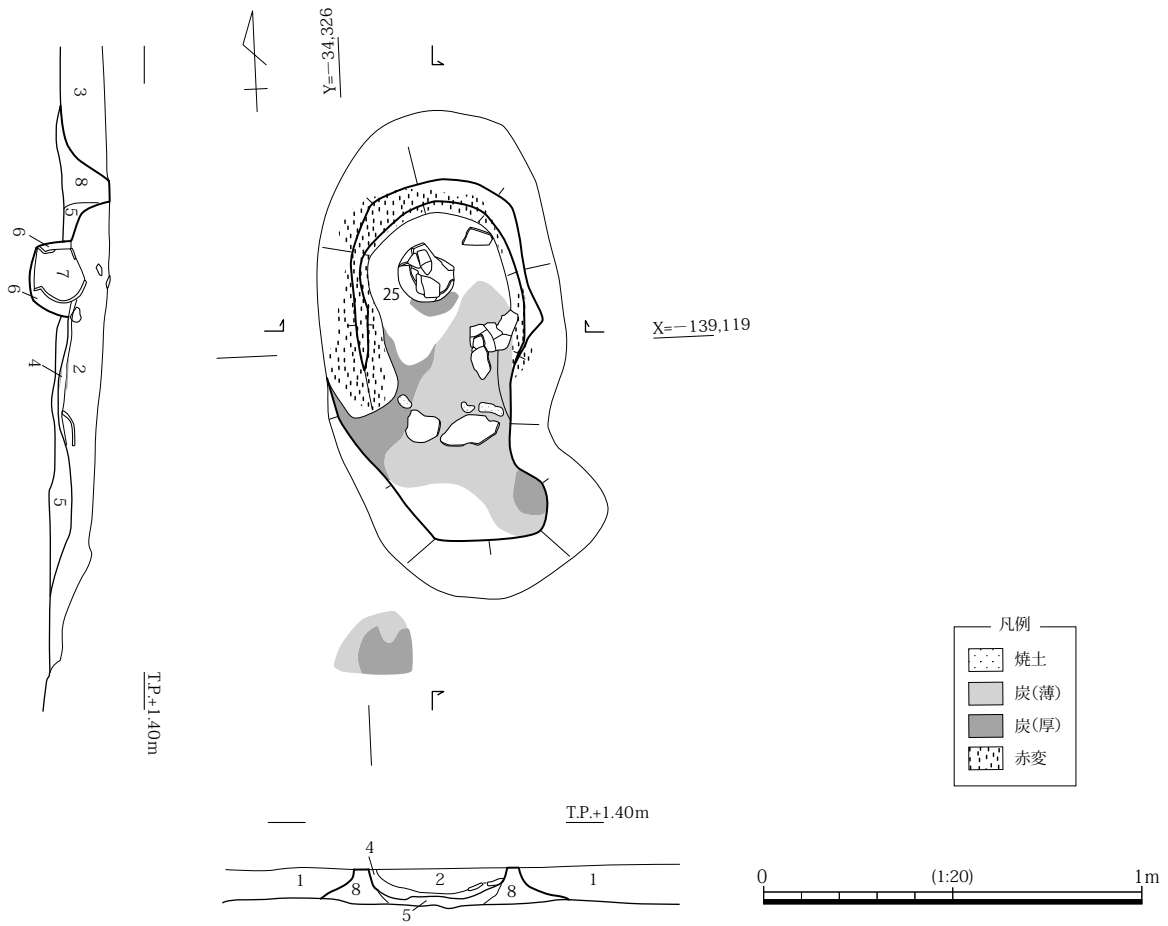
この建物は遺構検出時の平面確認で354土坑より後に掘られた遺構と判断し、調査を進めた。そのため写真図版8の遺物出土状況写真には竈東側に多くの遺物が写っているが、掘方での断面観察で埋土を検討した結果、土坑が建物を掘りこんでいることを確認した。このためそれらの遺物は土坑に伴うものと判断し、354土坑の遺物として掲載した(図51)。

北壁近くの中央やや東寄りに作り付けの竈(図19)を検出した。竈は北壁に取り付かず0.35m程離れ、建物軸と平行でなく北東隅側に向けて作られている。検出した竈の規模は長さ0.68m、最大幅0.62mである。



1. 5GY 4/1 暗オリーブ灰 極細砂～細砂混砂質シルト (炭粒・焼土粒含む)
2. 2.5GY 3/1 暗オリーブ灰 細砂, シルト質砂ブロック混砂質シルト
3. 7.5Y 4/1 灰 細砂, 砂質シルトブロック混シルト質砂

図18 竪穴建物4 平・断面図



- 1. 2.5GY 3/1 暗オリーブ灰 細砂～中砂混砂質シルト (炭粒・焼土粒含む)
- 2. 5GY 3/1 暗オリーブ灰 細砂～中砂混砂質シルト (炭含む)
- 3. 5GY 4/1 暗オリーブ灰 極細砂～細砂混砂質シルト (焼土粒含む)
- 4. 10Y 3/1 オリーブ黒 細砂～中砂混砂質シルト (炭・焼土粒含む)
- 5. 2.5GY 4/1 暗オリーブ灰 極細砂混シルト質砂 (炭粒・焼土粒含む)
- 6. 7.5Y 4/2 灰オリーブ 極細砂混粘土質シルト
- 7. 2.5GY 4/1 暗オリーブ灰 シルト質砂
- 8. 10Y 5/1 灰 極細砂混砂質シルト (炭粒含む)

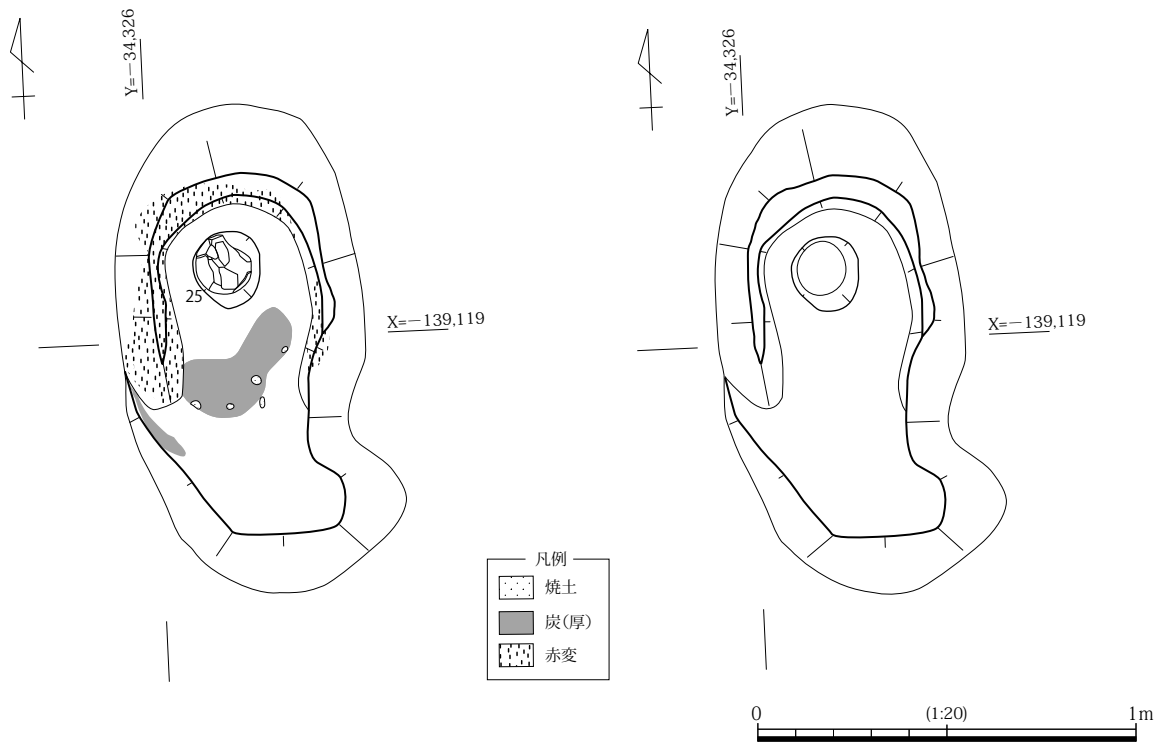


図 19 竪穴建物 4 竈 平・断面図

建物の平面検出時に焼土ブロックや炭が混じる「U」字形の袖部を確認し、その内側の暗オリーブ灰色極細砂から中砂混じり砂質シルトを取り除くと、燃焼部を検出した。竈の袖部は、底部は幅 0.18 m であるが上面は幅 0.04 m のみでかなり崩壊している。竈の構築材は焼土ブロックや炭をまばらに含む極細砂混じり砂質シルトである。袖部の壁面は固化していないが、焼けてやや赤変が見られた。

燃焼部は焚口より 3 cm 程くぼみ、中央奥に支脚として土師器甕（図 21 - 25）が据えられていた。この土師器甕は甕より一回り大きい直径 0.18 m、深さ 0.11 m の掘りこみに逆さに置かれ、底部近くまで埋め込まれていた。支脚の手前付近から焚口にかけては炭層が広がっており、焚口付近はやや厚く堆積していた（図 19 上）。この炭層の下に、さらにもう 1 層の炭層が認められたことから（図 19 左下）、この支脚は竈を使用する中で新たに据え付けられたものと考えられる。竈の掘方は確認されず床面上に構築されていた。

竈燃焼部に堆積していた炭・焼土層を 9 リットル（12.4 kg）洗浄したが、遺物は出土しなかった。

この竪穴建物は他の建物と比べると平面形が隅丸方形で小規模であることや、竈が北壁に取り付かないことなど異なる点が見られる。

遺物は床面から須恵器杯蓋 1 点、土師器甕 1 点・甕等体部片 3 点、製塩土器 9 点（2.56 g）、埋土 1 層から須恵器杯蓋片 1 点、土師器甕等体部片 7 点・器種不明小片 18 点、製塩土器片 18 点（6.47 g）、竈から支脚とされた土師器甕 1 点・甕 1 点・甕等体部片 4 点・器種不明小片 13 点、竈壁体内から須恵器杯片 1 点の計 78 点が出土し、3 点を図示し得た（図 21）。

24 は須恵器杯蓋で、全体に器厚が厚く、作りがあまりいものである（図版 22）。

天井部内面調整は回転ナデではなく、静止ナデである。25・26 は土師器甕である。25 は小型の甕で内面に明瞭な粘土紐痕が残る。26 は体部外面に使用によるスガが付着する。

建物の時期は 5 世紀第 3 四半期と考えられる。

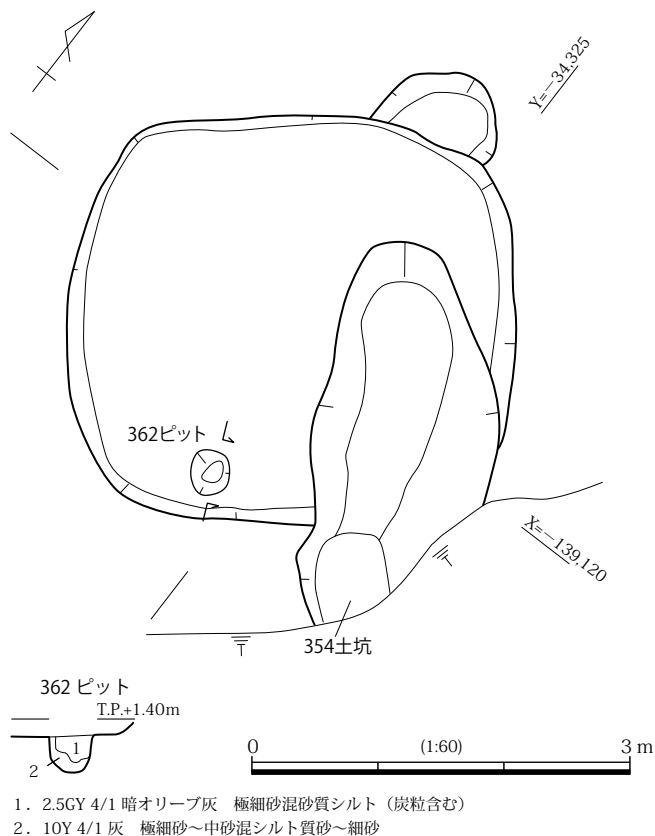


図 20 竪穴建物 4 掘方平・断面図

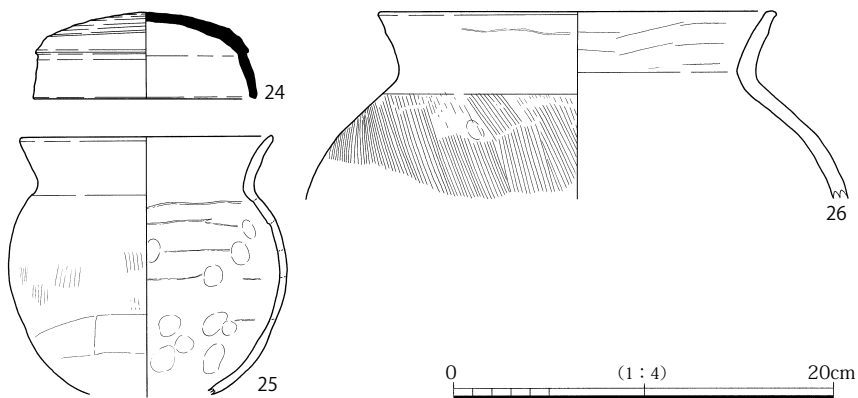
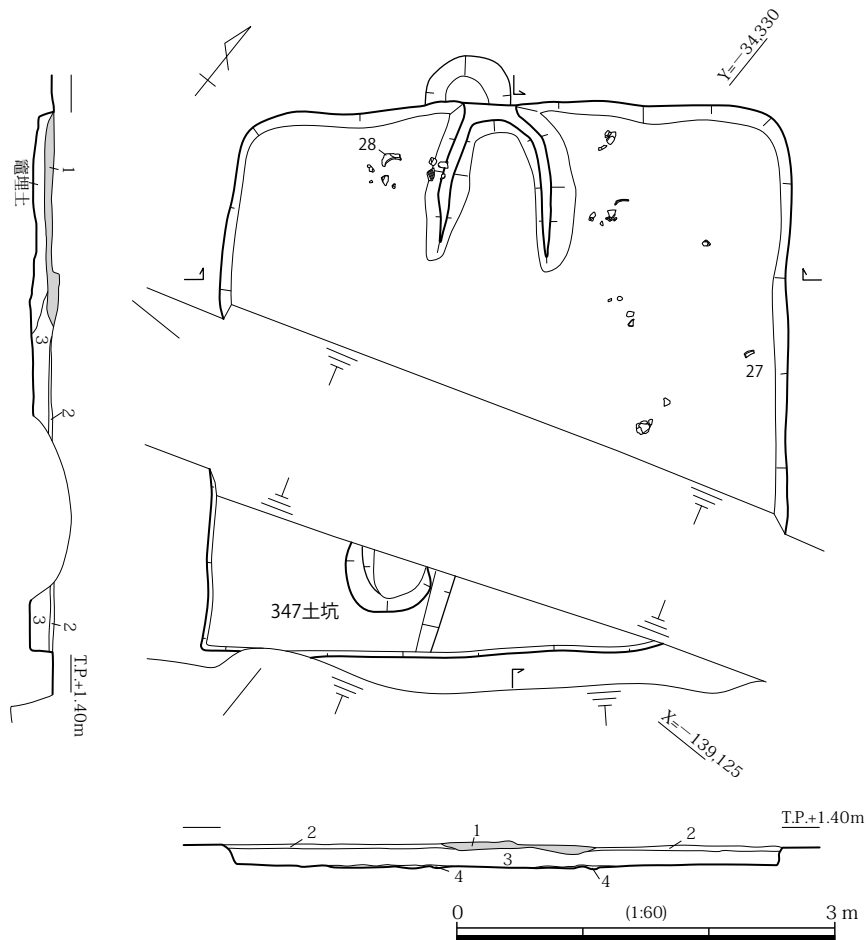


図 21 竪穴建物 4 出土遺物実測図

竪穴建物 5 (図 8・22～25、図版 1・3・8～10)

1 区南側で検出した。平面形は方形である。南北辺を主軸とすると $N-36^{\circ}-W$ である。規模は東西 4.5 m、南北 4.45 m である。面積は 20.025 m^2 である。床面までの深さは 0.18 m である。埋土は 4 層 (図 22) に分けられた。



- | | |
|---------------------------------------------|---------------------------------------|
| 1. 2.5GY 3/1 暗オリーブ灰 極細砂混シルト質砂
(炭粒・焼土粒含む) | 3. 5GY 3/1 暗オリーブ灰 極細砂混砂質シルト
(炭粒含む) |
| 2. 2.5GY 3/1 暗オリーブ灰 極細砂～細砂混シルト質砂
(炭粒含む) | 4. 2.5GY 3/1 暗オリーブ灰 砂質シルト |

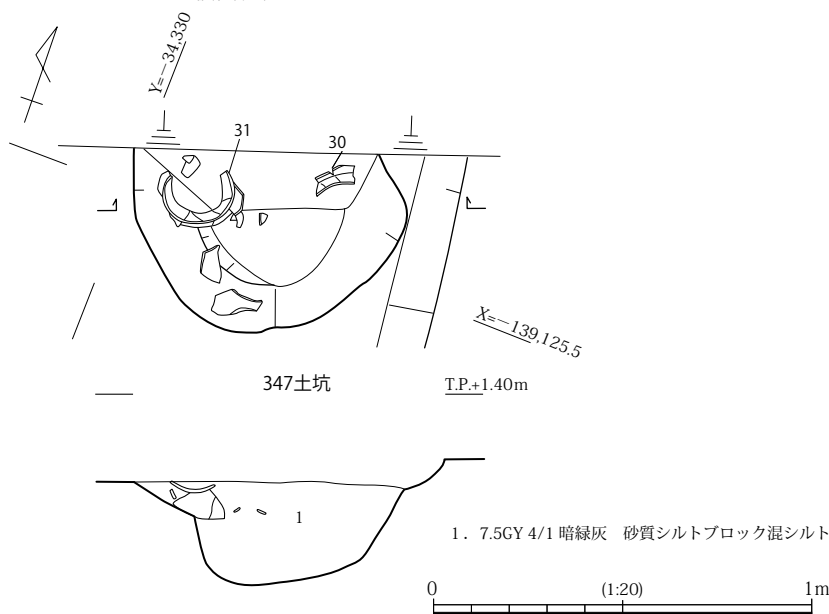


図 22 竪穴建物 5 平・断面図

層 (図 22) に分けられた。建物検出時に北壁中央付近に南北 1.8 m、東西 1.1 m の範囲に炭層の広がりを確認した (1 層)。そのため当初はこれが竈埋土の一部と考えて調査を進めたが、その下には 2・3 層が堆積していることから、建物廃絶後に投棄された炭層と考えられる。4 層は使用時に堆積した層と見られる砂質シルトである。微細遺物検出のために床面直上の埋土 37 リットル (46 kg) を土壌洗浄したが、雑草の種子 (第 5 章 第 3 節参照) を確認したのみである。床面は整地層に相当する層は確認できず、第 7 層であった。柱穴は検出されなかった。

北壁中央に作り付けの竈 (図 23) を検出した。竈の規模は長さ 1.35 m、最大幅 1.2 m である。竈は炭層を取り除き、さらに極細砂混じり暗オリーブ灰色シルト質砂 (1 層) を取り除くと竈の袖部を検出した。竈内には竈の構築材が崩落したブロックや炭混じりで焼土を多く含む層が堆積し、焚口周辺に土器片がまともって廃棄されていた。それらを取り除くと燃焼部手前

側を中心に炭層を検出した(図24左)。竈燃焼部に堆積していた炭・焼土を中心に埋土17リットル(22kg)を土壌洗浄したが、遺物は出土しなかった。

竈袖部を取り除くと右袖部が構築されていた箇所に炭層が広がっていた(図24右)。これは竈の作り替え以前の燃焼部の新しく構築された竈の袖基底部になったため残存していたものと考えられる。竈掘方は確認されず床面上に構築されていた。

南壁中央付近には0.1mの段差があり、その西に347土坑を検出した(図22下)。土坑の半分は攪乱を受け残存していないが、検出した規模は南北0.47m、東西0.72m、深さ0.28mである。土坑内には土師器甕が廃棄されていた。

遺物は床面から須恵器杯蓋1点・高杯片1点、土師器甕片5点・甕等体部片23点・器種不明小片24点、竈から土師器甕片3点・甕等体部片22点・器種不明小片24点、製塩土器4点(4.97g)、竈構築材から土師器甕等体部片3点、埋土から須恵器高杯片1点・甕片1点、土師器高杯片1点・甕片7点・甕等体部片39点・器種不明小片39点、347土坑から土師器甕片3点・甕等体部片3点・器種不明小片3点の計207点出土し、そのうち5点を図示し得た(図25)。

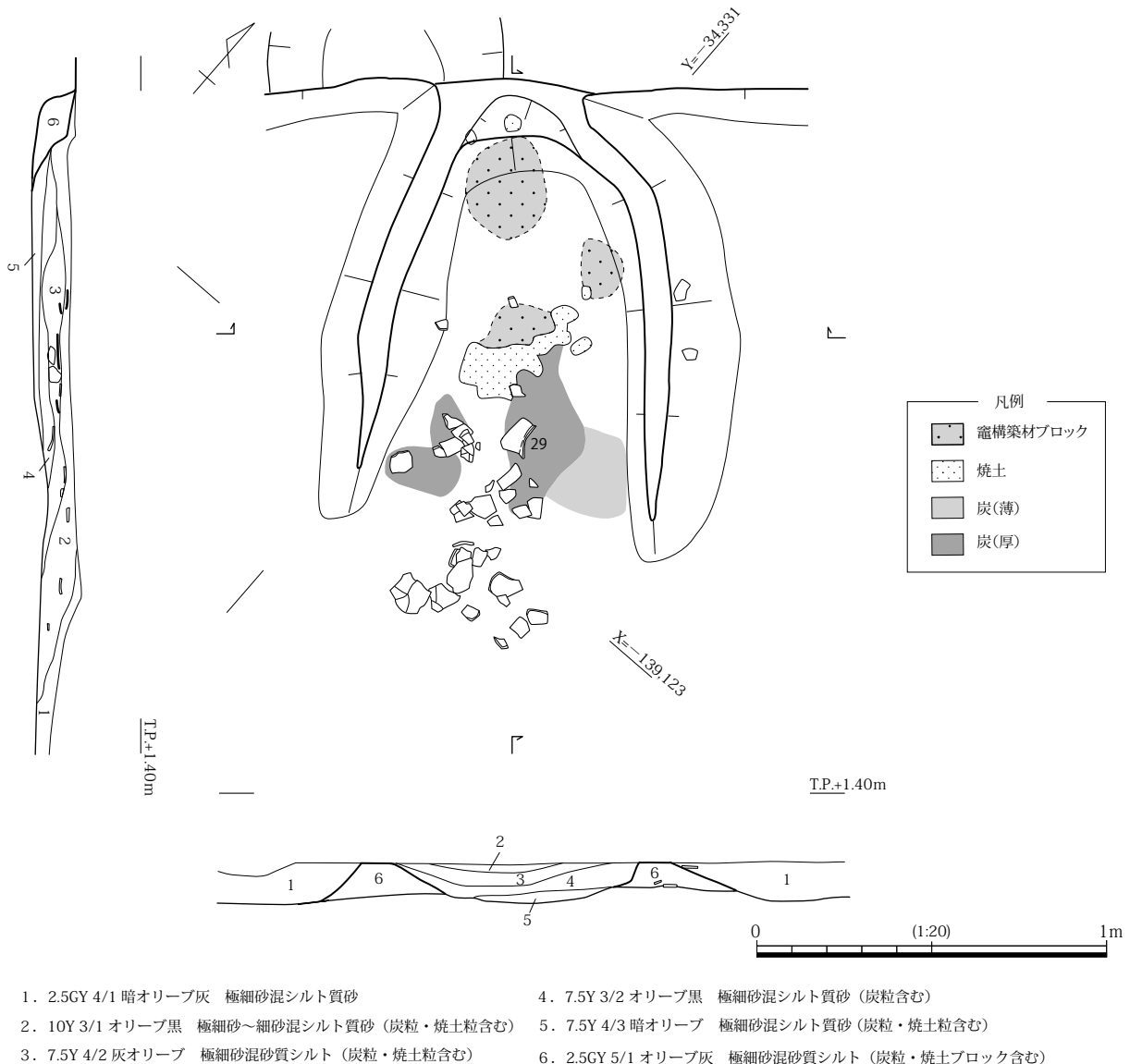


図23 竈穴建物5竈 平・断面図

27は床面から出土した須恵器杯蓋で、シャープなつくりである。28～31は土師器甕である。28は口縁端部を丸くおさめ、30は端部がやや肥大し内傾する。31も端部が内傾する。29は頸部が強く屈曲し、口縁端部が外方へ肥大する。口縁端部上面は平坦で、口縁部内面は強い回転ナデによりややくぼむ。体部外面調整は粗いタテハケを強く施す。東海系の宇田型甕の影響を受けている。

建物の時期は5世紀第3四半期である。

掘立柱建物1 (図8・26・27、図版1・11・12・23)

1区南西側で検出した側柱の建物である。東側と南・北側のそれぞれ一部に建物柱穴と平行する柱穴があり廂付きの建物と考えられる。棟は東西方向で、主軸はN-28°-Eである。規模は桁行4間、梁行3間である。身舎の面積は35.97㎡である。柱間寸法は柱痕跡を確認できた118・119柱穴間が1.85mである。

柱掘方の平面形は入側柱が長方形を基本とし、一部が円形である。廂の柱穴は方形と楕円形が見られる。廂の柱穴は、東側の124～127柱穴の柱掘方の規模は入側柱よりやや小型であるが、深さは同じである。それに比べて南・北側に位置する121・123・129柱穴は深さが0.1～0.25mと浅くなり、

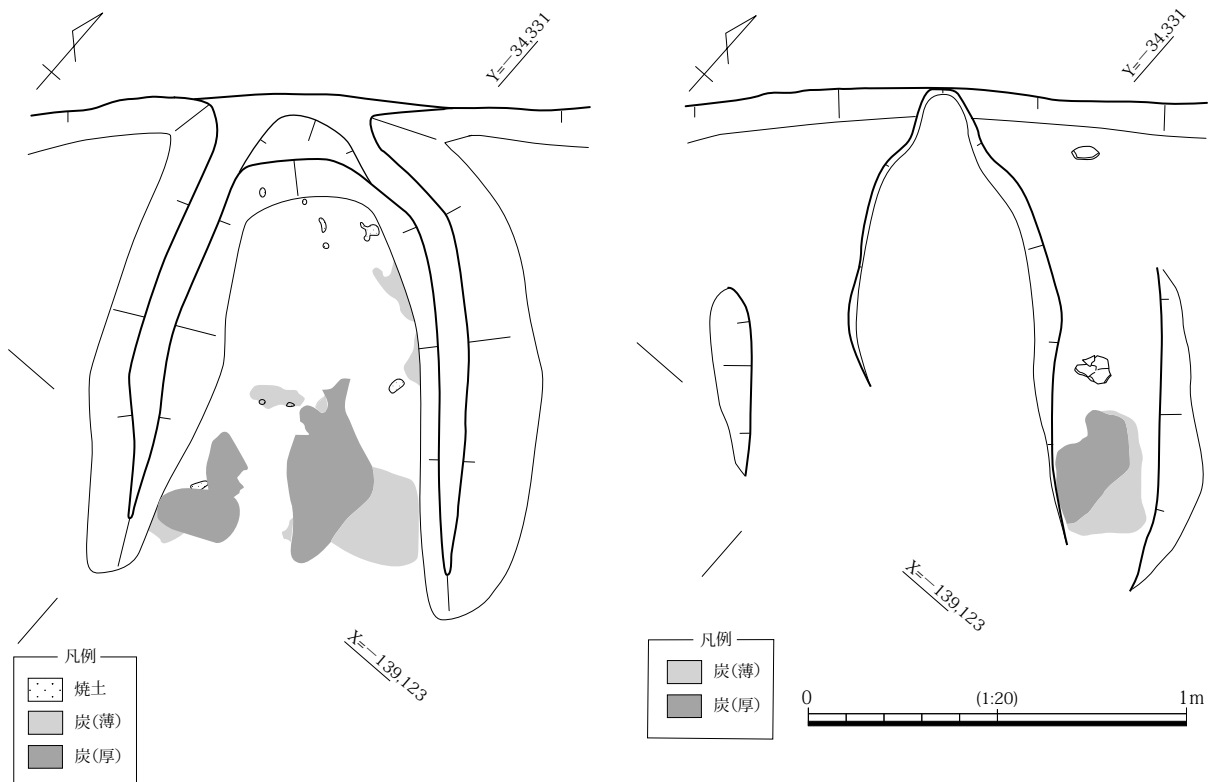


図24 竪穴建物5竈 平面図

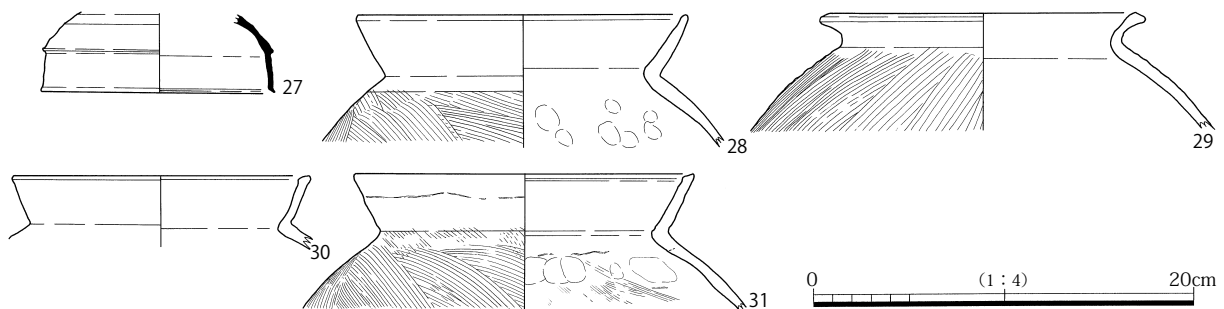
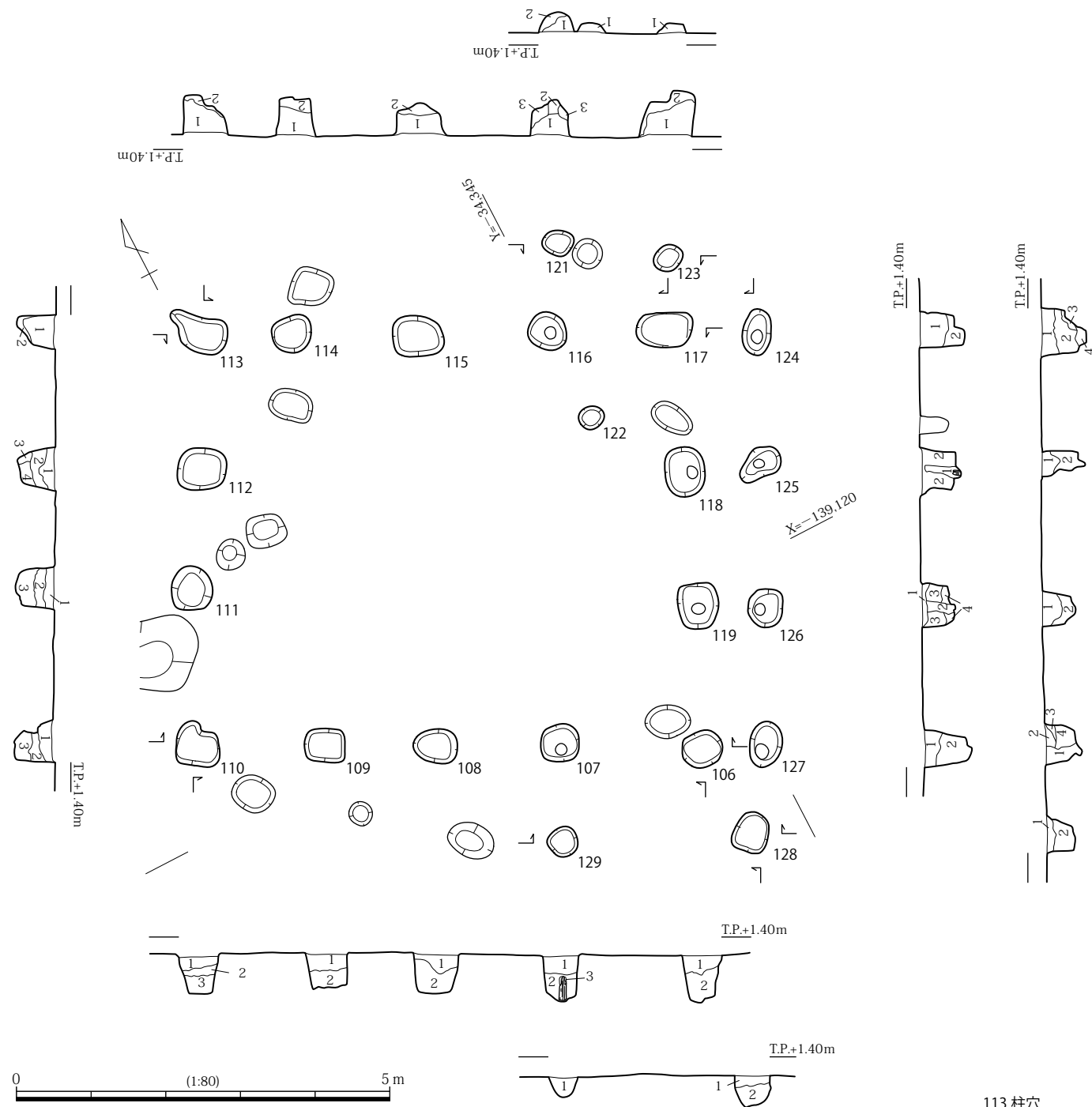


図25 竪穴建物5 出土遺物実測図



- 113
 1. 10Y 4 /1 灰 極細砂, 細砂ブロック混シルト質砂 (炭粒含む)
 2. 7.5Y 4 /1 灰 細砂ブロック混粘土質シルト (炭粒含む)

- 114
 1. 10Y 4 /1 灰 極細砂~細砂混シルト質砂 (炭粒含む)
 2. 10Y 3/2 オリーブ黒 細砂ブロック混砂質シルト

- 115
 1. 10Y 4/1 灰 極細砂~細砂混シルト質砂 (炭粒含む)
 2. 7.5Y 3/2 オリーブ黒 細砂ブロック混砂質シルト (炭粒含む)

- 116
 1. 10Y 4/1 灰 極細砂~細砂混シルト質砂 (炭粒含む)
 2. 7.5Y 3/2 オリーブ黒 粘土質シルト
 3. 10Y 4/2 オリーブ灰 細砂ブロック混砂質シルト (炭粒含む)

- 117
 1. 10Y 3/2 オリーブ黒 細砂混シルト質砂 (炭粒含む)
 2. 10Y 4/1 灰 細砂ブロック混粘土質シルト (炭粒含む)

- 118
 1. 10Y 4/2 オリーブ灰 粘土 (炭粒含む)
 2. 10Y 3/2 オリーブ黒 極細砂混砂質シルト (炭粒含む)

- 119
 1. 10Y 3/2 オリーブ黒 細砂混シルト質砂 (炭粒含む)
 2. 10Y 4/2 オリーブ灰 粘土質シルト (炭粒含む)
 3. 7.5Y 4/1 灰極細砂 細砂ブロック混砂質シルト
 4. 7.5Y 3/2 オリーブ黒 細砂ブロック混砂質シルト

- 106
 1. 7.5Y 4/1 灰 細砂ブロック混シルト質砂 (炭粒含む)
 2. 10Y 3/1 オリーブ黒 極細砂, 細砂ブロック混砂質シルト

- 107
 1. 7.5Y 4/1 灰 細砂ブロック混シルト質砂 (炭粒含む)
 2. 10Y 3/1 オリーブ黒 極細砂, 細砂ブロック混砂質シルト
 3. 7.5Y 3/1 オリーブ黒 粘土

- 108
 1. 7.5Y 4/1 灰 細砂混シルト質砂 (炭粒含む)
 2. 10Y 3/1 オリーブ黒 極細砂, 細砂ブロック混砂質シルト

- 109
 1. 7.5Y 4/1 灰 細砂混シルト質砂 (炭粒含む)
 2. 10Y 3/1 オリーブ黒 極細砂, 細砂ブロック混砂質シルト

- 110
 1. 5GY 4/1 暗オリーブ灰 極細砂混シルト質砂
 2. 7.5Y 3/1 オリーブ黒 細砂ブロック混砂質シルト
 3. 5Y 4/1 灰 砂質シルト

- 111
 1. 2.5GY 3/1 暗オリーブ灰 極細砂混シルト質砂 (炭粒含む)
 2. 10Y 3/1 オリーブ黒 極細砂, 細砂ブロック混砂質シルト
 3. 7.5Y 3/1 オリーブ黒 細砂混砂質シルト (炭粒含む)

- 112
 1. 2.5GY 3/1 暗オリーブ灰 極細砂混シルト質砂 (炭粒含む)
 2. 10Y 3/1 オリーブ黒 極細砂, 細砂ブロック混砂質シルト
 3. 7.5Y 3/1 オリーブ黒 細砂混粘土質シルト
 4. 10Y 4/1 灰 極細砂~細砂, 細砂ブロック混砂質シルト

- 121
 1. 10Y 4/1 灰 極細砂, 細砂ブロック混シルト質砂
 2. 10Y 4/2 オリーブ灰 極細砂混砂質シルト

- 123
 1. 7.5Y 4/1 灰 極細砂混シルト質砂 (炭粒含む)

- 124
 1. 2.5GY 3/1 暗オリーブ灰 極細砂, 細砂ブロック混シルト質砂
 2. 10Y 3/2 オリーブ黒 極細砂, 細砂ブロック混砂質シルト
 3. 10Y 3/1 オリーブ黒 細砂ブロック混粘土質シルト
 4. 7.5Y 3/1 オリーブ黒 粘土質シルト

- 125
 1. 2.5GY 3/1 暗オリーブ灰 極細砂, 細砂ブロック混シルト質砂 (炭粒含む)
 2. 10Y 3/2 オリーブ黒 極細砂, 細砂ブロック混砂質シルト

- 126
 1. 7.5Y 3/2 オリーブ黒 極細砂, 細砂ブロック混シルト質砂 (炭粒含む)
 2. 10Y 4/2 オリーブ灰 細砂ブロック混砂質シルト

- 127
 1. 5GY 4/1 暗オリーブ灰 極細砂混シルト質砂 (炭粒含む)
 2. 7.5GY 4/1 暗緑灰 中砂混砂質シルト
 3. 10Y 3/1 オリーブ黒 細砂ブロック混シルト質砂
 4. 10Y 3/2 オリーブ黒 細砂ブロック混シルト質砂 (炭粒含む)

- 128
 1. 10Y 4/2 オリーブ灰 極細砂混砂質シルト
 2. 2.5GY 3/1 暗オリーブ灰 極細砂, 細砂ブロック混シルト質砂

- 129
 1. 10Y 4/1 灰 極細砂混シルト質砂 (炭粒含む)

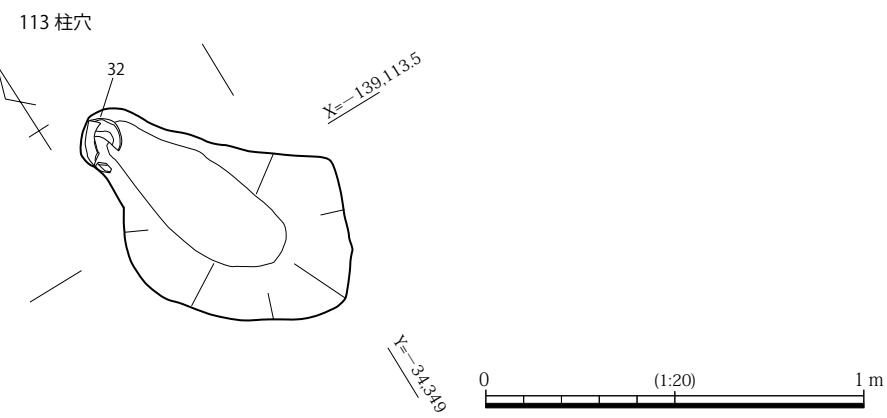


図 26 掘立柱建物 1 平・断面図、及び 113 柱穴 遺物出土状況図

柱掘方の規模が異なる。この点を考えると、廂は東西の一部を「コ」の字に囲むものであるか、または南側のみ片廂の可能性が考えられる。

107 柱穴と 118 柱穴（図版 11）では柱材が残存し、柱の残存長は 107 柱穴が直

径 0.07～0.1 m、長さ 0.36 m、118 柱穴は直径 0.07 m、長さ 0.12 m であった。113 柱穴は柱抜き取りにより掘方が北側に舌状に広がり、その最上層から須恵器杯身が出土した（図 26、図版 11）。

出土遺物は 108 柱穴から須恵器甕片 1 点、109 柱穴から土師器器種不明小片 1 点、111 柱穴から土師器甕等体部片 4 点、112 柱穴から溶着した須恵器甕または壺片 1 点（図版 27 - 278）、土師器器種不明小片 3 点、113 柱穴から須恵器杯身 1 点・杯蓋片 1 点、土師器器種不明小片 3 点、117 柱穴から土師器甕等体部片 1 点・器種不明小片 1 点、118 柱穴から土師器器種不明小片 1 点、125 柱穴から須恵器杯 1 点、土師器甕 2 点・甕等体部片 3 点、126 柱穴から土師器甕 2 点・甕等体部片 3 点・器種不明小片 1 点、製塩土器小片 8 点（1.95 g）、127 柱穴から土師器甕等体部片 1 点である。このうち 4 点を図示し得た（図 27）。

32 は 113 柱穴から出土した須恵器杯身である（図版 23）。口縁端部は内傾し、ややくぼむ。受部端から底部にかけて自然釉が認められるため、蓋を被せた状態で焼成されたと考えられる。33～35 は

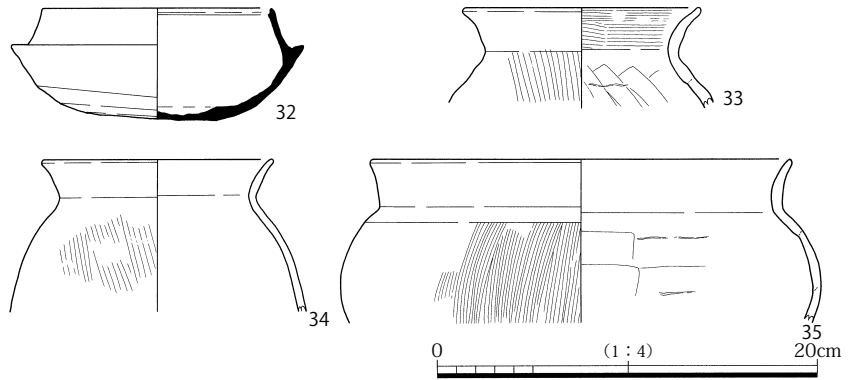


図 27 掘立柱建物 1 出土遺物実測図

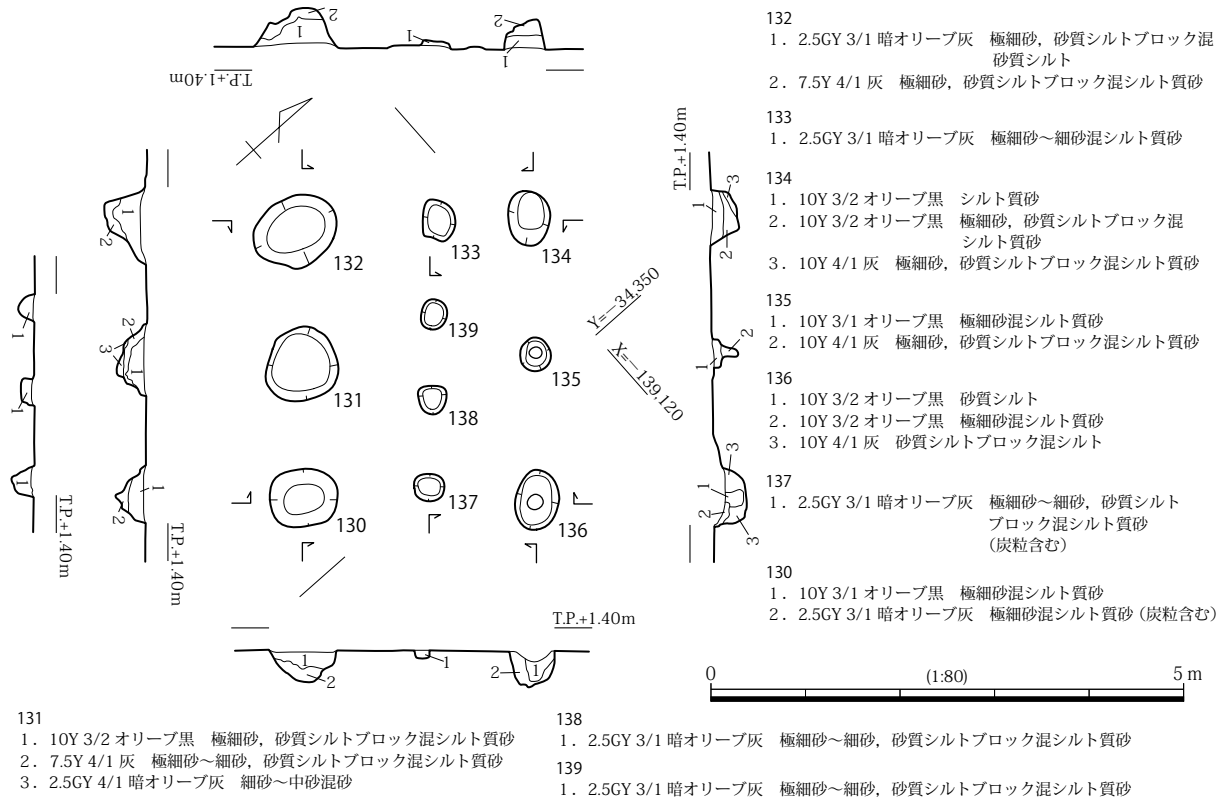


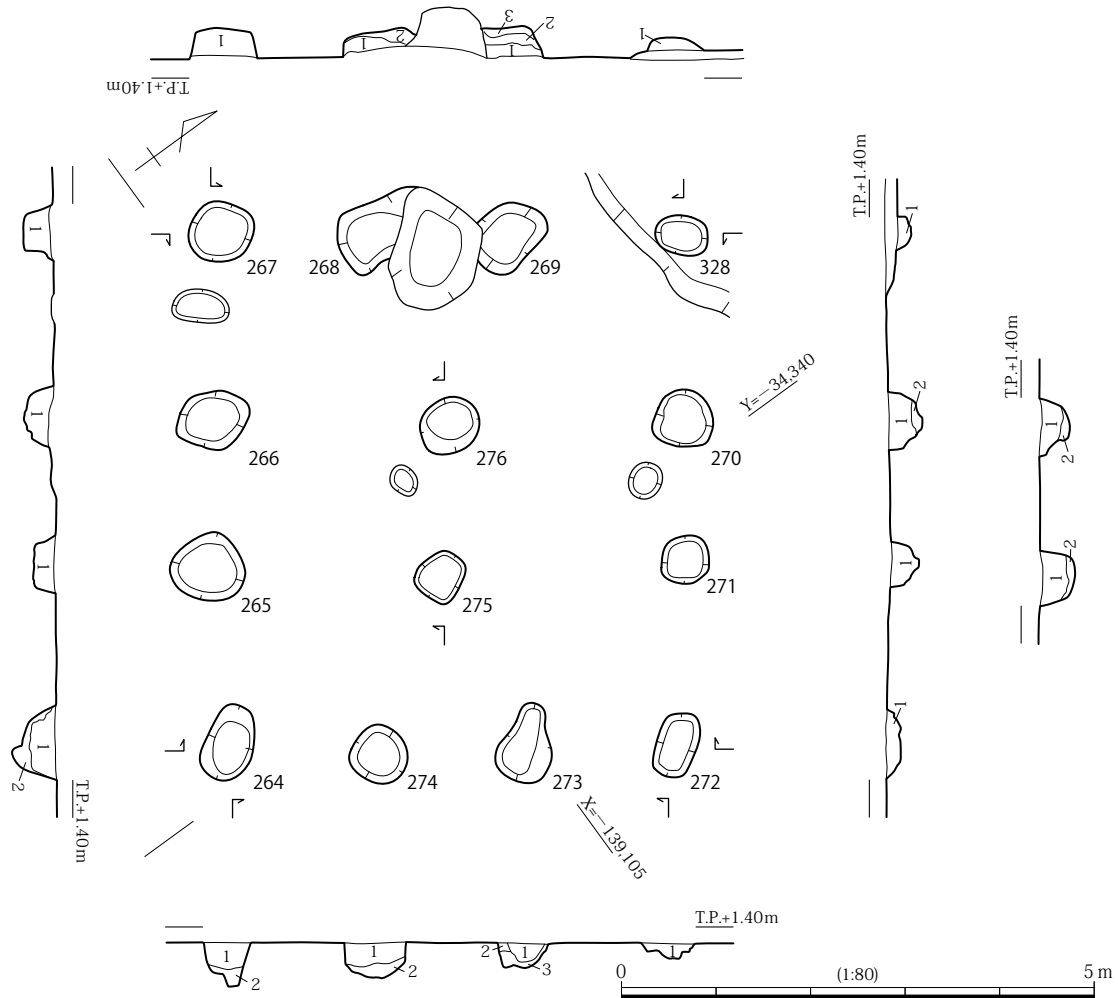
図 28 掘立柱建物 2 平・断面図

土師器甕である。

時期は 113 柱穴から出土した須恵器杯身が、出土状況から柱抜き取りの際に投棄されたものと推定されるため、6 世紀第 1 四半期に廃絶したと考えられる。

掘立柱建物 2 (図 8・28、図版 1・12)

1 区南西側、掘立柱建物 1 の南に隣接して検出した。規模は桁行 2 間、梁行 2 間である。中央に床束



- 267
1. 10Y 3/2 オリーブ黒 極細砂, シルトブロック混砂質シルト (炭粒含む)
- 268
1. 10Y 3/1 オリーブ黒 極細砂, シルトブロック混砂質シルト
2. 2.5GY 3/1 暗オリーブ灰 極細砂～中砂混砂質シルト
- 269
1. 10Y 3/2 オリーブ黒 極細砂, シルトブロック混砂質シルト (炭粒含む)
2. 10Y 3/2 オリーブ黒 極細砂～細砂, シルトブロック混砂質シルト
3. 7.5Y 4/1 灰 極細砂～細砂混シルト質砂
- 328
1. 10Y 3/2 オリーブ黒 細砂, シルトブロック混砂質シルト
- 270
1. 10Y 3/2 オリーブ黒 細砂, シルトブロック混砂質シルト
2. 7.5Y 4/1 灰 細砂～中砂, 砂質シルトブロック混シルト質砂
- 271
1. 10Y 3/2 オリーブ黒 極細砂, シルトブロック混砂質シルト
- 272
1. 10Y 3/2 オリーブ黒 極細砂, シルトブロック混砂質シルト

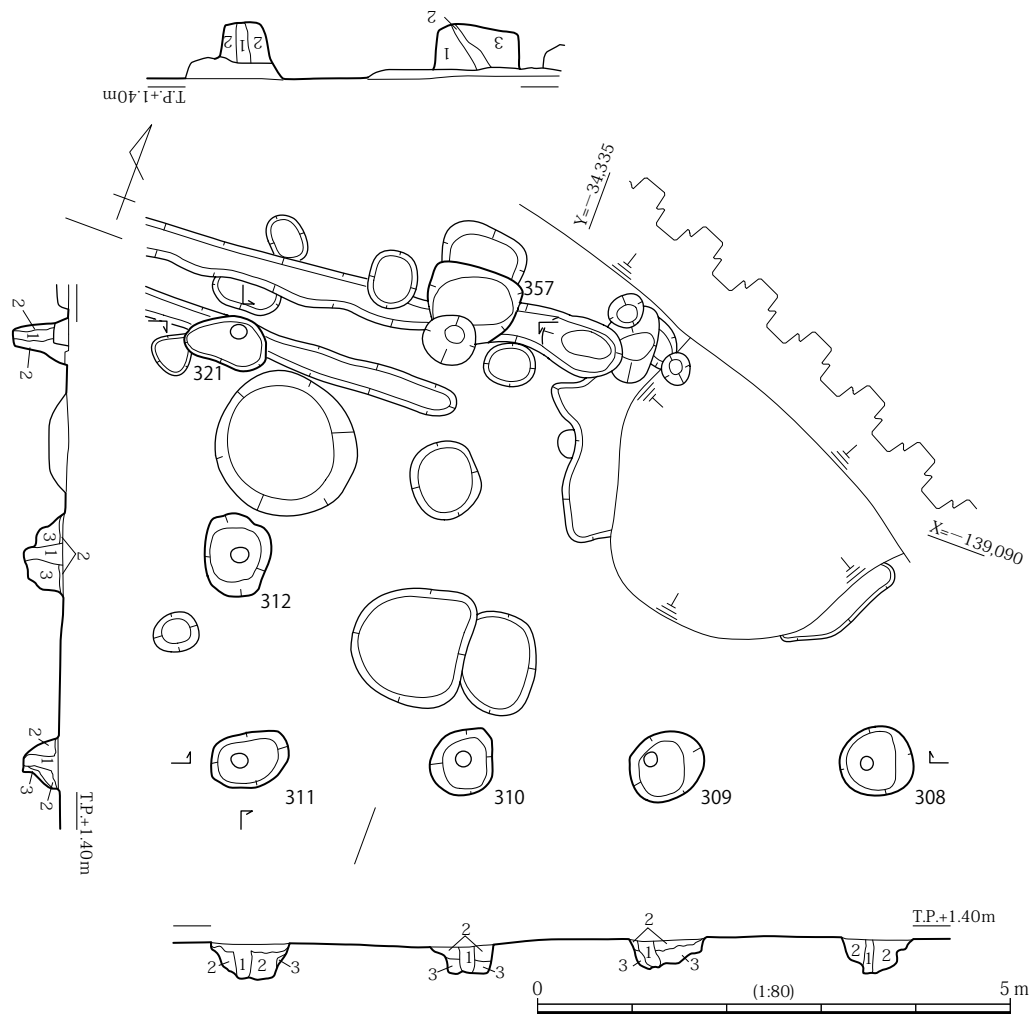
- 273
1. 10Y 3/2 オリーブ黒 極細砂, シルトブロック混砂質シルト
2. 7.5Y 3/1 オリーブ黒 極細砂, シルトブロック混シルト質砂
3. 10Y 4/1 灰 極細砂, 砂質シルトブロック混シルト質砂 (炭粒含む)
- 274
1. 10Y 3/2 オリーブ黒 極細砂, シルトブロック混砂質シルト
2. 2.5GY 3/1 暗オリーブ灰 極細砂, シルトブロック混砂質シルト
- 264
1. 10Y 3/2 オリーブ黒 極細砂, シルトブロック混砂質シルト
2. 10Y 4/1 灰 極細砂～細砂混シルト質砂
- 265
1. 10Y 3/2 オリーブ黒 極細砂, シルトブロック混砂質シルト (炭粒含む)
- 266
1. 10Y 3/2 オリーブ黒 極細砂, シルトブロック混砂質シルト (炭粒含む)
- 275
1. 2.5GY 4/1 暗オリーブ灰 シルトブロック混砂質シルト
2. 10Y 4/1 灰 細砂, 砂質シルトブロック混シルト質砂
- 276
1. 2.5GY 4/1 暗オリーブ灰 極細砂, シルトブロック混砂質シルト
2. 10Y 4/1 灰 細砂, 砂質シルトブロック混シルト質砂 (炭粒含む)

図 29 掘立柱建物 3 平・断面図

と考えられる柱穴2基を検出した。棟は東西方向で、主軸はN—42°—Eである。面積は7.11 m²である。柱間寸法は柱痕を確認できた、北側の桁行 135・136 柱穴間が 1.6 m である。柱穴間隔は梁行に比べ桁行は長くなる。

柱掘方の平面形は円形と楕円形が見られ、断面形は様々である。規模は西側柱にあたる 130～132 柱穴は直径 0.7 m、深さ 0.2 m 前後であるのに対して、133・135・137 柱穴は直径 0.15～0.2 m、深さ 0.05～0.1 m とかなり小さく、規模に差異が見られる。

建物の時期は遺物が出土しなかったため、特定できない。



321

1. 2.5GY 4/1 暗オリーブ灰 極細砂混砂質シルト (炭粒含む)
2. 10Y 3/1 オリーブ黒 極細砂～中砂, シルトブロック混シルト質砂 (炭粒含む)

357

1. 2.5GY 4/1 暗オリーブ灰 極細砂混砂質シルト (炭粒含む)
2. 2.5GY 4/1 暗オリーブ灰 極細砂～中砂, シルトブロック混砂質シルト
3. 2.5GY 4/1 暗オリーブ灰 シルトブロック混砂質シルト (炭粒含む)

308

1. 2.5GY 4/1 暗オリーブ灰 極細砂, シルトブロック混砂質シルト (炭粒含む)
2. 10Y 3/1 オリーブ黒 極細砂, シルトブロック混シルト質砂 (炭粒含む)

309

1. 2.5GY 4/1 暗オリーブ灰 極細砂, シルトブロック混砂質シルト
2. 10Y 3/1 オリーブ黒 極細砂, シルトブロック混シルト質砂
3. 2.5GY 3/1 暗オリーブ灰 極細砂～細砂, シルトブロック混シルト質砂 (炭粒含む)

310

1. 2.5GY 4/1 暗オリーブ灰 極細砂, シルトブロック混砂質シルト
2. 10Y 3/1 オリーブ黒 極細砂, シルトブロック混シルト質砂
3. 2.5GY 3/1 暗オリーブ灰 極細砂～細砂, シルトブロック混シルト質砂 (炭粒含む)

311

1. 2.5GY 4/1 暗オリーブ灰 極細砂～細砂, シルトブロック混砂質シルト
2. 10Y 3/1 オリーブ黒 極細砂～細砂, シルトブロック混シルト質砂
3. 10Y 4/1 灰 極細砂, 砂質シルトブロック混シルト質砂

312

1. 2.5GY 4/1 暗オリーブ灰 極細砂～細砂, シルトブロック混砂質シルト
2. 10Y 3/1 オリーブ黒 極細砂～中砂, シルトブロック混シルト質砂
3. 10Y 4/1 灰 極細砂, シルトブロック混シルト質砂 (炭粒含む)

図 30 掘立柱建物 4 平・断面図

掘立柱建物 3 (図 8・29、図版 1・12)

1 区北側中央で検出した。

規模は桁行 3 間、梁行 3 間で中央に床束と考えられる柱穴が 2 基並ぶ。棟は東西方向で、主軸は N—36°—E である。面積は 26.43 m² である。平面と断面からも柱痕跡は確認することができなかった。

掘方の平面形は方形や不整な長方形など様々で揃っていない。断面形は方形と段状に掘り下げられたものが見られる。

出土遺物は 266 柱穴から土師器高杯片 8 点・甕等体部片 3 点・器種不明小片 4 点、328 柱穴から土師器器種不明小片 1 点である。

図示し得る遺物はなく、遺構の時期を特定できない。

掘立柱建物 4 (図 8・30、図版 1・13)

1 区北東隅で検出し、調査区外に広がる。規模は桁行 3 間以上、梁行 2 間である。棟は東西方向で、主軸は N—21°—W である。柱掘方の平面形は不整な方形で、断面形は方形・逆台形・段状に掘り下げたものなど揃っていない。柱間は南側が西から 2.35 m、2.0 m、2.2 m、西側が南から 2.15 m、2.35 m である。掘立柱建物 4・6 の柱間は他の掘立柱建物の柱間がいずれも 2.0 m 以下であるのと比べると長くなる。

遺物は 311 柱穴から土師器器種不明小片 2 点、312 柱穴から須恵器器種不明小片 1 点、土師器器種不明小片 3 点、321 柱穴から須恵器器種不明小片 1 点、357 柱穴から須恵器甕片 3 点、土師器高杯片 1 点・甕等体部片 11 点・器種不明小片 4 点が出土した。図示し得る遺物はなかった。

時期は出土遺物からは不明であるが、この建物は出土遺物から 8 世紀後半と考えられる掘立柱建物 6 の柱穴を掘りこんでいるので、重複関係からそれ以降の時期に該当する。

掘立柱建物 5 (図 8・31・33、図版 1・13・23)

1 区中央北側で検出した。北東側柱は 62 溝により残存しなかった。62 溝に先行する建物である。規模は桁行 3 間、梁行 2 間である。棟は南北方向で、主軸は N—23°—W である。面積は 14.49 m² と推定される。柱間は桁行が 1.25 m と 1.4 m、梁行が 1.55 m、1.6 m、1.9 m で、桁行に比べ梁行の柱間が長い。

柱掘方の平面形は円形、断面形は方形や漏斗状のものがある。規模は 0.3～0.4 m と規模が小さいものである。埋土は柱痕跡が明瞭に観察でき、細砂混じり砂質シルトに焼土や炭を多量に含むという特徴を示す。

出土遺物は 183 柱穴から土師器甕等体部片 1 点・器種不明小片 2 点、185 柱穴が土師器甕片 2 点・器種不明小片 1 点、製塩土器 1 点 (0.47 g)、189 柱穴が土師器甕等体部片 3 点、190 柱穴が須恵器杯身 1 点、土師器高杯片 7 点・壺片 1 点・器種不明小片 8 点、191 柱穴が須恵器杯身 1 点、199 柱穴から須恵器甕片 1 点、土師器器種不明小片 3 点、製塩土器片 3 点 (4.74 g) が出土した。このうち 3 点を図示し得た (図 33)。

36 は 190 柱穴柱痕から出土した須恵器杯身である (図版 23)。たちあがり端部は段をもつ。受部上面に重ね焼きによる溶着が認められ、受部から底部にかけては自然釉が付着する。底部内面中央に直径 1.7 cm のくぼみがあり、そのまわりに 3 重の同心円状のミズビキ痕跡が残る。37 は 191 柱穴から出土した須恵器杯身である。たちあがり端部は内傾し、端部の仕上げが雑である。38 は土師器直口壺である。建物の時期は 5 世紀第 4 四半期に廃絶したと考えられる。

掘立柱建物 6 (図 8・32・33、図版 1)

1 区北端で、西辺 1 間、南辺 2 間を検出し、さらに調査区外の北側に広がる。西辺を主軸とすると N—15°—W である。柱掘方の平面形は不整な方形で、断面形は方形・逆台形・段状に掘り下げたものなど揃っていない。322 柱穴は柱材が残存し、その残存長は直径 0.15 m、長さ 0.42 m であった。

遺物は、322 柱穴から土師器甕 1 点・器種不明小片 3 点、324 柱穴から須恵器杯片 1 点・高杯片 1 点・甕片 8 点・器種不明小片 3 点、土師器甕等体部片 29 点・器種不明小片 9 点、韓式系土器片 1 点、製塩土器片 6 点 (1.73 g) が出土し、そのうち 1 点を図示し得た (図 33)。39 は土師器甕口縁部である。建物の時期は 8 世紀後半である。

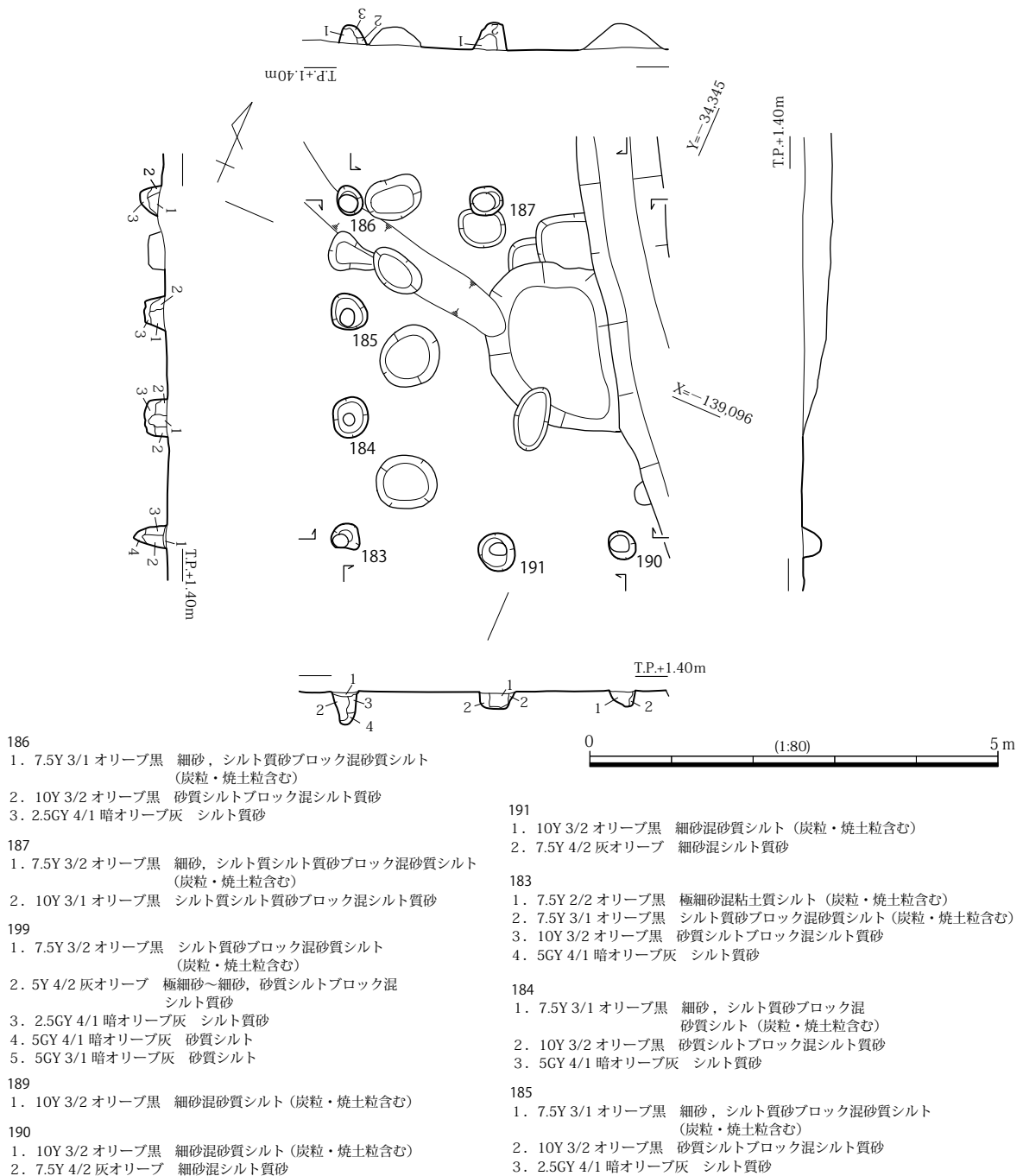
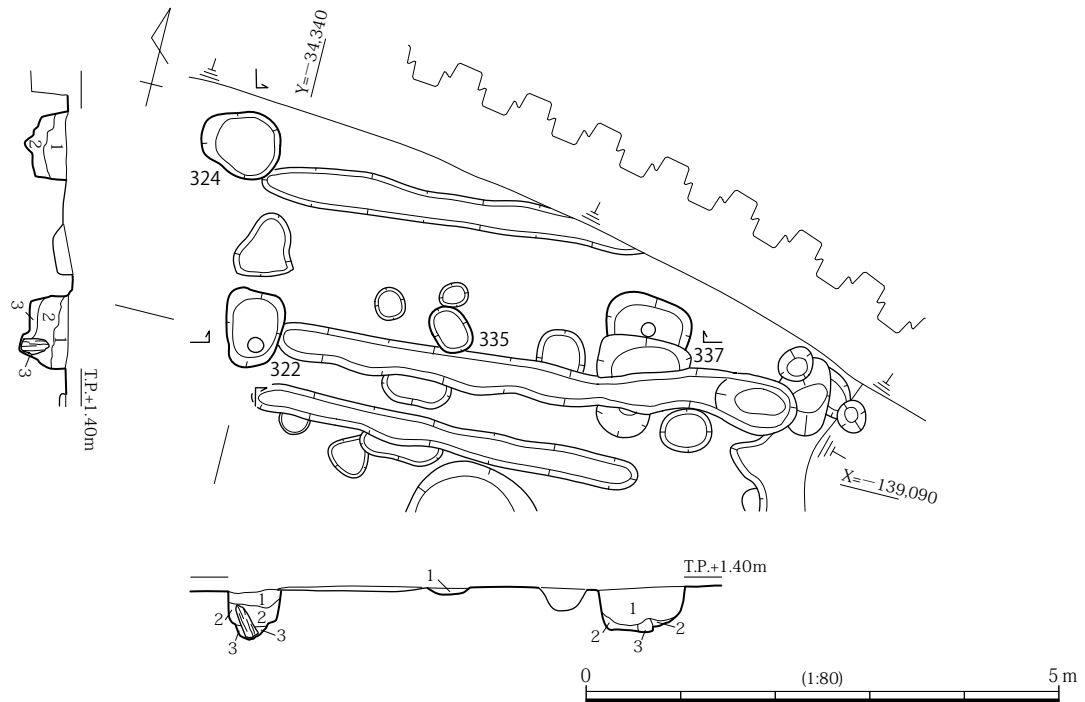


図 31 掘立柱建物 5 平・断面図



- | | |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>324</p> <p>1. 10Y 3/2 オリーブ黒 極細砂混シルト質砂</p> <p>2. 7.5Y 3/1 オリーブ黒 極細砂～細砂, シルトブロック混砂質シルト (炭粒含む)</p>
<p>337</p> <p>1. 10Y 3/1 オリーブ黒 細砂～中砂, シルトブロック混砂質シルト</p> <p>2. 10Y 4/1 灰 極細砂, 細砂ブロック混砂質シルト (炭粒含む)</p> <p>3. 7.5Y 3/1 オリーブ黒 粘土質シルト (炭粒・焼土粒含む)</p> | <p>335</p> <p>1. 2.5GY 4/1 暗オリーブ灰 砂質シルト</p>
<p>322</p> <p>1. 10Y 3/2 オリーブ黒 極細砂, シルトブロック混シルト質砂</p> <p>2. 7.5Y 3/1 オリーブ黒 極細砂～細砂, シルトブロック混砂質シルト (炭粒含む)</p> <p>3. 10Y 4/1 灰 細砂～中砂, 細砂ブロック混シルト質砂 (炭粒含む)</p> |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

図 32 掘立柱建物 6 平・断面図

掘立柱建物 7 (図 8・34・35、図版 1・23)

1区中央西側で検出した。掘立柱建物 7 とその周囲の「コ」字形の 72 溝を掘立柱建物の周囲をめぐる溝と考え、掘立柱建物 7 に付属する遺構としてここで報告する。規模は桁行 4 間、梁行 1 間と推定される。棟は東西方向で、主軸は N-39°-W である。172 柱穴は柱材が僅かに残存した。172 柱穴は 61 溝を掘りこむ柱穴と考えられるが、調査時には 61 溝上面では確認できず、底面から柱穴を検出した。

72 溝は中央付近が 71 土坑に掘りこまれ、底面のみ僅かに残存していた。規模は幅 0.8～1.3 m、深さ 0.23～0.3 m である。埋土は 2 層に分けられ、底面付近に止水状態で堆積した砂質シルトが見られ、その上層は炭粒を含む極細砂混じりシルト質砂で埋められた。遺物はこの埋め戻された層から出土した。

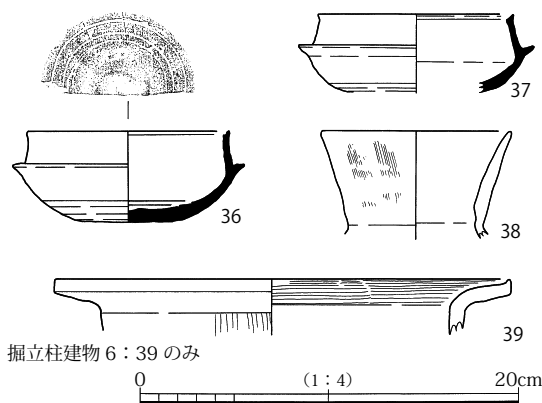
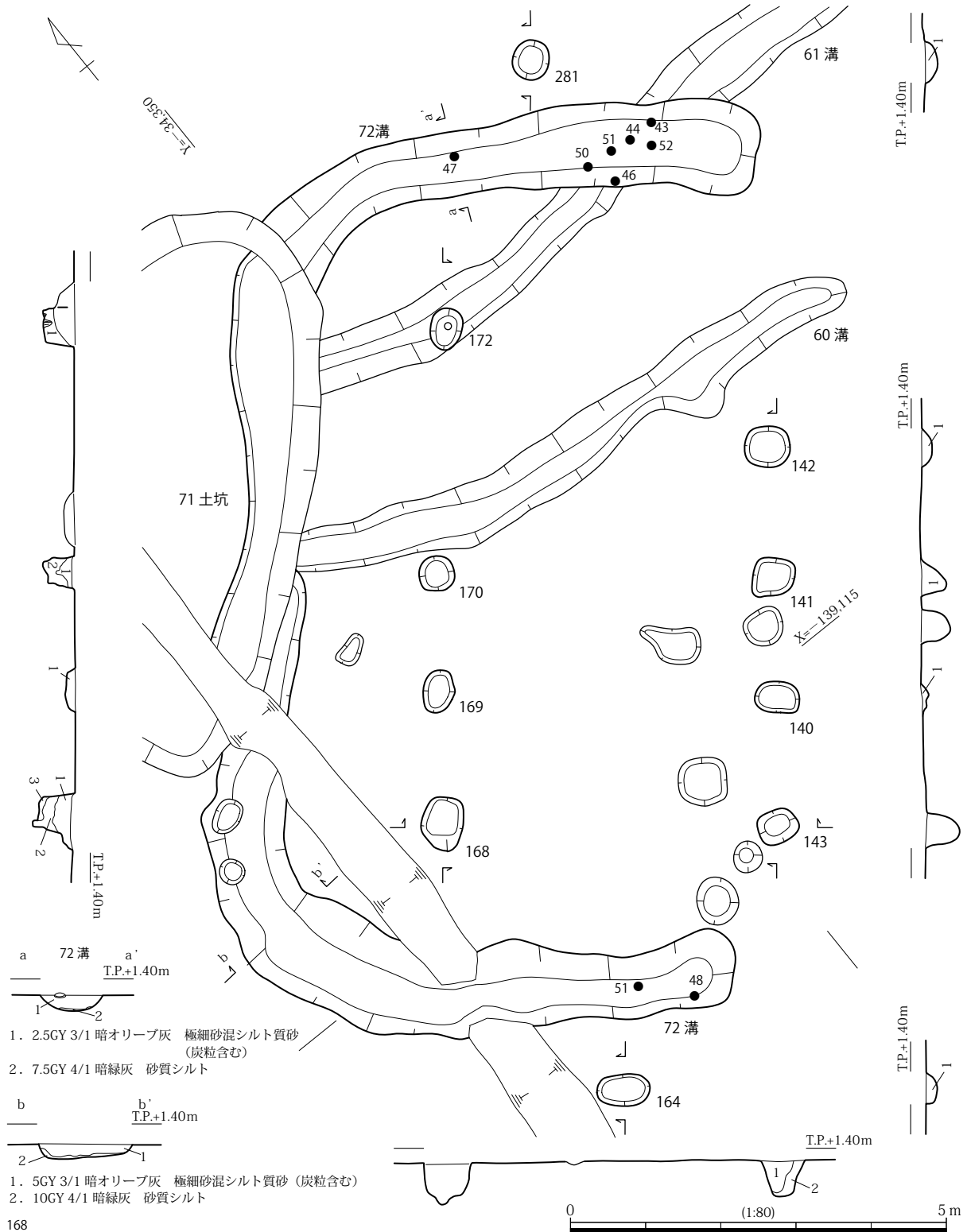


図 33 掘立柱建物 5・6 出土遺物実測図

埋土中の炭が多く含まれた箇所を 15 リットル (23.1 kg) 洗浄したが、遺物は検出されなかった。

遺物は 168 柱穴から土師器甕等体部片 2 点、72 溝から須恵器杯蓋 5 点・杯身 9 点・高杯蓋 1 点・壺蓋 1 点・壺 2 点・甕片 2 点、土師器高杯 2 点・鉢 1 点・甕片 4 点・甑片 1 点・甕等体部片 168 点の計 196 点が出土した。そのうち 14 点を図示し得た (図 35)。

40～43 は須恵器杯蓋である。いずれも口縁端部は丸くおさめ、口縁部と天井部の境は僅かな稜があるのみである。40 は口縁部外面に櫛状工具によるキザミがされ



a 72溝 a' T.P.+1.40m



- 1. 2.5GY 3/1 暗オリーブ灰 極細砂混シルト質砂 (炭粒含む)
- 2. 7.5GY 4/1 暗緑灰 砂質シルト

b b' T.P.+1.40m



- 1. 5GY 3/1 暗オリーブ灰 極細砂混シルト質砂 (炭粒含む)
- 2. 10GY 4/1 暗緑灰 砂質シルト

- 168
 - 1. 10Y 3/1 オリーブ黒 極細砂～細砂混, シルトブロック混シルト質砂
 - 2. 2.5GY 3/1 暗オリーブ灰 極細砂, シルトブロック混砂質シルト
- 169
 - 1. 10Y 3/1 オリーブ黒 極細砂～細砂, シルトブロック混シルト質砂
- 170
 - 1. 10Y 3/1 オリーブ黒 極細砂～細砂, シルトブロック混シルト質砂
 - 2. 2.5GY 3/1 暗オリーブ灰 極細砂, シルトブロック混砂質シルト
- 172
 - 1. 2.5GY 3/1 暗オリーブ灰 極細砂～細砂, シルトブロック混砂質シルト
- 281
 - 1. 2.5GY 4/1 暗オリーブ灰 極細砂～細砂混シルト質砂

- 142
 - 1. 5GY 3/1 暗オリーブ灰 シルトブロック混シルト質砂
- 141
 - 1. 5GY 3/1 暗オリーブ灰 シルトブロック混シルト質砂
- 140
 - 1. 7.5Y 3/1 オリーブ黒 砂質シルト
- 143
 - 1. 5GY 3/1 暗オリーブ灰 シルトブロック混シルト質砂
 - 2. 5GY 3/1 暗オリーブ灰 極細砂混砂質シルト
- 164
 - 1. 2.5GY 3/1 暗オリーブ灰 砂質シルト

図 34 掘立柱建物 7・72溝 平・断面図

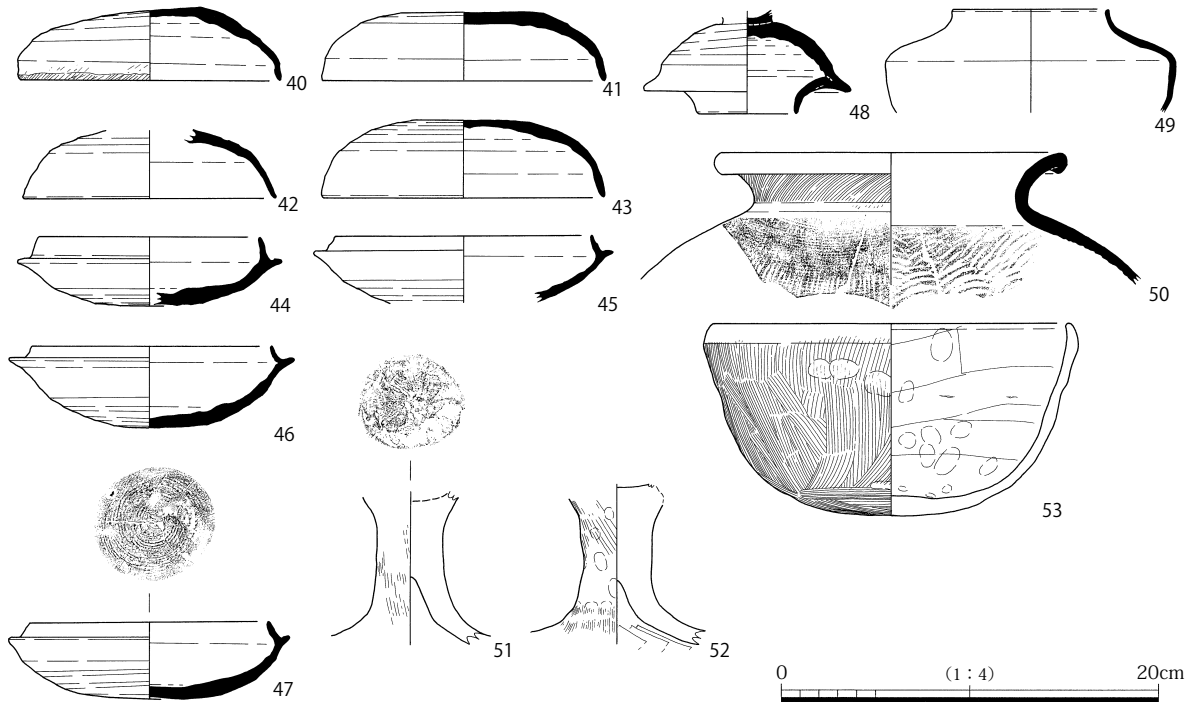
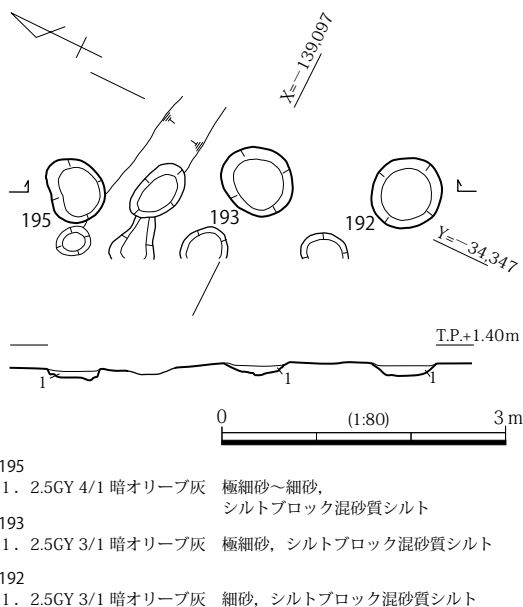


図35 72溝 出土遺物実測図

る。44～47は須恵器杯身で、いずれもたちあがりは低く内傾する。44は胎土に中砂から礫を多く含み、砂質が強い。47は内面底部に同心円状の当て具痕が残る（図版23）。48は須恵器壺蓋である。49は須恵器短頸壺、50は須恵器壺である。50は頸部に縦方向のハケ調整、肩部にはタタキ後にカキメ調整をする。

51・52は土師器高杯である。脚部はいずれも柱状で中空にならず、脚部内面はへら状の工具を回転させて整形する。51は杯部との接合箇所をへらで放射状に刻んでいる。53は土師器鉢である。大型のもので口縁が内湾し、端部内面がやや肥厚する。

時期は6世紀後半と見られる。



- 195
1. 2.5GY 4/1 暗オリーブ灰 極細砂～細砂、シルトブロック混砂質シルト
- 193
1. 2.5GY 3/1 暗オリーブ灰 極細砂、シルトブロック混砂質シルト
- 192
1. 2.5GY 3/1 暗オリーブ灰 細砂、シルトブロック混砂質シルト

図36 柵列1 平・断面図

柵列1（図8・36、図版1・13）

1区中央北側で検出し、192・193・195柱穴からなる。この3基は規模や埋土も似通っていたことから柵列の可能性が考えられるためそれとし、ここで報告する。

掘方の平面形は円形である。規模は直径0.7～0.8m、深さ0.1mである。埋土はいずれも極細砂から細砂やシルトブロックが混じる砂質シルトである。

出土遺物は192柱穴から須恵器甕片1点、土師器甕等体部片1点、193柱穴から土師器甕等体部片2点である。図示し得た遺物はなく、遺構の時期は不明である。

以下に、建物として並ばないが柱痕が検出された柱穴と遺物が出土したピットを報告する。

149柱穴（図8・37・38、図版1）

1区南西端で検出した。規模は長軸0.74m、短軸

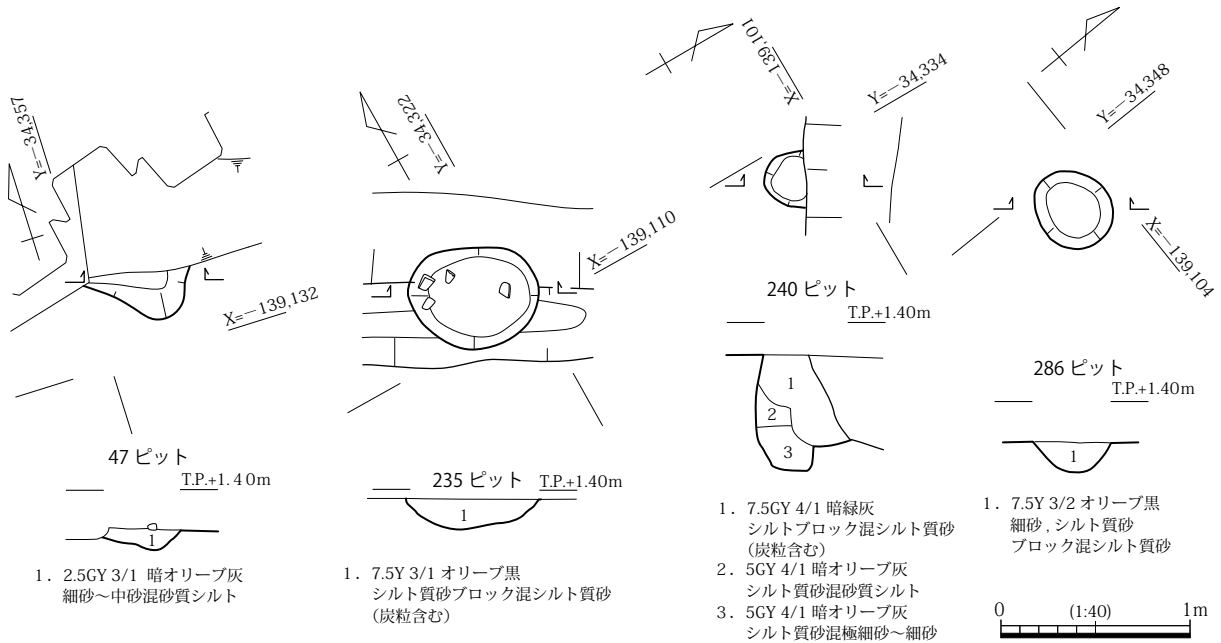
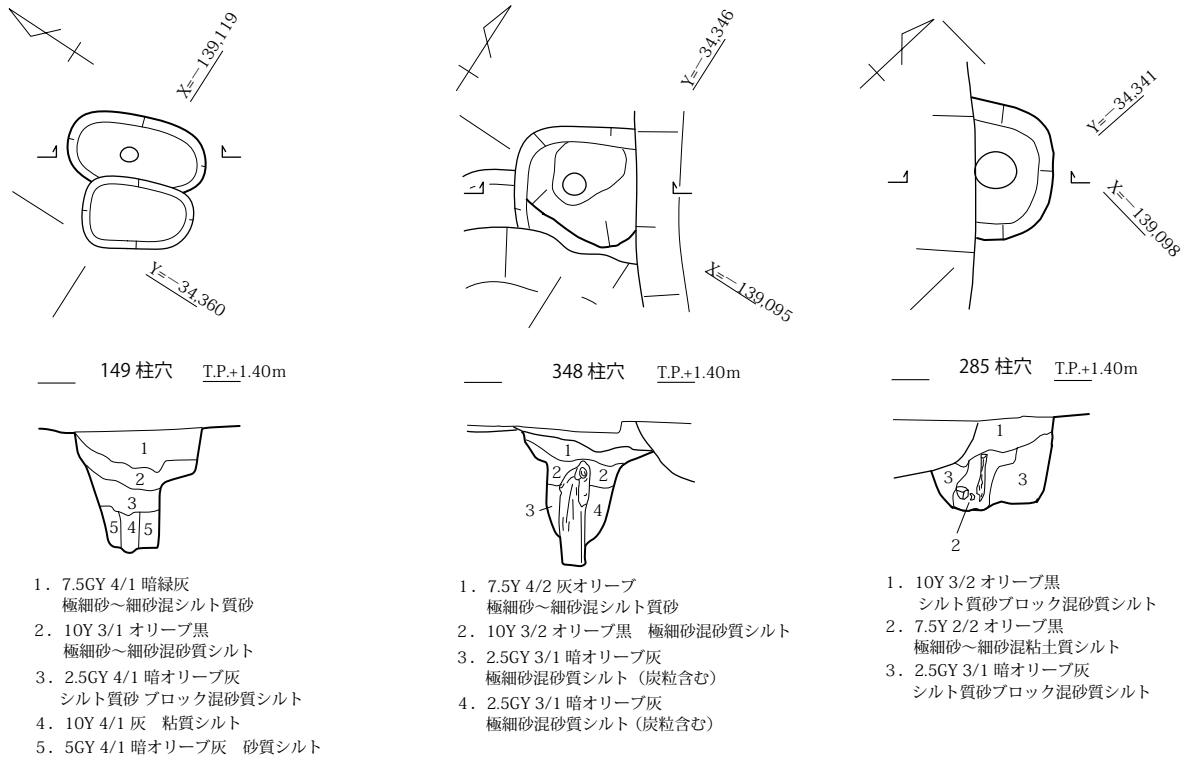


図 37 149・285・348 柱穴、47・235・240・286 ピット 平・断面図

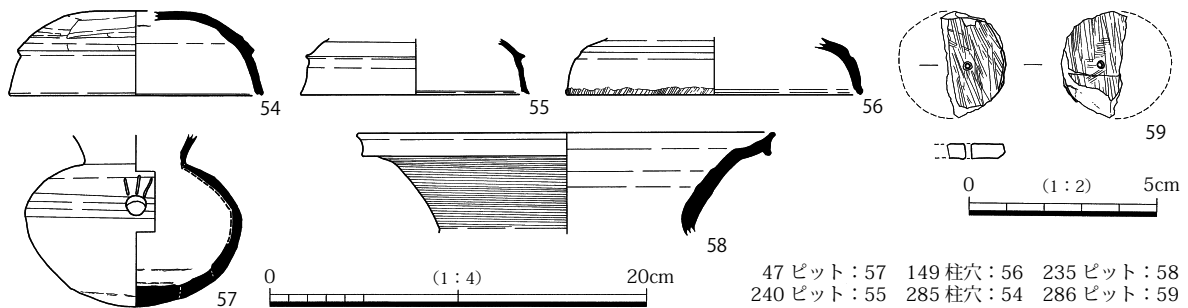


図 38 149・285 柱穴、47・235・240・286 ピット 出土遺物実測図

0.34 m、深さ 0.61 m である。

遺物は掘方から須恵器杯蓋 1 点が出土し、これを図示した (図 38)。

56 は須恵器蓋である。口縁部外面に櫛状工具によるキザミが施される。遺物の時期は 6 世紀中頃と考えられる。

285 柱穴 (図 8・37・38、図版 1)

1 区中央南側で検出し、62 溝に西半を壊される。規模は長軸 0.72 m、短軸 0.42 m、深さ 0.45 m である。

柱穴内には直径 0.07 ~ 0.11 m、長さ 0.31 m の柱痕が残存した。遺物は須恵器杯蓋 1 点、土師器器種不明小片 2 点が出土し、そのうち 1 点を図示し得た (図 38)。

54 は須恵器杯蓋である。口縁端部は鋭さに欠ける。天井部外面は頭頂部に不定方向のナデを行い、その後、下部は板状工具による静止ナデを施し、一部のみ回転ナデを行っている。全体に器厚が厚く、胎土は砂質が強いものである。遺物の時期は 6 世紀前半と考えられる。

348 柱穴 (図 8・37、図版 1)

1 区中央北側で検出し、上層を 55 土坑に掘りこまれ、東端を 62 溝に削られる。規模は直径 0.55 m、深さ 0.7 m である。柱穴内には直径 0.18 ~ 0.19 m、長さ 0.52 m の柱痕が残存した。

遺物は土師器甕体部片 1 点が出土したが、図示し得えなかった。そのため時期を特定できない。

47 ピット (図 8・37・38、図版 1・23)

2 区北西端で検出した。規模は南北 0.24 m、東西 0.57 m、深さ 0.1 m である。埋土最上層から須恵器甕が出土し、これを図示し得た (図 38)。

37 は須恵器甕である。円孔の上部に 3 本のへら描きがされる。

遺物の時期は 5 世紀後半である。

235 ピット (図 8・37・38、図版 1)

1 区中央東端で検出し、63・79 溝を掘りこむ。平面形は楕円形である。規模は長軸 0.7 m、短軸 0.54 m、深さ 0.15 m である。

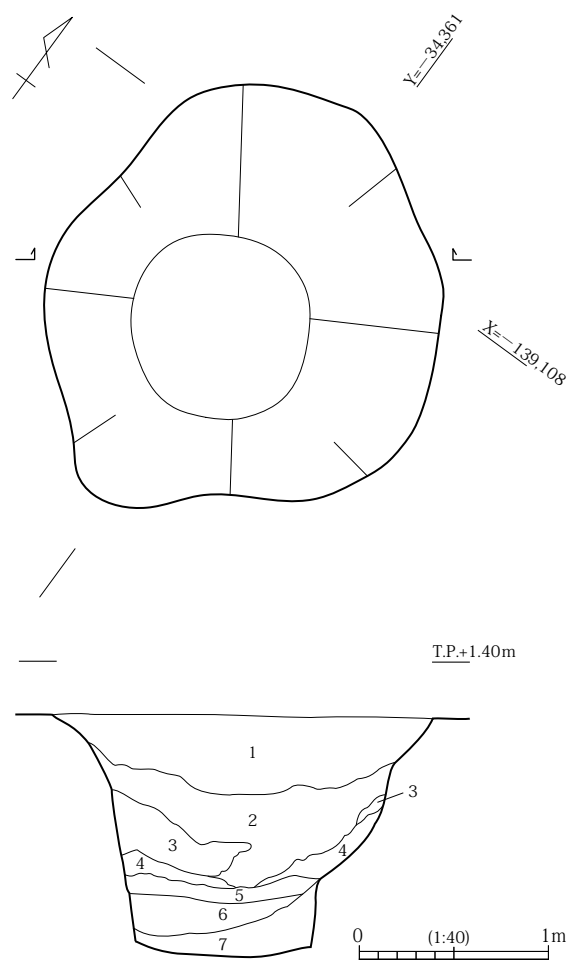
遺物は須恵器壺 1 点・甕片 3 点が出土し、そのうち 1 点を図示し得た (図 38)。58 は須恵器壺である。口縁直下に凸帯をめぐらし、頸部にカキメを施す。

遺物の時期は 5 世紀後半と考えられる。

240 ピット (図 8・37・38、図版 1)

1 区中央で検出し、63 溝に東半を壊されている。規模は直径 0.3 m、深さ 0.6 m である。

遺物は須恵器杯蓋 1 点・口縁部片 1 点が出土し、そのうち 1 点を図示し得た (図 38)。55 は須恵器杯



1. 7.5Y 4/2 灰オリーブ 極細砂～細砂混シルト質砂 (炭粒含む)
2. 2.5GY 3/1 暗オリーブ灰 極細砂, 粘土ブロック混シルト
3. 10Y 3/1 オリーブ黒 極細砂, 砂ブロック混シルト質砂
4. 2.5GY 4/1 暗オリーブ灰 細砂混シルト質砂
5. 7.5Y 3/1 オリーブ黒 極細砂～細砂, 砂ブロック混砂質シルト
6. 2.5GY 3/1 暗オリーブ灰 極細砂～細砂, 砂ブロック混砂質シルト
7. 10Y 4/1 灰 極細砂～中砂混砂質シルト

図 39 51 井戸 平・断面図

蓋である。遺物の時期は5世紀第3四半期と考えられる。

286ピット(図8・37・38、図版1・27)

1区中央で検出した。平面形は円形である。規模は南北0.4m、東西0.44m、深さ0.15mである。遺物は滑石製有孔円盤が出土した(図38-59)。

51井戸(図8・39、図版1・14)

1区中央西端で検出した。平面形は不整形である。規模は長軸2.4m、短軸2.1m、深さ1.27mである。埋土は7層に分けられた。2~7層は井戸使用時に堆積した層である。7層は止水状態で堆積した砂層がラミナ状に見られる。6~2層は止水状態と壁からの崩落を繰り返しながら徐々に埋没する段階の堆積層である。6層は第7層がブロック状に混じる砂質シルト、5層には上面に植物遺体の薄層が見られる。3層は第7層をブロック状に多く含み、2層には植物遺体の薄層が見られ、粘土ブロックが若干入る。そして1層の炭粒を含むシルト質砂で埋め戻され、完全に埋没する。

遺物は須恵器杯身片1点、土師器器種不明小片1点が出土したが図示し得るものはなかった。

時期は出土遺物が僅少で、他の遺構との前後関係もないため特定できない。

36土坑(図8・40、図版2)

2区中央北側で検出し、北半は調査区外にあたる。平面は楕円形と推定される。検出した規模は東西2.9m、南北1m、深さ0.06mである。埋土は粗砂から中砂混じりのオリーブ黒色シルト質砂である。時期は遺物が出土していないため特定できない。

54土坑(図8・40・41、図版1・23・27)

1区中央北側で、55土坑・62溝と重複して検出した。55土坑を掘りこみ、東半は62溝によって壊されている。平面形は不整な長方形である。規模は長軸2m、短軸1.5m、深さ0.25mである。

埋土は黒色の強い、極細砂混じりのオリーブ黒色シルト質砂である。埋土全体に炭粒や焼土が散らばり、ブロック状の炭と焼土も多く含まれる。埋土下部には第7層に由来するシルト質砂ブロックが多く含まれていた。埋土を22.1リットル(29.5kg)洗浄した。その結果、滑石製白玉1点、雑草の種子1点(第5章 第3節参照)を確認した。これは炭や焼土、土器などの廃棄のために掘られた土坑と考えられる。

遺物は須恵器杯身片2点・甕片19点、土師器高杯片1点・甕等体部片40点・器種不明小片3点、韓式系土器平底鉢2点・体部片7点・把手1点、製塩土器2点(15.24g)、滑石製白玉1点、金属製品刀子1点の計79点が出土した。そのうち8点を図示し得た(図41)。

60は須恵器甕口縁部である。口縁端部下で、断面三角形の凸帯を貼り付ける。胎土は砂質が強く、中砂から粗砂を多く含む。

61~64は韓式系土器である。61・62は平底鉢の底部である。61は体部外面は格子タタキ後に体部下端はヘラケズリがされる。内面はヨコナデ、底部と体部の接合部に「L」字状の板状工具の痕跡が残る。62は体部外面が平行タタキ後に体部下端はナデ、内面は底部と体部の接合は強いナデである。底部外面は製作時の、所謂ゲタ痕跡が明瞭に残る。痕跡は3.7cm四方がくぼみ、その辺の一部がやや盛り上がる。四方の中央には直径1.4cmの浅いくぼみが見られる。63・64は体部破片である。外面調整は63が縄蓆文、64が格子タタキである。65は製塩土器で深鉢型である。口縁部下でやや段がつき、調整はユビオサエ後ナデである。66は滑石製白玉である。断面は台形になる。68は鉄製品刀子で、茎に近い部分にあたる。

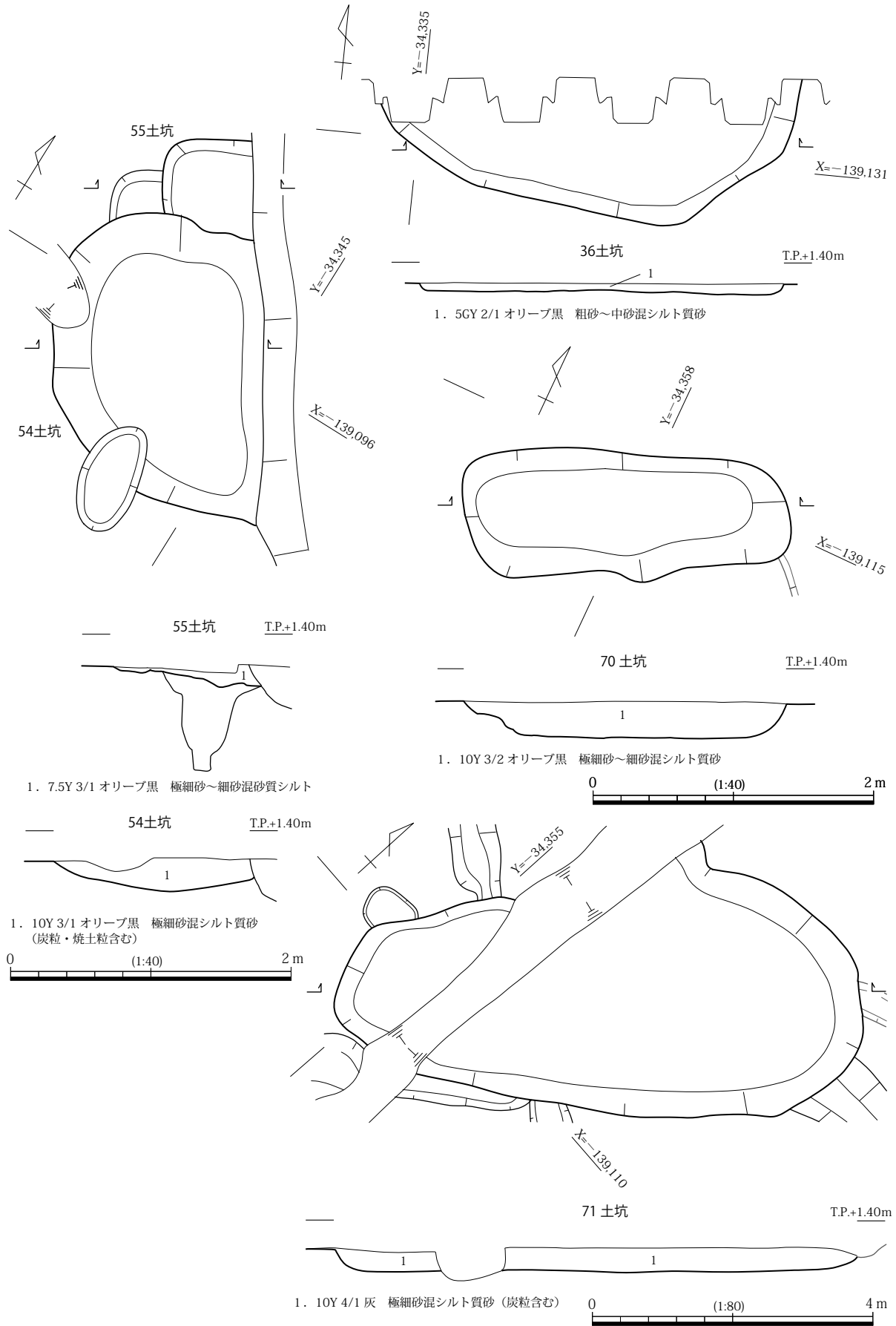


図40 36・54・55・70・71土坑 平・断面図

これらの遺物の時期は5世紀中葉と考えられる。

55土坑(図8・40、図版1)

1区中央北側で54土坑・62溝・348柱穴と重複して検出した。348柱穴の上層を掘りこみ、南側を54土坑、東側を62溝に壊されている。平面形は方形である。規模は直径0.65m、深さ0.15mである。

埋土は極細砂から細砂混じりオリブ黒色砂質シルトで、54土坑ほど顕著な炭粒や焼土を含まない。遺物は出土していない。

時期は、遺物は出土していないが遺構の重複関係から54土坑に先行する。

70土坑(図8・40、図版1)

1区南西側で検出した。平面形は楕円形である。規模は長さ2.3m、最大幅0.9m、深さ0.25mである。埋土は極細砂から細砂混じりオリブ黒色シルト質砂で、第7層が混じる。

時期は遺物が出土していないため特定できない。

71土坑(図8・40・41、図版1)

1区中央西側で検出した。60・61・72溝と重複し、いずれの遺構も掘りこんでいる。平面形は楕円形で、皿状に掘り、底面はほぼ平坦である。規模は長軸7.5m、短軸3.5m、深さ0.36mである。

埋土は極細砂混じり灰色シルト質砂で炭粒が若干含まれていた。

遺物は須恵器杯蓋片2点・杯身4点・高杯片1点・杯小片2点・甕片6点、土師器甕片6点・甕等体部片55点・把手3点・器種不明小片5点の計84点が出土した。そのうち1点を図示し得た(図41)。

67は須恵器杯身で受部はやや上向きにのび、底部回転ヘラケズリの範囲は狭い。

これらの遺物の時期は6世紀後半と考えられる。

74土坑(図8・42、図版1)

1区南西側で検出し、第3面の8・15溝によって一部が壊され、73溝を掘りこんでいる。平面形は楕円形で、皿状に掘り、底面はほぼ平らである。規模は長軸3.8m、短軸3m、深さ0.15mである。埋土は極細砂混じりオリブ黒色シルト質砂で第7層のシルト質砂ブロックが全体に含まれる。

時期は遺物が出土しなかったため、特定できない。

78土坑(図8・42・43、図版1・24)

1区中央北側で検出した。平面形は円形で、底面は凹凸がある。規模は直径1.5m、深さ0.17mである。埋土は暗オリブ灰色シルト質砂である。

遺物は土師器甕片1点・甕等体部片28点・器種不明小片7点、黒色研磨土器片2点、韓式系土器片4点の計42点が出土した。そのうち6点を図示し得た(図43)。

69・70は黒色研磨土器壺の破片である(図版24)。胎土は黒色で、長石や雲母を含む。外面調

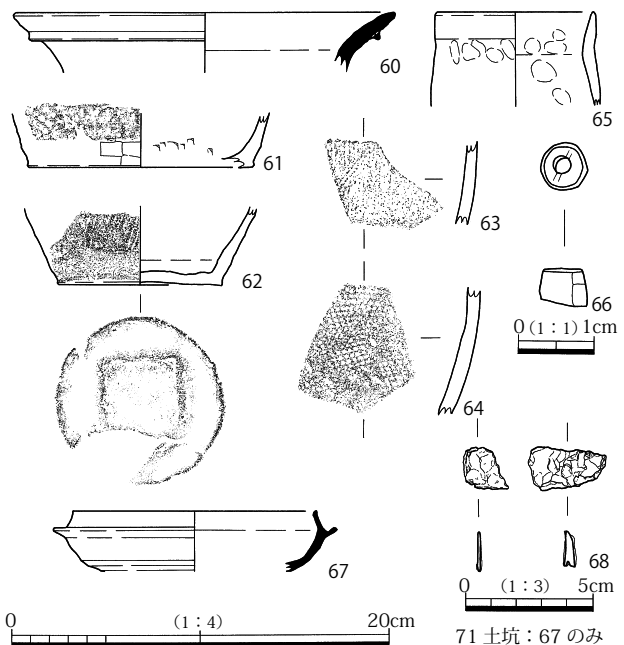
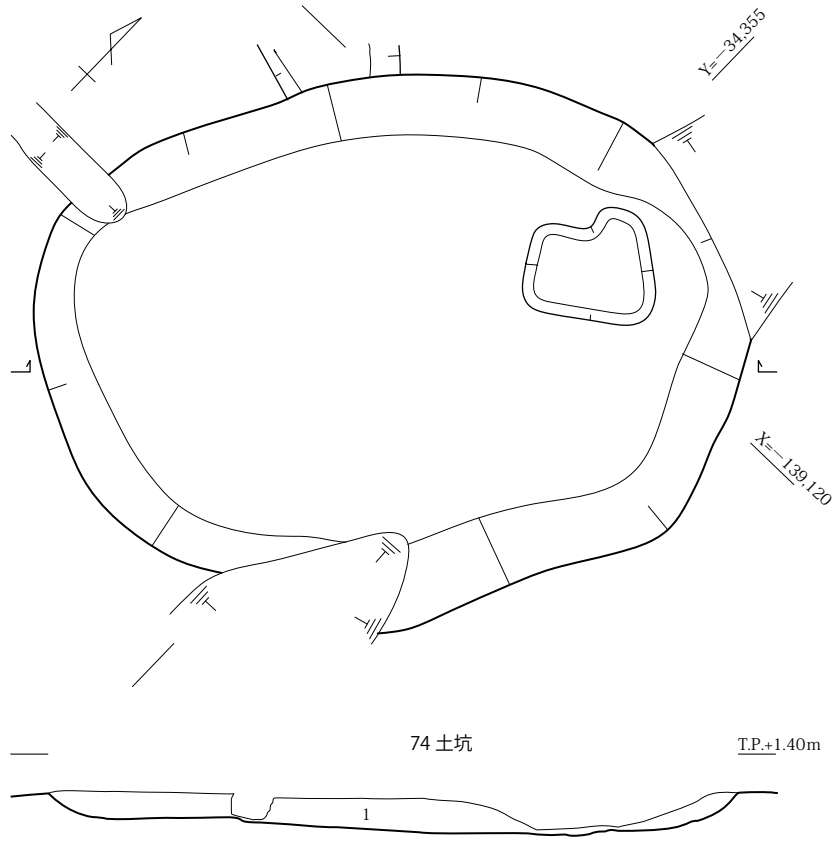
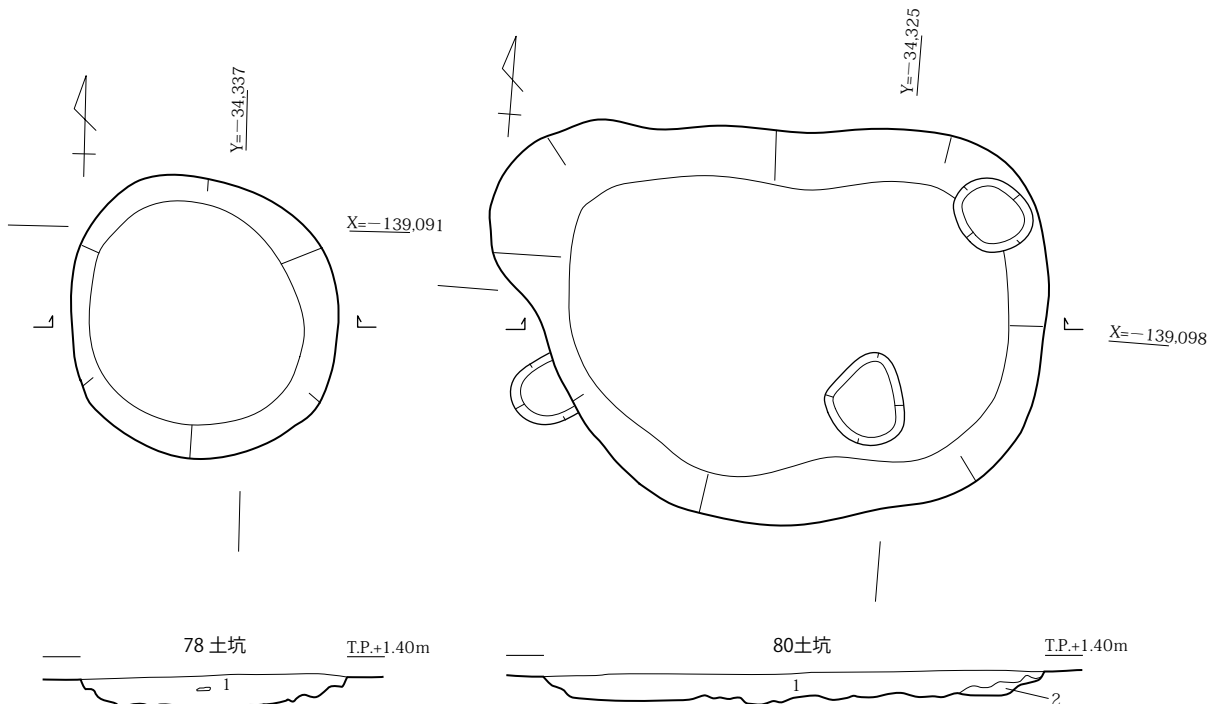


図41 54・71土坑 出土遺物実測図



1. 5Y 3/1 オリーブ黒 極細砂混シルト質砂



1. 2.5GY 3/1 暗オリーブ灰 シルト質砂

1. 10Y 3/1 オリーブ黒 極細砂～細砂混砂質シルト (炭粒・焼土粒含む)
 2. 7.5Y 4/2 灰オリーブ 砂質シルト

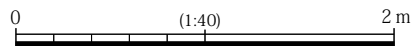


図 42 74・78・80 土坑 平・断面図

整は69が横方向、70が縦方向のヘラミガキ、内面はナデである。71～74は韓式系土器の体部破片である（図版24）。外面調整は71が格子タタキ、72が斜格子タタキ、73が縄蓆文タタキ、74が格子タタキである。

これらの遺物の時期は5世紀中葉と考えられる。

80土坑（図8・42・43、図版1・27）

1区東端で検出した。平面形は不整な長方形で、皿状に掘り、底面は凹凸がある。規模は長軸2.65m、短軸2.1m、深さ0.15mである。

埋土は2層に分けることができる。1層は極細砂から細砂混じりオリブ黒色砂質シルト

トで第6層に近似する。埋土全体に炭粒や焼土が多く、特に中央部分では炭がブロック状に多く含まれる。2層は東隅の底面付近にのみ堆積した灰オリブ色砂質シルトである。この土坑は炭や土器などの廃棄のために掘られたものであろう。微細遺物の検出のために炭が多く見られる箇所の埋土21.4リットル（34.2kg）を洗浄した。その結果、滑石製白玉1点とイネ2点・コムギ10点・ヒエ近似種28点（第5章 第3節参照）などを検出した。

遺物は須恵器甕片1点、土師器高杯片1点・甕片1点・甕等体部片7点、韓式系土器平底鉢1点・格子タタキと縄蓆文タタキを施文した体部片2点、滑石製白玉1点の合計14点が出土した。そのうち2点を図示し得た（図43）。

75は韓式系土器平底鉢底部で、外面はナデの後、体部下端に細かいヘラケズリが施される。76は滑石製白玉である（図版27）。断面形はそろばん玉形で、側面中央部分に稜が入る。

これらの遺物の時期は5世紀中葉と見られる。

81土坑（図8・44・45、図版1・24）

1区南東部で検出した。平面形は不整な楕円形で、皿状に掘りこまれ、底面はほぼ平坦である。規模は長軸4.2m、短軸3m、深さ0.18mで大型である。

埋土は細砂から中砂混じり暗オリブ灰色シルト質砂である。砂質が強く全体に炭粒・焼土が含まれる。炭・焼土・土器などを廃棄するために掘られた土坑であろう。微細遺物の検出のため、埋土を19.7リットル（31.1kg）洗浄し、コムギ1点（第5章 第3節参照）を検出した。

遺物は須恵器高杯1点・壺1点、土師器甕片7点・甕等体部片58点・器種不明小片7点、韓式系土器体部片1点・把手1点の計76点が出土した。そのうち3点を図示し得た（図45）。

77は須恵器高杯脚部である（図版24）。柱状部はふくらみをもち、外面にミガキ調整を施す。杯部との接合部に放射線状のキザミ痕跡がある。内面にはシボリ痕跡と粘土接合痕跡が見られる。この脚部は土師器高杯の同じ形状、調整方法で作成されている。78は須恵器壺である。口縁端部は上下に稜をもち、頸部は凸帯を2条めぐらしているが、下段は退化しており、稜のようになっている。その凸帯の上下に2段の櫛描波状文を施し、その後頸部下端の一部にヘラを用い回転させながらナデしているために、

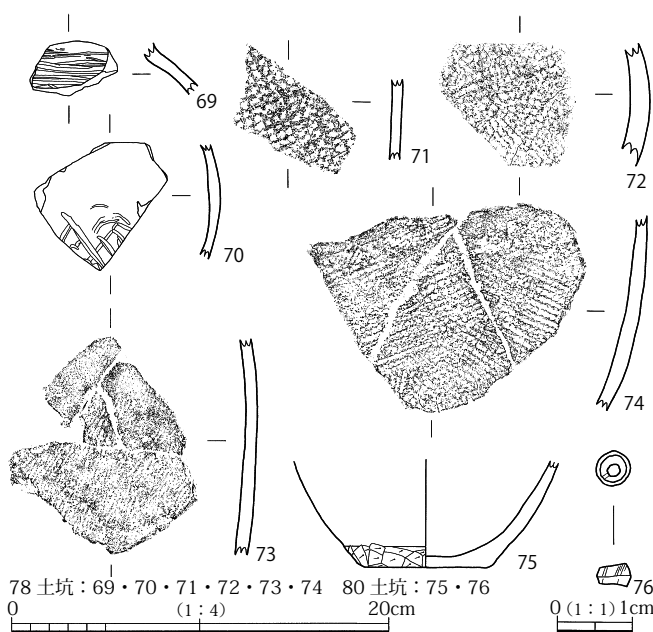


図43 78・80土坑 出土遺物実測図

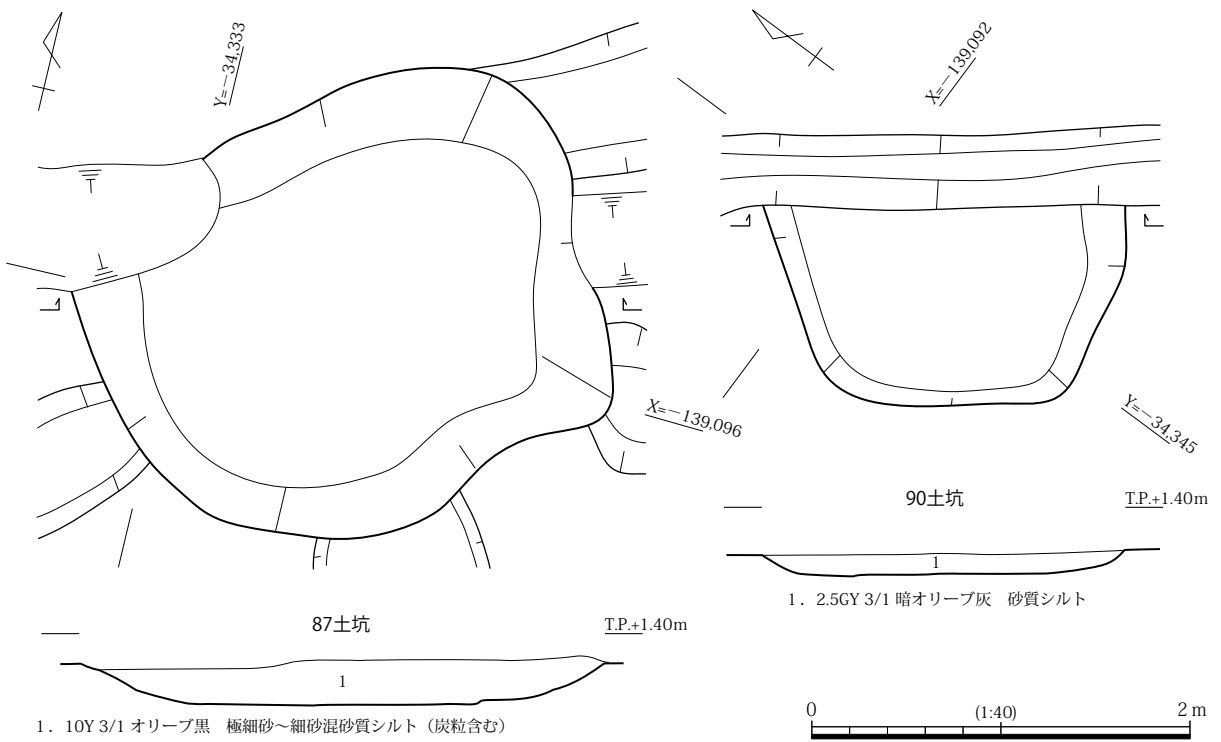
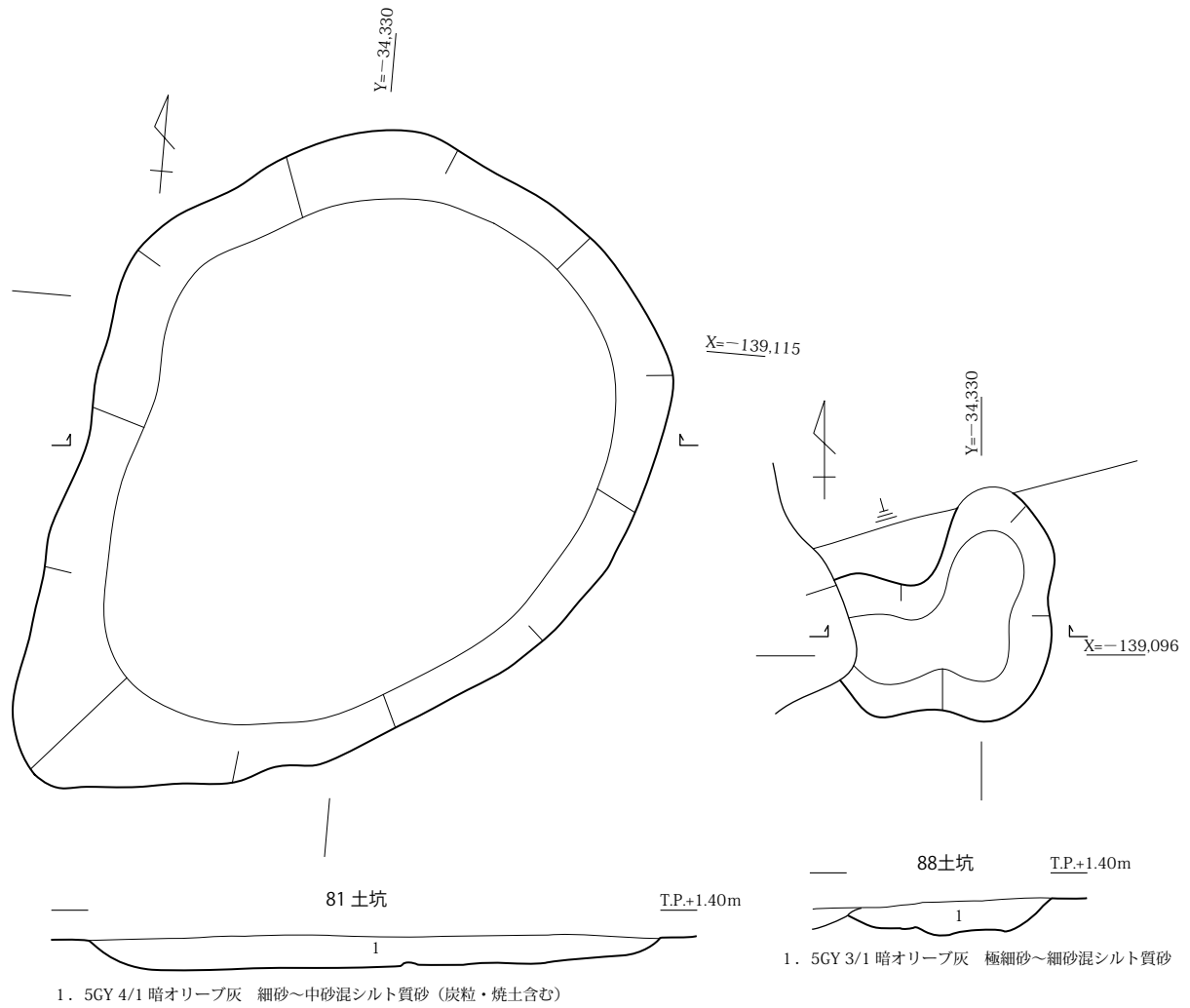


図 44 81・87・88・90 土坑 平・断面図

櫛描波状文が消されている箇所がある。体部外面はタタキの後にカキメを施す。内面は当て具痕をナデ消し、体部中央付近は指で強く斜めにナデ調整を行う。

79は韓式系土器甑または鍋の把手である(図版24)。外面にはハケ調整をし、把手上面から切り込みが入る。

これらの遺物の時期は5世紀第3四半期と考えられる。

87土坑(図8・44・45、図版1)

1区北東部で検出し、一部を東西方向に第3面の17溝によって破壊されている。平面形は不整な長方形である。規模は東西2.9m、南北2.5m、深さ0.24mである。

埋土は極細砂から細砂混じりオリブ黒色砂質シルトで、全体に炭粒を含む。埋土を23.7リットル(33kg)洗浄し、イネ7点・コムギ5点(第5章 第3節章参照)を検出した。

遺物は須恵器杯蓋1点・杯蓋片3点・高杯蓋片1点・高杯1点・壺1点・甕片9点、土師器甕1点・甕等体部片25点、製塩土器13点(29.35g)の55点が出土し、そのうち5点を図示し得た(図45)。

80は須恵器杯蓋である。天井部は丸く、口縁端部は内傾し、段をもつ。胎土は中砂から粗砂を多く含み砂質の強いものである。81は須恵器無蓋高杯である。口縁部は外反し、端部は丸くおさめる。口縁部と底部の境の2条の凸帯はやや丸味があり鋭さに欠ける。その下に乱れた櫛描波状文をめぐらし、その後櫛描波状文の上下にへら描き沈線が施される。脚部は4方透かしをもつ。杯部内面全体に降灰が見られるが、底面に幅約5mmの円形に降灰のない部分があり、重ね焼きの痕跡であろう。82は須恵器壺である。口縁端部は上下に稜をもち、直下に凸帯をめぐらす。その下方に櫛描波状文を施した後、さらに下段に凸帯をめぐらす。凸帯に対応して内面もナデによって段が形成される。

83は土師器甕の口縁部である。口縁部は強く外反する。口縁部内面から外面端部にかけて使用時のススが付着する。84は製塩土器である。内外面共にタタキ調整で、外面は横方向、内面は縦方向である。胎土に雲母を含む。

これらの遺物の時期は5世紀第3四半期である。

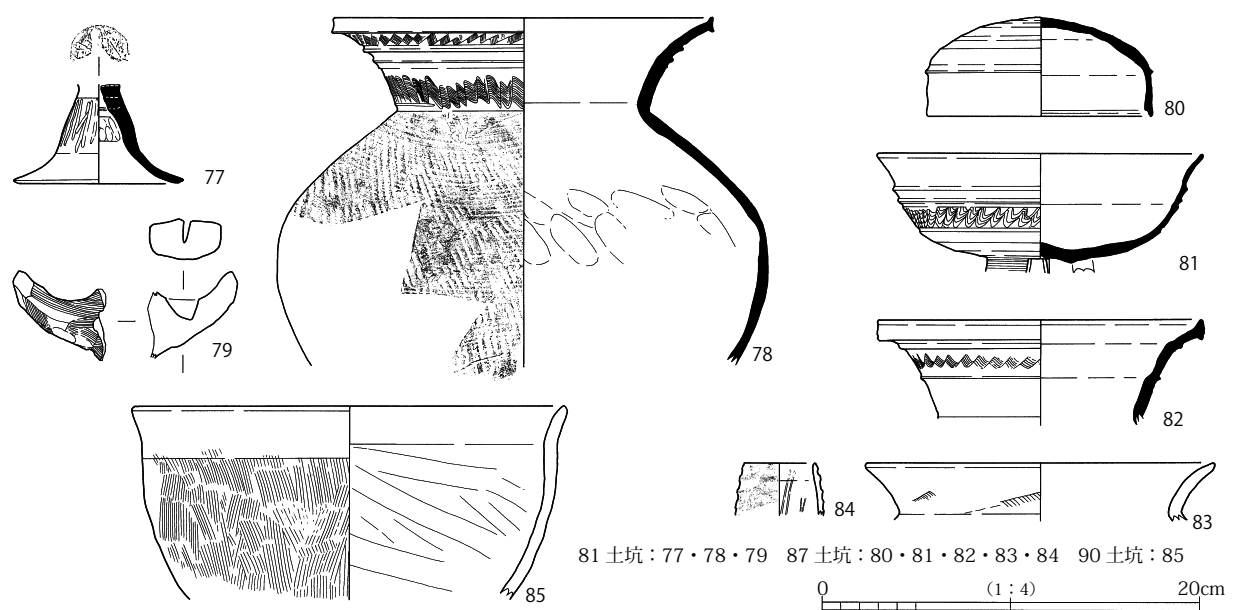


図45 81・87・90土坑 出土遺物実測図

88 土坑 (図 8・44、図版 1)

1 区北東部で検出し、西端は 87 土坑によって削られている。平面形は不整な長方形で、底面は凹凸がある。規模は南北 1.2 m、東西 1 m、深さ 0.18 m である。

埋土は極細砂から細砂混じり暗オリーブ灰色シルト質砂である。遺物は出土しなかった。

時期は遺物が出土していないが、遺構の重複関係から 87 土坑に先行する。

90 土坑 (図 8・44・45、図版 1)

1 区北東部で検出し、東半は 63・91 溝に壊される。平面形は隅丸方形と推定される。検出した規模は長軸 1.9 m、短軸 1 m、深さ 0.1 m である。底面はほぼ平坦である。埋土は暗オリーブ灰色砂質シルトである。

遺物は須恵器甕片 1 点、土師器高杯片 1 点・鉢 1 点・甕等体部片 17 点、製塩土器片 2 点 (1.57 g) の 22 点が出土し、そのうち 1 点を図示し得た (図 45)。

85 は大型の土師器鉢である。口縁部は緩やかに外反する。体部外面は縦方向にハケ調整の後に、口縁部をヨコナデ調整する。

時期を特定できる遺物が少ないが、5 世紀後半から 6 世紀前半と考えられる。

93 土坑 (図 8・46・48、図版 1)

1 区中央東部で検出した。平面形は不整な楕円形である。規模は南北 1.9 m、東西約 1 m、深さ 0.22 m である。

埋土は 2 層に分けることができた。1 層は極細砂混じりオリーブ黒色砂質シルトで、2 層が極細砂から細砂混じり暗オリーブ灰色シルト質砂である。

遺物は須恵器杯片 1 点・高杯 1 点・甕片 1 点、土師器甕片 2 点・甕等体部片 36 点、製塩土器片 1 点 (2.25 g) の 42 点が出土し、そのうち 1 点を図示し得た (図 48)。

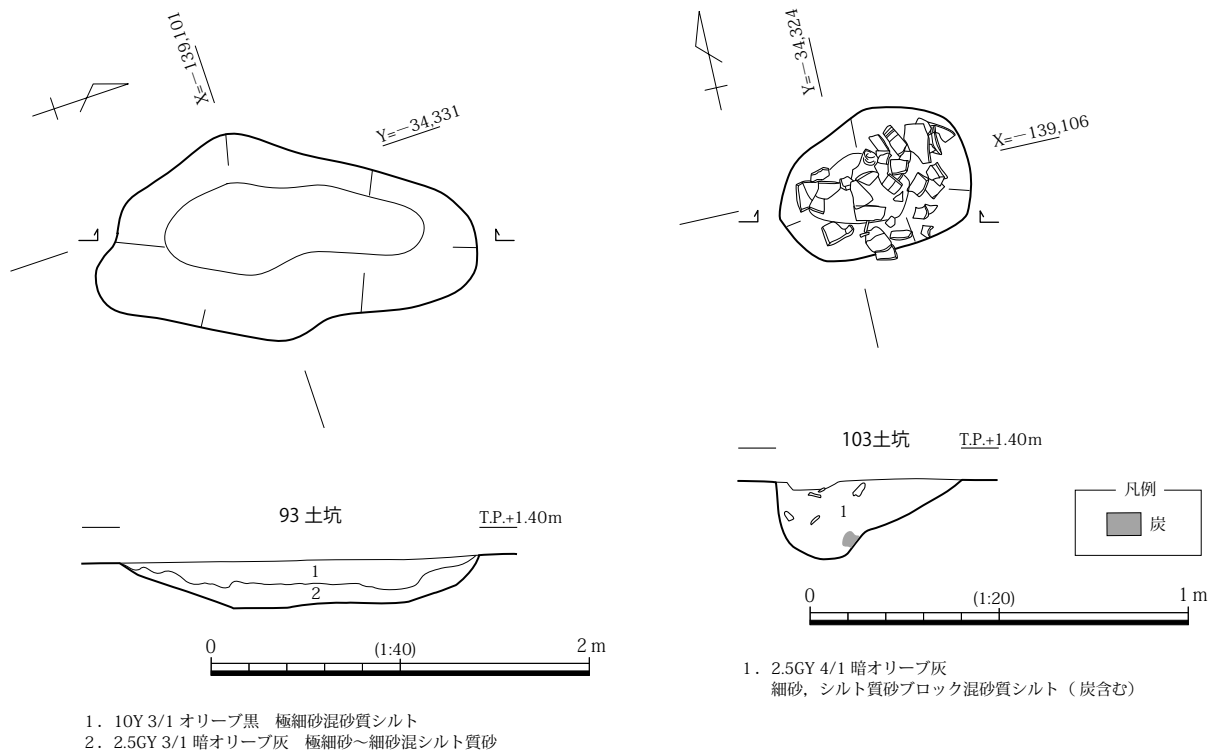
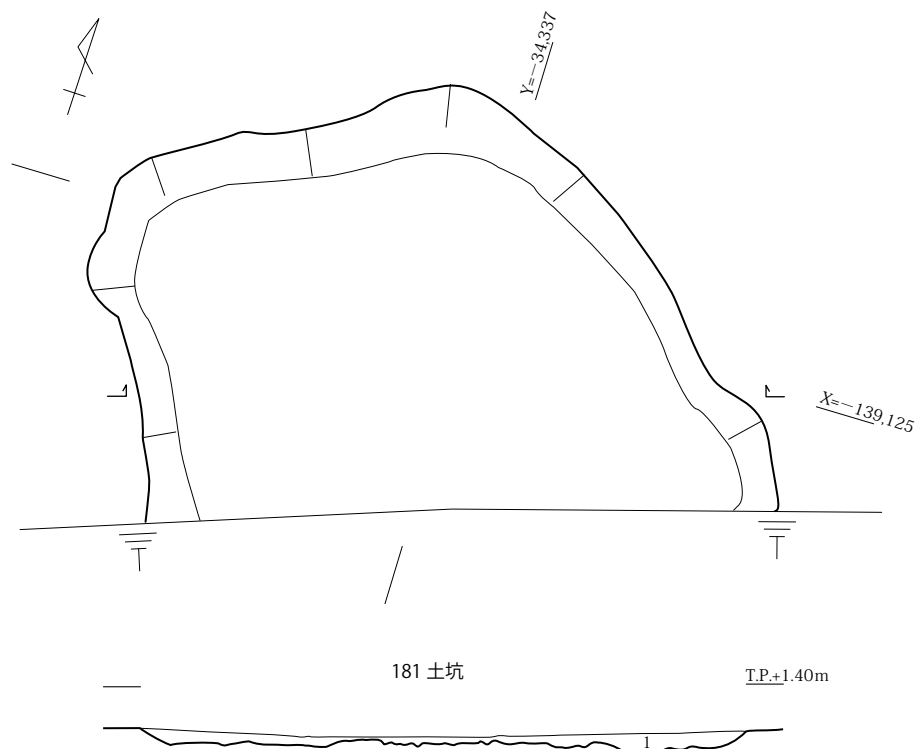


図 46 93・103 土坑 平・断面図

86は須恵器無蓋高杯である。口縁部と底部の境に鋭さに欠ける稜がつく。櫛描波状文を施した後、上部に強い回転ナデにより稜をつくるため、櫛描波状文上部の一部が消されている。

時期は5世紀後半である。



1. 10Y 3/2 オリーブ黒 極細砂～細砂, シルト質砂ブロック混砂質シルト



1. 7.5Y 3/2 オリーブ黒 極細砂～細砂, シルト質砂ブロック混砂質シルト

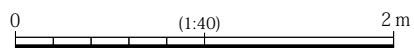


図 47 181・182 土坑 平・断面図

103 土坑 (図8・46・48、図版1・24)

1 区中央東半で検出した。平面形は楕円形、規模は東西 0.5 m、南北 0.37 m、深さ 0.20 m である。第 6 層を掘削中に須恵器甕片がまとまって出土した、その時点で遺構の平面確認を行ったが、平面形を検出することができなかつたため、第 7 層まで掘り下げ確認した。そのため第 6 層下面で検出したが、この遺構は第 6 層中から掘りこまれたものである。

埋土は細砂と第 7 層のシルト質砂ブロックが混じる暗オリーブ灰色砂質シルトで、炭粒が含まれる。細砂や炭粒の方向から、東から西方向に埋土が入る様子が観察できた。埋土を土壤洗浄した結果、マメ類 22 点(第 5 章 第 3 節参照)が検出された。この土坑は炭や土器などを廃棄した小型の土坑と見られる。

遺物は、須恵器杯蓋片 5 点・高杯片 1 点・壺 1 点・甕片 71 点・器種不明小片 15 点、土師器高杯片 1 点・甕片 2 点・甕等体部片 51 点・器種不明小片 8 点、韓式系土器把手 1 点の計 156 点が出土し、そのうち 5 点を図示し得た (図 48)。

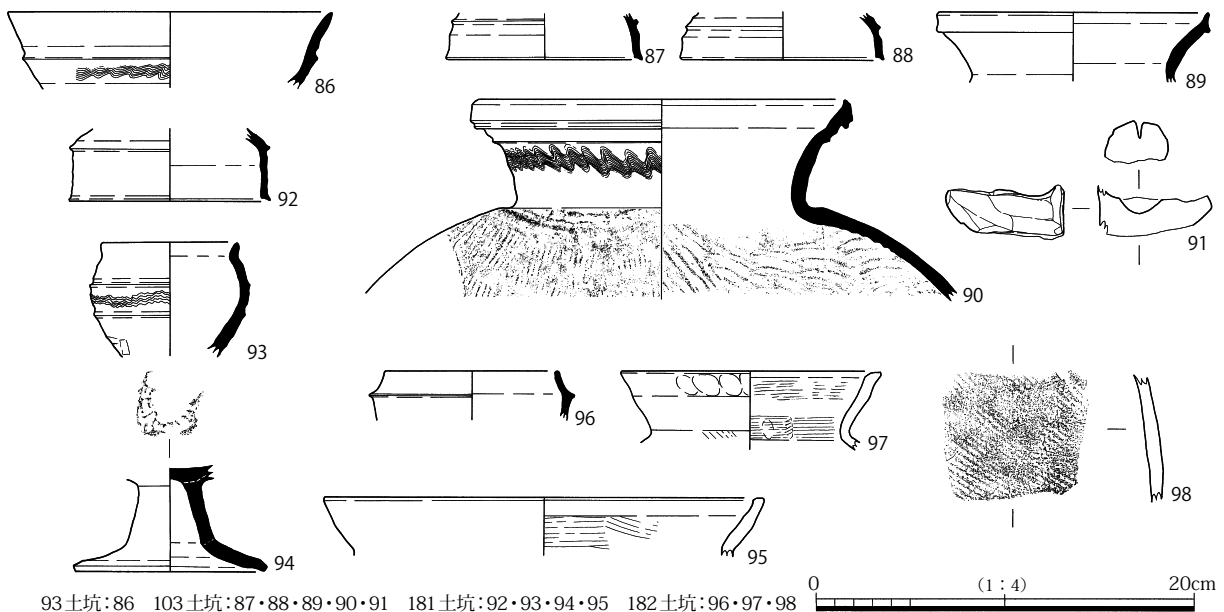
87・88 は須恵器杯蓋の口縁部である。87・88 は天井部と口縁部を分ける稜は短く、稜の下には強いナデによりくぼみが見られる。87 は砂質の強い胎土である。89 は須恵器壺の口縁部から頸部である。口縁部端面は上下にのび、丸みのある稜をもつ。90 は須恵器甕の口縁部から肩部である。口縁部端面は上下にのび、とくに下端面は段をもち、直下に凸帯をめぐらす。頸部外面には櫛描波状文が施される。この波状文は 8 条で幅は一定ではない。肩部より下位では縦方向のタタキがされ、内面には当て具痕跡が残る。頸部内面から外面肩部にかけて自然釉が見られる。91 は韓式系土器の甑または鍋の把手である (図版 24)。把手上面から断面半円形の切り込みを入れる。上面先端と下部は欠損している。

時期は 5 世紀後半頃と考えられる。

181 土坑 (図8・47・48、図版1・24)

1 区南側で検出し、南半は攪乱によって破壊されている。平面形は不整な方形で、規模は東西 3.3 m、南北 2.1 m、深さ 0.02 ~ 0.08 m で、底面に凹凸がかなり見られる。

埋土は極細砂から細砂と第 7 層のシルト質砂ブロックが混じるオリーブ黒色砂質シルトで、層中に植物遺体の薄層が入る。



93 土坑:86 103 土坑:87・88・89・90・91 181 土坑:92・93・94・95 182 土坑:96・97・98

図 48 93・103・181・182 土坑 出土遺物実測図

遺物は須恵器杯蓋1点・杯片2点・把手付椀1点・高杯1点、土師器甕片2点・器種不明1点の8点が出土し、そのうち3点を図示し得た(図48)。

92は須恵器杯蓋で、口縁部は高く、口縁部と天井部を分ける稜はやや甘い。口縁端部と天井部に自然釉がかかる。93は須恵器把手付椀で、体部外面中央に2条の稜がめぐり、その間に櫛描波状文が施される。波状文は幅が一定ではなく、波目振幅も緩やかである。体部下端にヘラケズリが施される。外面上部と内面底部は自然釉がかかる。94は須恵器高杯の脚部である。杯部との接続のため、脚部上面にはキザミを放射線状に入れている(図版24)。裾部は強く屈曲し、柱状部との接合痕が認められる。

95は土師器甕の口縁部である。口縁部は内湾してたちあがり、口縁端部上面は面をもつ。

時期は5世紀中葉と考えられる。

182 土坑(図8・47・48、図版1)

1区南端で検出し、土坑北端は攪乱によって破壊されている。平面形は不整形で、南半は調査区外に広がるため不明である。規模は東西3.5m、南北1～1.9m、深さ0.04～0.18mで底面は凹凸が著しい。

埋土は極細砂から細砂と第7層のシルト質砂ブロックが混じるオリブ黒色砂質シルトで、181土坑と似通っている。

遺物は須恵器杯片1点・壺1点・甕片1点、土師器高杯1点・甕片4点・甕等体部片9点・器種不明小片4点、韓式系土器体部片1点の計22点が出土し、そのうち3点を図示し得た(図48)。

96は須恵器壺の口縁部である。有蓋の壺で口縁部は丸くおさめられ、受部は短く水平に突出する。器厚は3～4mmと薄いものである。97は土師器甕口縁部である。口縁部は内湾してたちあがり、布留式甕の影響の残るものである。98は韓式系土器の体部破片である。外面は格子タタキを施したのち、一部ナデがみられる。

時期は5世紀中葉と考えられる。

203 土坑(図8・49、図版1)

1区中央北半で、62・63溝の間で検出した。平面形は円形で、規模は直径0.63m、深さ0.42mである。埋土は2層に分けることができ、1層は第7層のシルト質砂ブロック混じりのオリブ黒色シルト質砂で、炭粒・焼土を若干含む。この層の下部から製塩土器小片がまとまって出土した。2層は極細砂から細砂と第7層のシルト質砂ブロックがかなり多く混じるオリブ黒色砂質シルトで炭粒・焼土を若干含む。1層に比べ2層は第7層のシルト質砂のブロックを多く含む。この製塩土器が出土した1層下部を微細遺物検出のため土壌洗浄を行った結果、コムギ26点(第5章 第3節参照)が検出された。

遺物は須恵器杯片1点、土師器甕片1点、器種不明小片4点、製塩土器片475点(58.22g)の計481点が出土したが細片のため図化することができなかった。しかし出土した製塩土器は外面がタタキ調整で、薄手のものであるため、時期は5世紀代と考えられる。

218 土坑(図8・49、図版1)

1区南部、竪穴建物4・5の間で検出した。平面形は長方形である。規模は長軸0.7m、短軸0.5m、深さ0.34mである。

埋土は2層に分けることができ、1層は細砂と砂質シルトブロックが混じる暗オリブ灰色シルト質砂で第7層に起因するシルト質砂に第6層に近似する砂質シルトブロックが混じる。2層は第7層のシルト質砂ブロックを多く含むオリブ黒色砂質シルトである。1・2層ともに人為的な埋め戻し土と考えられる。

時期は遺物が出土しなかったため、特定することができない。

222 土坑 (図 8・49、図版 1)

1 区中央、60 溝のやや南で検出した。平面形は長方形である。規模は長軸 0.94 m、短軸 0.58 m、深さ 0.44 m である。

埋土は 3 層に分けることができる。1 層は極細砂や炭粒、第 7 層に起因するシルト質砂ブロックが混じる灰色砂質シルト、2 層は極細砂と第 7 層のシルト質砂ブロックが混じる灰オリーブ色砂質シルトである。2 層は第 7 層のブロックが 1 層より多く含まれる。3 層は第 7 層のシルト質砂ブロックが混じる暗オリーブ灰色粘土質シルトの滞水堆積である。3 層が徐々に堆積した後 1・2 層で人為的に埋め戻さ

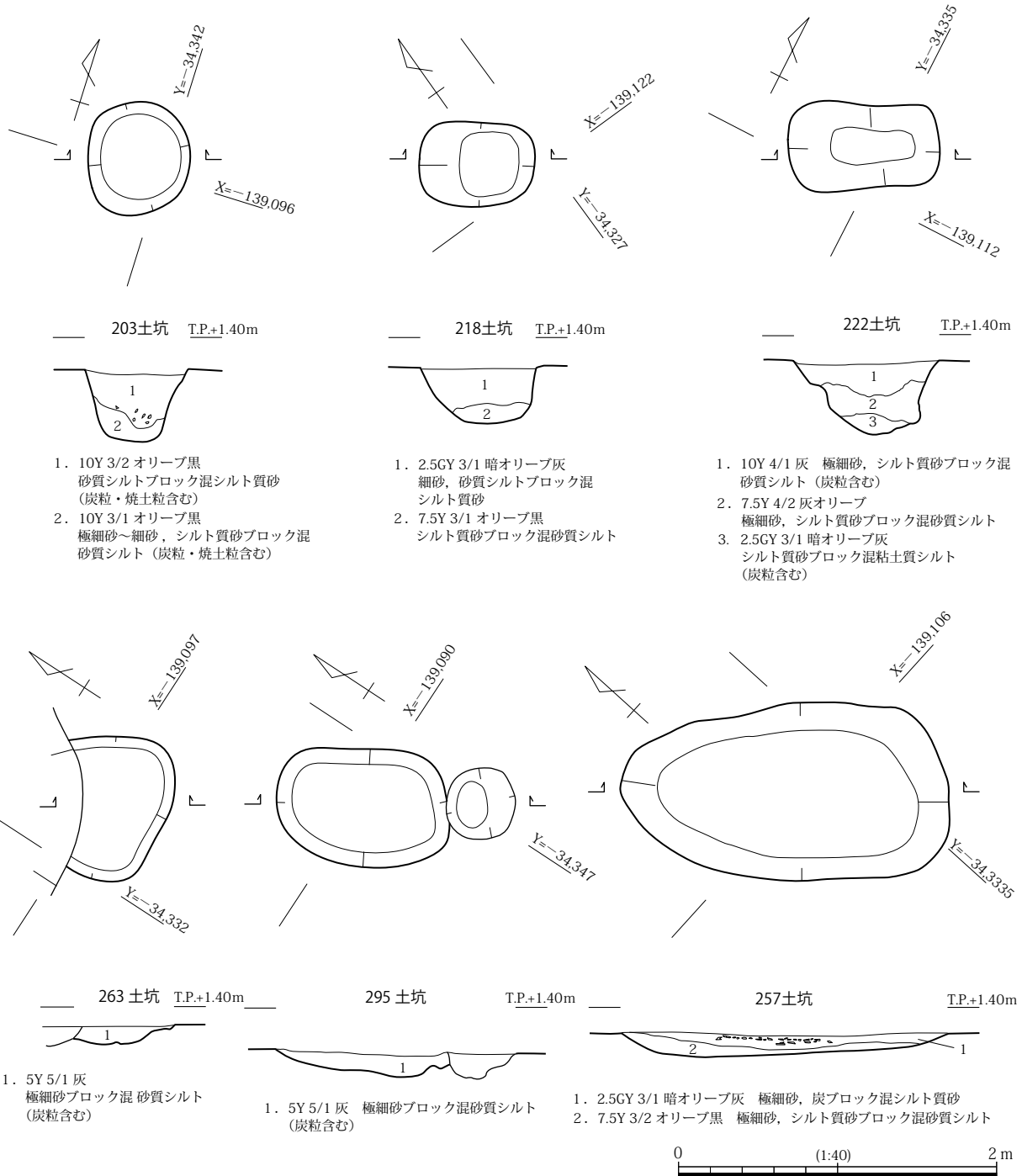


図 49 203・218・222・257・263・295 土坑 平・断面図

れたと思われる。

遺物は土師器甕片 1 点・甕等体部片 11 点の 12 点が出土したが、図示し得たものはなかった。そのため遺構の時期は特定できない。

257 土坑 (図 8・49・50、図版 1・14・25)

1 区中央で検出した。平面形は楕円形である。規模は長軸 2.06 m、短軸 1.1 m、深さ 0.16 m である。埋土は 2 層に分けることができる。1 層は暗オリーブ灰色極細砂混シルト質砂で、下部に製塩土器がまとまって廃棄されていた。この製塩土器周囲の埋土の土壌洗浄を行ったところ、コムギ 1 点 (第 5 章第 3 節参照) が出土した。2 層は炭粒や極細砂、シルト質砂ブロックが混じるオリーブ黒色砂質シルトで土坑掘削時の堆積層と考えられる。

遺物は須恵器杯蓋片 2 点・杯片 1 点・甕 1 点・甕片 1 点、土師器甕片 1 点・甕等体部片 5 点・器種不明小片 13 点、製塩土器片 1090 点 (422.62 g) の 1114 点が出土し、そのうち 7 点を図示し得た (図 50)。

99 は須恵器甕の口縁部である。口縁部は稜を境に端部に向かって内湾ぎみに開く。口縁端部は外方し、水平な面をもつ。稜の下位には櫛描波状文が施文されるが、条数は欠損のため不明である。器厚は薄く、焼成もかなり良いものである。100～105 は製塩土器である (図版 25)。薄手の丸底製塩土器で 102・104・105 はやや大型、100・101・103 は小型のものである。いずれも外面はタタキ調整、内面は 100・102 にシボリのような痕跡が残る。

時期は 5 世紀第 3 四半期と考えられる。

263 土坑 (図 8・49・50、図版 1)

1 区北東部で検出し、北端は 87 土坑に掘りこまれる。平面形は円形である。規模は直径 0.9 m、深さ 0.11 m である。埋土は極細砂ブロックが若干混じる灰色砂質シルトで全体に炭が多く含まれる。

遺物は土師器鉢 1 点・甕等体部片 4 点が出土し、そのうち 1 点を図示し得た (図 50)。

106 は土師器鉢である。口縁端部近くで「く」の字に屈曲し、内面にはヨコナデの後、暗文が施される。時期は出土した遺物が少量のため特定できないが、遺構の重複関係から 87 土坑に先行する。

295 土坑 (図 8・49・50、図版 1)

1 区中央北端で検出した。平面形は楕円形である。規模は長軸 1.08 m、短軸 0.75 m、深さ 0.15 m である。

埋土は極細砂ブロックが混じる灰色砂質シルトで炭が多く含まれる。

遺物は須恵器壺片 1 点・甕片 1 点、土師器甕等体部片 1 点・器種不明小片 5 点の計 8 点が出土し、そのうち 1 点を図示し得た (図 50)。

107 は須恵器壺口縁部である。口縁端部は外反し、口縁端部直下に凸帯をめぐらす。

時期は、出土した遺物は少量であるが、107 の須恵器壺から 5 世紀後半と考えられる。

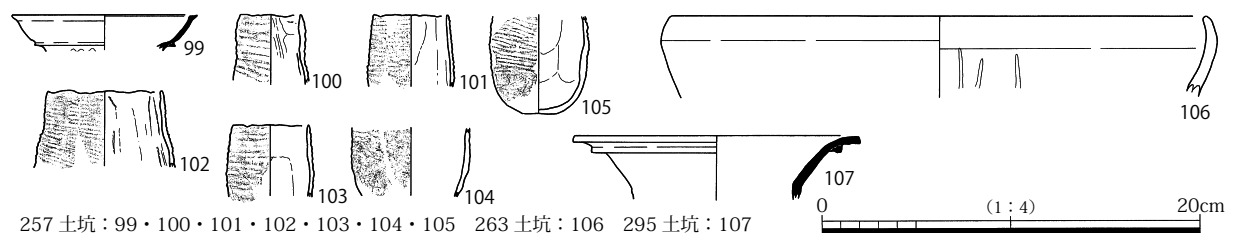


図 50 257・263・295 土坑 出土遺物実測図

330 土坑 (図8・51、図版1)

1 区南東部で検出し、北側を 62 溝、東側を 336 土坑によって削られ、331 土坑を掘りこんでいる。平面形は円形ないし楕円形であっただろう。残存する規模は東西 0.6 m、南北 0.4 m、深さ 0.1 m である。

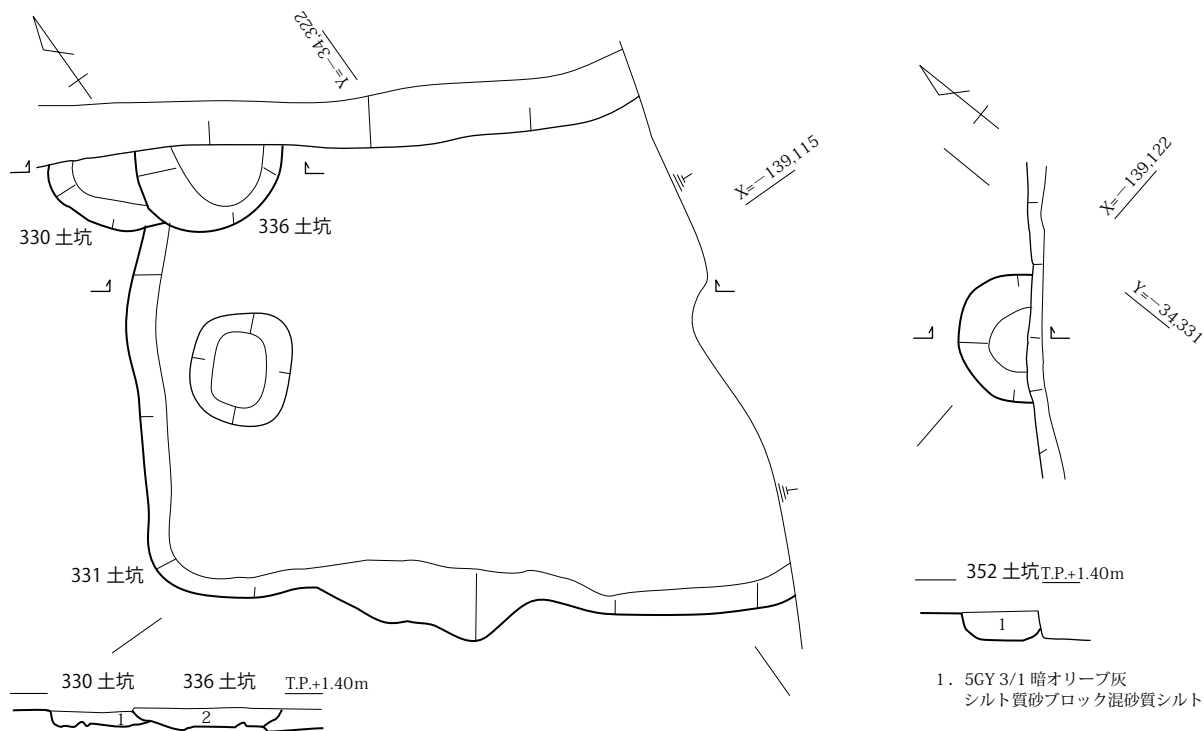


図 51 330・331・336・352・353・354 土坑 平・断面図、及び遺物出土状況

埋土は極細砂や第7層のシルト質砂がブロック状に混じるオリブ黒色砂質シルトで炭粒が全体に含まれる。

遺物は土師器甕等体部片5点が出土しているが、図示し得なかった。

時期は重複する遺構との関係から331土坑より新しく、62溝より古い時期である。そのため5世紀後半から6世紀前半と考えられる。

331土坑（図8・51・52、図版1）

1区南東部で検出し、北側を62溝、330土坑、336土坑に掘りこまれている。平面形は方形または長方形であったと推定される。残存する規模は長軸3.4m、短軸2.5m、深さ0.05～0.1mである。底面はほぼ平坦であるが、やや北が深くなる。

埋土は細砂から中砂と第7層の砂質シルトブロックが混じる暗オリブ灰色シルト質砂である。

遺物は須恵器高杯片3点・甕片4点、土師器甕片5点・甕等体部片11点・器種不明小片190点、製塩土器片14点（9.14g）、滑石製白玉1点の228点が出土し、そのうち3点を図示し得た（図52）。

109は須恵器高杯脚部である。透かしはいびつな方形で、4方透かしのうち2箇所が残る。110は土師器甕の口縁部から肩部である。口縁部は外反し、端部は丸くおさまる。体部外面はハケ調整で、コゲが付着する。内面はナデ調整である。120は滑石製白玉である。断面は台形に近い。

時期は5世紀後半と考えられる。

336土坑（図8・51、図版1）

1区南東部で検出し、北半を62溝に破壊され、330・331土坑を掘りこむ。平面形は円形または楕円形であったと思われる。残存する規模は東西0.76m、南北0.45m、深さ0.12mである。底面には凹凸がある。埋土は極細砂混オリブ黒色砂質シルトで、330土坑や331土坑と異なり、第7層のシルト質砂のブロックを含まない。

遺物は土師器甕等体部片4点が出土したが、図示し得なかった。

時期は重複する遺構の関係から、5世紀後半から6世紀前半と考えられる。

352土坑（図8・51・52、図版1）

1区南部で検出し、竪穴建物5に掘りこまれる。平面形は円形であったと推定される。検出した規模

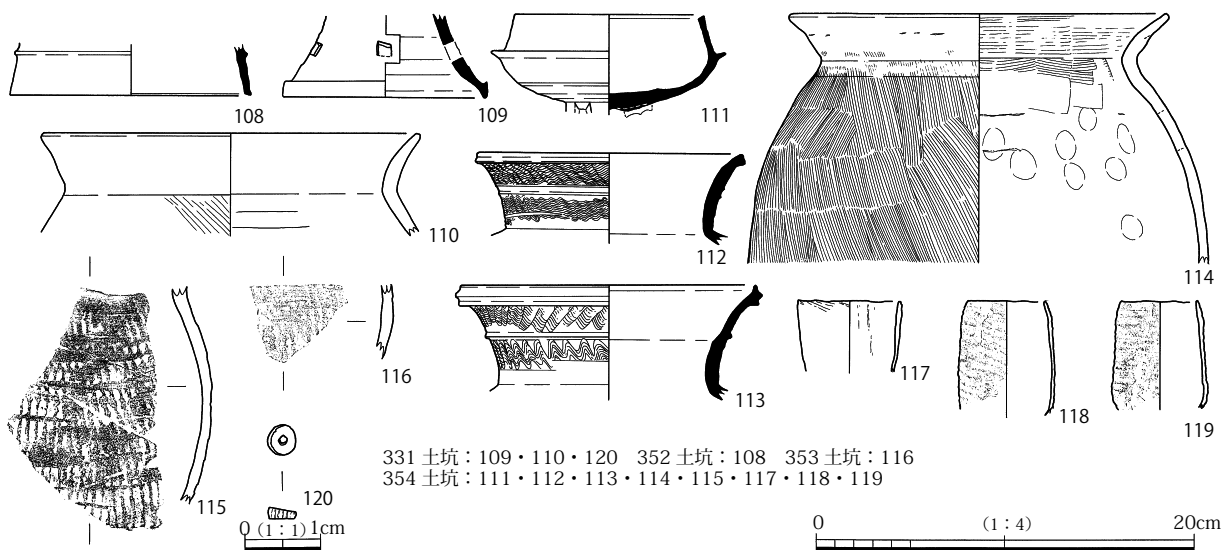
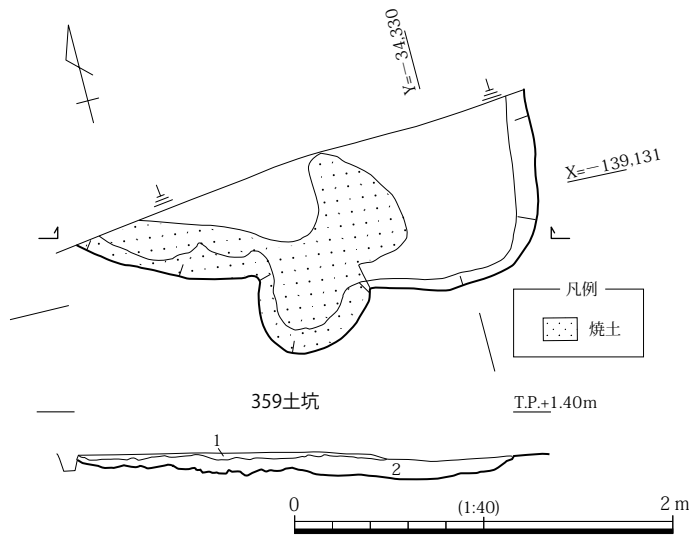
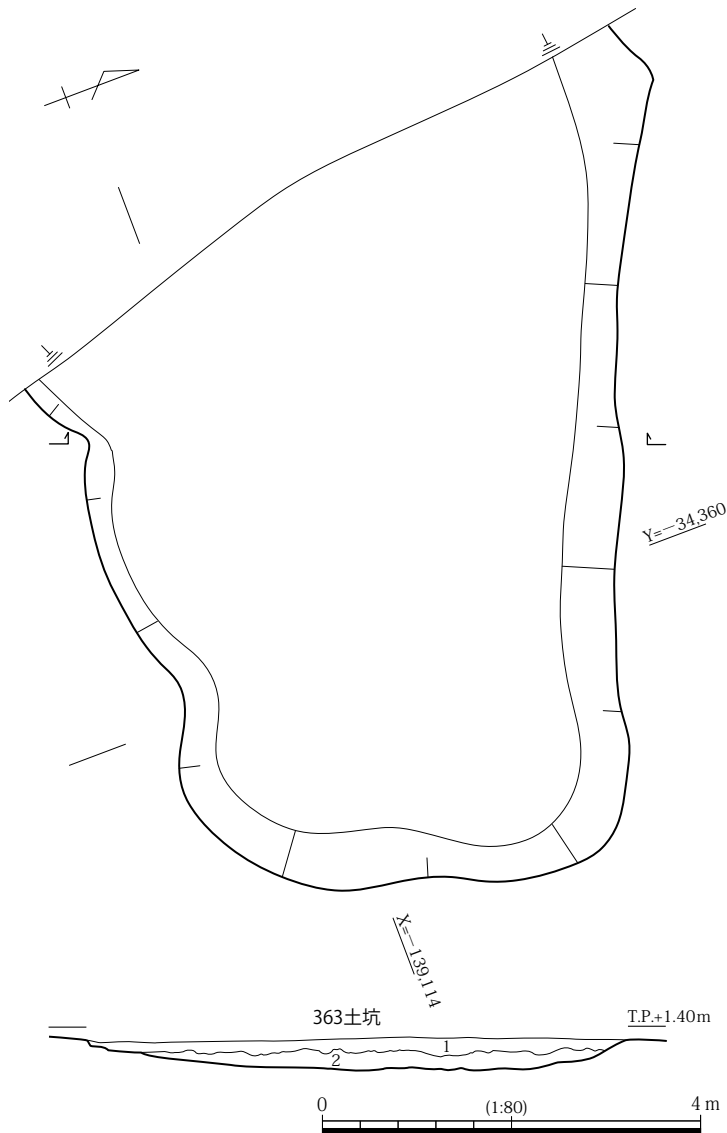


図52 331・352・353・354土坑 出土遺物実測図



1. 7.5Y 4/1 灰 細砂, 粘土質シルトブロック混シルト質砂 (炭粒・焼土粒含む)
 2. 7.5GY 4/1 暗緑灰 粘土質シルトブロック混シルト質砂



1. 2.5GY 3/1 暗オリーブ灰 極細砂～中砂混シルト質砂
 2. 10Y 3/2 オリーブ黒 細砂混砂質シルト (炭粒含む)

図 53 359・363 土坑 平・断面図

は直径 0.68 m、深さは 0.16 m である。埋土は第 6 層の砂質シルトブロックが混じる暗オリーブ灰色シルト質砂である。

遺物は須恵器杯蓋 1 点、土師器甕等体部片 4 点の 5 点が出土し、そのうち 1 点を図示し得た (図 52)。

108 は須恵器杯蓋である。天井部と口縁部を分ける稜は鋭さに欠ける。

時期は出土した遺物が少量のため特定できないが、遺構の重複関係から竪穴建物 5 に先行する。

353 土坑 (図 8・51・52、図版 1)

1 区南東部で検出し、竪穴建物 4 に掘りこまれる。平面形は竪穴建物 4 により不明である。規模は直径 0.88 m、深さは 0.12 m である。

埋土は第 7 層のシルト質砂ブロックや極細砂が混じる暗オリーブ灰色砂質シルトである。

遺物は土師器甕片 1 点、韓式系土器片 1 点の 2 点が出土し、そのうち 1 点を図示し得た (図 52)。

116 は韓式系土器の体部片である。外面調整は平行タタキ後ナデである。

354 土坑 (図 8・51・52、図版 1・24・25)

1 区南東部で検出し、竪穴建物 4 の南東部を掘りこんでいる。平面形は楕円形である。規模は長軸 2.8 m、短軸 1.4 m、深さは 0.1～0.3 m で、南側がやや深くなるが、底面は凹凸があり、深さは一定ではない。

埋土は 2 層に分けることができた。1 層は極細砂や炭粒、焼土がブロック状に混じるオリーブ黒色砂質シルトである。2 層は極細砂から細砂や第 7 層のシルト質砂ブロックが混じる暗オリーブ灰色

砂質シルトであり、焼土粒や炭粒が含まれていた。1層は焼土ブロックを多く含むのに対し、2層には含まれていなかった。

遺物は須恵器杯蓋片1点・高杯片1点・壺片2点、土師器甕片6点・甕等体部片9点、製塩土器片33点(47.78g)、韓式系土器片3点の55点が出土し、そのうち8点を図示し得た(図52)。

111は須恵器有蓋高杯である。口縁端部は面をもち、内傾する。杯部の外面底部は回転ヘラケズリである。透かしは長方形の3方透かしである。112・113は須恵器壺口縁から頸部である。113は口縁部端面の上下に稜をつくり、直下に凸帯をめぐらす。凸帯や口縁部は丸みをおび、鋭さに欠ける。頸部調整はどちらも中央に凸帯をめぐらし、その上下に櫛描波状文が施されている。112は14条の櫛描波状文後に、下部は3分の2周ほどにわたってヘラによる凹線が1条入る。113は凸帯より上部の櫛描波状文は9条で、幅や高さが一定ではないが、上部に比べ下部は単位が細かく一定である。櫛描波状文後に体部との接合のための回転ナデにより、一部が消えている。

114は土師器甕である。口縁部はやや内湾し、端部は丸くおさまる。体部外面は縦方向のハケ調整で、使用時のススが付着している。内面は上部にハケが施され、その下は板ナデ、さらに胴部中央より下はユビオサエ後にナデ調整である。115は韓式系土器平底鉢の体部破片である(図版24)。外面は平行タタキの一部格子状になるタタキ後一部ヨコナデ調整を行う。

117～119は製塩土器である(図版25)。いずれも口縁部外面にタタキが見られ、内面はシボリ状の痕跡が残る。

時期は5世紀第4四半期と考えられる。

359 土坑(図8・53、図版2)

2区中央北端で検出し、遺構の北半は調査区外に広がる。平面形は不整な方形と推定される。検出した規模は東西2.35m、南北0.9m、深さ0.04～0.1mである。底面はやや凹凸があった。

埋土は2層に分けることができた。1層は中央部分に多く分布し、第7層の粘土質シルトブロックが混じり、焼土・炭粒が多く含まれる灰色シルト質砂である。2層は掘削時の埋土で、第7層の粘土質シルトブロック混じりの暗緑灰色シルト質砂である。焼土や炭などを廃棄した土坑と考えられる。

遺物は土師器甕片1点・甕等の体部13点・器種不明小片2点の16点が出土したが、図示し得るものはなかった。そのため時期は特定できない。

363 土坑(図8・53・54、図版1)

1区中央西端で検出し、さらに西に広がる。平面形は不整な長方形である。検出した規模は長軸4.2m、短軸2.8m、深さ0.19mである。

埋土は2層に分けることができた。1層が極細砂から中砂が混じる暗オリーブ灰色シルト質砂、2層は細砂や炭粒が混じる砂質シルトである。

遺物は須恵器杯蓋片2点・杯身片2点・杯片1点・壺1点・甕片1点、土師器甕片2点・甕等体部片4点・器種不明小片2点の15点が出土し、そのうち3点を図示し得た(図54)。

121・122は須恵器杯蓋である。121は口縁端部や口縁部と天井部境の稜は丸味をおびシヤープでない。122は口縁端部が内傾し、口縁部と天井部境

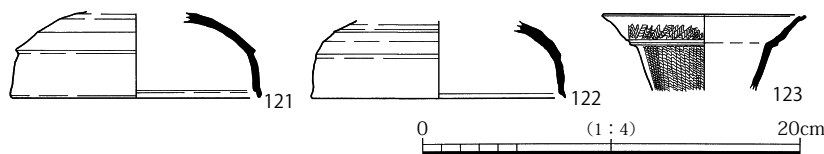


図54 363土坑 出土遺物実測図

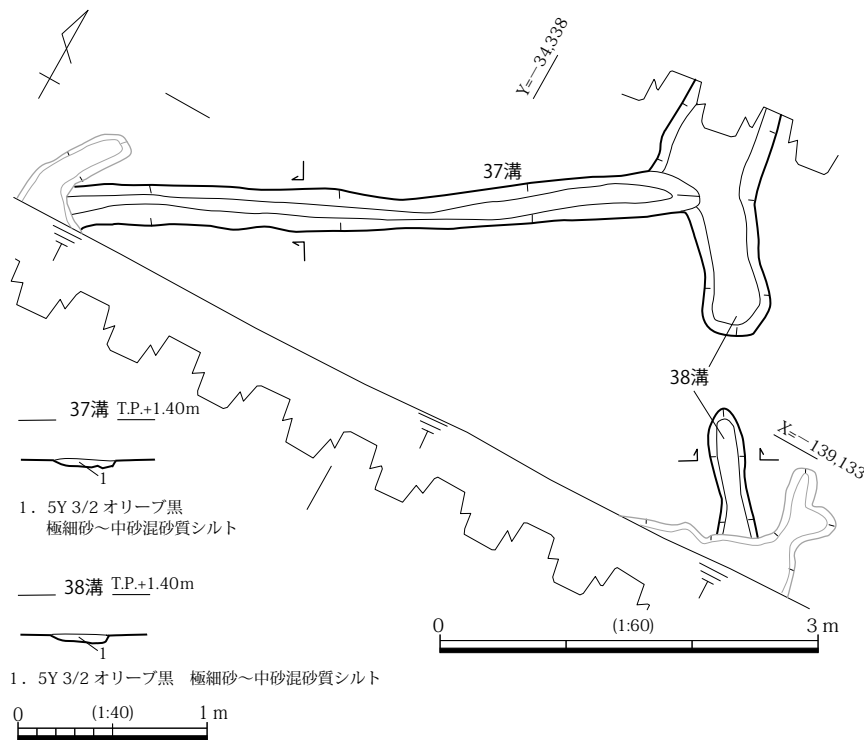


図55 37・38溝 平・断面図

第5-2層の溝状耕作痕に掘りこまれていた。

規模は幅0.3～0.8m、深さ0.05mである。埋土はいずれも極細砂から中砂混じりオリーブ黒色砂質シルトである。この溝は、竪穴建物1における24・25溝、竪穴建物3における48溝と同じように竪穴建物の周囲にめぐらした溝の可能性が考えられる。

遺物は出土しなかったため時期は特定できない。

60・61溝（図8・56～59、図版1・15・16・26）

1区中央で、東西方向に平行する2条の溝を検出した（図56）。南側が60溝、北側が61溝である。両溝は1.7～1.9m間隔で平行して、東から西方向にほぼ一直線にのび、調査区西側で円弧を描くように北に向きを変える。1区西側において61溝は終息するが、60溝は調査区外にさらに続く。60・61溝は、東側の一部を62・63・82溝に、西側を掘立柱建物7の72溝、71土坑に壊されている。

60・61溝ともに溝が途切れる箇所が認められた。60溝は調査区での東端から12.75m（東地点）と22.9m（西地点）の2箇所それぞれ0.95m、1.3mの幅で途切れ、61溝は調査区東端から20mの地点で0.85mの幅で途切れる。それぞれ北・南側への入口の可能性があり、両溝間は通路としての機能をはたしていたものと考えられる。

60溝の規模は幅0.4m～1.4m、深さ0.07～0.4mである。幅は東端から中央部までは0.4～0.8mだが、西端の一部は1.4mに広がる。60溝の幅が最も広く、深くなっている。この箇所から土師器破片が集中して出土した（図56）。溝を掘り返して遺物を廃棄した可能性もあるが、埋土からは確認できなかった。出土した土師器片は756点にもなるが、すべて細片のため図化できなかった。埋土を4.2リットル（6.2kg）洗浄したが遺物は出土しなかった。底面の高さは、高い地点でT.P.+1.08m、土器が集中して出土した地点が最も低くなっており、T.P.+0.75mである。

61溝は幅0.5～1.2m、深さ0.16～0.23mである。60溝に比べ15cm程浅くなる。1区中央部の

の稜はにぶく、突出しない。123は須恵器礎である。口縁部と頸部に櫛描波状文を施す。口縁部の波状文は揃わず雑であるのに対して、頸部は29条以上の波状文を細かく丁寧に施す。

時期は6世紀第1四半期である。

37・38溝（図8・55、図版2）

2区中央部分に位置する。37溝は南西から北東方向にのび、38溝は37溝に直交して北西から南東にのびている。南端は、

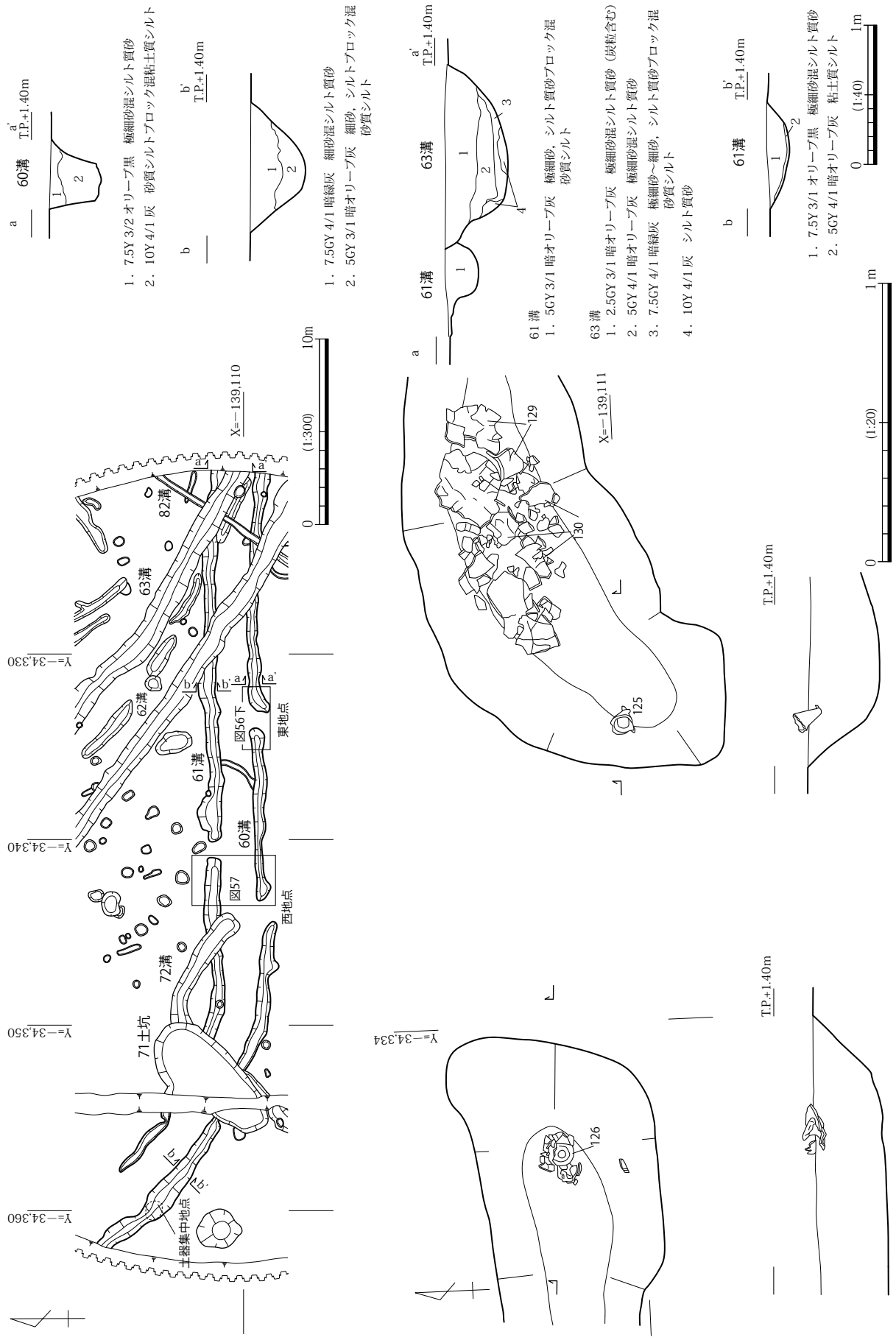
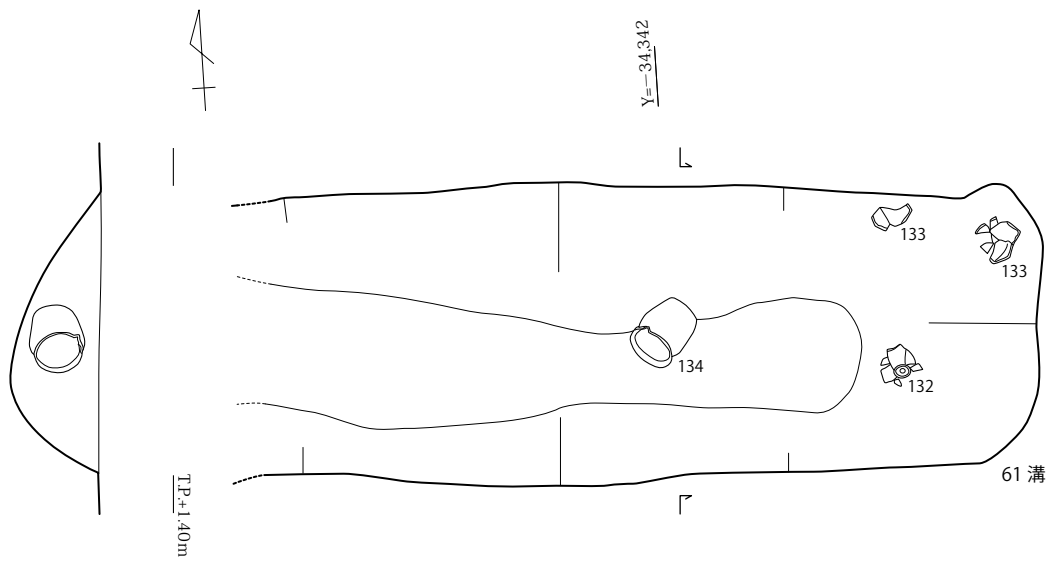


図 56 60・61溝 平・断面図、及び遺物出土状況・立面図 (1)



X=-139.110

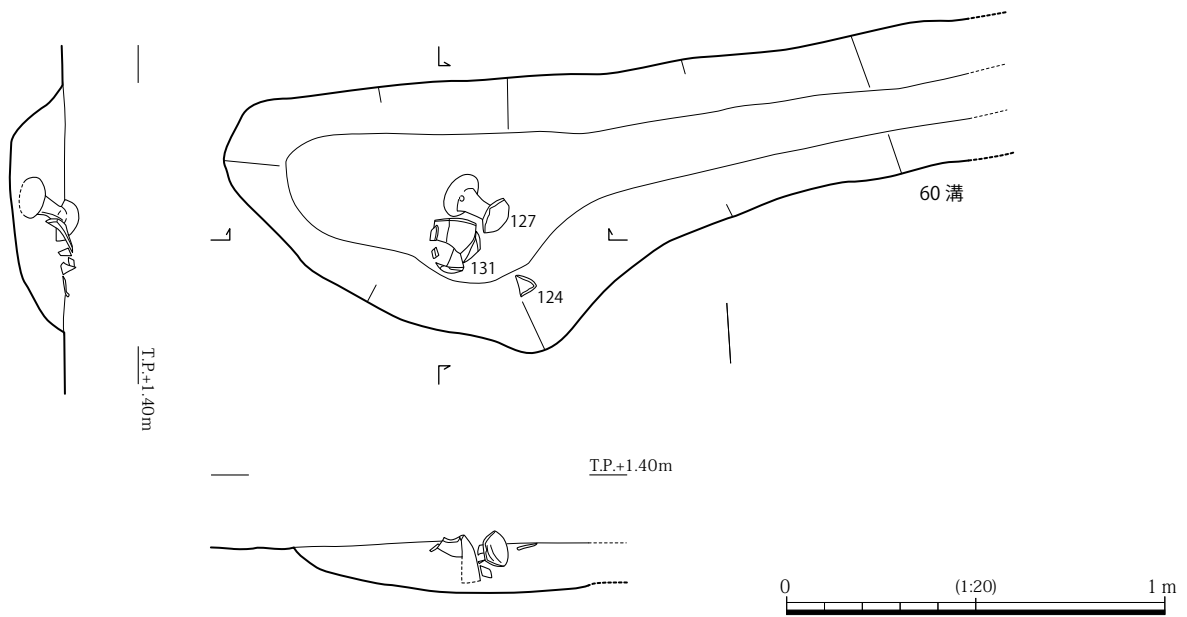


图 57 60・61 溝 遺物出土状況・立面図 (2)

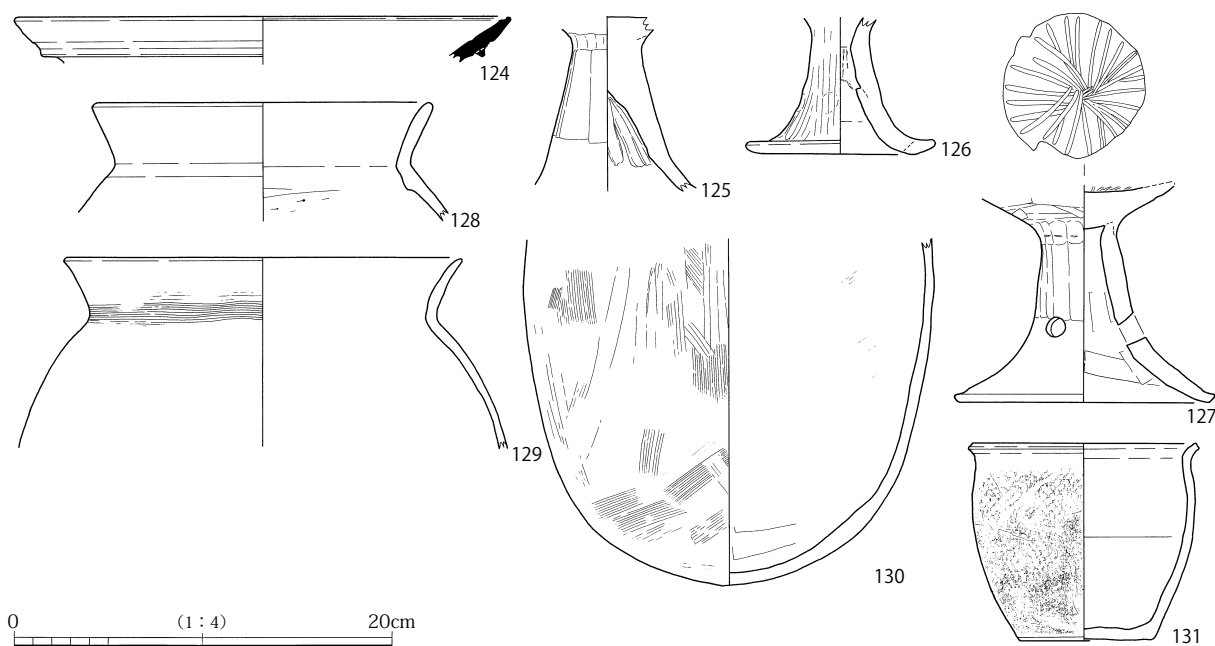


図 58 60 溝 出土遺物実測図

溝が途切れる箇所東側で最も幅が広がる。底面の高さは、高い地点で T.P. + 1.17 m、低いところで T.P. + 0.93 m である。60・61 溝共に、溝底面の深さに規則性がなく、排水路の役割はなかったと見られ、通路側溝のように一時的な排水に対応する程度であったかと思われる。

60 溝の埋土は 2 層 (図 56) に分けることができた。2 層は、東断面 (a) では第 7 層に由来するシルトから砂質シルトブロックが混じる粘土質シルトで層中に植物遺体の薄層を挟む。溝が途切れる箇所のため水が溜まり易い状態であったと見られる。西断面 (b) では細砂や第 7 層のブロックが混じる砂質シルトである。1 層は極細砂から細砂混じりのシルト質砂である。

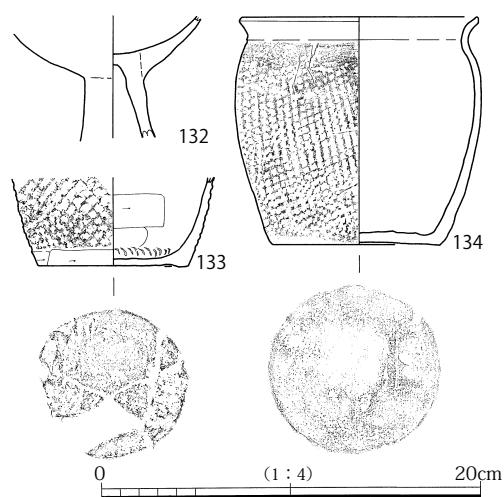


図 59 61 溝 出土遺物実測図

61 溝の埋土は 60 溝と同じく 2 層 (図 56) に分けることができた。2 層は暗オリーブ灰色粘土質シルトである。1 層は極細砂やシルト質砂ブロックが混じるオリーブ黒色砂質シルトである。60・61 溝共に機能時に 2 層が堆積し、1 層で埋め戻されたと見られる。

前述の両溝が途切れる箇所には土器が据え置かれた状態で出土した (図 56・57、図版 15)。60 溝の東地点 (図 56) は、東側溝端に土師器高杯脚部 (図 58 - 125) が反転した状態で置かれ、東に 1 m ほど離れたところには土師器甕 (図 58 - 128 ~ 130) が廃棄されていた。この箇所の埋土を 7.1 リットル (11.3kg) 洗浄したが、遺物は出土しなかった。

向かい合う西側溝端には東側溝端と同じように土師器高杯脚部 (図 58 - 126) が反転した状態で置かれ、その下からは土師器甕体部片が出土した (図 56 下)。東地点の土師器高杯は東西どちらも裾脚部と杯部が失われていた。いずれも 1 層から出土しており、溝の廃絶に伴うものである。

西地点 (図 57) は、60 溝西側端とその北側の 61 溝東側端に 60 溝東地点と同じように同一の器種

が据え置かれていた。東地点は土師器高杯であったが、西地点は韓式系土器平底鉢であった（図 57）。60 溝からは韓式系土器平底鉢（図 58 - 131、図版 26）と土師器高杯（図 58 - 127、図版 26）が出土した。土師器高杯は杯部が欠損する。やや離れて須恵器甕口縁部破片（図 58 - 124）が出土した。61 溝からはほぼ完形の韓式系土器平底鉢と（図 58 - 134、図版 26）、やや離れて土師器高杯（図 59 - 132）、韓式系土器平底鉢の底部片（図 59 - 133）が出土した。いずれも 1 層から出土しており、溝の廃絶に伴うものである。

遺物は、60 溝は須恵器甕片 1 点、土師器高杯 3 点・甕 16 点・甕等体部片 620 点、韓式系土器平底鉢 1 点、器種不明小片 639 点の計 1280 点出土し、そのうち 8 点を図示し得た（図 58）。

124 は須恵器甕の口縁部である。口縁端部内面は強いナデによって段がつく。外面は口縁部下に凸帯がめぐり、凸帯の上下の部分は強いヨコナデによりやや凹む。色調は赤みをおびている。

125 ~ 127 は土師器高杯である。125 は底部が若干残り、脚裾部は欠損している。脚部は柱状の粘土を用い、内面をへら状の工具で掻き出すようにし、広げている。外面は板状工具による縦方向に面を作るようなナデ調整を行う。126 は内面にシボリ痕跡が見られ、その直下には柱状部との裾部との接合による粘土の段が残る。裾端部は折り曲げるように反りあがる。127 は底部内面には放射線の暗文が施されている（図版 26）。底部は粘土接合箇所を剥離しており、そこにハケ調整が残る。杯部と脚部との接合部分は外面にミガキ調整を行っているが、粘土の貼り付けの痕跡が残る。脚部は円形の透かし孔が 3 箇所あけられる。透かし孔より上部はタテ方向のミガキの後にナデ調整を行う。

128 ~ 130 は土師器甕である。いずれも口縁部は外反し、端部は丸くまとまる。130 は長胴甕の胴部から底部である。外面は細いハケの後、粗いハケ調整を行う。

131 は韓式系土器平底鉢である（図版 26）。口縁部は短く外反し、端部はヨコナデによって面をもち、僅かに段がつく。体部外面は格子タタキ、口縁部のナデはこの格子タタキの後に施されたものである。体部端はタタキの後にナデ調整を行う。

61 溝からは、遺物は須恵器甕片 2 点、土師器高杯 2 点・甕片 4 点・甕等体部片 24 点、韓式系土器平底鉢 1 点・底部片 2 点の計 35 点出土した。そのうち 3 点を図示し得た（図 59）。

132 は土師器高杯である。底部は丸みをおびている。脚部内面には棒状のもので整形した痕跡が残る。

133・134 は韓式系土器平底鉢である。133 は胴部外面に格子タタキ後に、体部端に横方向のへらケズリを行う。底部外面は中央部分がやや凹むが、所謂ゲタの痕跡とは言いがたく、整形時に敷いていたものの痕跡であろう。体部内面はナデを施し、底部のみへら状の工具でさらにオサエをする。134 は体部に格子タタキをした後、口縁部～頸部は強いヨコナデを行う。それにより頸部に段が生じている。体部端は格子タタキ後にヨコナデを行う。底部はナデ調整であるが、僅かにゲタの痕跡が残る（図版 26）。

時期はこれらの韓式系土器平底鉢は出土状況から溝の廃絶時に伴うものと考えられることから、溝の廃絶は 5 世紀前半と考えられる。

62 溝（図 8・60 ~ 62、図版 1・15・16・26）

1 区を南東から北西にのび、63・96 溝と平行する溝である。南東部で 60・61・82 溝や 330・331・336 土坑、北西部で掘立柱建物 5 の柱穴・285 柱穴・54 土坑・55 土坑・67 溝を掘りこむ。

規模は幅 1.0 ~ 1.9 m、深さ 0.12 ~ 0.32 m である。底面の高さは一部 T.P. + 0.85 m に低くなる地点があるが、T.P. + 1.05 m 前後で、南東部から北西部へと底面の高さに変化は見られない。

埋土は中央断面（a）が3層、北西断面（b）が2層に分けられる。3・2層（a）、2層（b）は溝が機能していた時の堆積である。2層（a）は層全体に植物遺体を多く含む極細砂から細砂混じりの灰色粘土質シルトである。1層は廃絶後の埋土と見られ、極細砂が混じる暗オリーブ灰色砂質シルトである。南東部の溝底面からは須恵器甕の破片などがまとまって出土した（図61、図版16）。

遺物は須恵器杯蓋1点・杯蓋片13点・杯身1点・杯身片5点・杯片24点・無蓋高杯片1点・高杯片8点・壺1点・甕片206点・器種不明小片10点、土師器高杯片4点・甕片33点・甕等体部片148点・器種不明小片74点、韓式系土器体部片1点の計530点が出土し、そのうち5点を図示し得た（図62）。

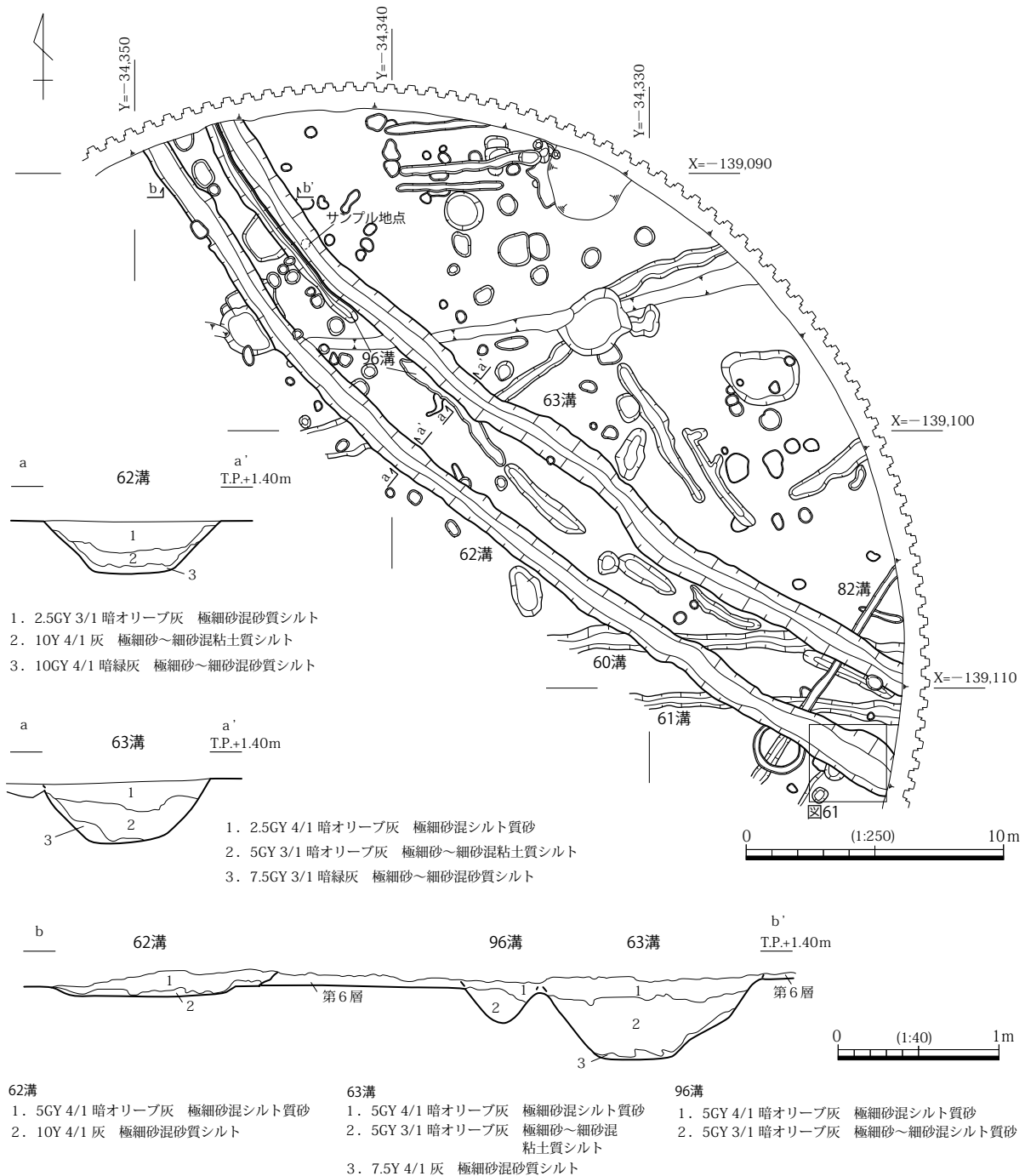


図60 62・63・96溝 平・断面図

135は須恵器杯蓋である(図版26)。全体に焼けひずみが激しい。天井部は扁平で、自然釉がかかり、天井部と口縁部を分ける稜はほとんど失われている。天井部内面は回転ナデの後、不定方向に静止ナデを行う。136は須恵器杯身である。口縁端部内面は浅く凹み、受部は外上方にのび、端部はあまい。137は須恵器短頸壺である。口縁端部外面は段をなす。胴部内面の頸部・体部中央・体部下部に接合痕跡が残る。138・139は須恵器甕である。138は溝南東部に須恵器甕片がまとまって出土した地点のものである(図61)。口縁端部直下に稜をめぐらす。胴部外面は平行タタキ、内面はナデである。139は口縁端部外面に段をなし、頸部は2条の凸帯をめぐらし、その下に10条の櫛描波状文を施文する。

時期は6世紀前半と考えられる。

63溝(図8・60・63、図版1・15・16)

1区を北西から南東にのびる溝で、62・96溝に平行する。61・86・96溝を掘りこみ、235ピットに掘りこまれる。63溝と96溝の新旧関係は平面遺構や断面観察では判断がつかなかったが、63溝は82溝を掘りこみ、82溝は96溝を掘りこむことから、96溝より63溝が新しい遺構であることがわかった。

規模は幅1.03～1.42m、深さ0.26～0.49mである。底面の深さは南東がT.P. + 0.9m、北西がT.P. + 0.73mと0.17m下がっていく。62溝の底面の高さは南東から北西にほぼ変わらなかったのは違いが見られる。

埋土は中央断面(a)・北西断面(b)共に3層に分けることができる。3・2層は溝が機能していた時の堆積である。2層は層全体に炭粒や、極細砂から細砂が混じる暗オリーブ灰色粘土質シルトである。



図61 62溝 遺物出土状況図

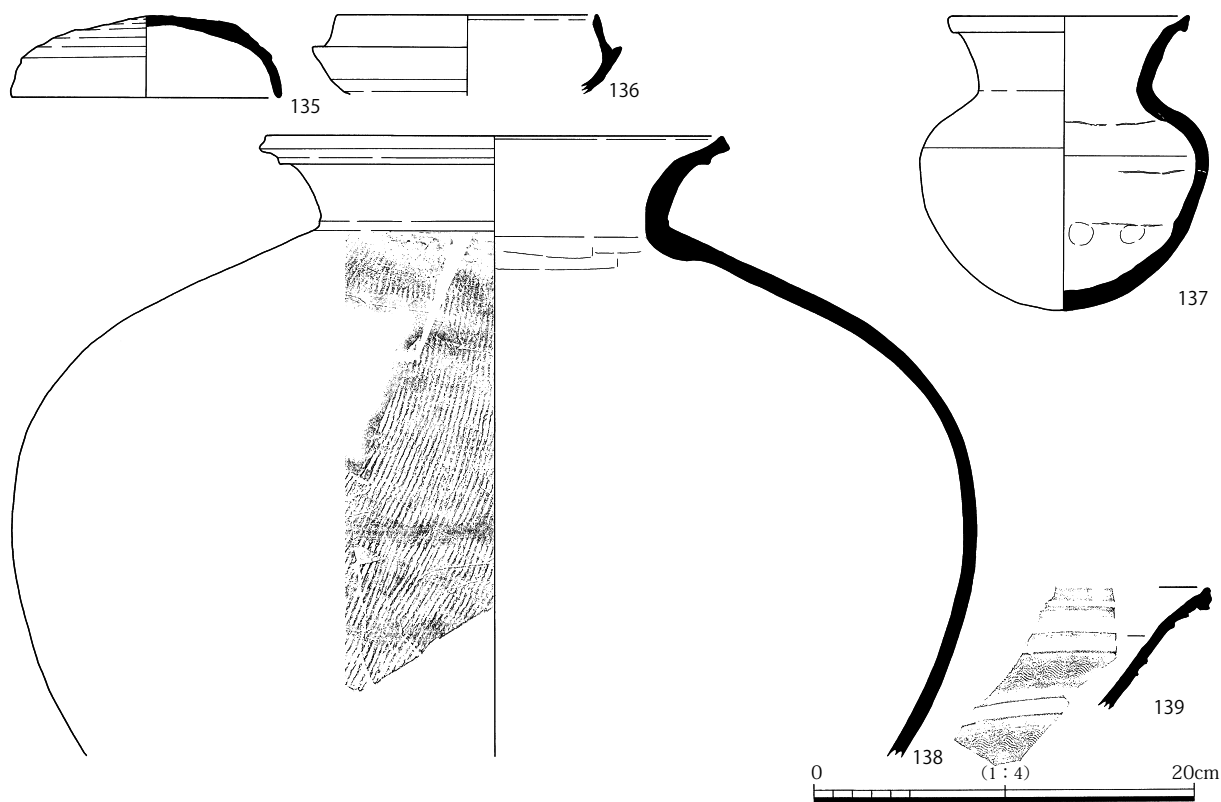


图 62 62 溝 出土遺物実測図

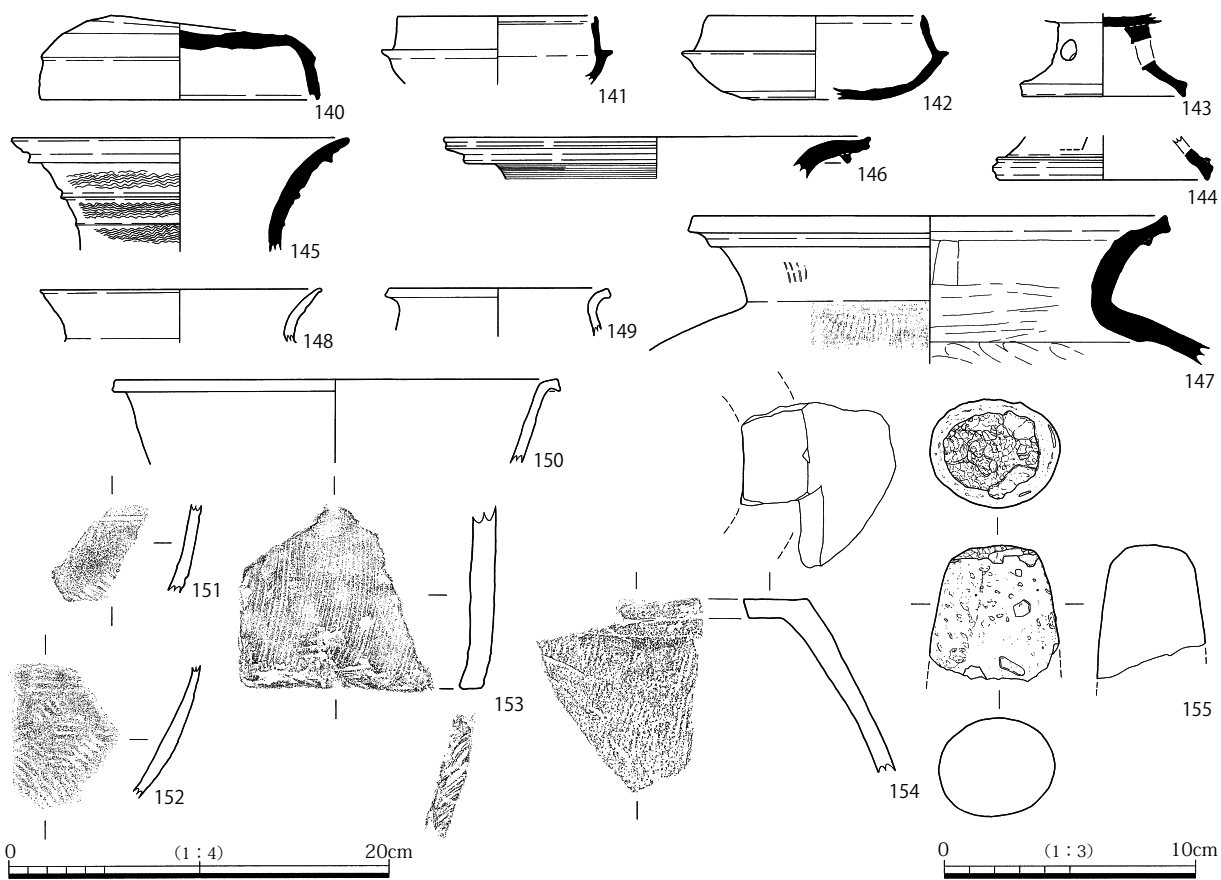


图 63 63 溝 出土遺物実測図

る。特に中央断面（a）2層は植物遺体が多く含まれた。1層は廃絶後の埋土と見られ、極細砂やシルト質砂ブロックが混じる暗オリーブ灰色シルト質砂である。62溝と63溝のそれぞれの地点での堆積状況はよく似ており、2条の溝は同時期に存続したものと思われる。溝北側の炭を多く含む埋土（図60サンプル地点）を58リットル（87.4kg）洗浄した。その結果、イネ4点、コムギ27点などを検出した（第5章 第3節参照）。

遺物は須恵器杯蓋1点・杯蓋片2点・杯身片8点・杯片7点・高杯片4点・壺片2点・甕片73点・器種不明片1点、土師器高杯8点・甕片30点・甕等体部片323点・把手1点・器種不明小片9点、移動式竈片3点、韓式系土器平底鉢片2点・甑片1点・体部片7点・移動式竈片1点、製塩土器片8点（17.9g）、鍛冶炉壁片1点（図版27－281）、敲石1点の493点が出土し、そのうち16点を図示し得た（図63）。

140は須恵器杯蓋である。全体に焼けひずみが激しく、天井部は扁平になり、粘土塊が付着する。天井部内面は回転ナデの後、横方向の静止ナデを行う。口縁部と天井部を分ける稜はにぶく、外方に突出していない。141・142は須恵器杯身である。141はたちあがりほぼ垂直で、口縁端部に段がつく。142はたちあがり内傾し、端部の段は緩い。底部は扁平である。143・144は須恵器高杯の脚部である。143は3方向の円形透かして、孔周囲の内外面に粘土のはみ出しが残る。144は方形の透かして、裾端部は段をなし、その上に断面三角形の凸帯をめぐらす。145は須恵器広口壺である。口縁端部下に断面三角形の凸帯がめぐり、頸部は2条の凸帯がめぐり、凸帯間に15～16条の櫛描波状文を時計回りに施文する。146・147は須恵器甕である。146は口縁端部がナデによってやや凹み、口縁部直下に凸帯がめぐり、頸部にはカキメ調整がされる。147は口縁端部直下に断面三角形の凸帯がめぐり、頸部はタタキ後にナデ調整を行う。内面は、頸部上半から粗くヨコナデをし、下半へと細くなる。肩部斜め方向に指ナデを行う。

148は土師器甕である。やや小型の甕で、口縁端部は僅かに稜をなす。149～152・154は韓式系土器である。149は平底鉢の口縁部である。150は甑である。口縁部は強く外反し、口縁端部は面をもつ。外面に使用時のススが付着する。151・152は塙の体部片と思われる。151は外面に平行タタキがされ、上部に横方向の沈線が入る。内面は板ナデである。152は不定方向の平行タタキ後にナデがされる。153・154は移動式竈である。153は底部で外面がハケ調整、底面にヘラによるキザミがされる。154は掛口である。掛口は垂直で面をもち、体部はタテハケの後ナデ調整を行う。胎土は生駒山西麓産のものである。155は敲石の破片である。砂岩であり、端部に使用痕跡が残る。

遺構の時期は6世紀前半と考えられる。

64溝（図8・64・67、図版1）

1区の南西部で検出し、南東方向から「く」の字状に曲がり西に調査区外へ続く。

規模は幅0.7～1.8m、深さ0.18mで、「く」の字状に曲がる箇所がやや深くなる。この遺構は掘立柱建物7に伴う72溝と並び、同様に「U」字に屈曲することを想定すれば、掘立柱建物の周囲をめぐり施設である可能性も考えられる。その場合64溝南に検出した149・150・152柱穴の柱列は、南西方向に展開する掘立柱建物の一部であった可能性がある。

埋土は2層に分けることができる。2層は極細砂や第7層のシルト質砂ブロックが混じる暗オリーブ灰色砂質シルトである。1層は極細砂や炭粒が混じるオリーブ黒色砂質シルトである。

遺物は須恵器杯蓋片4点・杯身片2点、土師器高杯片1点・甕片2点・甕等体部片15点の24点が

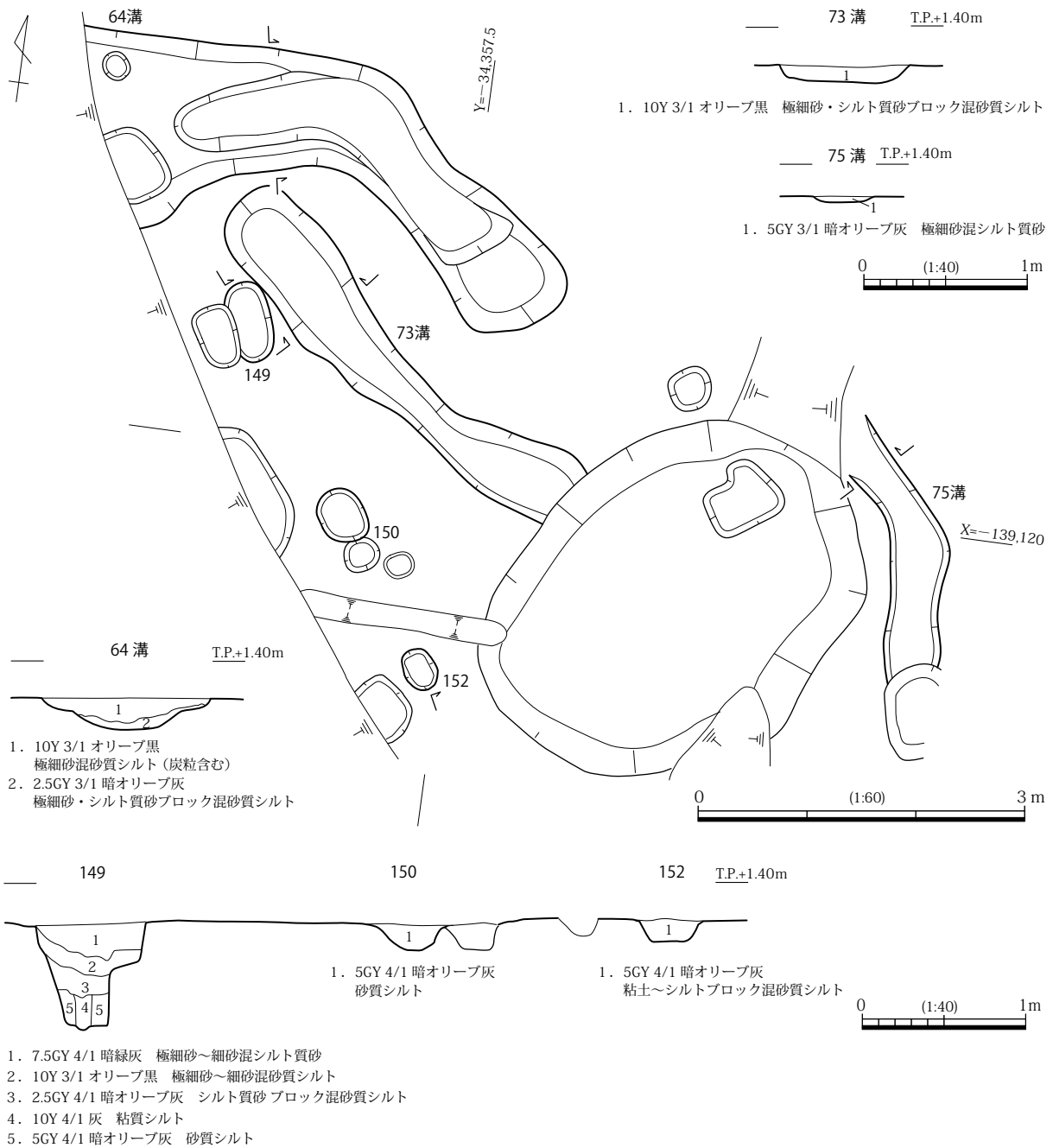


図 64 64・67・73・75溝 平・断面図

出土し、そのうち1点を図示し得た（図67）。

159は土師器高杯脚部である。底部のない杯を脚部側面に接合し、ハケ調整の後ナデを行う。脚部内面は棒状のものによるナデ調整をする。

出土遺物が僅少のため、時期は特定することができない。

67溝（図8・64・67、図版1）

1区北部で検出し、東西方向にのびる。東端を62溝によって削られる。規模は幅1.1～1.6m、深さ0.12mである。

埋土は2層に分けることができる。1層は細砂や第7層のブロックが混じるオリーブ黒色シルト質砂である。2層は極細砂から細砂混じりの灰色砂質シルトである。

遺物は須恵器甕片3点、土師器甕等体部片11点、韓式系土器体部片2点の16点が出土し、そのうち1点を図示し得た（図67）。161は韓式系土器平底鉢体部片である。外面に格子タタキを施す。

出土遺物が僅少のため、時期は特定することができない。

73溝（図8・64、図版1）

1区南西部で検出し、64溝の南から南東方向にのびる。南端は74土坑によって削られている。規模は幅0.35～0.8m、深さ0.09mである。

埋土は1層である。極細砂と第7層シルト質砂ブロックが混じるオリーブ黒色砂質シルトである。

遺物が出土していないため、時期を特定することはできない。

75溝（図8・64、図版1）

1区南西部に検出し、74土坑の北から南東方向に屈曲する。規模は幅0.35～0.55m、深さ0.05mと浅い。

埋土は1層で、暗オリーブ灰色極細砂混じりシルト質砂である。

遺物が出土していないため、時期を特定することはできない。

76・77・98溝（図8・65、図版1）

1区北東部で検出した、東西方向にのびる3条の溝である。第3面の5高まりを排除し、第6層上面で検出した。掘立柱建物4の柱穴を掘りこむ。規模は76溝が長さ5.55m、幅0.46m、深さ0.13mである。77溝は長さ3.8m、幅0.35m、深さ0.11mである。98溝は長さ4.15m、幅0.3m、深さ0.19mである。

埋土は3条の溝のすべてが極細砂混じりオリーブ黒色シルト質砂である。

遺物は、76溝が土師器甕等体部片4点、77溝が須恵器鉢片1点、土師器甕片1点・甕等体部片6点、製塩土器1点（33.97g）が出土し、そのうち1点を図示し得た（図67）。

162は76溝から出土した製塩土器である。器形は逆円錐形で器壁は厚い。調整はコビオサエである。

時期は出土遺物と掘立柱建物4との新旧関係、第3面の5高まりの時期から8世紀後半から9世紀初頭と考えられる。

82溝（図8・65・67、図版1）

1区南東部で検出し、北東から南西にのびる。竪穴建物4・5の北壁に平行する。2区で検出した48溝は竪穴建物3に付随する溝の可能性と、この82溝から続く溝の可能性も考えられる。北東部で60・61・96・102溝を掘りこみ、62・63溝に壊される。規模は幅0.35～0.7m、深さ0.05mである。

埋土は1層で暗緑灰色砂質シルトである。

遺物は須恵器杯蓋が1点出土し、これを図示した(図67)。156は須恵器杯蓋である。口縁部と天井部との境には2条の凹線をめぐらし、天井部は丸みをもつ。焼成は不良である。

時期は出土遺物が僅少ではあるが、須恵器杯蓋から6世紀初頭と考えられる。

85溝(図8・65・67、図版1・26)

1区東端で検出し、南西から北東方向にのび、東端は1区調査区外に続く。規模は幅0.45~0.85mで、深さは0.08mである。

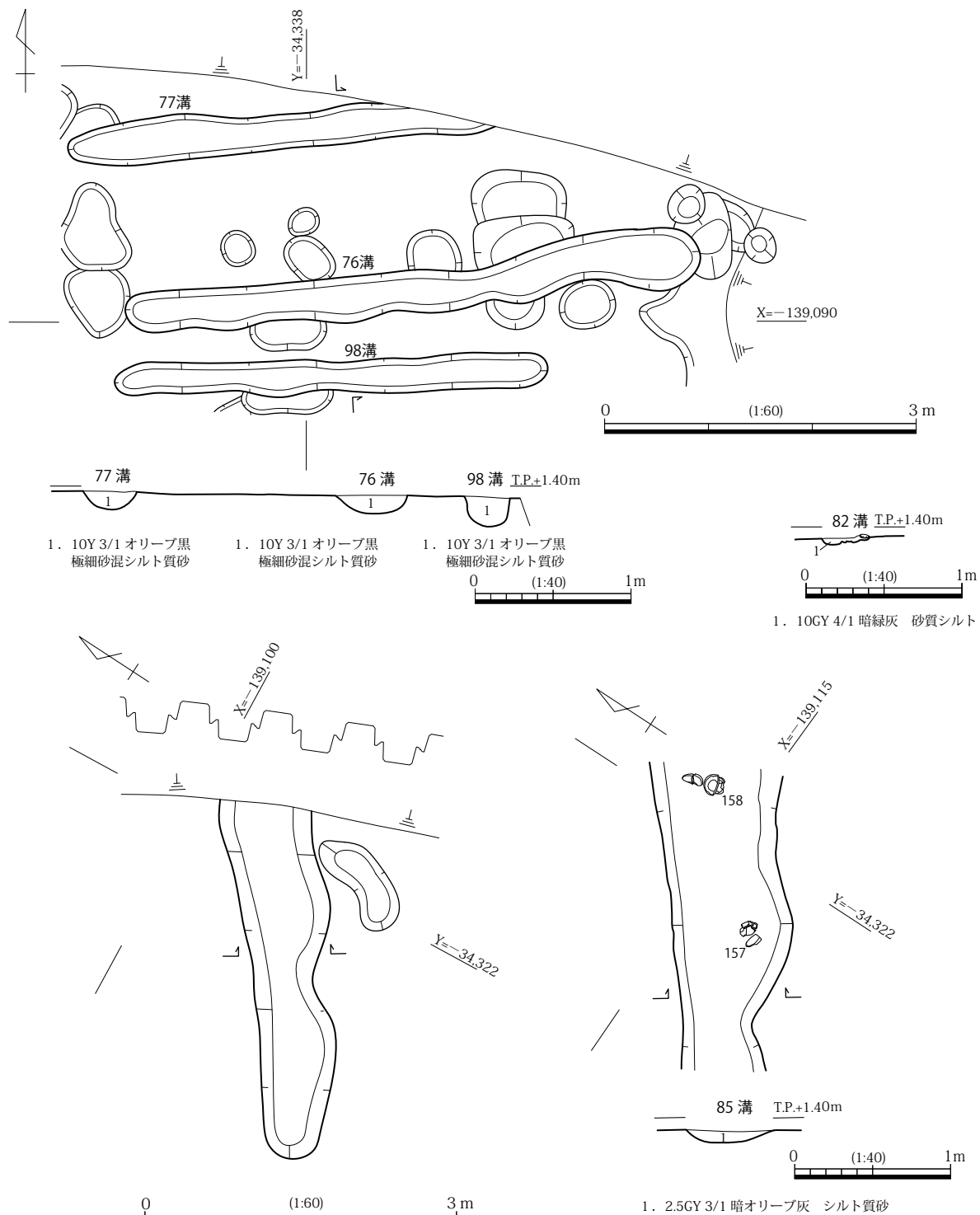
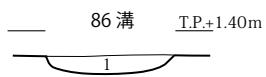
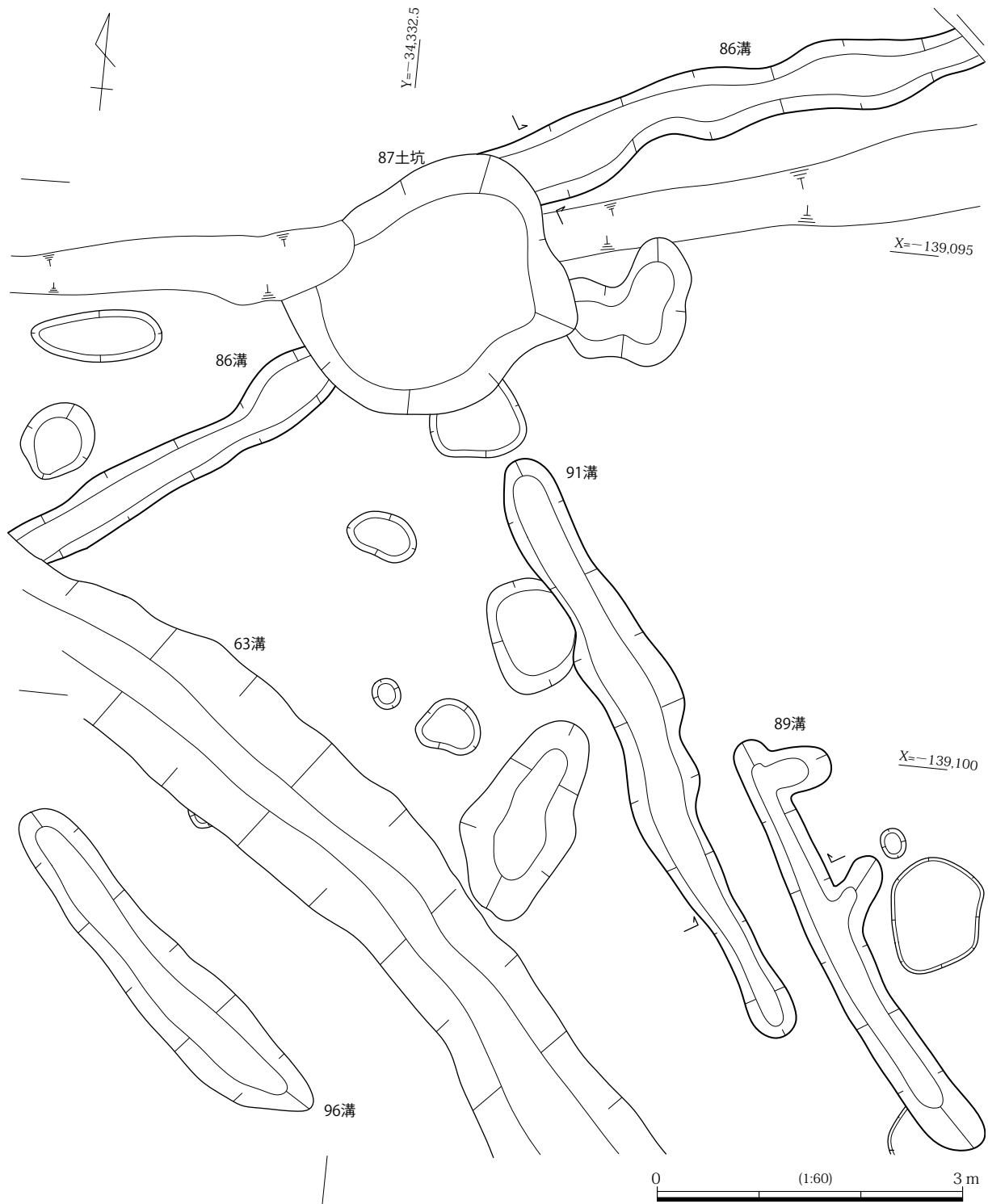


図65 76・77・82・85・98溝 平・断面図、及び85溝 遺物出土状況図



1. 5GY 3/1 暗オリーブ灰 極細砂混砂質シルト



89溝
1. 2.5GY 3/1 暗オリーブ灰
砂質シルト (炭粒含む)

91溝
1. 5GY 3/1 暗オリーブ灰
細砂, シルト質砂ブロック混シルト質砂

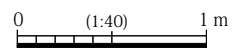


図 66 86・89・91 溝 平・断面図

埋土は暗オリーブ灰色シルト質砂である。

遺物は須恵器杯身1点・杯身片1点・高杯片1点、土師器甕等体部片1点の4点が出土し、そのうち2点を図示し得た(図67)。

157は須恵器杯身で、たちあがりはやや内傾し、口縁端部は丸くおさまる(図版26)。受部には重ね焼きによる溶着痕が認められる。158は須恵器有蓋高杯である。杯部のたちあがりはやや内傾し、口縁端部は面をもつ。脚部は透かしのない低脚である。脚部内面に粘土の接合痕跡が若干残るが、杯部と脚部の接続部分は、ナデによって丁寧に調整する(図版26)。

時期は5世紀第3四半期と考えられる。

86溝(図8・66、図版1)

1区北東部、63溝の東で検出し、南西から北東方向にのびる溝である。中央を87土坑に、西端を63溝に掘りこまれている。この溝は96溝の西にのびないことから、96溝に接続していた可能性が考えられる。規模は幅0.4～0.7m、深さ0.1～0.14mである。底面の高さは北東部がT.P + 1.23m、南西部がT.P + 1.18mである。

埋土は極細砂混じりの暗オリーブ灰色砂質シルトである。

遺物は出土していないが、87土坑との重複関係から、5世紀後半には廃絶していたと考えられる。

89溝(図8・66、図版1)

1区北東部、86溝の南で検出した、南北にのびる溝である。規模は長さ4.6m、幅0.45m、深さ0.15mである。

埋土は暗オリーブ灰色砂質シルトで、全体に炭粒を含んでいる。

遺物は須恵器杯蓋片1点・杯身片3点・杯片3点・甕片16点、土師器甕片2点・甕等体部片15点の40点が出土したが、図示し得るものはなかった。そのため時期は特定することができない。

91溝(図8・66・67、図版1)

1区北東部、89溝の西に検出した。規模は長さ6.2m、幅0.37m、深さ0.06mである。埋土は細砂や第7層のシルト質砂ブロックが混じる暗オリーブ灰色シルト質砂である。

遺物は土師器甕片4点・甕等体部片22点・把手1点、韓式系土器体部片1点の28点が出土し、そのうち1点を図示し得た(図67)。

160は土師器長胴甕である。口縁部はやや外反し、端部が丸くまとまる。

時期は特定することができない。

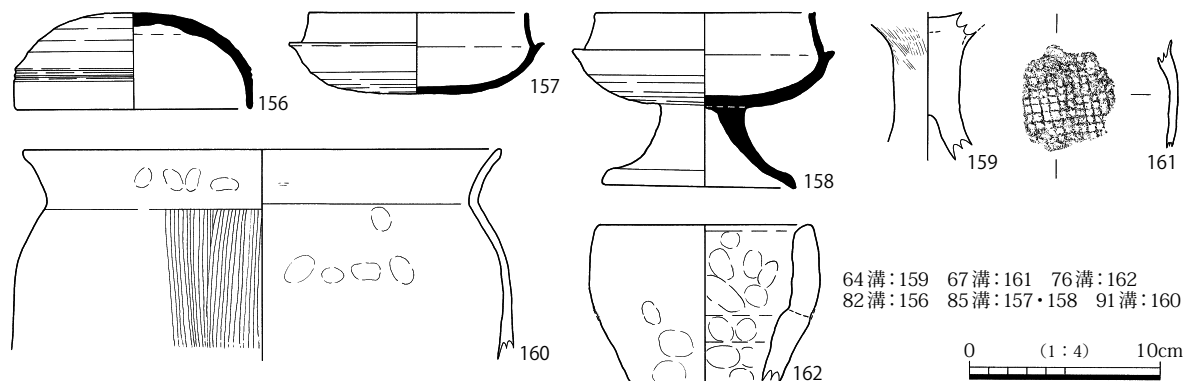


図67 64・67・76・82・85・91溝 出土遺物実測図

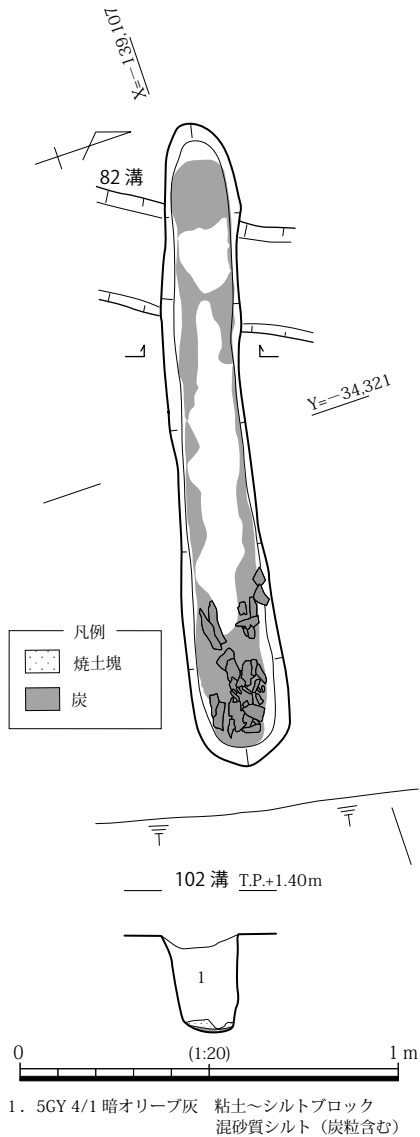


図 68 102 溝 平・断面図

1 区東端で検出した、東西方向にのびる溝である。82 溝によって上部が削られる。規模は長さ 1.7 m、幅 0.2 m、深さ 0.22 ~ 0.25 m である。

96 溝 (図 8・60、図版 1・16)

1 区を北西から南東にのびる溝で 62・63 溝間に位置し、両溝と平行する。この溝は所々途切れるが、同一の溝と考えられる。63・82 溝に掘りこまれる。規模は幅 0.4 ~ 0.8 m、深さ 0.2 m である。

埋土は極細砂から細砂が混じるシルト質砂である。

遺物は須恵器杯片 1 点・甕片 1 点、土師器甕等体部片 17 点の 19 点が出土したが、図示し得るものはなかった。

時期は、遺物からは判明しないが、重複する 63・82 溝との新旧関係から 6 世紀初頭以前である。

102 溝 (図 8・68、図版 1・16)

1 区東端で検出した、東西方向にのびる溝である。82 溝によって上部が削られる。規模は長さ 1.7 m、幅 0.2 m、深さ 0.22 ~ 0.25 m である。

埋土は第 7 層の粘土からシルトブロックが多く混じる暗オリーブ灰色砂質シルトである。溝の底部には炭が全体的に敷かれており、東側の一部にはその炭の上に焼土塊が見られた。

この遺構は、埋土は炭を敷き詰めた後に一度に埋め戻されていることから防湿を目的とした何らかの遺構の下部施設と考えられる。遺物は出土しなかった。時期は、重複する 82 溝が 6 世紀初頭に廃絶していることから、それ以前の遺構と考えられる。

第 6 層出土遺物 (図 69)

163 ~ 169 は須恵器である。163 は杯蓋で、口縁部と天井部を分ける稜は丸味をおびる。164・165 は杯身である。164 は口縁端部を丸くおさめ、165 は僅かに内傾する。165 は回転ヘラ

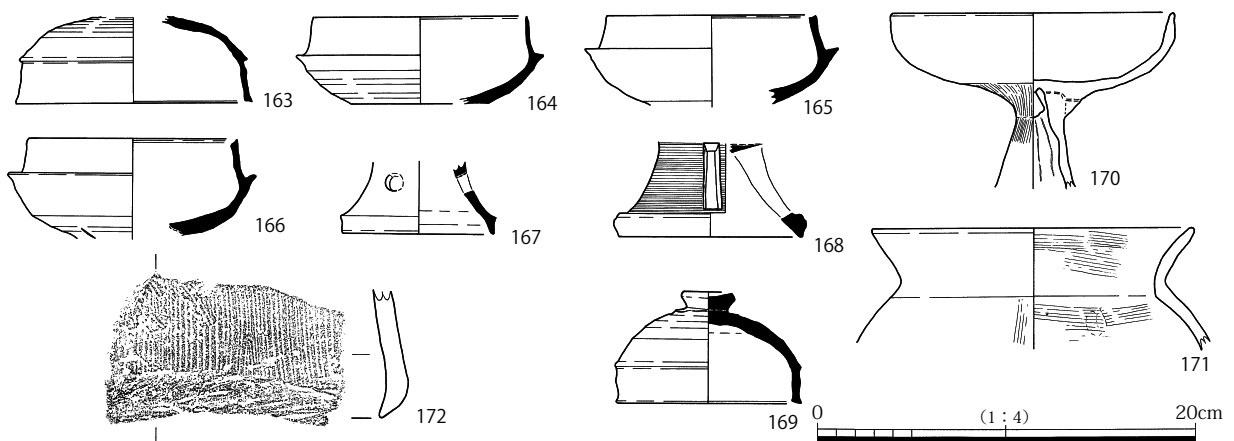


図 69 第 6 層 出土遺物実測図

163・164・166は5世紀第3四半期、165は5世紀第4四半期、167～169は6世紀第1四半期である。

170～172は土師器で、170は高杯である。杯部は椀形で、底部から脚部はハケ調整である。脚部内面はシボリ痕が見られる。171は甕である。172は移動式竈の底部である。端部にヘラによるキザミがされる。

第5—2層出土遺物（図70、図版27）

173～188は須恵器である。173は杯身底部である。174～176は杯蓋である。いずれも口縁部と天井部を分ける稜は短い。174は胎土に中砂から粗砂を多く含む砂質が強いものである。177は杯蓋天井部の破片である。ヘラ記号が刻まれている。178は盤の口縁部である。179は鉢底部片である。外面はタタキ調整である。180～182は高杯である。180は無蓋高杯の杯部である。口縁部は外上方

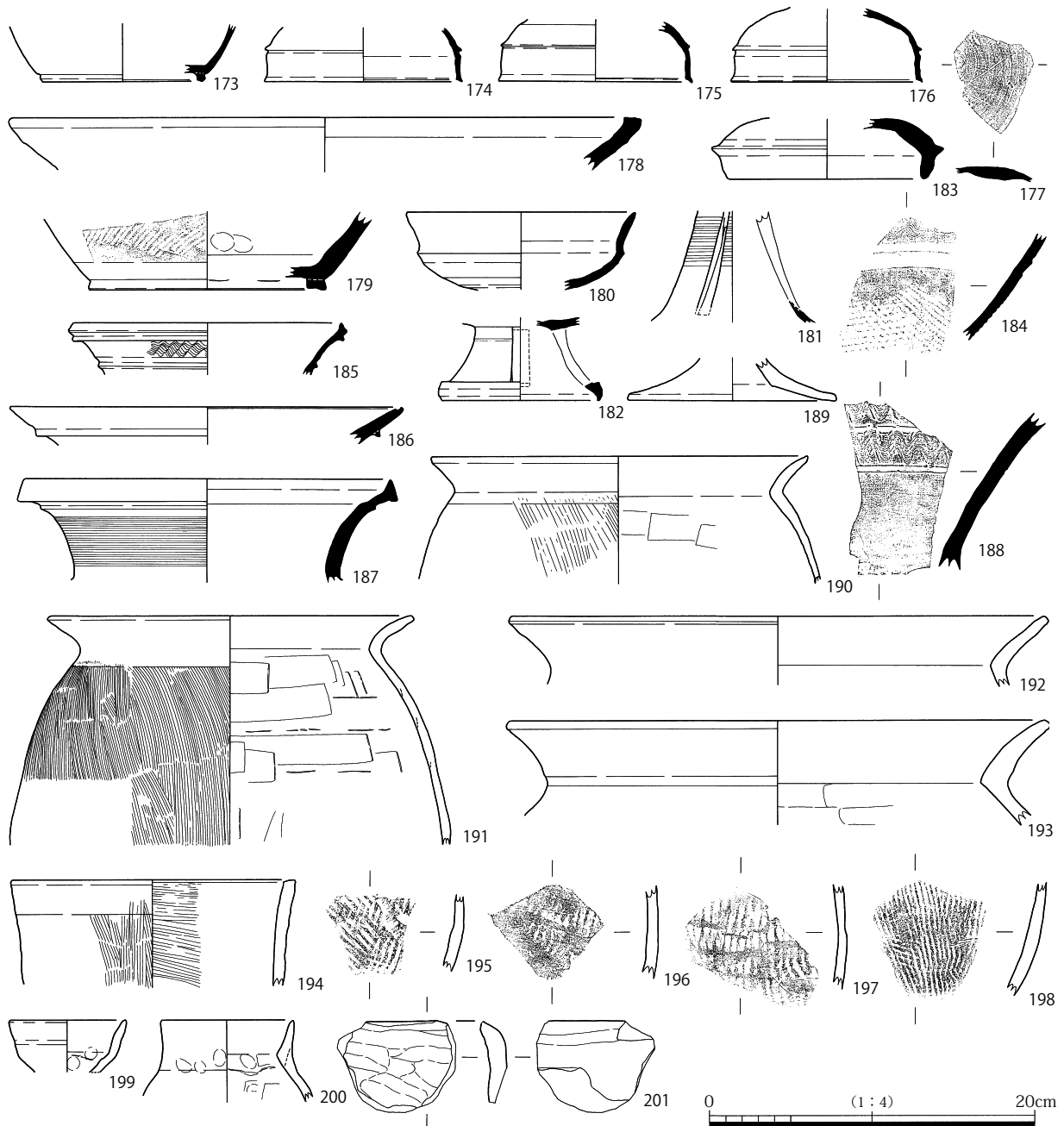


図70 第5—2層 出土遺物実測図

に開き、口縁部と底部の境には段がつく。内面には自然釉が付着する。181・182は脚部である。181は上部にカキメ調整がされる。3方透かしで内面上下端は面取りをする。焼成は硬質であるが、色調が内外面ともににぶい黄橙色である。182は長方形の4方透かしである。脚端部は段をなす。

183は壺蓋または高杯杯部である。全体に器厚が厚く、かえりの端部も丸く厚ぼったいつくりである。かえり端部外面に重ね焼きによる溶着が認められる。外面天井部は回転ヘラケズリの後回転ナデ調整で、自然釉がかかる。184は器台の杯部である。凸帯をめぐらし、その上部に櫛描波状文を施文する。下部は平行タタキが施される。185は壺である。口縁端部は上方に屈曲する。頸部に8条の櫛描波状文を施文し、その後上下に断面三角形の凸帯をめぐらせる。胎土は中砂から粗砂が混じり、砂質が強い。

186・187は甕である。186は口縁端部に段がつき、端部より2cmほど下に断面三角形の凸帯が取り付く。色調は赤みをおびている。187は、口縁端部下は凸帯をめぐらせ、頸部にカキメを施す。188は甕頸部である。上部に2条の凹線を入れ、その後凹線間に櫛描波状文を施す。

173は8世紀末、174～176は5世紀第4四半期、178は8世紀前半、179は8世紀後半、180・181は6世紀第1四半期、183は6世紀前半、185は5世紀第4四半期、186は5世紀半ば頃でも古い様相を示す。188は5世紀後半に相当する。

189～194は土師器である。189は高杯である。190～193は甕である。いずれも口縁部は外反し、口縁端部は丸くまとめる。192は頸部の外面にススが付着している。193は、体部内面はヘラケズリ調整である。194は甕である。

195～198は韓式系土器体部片である(図版27)。195・196・198は平行タタキ、197は一部格子状になる平行タタキである。

199・200は製塩土器である。199は小型の椀形のもので、口縁部外面は強いヨコナデのためやや凹み、内面は粘土紐の痕跡が残る。200は甕形のものでユビオサエ調整である。

201はU字形板状土製品の破片である(図版27)。上部にあたり、焚口部は欠損している。上端は凸帯状に折り曲げられている。外面は板状工具による横方向のナデ、内面は不定方向にナデ調整を行う。

第3節 第3・2面

9世紀代の遺物を含む耕作土である第5-1層を除去して検出した第5-1層下面を第3面、第4-2層を除去して検出した第5-1層上面を第2面として調査した。第2面は水成堆積層である第4-2層に覆われていたため古土壌が良好に残存していた。

第3面は北部に5高まりが形成され、高まり上に14井戸・16落ち込みを検出した。その南側は耕作地となる。耕作地を南北方向に15溝が掘削され、東西方向の8溝と接続し、5高まりの近くで東に屈曲し、幅を細めて北に流れる。そして5高まりの南側裾には東西方向に17溝がめぐり、15溝と接続する。

15溝の東側では南北方向の溝状の耕作痕を確認した。8・15溝や耕作痕の方向から第3面は条里地割が施工されていたと考えられる。

第2面になると5高まり上の14井戸は廃絶し、窪地であった。15・17溝は埋没し、8溝が継続して機能する。新たに12・19溝が掘削される。第3面で15溝が掘削されていた箇所は、第2面では東から西へ一段低くなる境になり、西側に東西方向の11畦畔、東側で6・7・9畝状遺構を検出した。

5高まりと7畝状遺構の間ではウマの歯(図72 283～286)を4点(第5章 第2節参照)検出した。

14井戸 (図 71 ~ 74、図版 17 ~ 20)

第3・2面の1区中央北端の5高まり上で検出した。第2面ではすでに廃絶し、窪地となっていた。規模は東西3.5m、南北2.7m、深さ0.87mである。井戸は素掘りで井戸枠は検出されなかった。

埋土は5層に分けられた(図73)。5層は細砂から中砂がブロック状に混じるオリーブ灰色砂質シルトで井戸掘削時に堆積した層である。4層は細砂から粗砂や炭粒が混じるシルト質砂で崩落土である。3層は灰色粘土からシルト層である。滞水状態で使用時に徐々に堆積した層で、層中には植物遺体の薄層がラミナ状に見られる。2層は細砂から中砂やシルト質砂ブロックが混じる灰色砂質シルトである。1層の第4-2層暗オリーブ灰色粘土質シルトで埋没する。

井戸底面で0.15m四方の大きさの編物が出土した(図73、図版18)。井戸底に置かれていたものであろう。

遺物は2層から須恵器杯蓋片1点・甕片15点・器種不明4点、土師器甕片2点・甕等体部片7点・器種不明小片7点、平瓦1点、丸瓦1点の38点である。3・4層から須恵器杯片1点・甕片3点、土

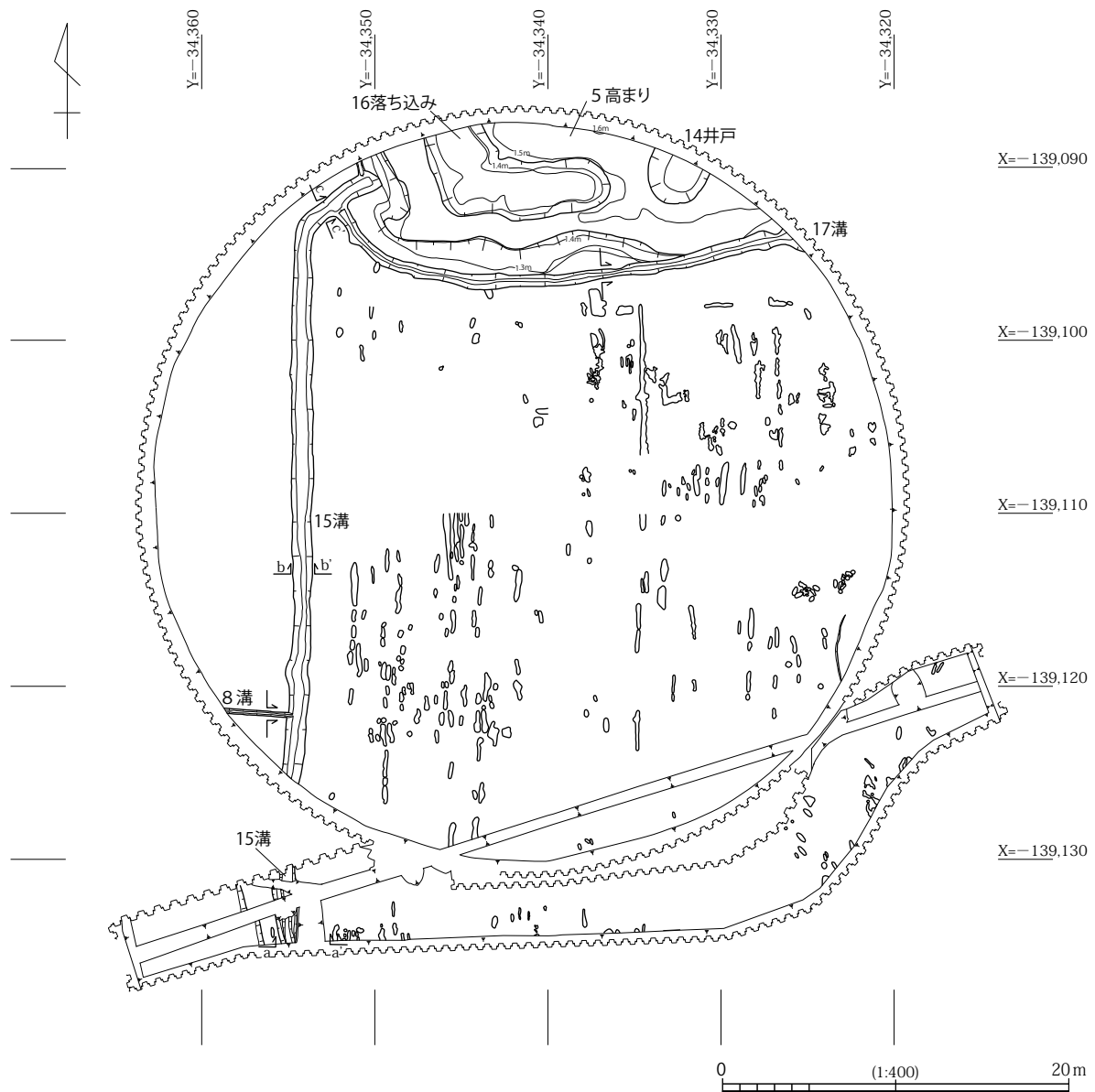


図 71 第 3 面 全体図

師器甕片7点・甕等体部片7点、韓式系土器1点の19点が出土した。そのうち2点を図示し得た（図74）。202は平瓦である。凸面縄叩き痕跡が見られる。凹面は摩滅により不明である。203は丸瓦である。凸面は縄叩き痕跡があり、凹面は布目圧痕とヘラケズリ痕が残る。

5高まり（図71・72・73・75、図版17・19・20・26・27）

1区北側で検出した。第3面で盛り土により作られ、第2面まで継続する。高まり上で14井戸とL字状の16落ち込みを検出し、14井戸周囲を中心に須恵器甕片が散乱する（図版20）。検出した範囲は東西22.7m、南北7.5mで、周囲との高低差は0.3mである。

高まりは2層に分けられ、1層の細砂から粗砂やシルト質砂ブロック混じりの灰色砂質シルト、2層の極細砂混じりの暗オリーブ灰色砂質シルトからなる。ベースには第6層の暗オリーブ灰色砂質シルトが遺存していた。

遺物は須恵器杯・高杯・壺・壺・甕片が354点、黒色土器片12点、土師器杯・高杯・甕・移動式竈片が527点、韓式系土器片7点、製塩土器片が25点（262.96g）、瓦片2点、砥石1点の928点が

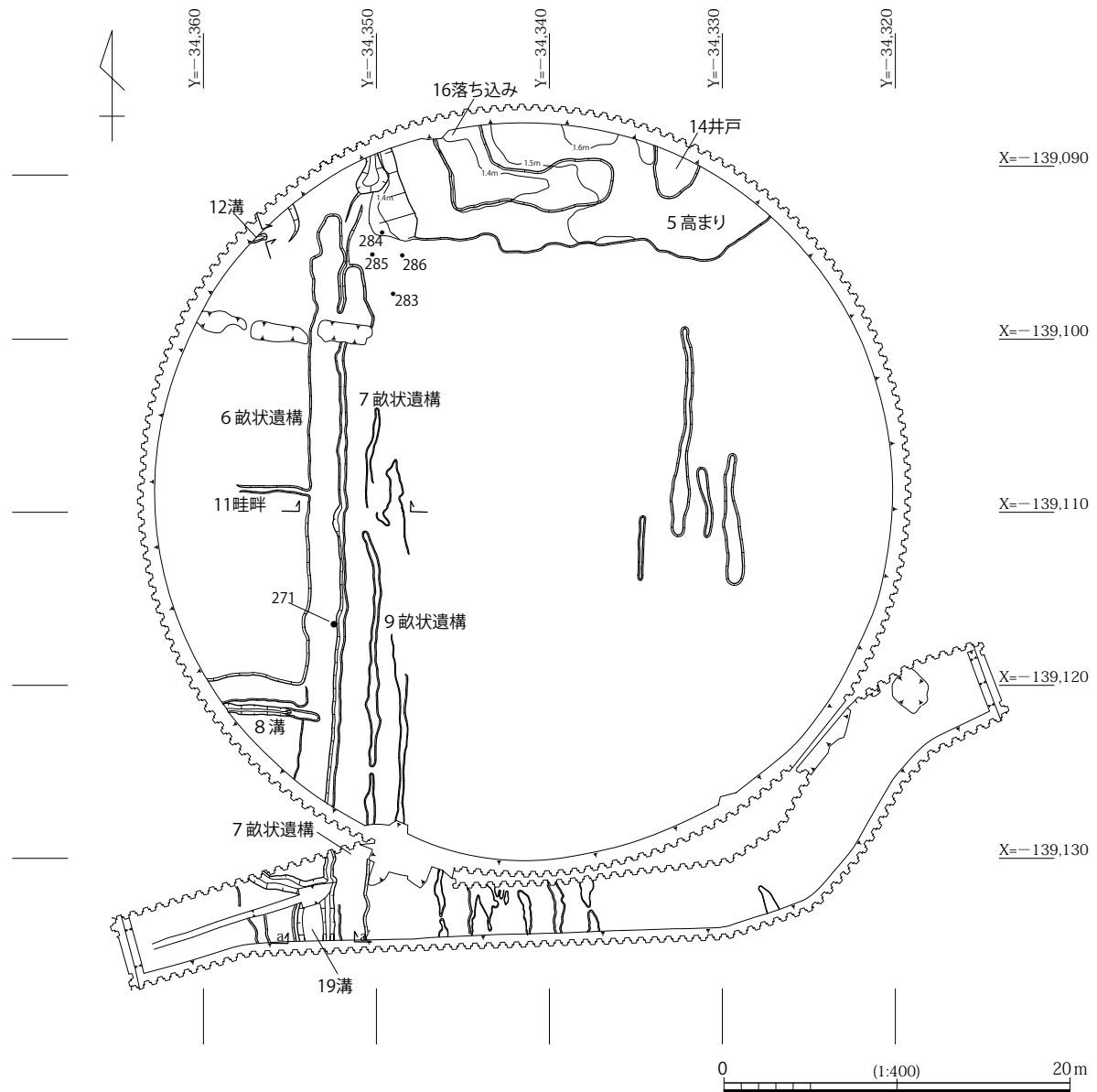


図72 第2面 全体図

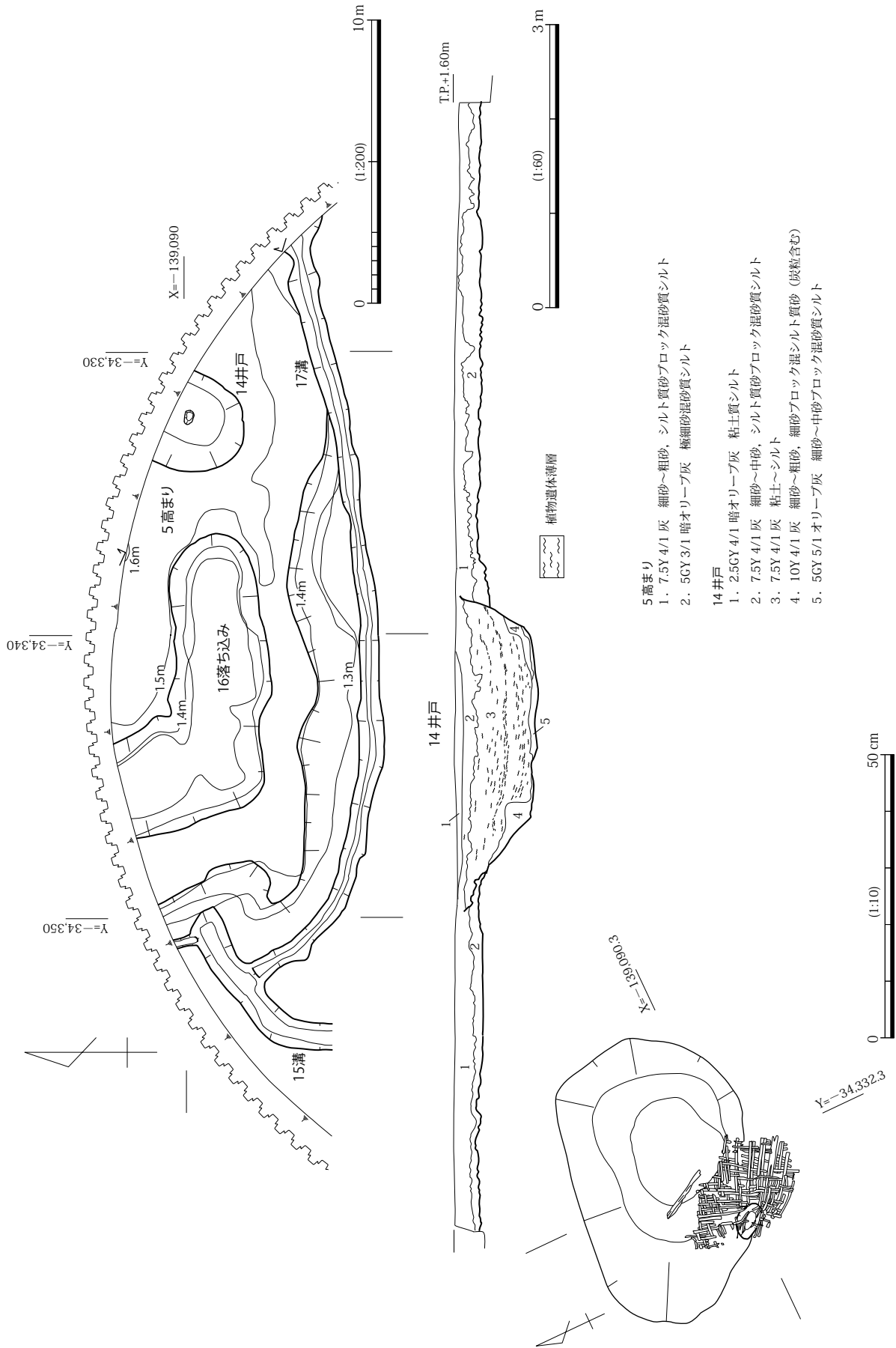


図 73 14井戸 平・断面図、及び編物出土状況図

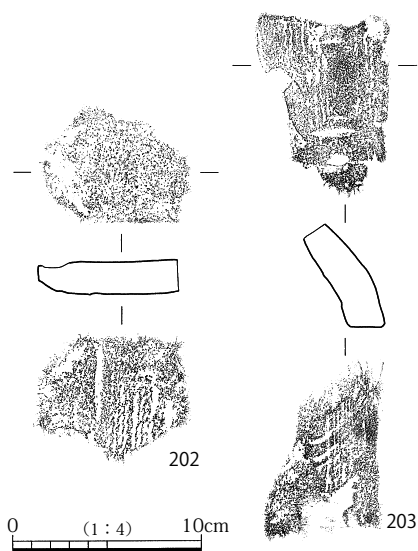


図74 14井戸 出土遺物実測図

出土し、そのうち 25 点を図示し得た (図 75)。

204～207 は須恵器杯身である (図版 26)。208・209 は須恵器高杯の脚部である。いずれも裾部は段をもち、208 は 3 方透かし、209 は 4 方透かしである。210～213 は須恵器壺である。213 は 2 段の櫛描波状文が施される。214～217 は須恵器甕である。217 は大型で、口縁端部が大きく屈曲している。204～207 は 8 世紀末から 9 世紀初頭、208・209 は 5 世紀後半、214 は 8 世紀代、216 は 5 世紀中葉に相当する。

218 は黒色土器椀 A 類である。口縁端部が玉縁状になる。219・220 は土師器椀である (図版 27)。221～223 は土師器甕である。221 と 222 は口縁部が大きく外反し、端部は面をもって外方を向く。218 は 9 世紀代、219・220 は 9 世紀初頭から前半に相当する。221・222 は 8 世紀後半頃に相当する。

224 は韓式系土器甑または鍋の把手である。先端に面をもつ。上面から断面半月形に切り込みが入る。225 は土師器甑または鍋の把手である。226 は土師器移動式竈の掛口部分である。227 は製塩土器片である。内面に布目痕が残る。228 は砥石である。

水田 (図 72、図版 19)

第 2 面において、1 区西側で検出した。6 畝状遺構・8 溝を境に北西側に広がり、一部ではあるが東西方向の 11 畦畔を検出した。

6・7・9 畝状遺構 (図 72・76・83、図版 19・20)

第 2 面において、1・2 区の西側で南北にのびる 6・7・9 畝状遺構を検出した。6 畝状遺構の幅 1.58～1.7 m、7 畝状遺構の幅 1.35～1.95 m、9 畝状遺構の幅 0.95～1.4 m である。各畝状遺構間は幅 0.4 m 前後で、高低差は 0.04～0.07 m である。

これらの遺構は畝の畝と考えるには幅が広いことや、調査区東側には一部で確認できたが全面に畝状遺構が広がらないことから畝作に伴う畝とは断定できない。しかし第 5 - 1 層下面である第 3 面では畝状遺構が検出されなかった箇所においても溝状の耕作痕が検出されていることから、何らかの耕作がされていたと考えられた。このため栽培作物を特定を目的とし、土壌洗浄を行った (第 5 章 第 1 節参照)。サンプル量は 6 畝状遺構が 30.6 リットル (56.7 kg)、7 畝状遺構が 28.4 リットル (52.4 kg) である。また畝状遺構が検出されなかった地点でも 2 箇所サンプルを採取した。それぞれのサンプル量は、サンプル地点 3 が 34.5 リットル (47 kg)、サンプル地点 4 が 38.2 リットル (59.3 kg) である。その結果、すべての地点からイネと雑草の種子が検出された (第 5 章 第 3 節参照)。

このことから 6 畝状遺構から東側も水田であった時期があるといえるが、畝状遺構が畝に伴う遺構とは考えがたい。

8 溝 (図 71・72・76、図版 19・20)

第 3・2 面の 1 区南西端で検出し、東西方向にのびる。第 3 面では 15 溝と接続し、第 2 面まで継続して機能する溝である。第 2 面では 6 畝状遺構に取り付く。

規模は幅 0.46～0.5 m、深さ 0.03～0.29 m である。埋土は 2 層に分けられ、2 層が細砂から中砂や粘土質シルトブロックが混じるシルト質砂である。1 層が第 4 - 2 層の暗オリーブ灰色シルト質粘土

で、この層で埋没していた。

この溝は第3面においては15溝から東への水路、第2面では6畝状遺構からの排水のための溝と考えられる。

遺物は土師器器種不明小片5点が出土し、図示し得る遺物はなかった。

15溝 (図71・76・77、図版17)

第3面の1・2区西側を南北方向に伸び、8・17溝と接続する溝である。規模は幅0.9～1.2m、深さ0.2～0.3mである。

埋土は2～4層に分けられた。4層が中砂から粗砂がブロック状に混じる砂質シルトである。2層が細砂から粗砂が混じるシルト質粘土で機能時に堆積した層である。1層が第5-1層に類似した細砂から粗砂混じりの砂質シルトで埋め戻し土と考えられる。この溝は南から北への水路と考えられる。

遺物は黒色土器片2点、須恵器杯蓋1点・杯身3点・杯片5点・高杯片1点・甕片6点・器種不明

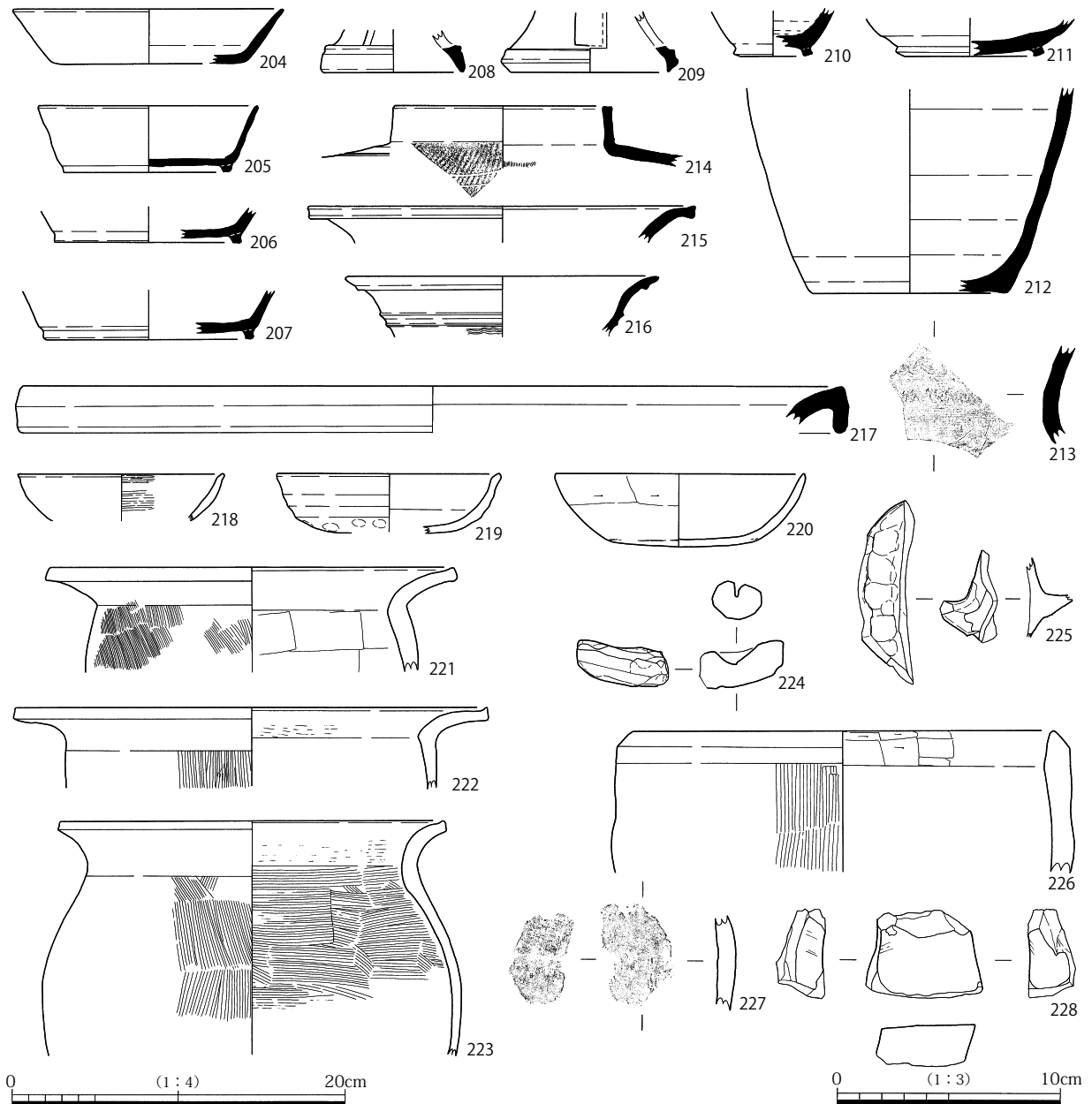


図75 5高まり 出土遺物実測図

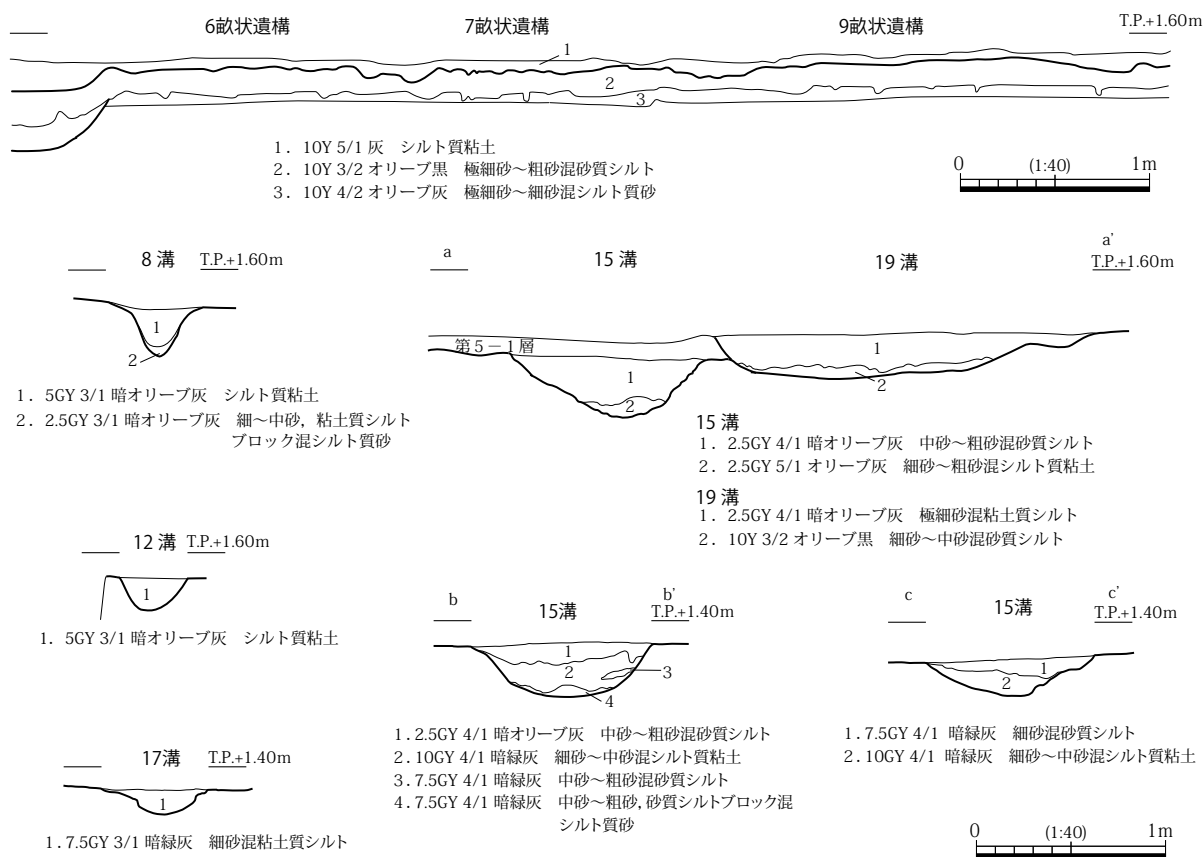


図76 6・7・9畝状遺構、8・12・15・17・19溝 断面図

小片4点、土師器甕片4点・甕等体部片9点・把手1点・器種不明小片39点、木製品1点の76点が出土し、そのうち1点を図示した(図77)。229は曲物底板である。直径14.4cmで、側板との接合のための釘痕跡が2箇所残存する。

17溝(図71・76、図版17)

第3面の1区北側を東西にのび、15溝に接続する溝である。規模は幅0.4～0.8m、深さ0.08～0.15mである。底面の高さから、東から西へ流れる水路と推定される。

埋土は細砂混じりの粘土質シルトで第5-1層に類似した層である。埋め戻し土と考えられる。

遺物は須恵器杯蓋片7点・杯身片3点・杯片3点・高杯片2点・壺片1点・甕片27点・器種不明小片4点、土師器杯片2点・甕片3点・甕等体部片29点・器種不明小片15点、瓦片1点の97点が出土し、図

示し得るものはなかった。

12溝(図72・76、図版19)

第2面の1区北西端で検出した。東西方向にのび、調査区外に続く。規模は幅0.32m、深さ0.16mである。

埋土は第4-2層の暗オリーブ灰色シルト質粘土である。第2面における8溝と同様に排水のための溝と考えられる。遺物は出土しなかった。

19溝(図72・76、図版19・20)

第2面の2区西部で検出した。南北方向にのび、すぐに北西方向に屈曲し、幅を狭めて調査区外へ続いている。

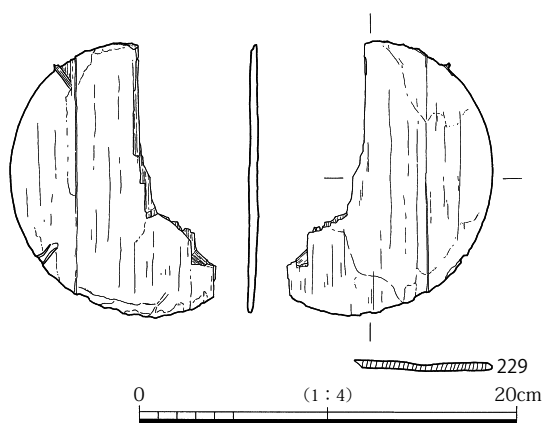


図77 15溝 出土遺物実測図

規模は南北方向部分が幅 2.1 m、北西方向部分が幅 0.8 m、深さ 0.2 m である。底面の高さは南から北へ 0.05 m 低くなる。南から北への排水路と考えられる。

埋土は 2 層に分けられた。2 層は細砂から中砂が混じるオリーブ灰色砂質シルト、1 層が第 4 - 2 層の極細砂が混じる暗オリーブ灰色粘土質シルトである。

遺物は須恵器器種不明小片 1 点が出土し、図示し得るものはなかった。

第 5 - 1 層出土遺物 (図 78、図版 27)

230 は緑釉陶器碗である。端部は小さく外反する。231 ~ 258・279・280 は須恵器である 231 ~ 234 は杯蓋で、231・232 は杯 B 蓋である。233 は口縁部が高く直立し、口縁部と天井部との境の稜が短く取り付く。234 は天井部片である。上面に「×」のヘラ記号が刻されている。235 ~ 244 は杯身である。235 ~ 240・242 は杯 B、241 は杯 A である。236 は底部内面が回転ナデの後、中央部に不定方向のナデがされる。底部外面はヘラ切り後未調整である。238 は底部内面と側面下部に重ね焼きによる溶着痕が認められる。241 は底部外面には墨書があり、「本」の別体かと思われる (図版 27)。243 はたちあがりやや内傾し、端部の内面に段をなす。244 はたちあがり短く、内傾する。

245 は高杯蓋である。天井と口縁部を分ける稜は短く、天井部上面に列点文が放射状に施される。246・247 は高杯である。246 は脚端部に段をなし、細くまとまる。247 は無蓋高杯である。2 条の断面三角形の凸帯がめぐり、その間を 7 ~ 8 本の櫛描波状文が施される。

248 は壺蓋である。口縁端部は内方へ折れ曲がり、口縁部は直立する。249 ~ 251、図版 27 - 280 は壺である (図版 27)。249 は短頸壺である。頸部外面に重ね焼きによる溶着があり、そこから肩部にかけて自然釉がかかる。焼成時は蓋を合わせていたと思われる。251 はヘラ切りの後不定方向のナデがされる。252・253 は甕である。252 は頸部に 10 本の櫛描波状文が施され、体部は 2 本の凹線間に櫛状工具による半月状のキザミが連続的に施されている。253 は器壁が薄く、細かな櫛描波状文が施される。280 は二次焼成が認められる体部片である。254 ~ 256・258、図版 27 - 279 は甕である (図版 27)。255 の口縁部は大きく外反し、口縁部下に断面三角形の凸帯がめぐり。256・258 は体部片である。256 は外面は格子タタキ、258 は斜格子タタキが施される。258 はタタキの目が細かく、比較的均一である。257 は装飾付須恵器の装飾部分である。壺か器台に接続した部分であろう。動物を模した小像の胴部分で、下部には T 字に突出した部分があり、その先端も欠損している。右端は短く屈曲し、左端は欠損する。図版 27 - 279 は溶着した甕体部片である。図版 27 - 280 は二次焼成を受けた壺体部片である。230 は 9 世紀前半、231・232 は 8 世紀前半から中葉、233 は 5 世紀中葉、235 ~ 240・242 は 8 世紀末から 9 世紀初頭、243 は 5 世紀末から 6 世紀初頭、244 は 6 世紀後半、245 は 5 世紀前半、248 は 8 世紀末から 9 世紀、249 は 9 世紀前半に相当する。

259 は土師器甕で口縁部は二重口縁状になる。260 ~ 266 は韓式系土器である (図版 27)。260 ~ 264 は甕または鍋の把手である。260 は上面から 2 本の切り込みを入れている。切り込みは基部に近い部分は断面楕円形、先端に近い方は断面三角形である。261 ~ 263 は上面から半月型の切り込みを入れている。261 は先端を上部に折り曲げ、側面はユビオサエで調整する。上面から棒状のもので孔が穿たれ、孔は貫通していない。263 はユビオサエによって調整されるが、仕上げは粗雑である。264 は切り込みが貫通し、側面は基部から先端に向かってナデ調整がされる。265・266 は体部片である。265 は格子タタキ、266 は須恵質で縄文タタキである。

267・268 は製塩土器である。267 は円筒形で、口縁端部は丸くおさまる。胎土は粗く、礫を多く含

む。268は267より大型である。口縁部先端がやや外反する。胎土は粗く、粗砂や細礫が混じる。8世紀後半から9世紀前半に相当する。

269は丸瓦の破片である。凸面はタタキの痕跡が若干残るが、磨耗が著しい。凹面は布目痕が見られる。

270は砥石である。二次焼成を受けている。271は板状鉄斧である。図版27 - 282はガラス質滓である(図版27)。

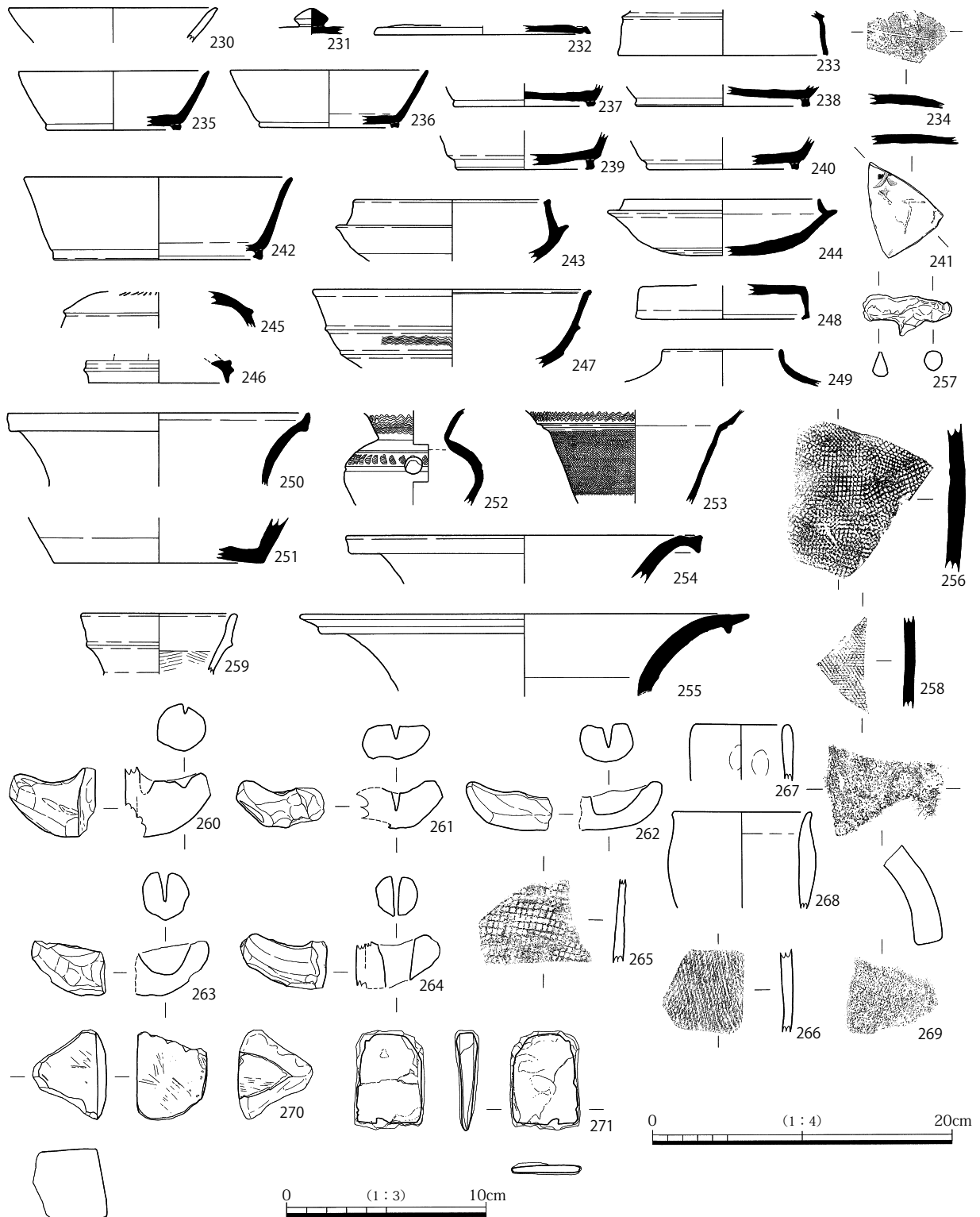


図 78 第 5 - 1 層 出土遺物実測図

第4-2層出土遺物 (図79)

272・273は瓦器である。272は椀、273は皿である。13世紀後半に相当する。274は鉄製品犁先である。袋部を「く」字に鑄出している。

第4節 第1面

第2-1・2層の耕作土を除去して検出した第2-2層下面を第1面として調査した(図80)。第2-1層は18世紀後半、第2-2層は17世紀前半の遺物を含む耕作土である。

調査区全域が水田である。検出した遺構は東西方向の溝1条、南北方向の畦畔2条、水口、耕作に伴う小溝群である。

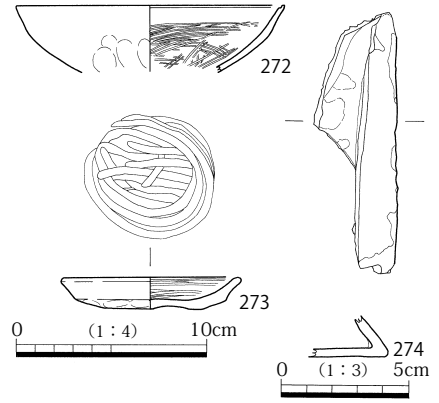


図79 第4-2層 出土遺物実測図

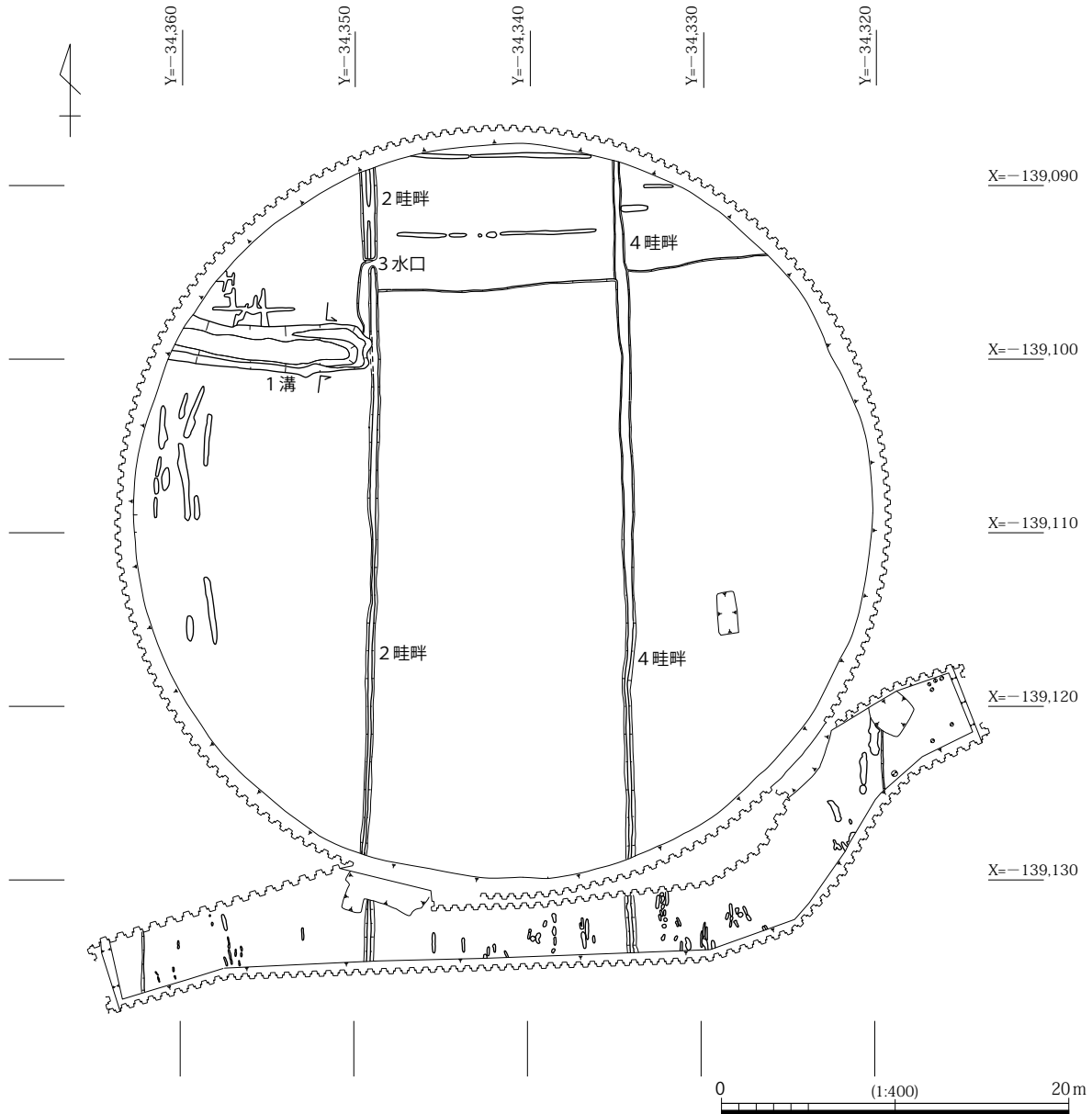
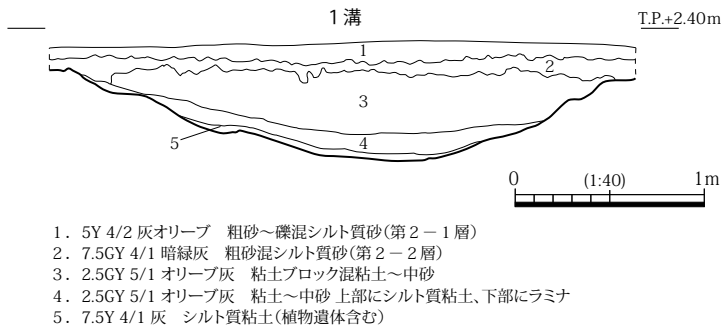


図80 第1面 全体図



1. 5Y 4/2 灰オリーブ 粗砂～礫混シルト質砂(第2-1層)
2. 7.5GY 4/1 暗緑灰 粗砂混シルト質砂(第2-2層)
3. 2.5GY 5/1 オリーブ灰 粘土ブロック混粘土～中砂
4. 2.5GY 5/1 オリーブ灰 粘土～中砂 上部にシルト質粘土、下部にラミナ
5. 7.5Y 4/1 灰 シルト質粘土(植物遺体含む)

図 81 1 溝 断面図

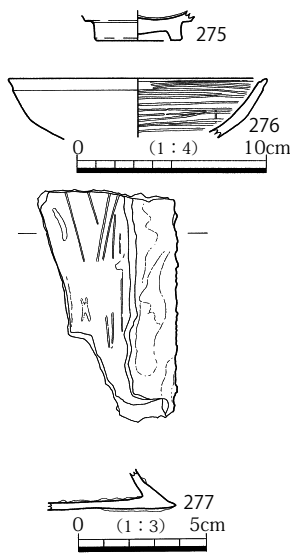


図 82 第2-2層
出土遺物実測図

れも細片のため図示し得なかった。

第2-2層出土遺物(図82)

275は瀬戸美濃天目茶碗である。高台は削り出しによるもので、底部から椀部は角張る。17世紀前半頃に相当する。276は瓦器椀である。口縁端部内面に段をもつ。13世紀前半に相当する。277は、鉄製の犁先である。袋部を「く」字状に鋳出している。

水田畦畔(図80、図版21)

1・2区で南北方向の2条の畦畔、2区では同方向に水田の掘削深度差によって畦畔箇所が段として東西端2箇所検出された。1区北側で東西方向の段が検出された。それぞれの区画幅は、東側段と4畦畔間が14.5m、4畦畔と2畦畔間が14.5m、4畦畔と西側段間が13mである。南北方向の

長地型地割りであったと考えられる。

2畦畔は調査区北側で3水口を検出した。この畦畔は後世も踏襲されたと見られ、畦畔東端に沿って杭の痕跡が残存した。

1 溝(図80・81、図版21)

1区北西部で検出した。この溝は第2-2層下面で検出したが、地層断面観察から第2-2層ではすでに埋没しており、それ以前に掘りこまれた遺構である。

検出した規模は幅2.3～3.0m、深さ0.36～0.47mである。埋土は3層に分けることができた。最終堆積である上層(3・4層)はオリーブ灰色粘土から中砂の水成層である。3層は粘土ブロックの周りを砂が渦巻くように堆積し、4層は中砂の上部にシルト質粘土が薄く堆積する。5層は溝機能時の堆積である灰色シルト質粘土である。

遺物は須恵器杯片2点・甕片5点・高杯片1点、土師器甕片1点・甕等体部片1点・器種不明片8点、韓式系土器片1点の19点が出土したが、い

第5章 自然科学分析

第1節 分析の目的

分析は周辺環境や動・植物質資源の利用の実態を明らかにするために行った。

第4面では各竪穴建物の竈燃焼部に堆積していた焼土・炭層や床面の埋土、炭・焼土や土器が多く出土した土坑・溝の埋土を0.5mmの篩で水洗選別を行った。その結果、竪穴建物3から動物遺存体が、竪穴建物2の竈燃焼部、竪穴建物3・5の床面埋土、54・80・81・87・103・203・257土坑、63溝（図8）から大型植物遺体が出土した。

第2面では栽培作物を明らかにするために、耕作土をサンプリング（図83）し、同じく0.5mmの篩で水洗選別を行った。その結果、各地点から大型植物遺体が出土した。

これらの出土した動物遺存体と大型植物遺体同定分析を実施し、第2・3節に報告する。

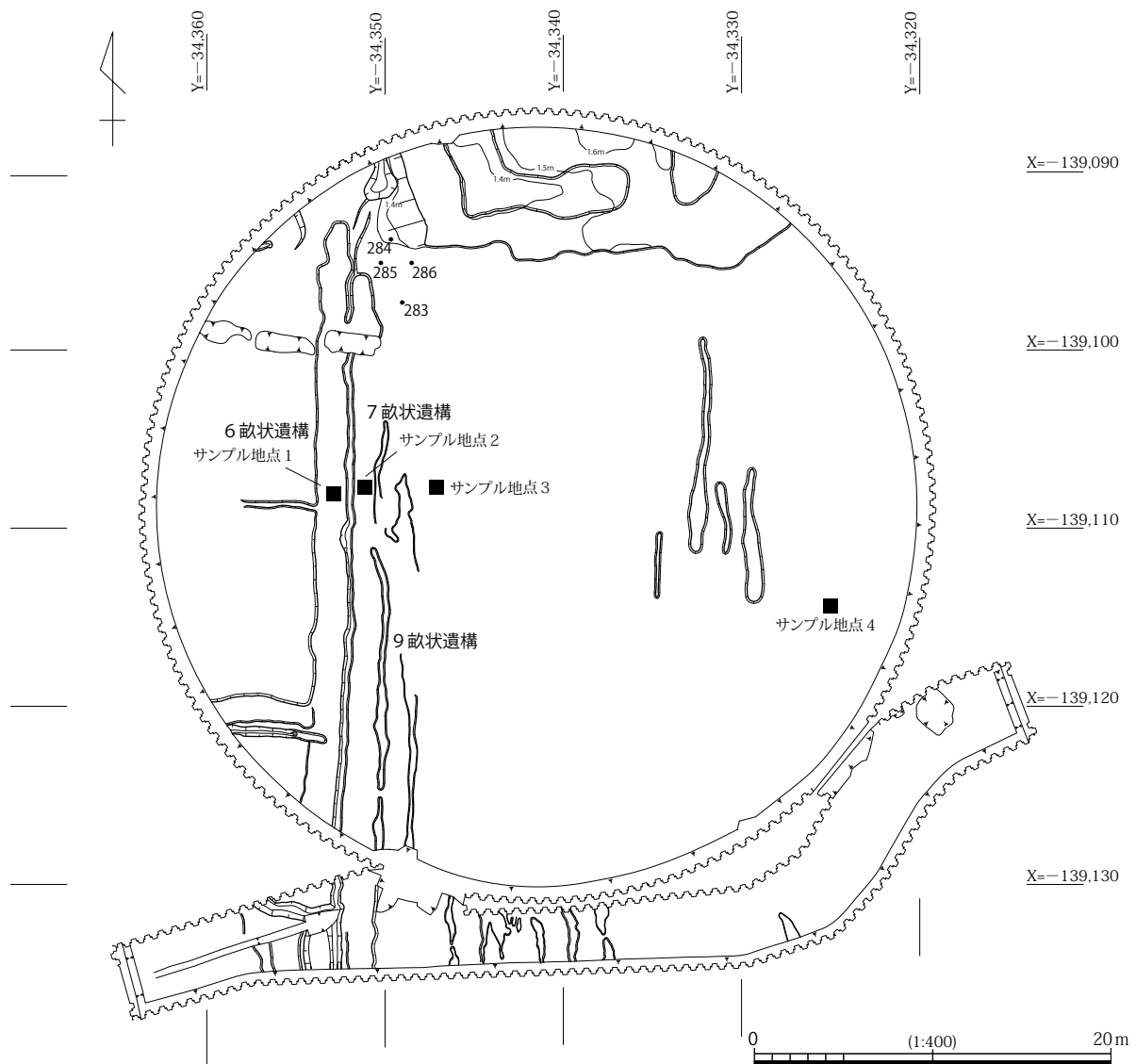


図83 第2面 分析地点図

第2節 讃良郡条里遺跡から出土した動物遺存体

丸山真史（奈良文化財研究所・客員研究員）

はじめに

讃良郡条里遺跡のこれまでの調査では湿地部から古墳時代のカニ類、フグ科、タイ科といった魚類、ウマ、ニホンジカ、イノシシ、イヌ、モグラ属といった哺乳類が出土している（奥村編 2008、森本編 2009、中尾編 2009）。今回の調査では、動物遺存体が破片数にして8点出土しており、古墳時代の魚類遺存体と平安時代の馬歯を同定した（表1）。以下に、それぞれの概要を時代別に記載する。

表1 種名表

脊椎動物門	Vertebrata
硬骨魚綱	Osteichthyes
ナマズ目	Siluriformes
ナマズ科	Siluridae
ナマズ?	<i>Silurus asotus</i> ?
哺乳綱	Mammalia
奇蹄目	Perissodactyla
ウマ科	Equidae
ウマ	<i>Equus caballus</i>

1) 古墳時代の魚類遺存体

1区で検出された5世紀中頃の竪穴建物3にともなう竈から、被熱して白色を呈するものが2点出土している。

1点はナマズ目の鱗棘、もう1点はナマズの基後頭骨と思われるが、いずれも保存状態が良くないため断定するのは困難である。また、同じ竪穴建物の埋土から、被熱して白色を呈するナマズ目の胸鱗棘（左右不明）が1点出土している。これらのほかに、同竪穴建物の床面に堆積した炭層から、種類・部位を特定できない被熱して白色を呈する哺乳類の小片が出土している。

4基の竈や6基の土坑、4条の溝の埋土をフルイにかけて水洗選別を行ったが、動物遺存体が出土したのは竪穴建物3のみである。建物にともなう竈や炉、その周辺の灰溜まりから動物遺存体が出土した例は大阪市長原遺跡などにあり、食料残渣を火中に投棄したものと考えられる（丸山・松井 2008）。竈や炉に投棄された動物骨は被熱して、無機化することで土壤中の微生物による分解を免れるなどの要因で保存状態に恵まれたと考えられる。当遺跡で出土したナマズ目には、ナマズやギギなどの種が含まれる。これまで讃良郡条里遺跡ではフグ科、タイ科といった海水魚が出土しているが、淡水魚の利用が明らかになった。部屋北遺跡では、5世紀中頃～6世紀前半の溝からナマズが数多く出土しており（丸山 2010）、河内湖沿岸でナマズ目の利用が一般的であった可能性を指摘できる。

2) 平安時代の馬歯（写真1）

1区の北部（3K-5j・6j）において、平安時代前期のウマの遊離歯が4点出土している。全身骨格のなかで、最も保存されやすい歯だけが遺存した可能性が高く、歯だけを投棄したとは即断できない。これらの遊離歯はすべて上顎臼歯の歯冠部であり、上顎第2前臼歯（左）が1点、上顎第3前臼歯または第4前臼歯（右）が2点、後臼歯（右）のうちどの部分か判明しなかったものが1点である。上顎第3前臼歯または第4前臼歯（右）の2点は、歯冠高がそれぞれ38.2mm、39.0mmを測る。西中川駿ら（1991）の歯冠高による年齢推定式から、9歳から11歳の牡馬と推定される。

当遺跡が所在する寝屋川市南部の一部から四條畷市、大東市の一部の讃良郡域が古墳時代中期には馬の生産地であったと考えられている（野島 1984）。最近では、当遺跡の南に位置する部屋北遺跡にお

いて5世紀後半の埋葬された馬骨、木製馬具、大量の製塩土器が出土しており、馬飼いの集落として注目されている（安部 2006、大阪府教育委員会編 2010）。当遺跡の他地点では、4世紀末から5世紀初頭の溝や、5世紀後半の流路からウマの歯や骨が出土しており、馬飼いの集落との関連が推測されている（中尾編 2009、丸山 2009）。今回の調査では、古墳時代の集落が廃絶した後、奈良時代から平安時代の集落域の南限となる高まりと、それより南側の耕作地が検出されている。当資料は、その高まりと耕作地の間において散乱状態で出土している。資料は、古墳時代の馬飼いの集落との連続性は見られず、具体的な利用法は定かではないが、祭祀の犠牲、あるいは農耕、駄載などに使役された後に投棄されたものと推測され、さらに死後は皮や肉などが利用されたことも考えられる。

おわりに

今回の調査では、5世紀中頃の竪穴建物にともなう竈から淡水産のナマズ目、ナマズ?が出土した。河内湖沿岸の遺跡では一般的に消費された魚種と考えられ、当遺跡で海水魚と淡水魚の両方が利用されたことを示す資料である。また、平安時代前期の馬歯は壮齢の個体であり、当遺跡で検出された耕作地で農耕に使役されるほか、犠牲や荷駄馬、死後は皮や肉の利用なども予想される。

参考文献

- 安部みき子 2006 「古墳時代中期のウマの形質復元と保存（概要）」『部屋北遺跡発掘調査概要Ⅳ』大阪府教育委員会 pp.5-11
大阪府教育委員会編 2010 『部屋北遺跡Ⅰ』本文編 大阪府教育委員会
奥村茂輝編 2008 『讚良郡条里遺跡Ⅶ』（財）大阪府文化財センター
中尾智之編 2009 『讚良郡条里遺跡Ⅷ』本文編（財）大阪府文化財センター
西中川駿編 1991 『古代遺跡出土骨から見たわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究』平成2年度文部省科学研究費補助金（一般研究B）研究成果報告
野島稔 1984 「河内の馬飼」『万葉集の考古学』森浩一編 筑摩書房 pp.402-408
丸山真史・松井章 2008 「動物遺存体」『長原遺跡発掘調査報告 XVII』（財）大阪市文化財協会 pp.133-136
丸山真史 2009 「動物遺存体の同定・分析」『讚良郡条里遺跡Ⅸ』（財）大阪府文化財センター pp.376-380
丸山真史 2010 「部屋北遺跡出土の魚類遺存体」『部屋北遺跡発掘調査報告書』大阪府教育委員会 pp.325-334
森本徹 2009 『讚良郡条里遺跡Ⅸ』（財）大阪府文化財センター pp.376-380



写真1 平安時代前期の馬歯

第3節 讃良郡条里遺跡（讃良立坑）の大型植物遺体同定

はじめに

今回の分析調査では、讃良郡条里遺跡（讃良立坑）調査区における、平安時代前半および古墳時代中～後期の植生や植物の利用状況に関する情報を得ることを目的として、各時代の遺構等から出土した種実等の大型植物遺体について、大型植物遺体同定分析を実施する。

1 試料

大型植物遺体同定分析試料は、第2面の6畝状遺構サンプル地点1（試料1）、7畝状遺構サンプル地点2（試料2）、サンプル地点3（試料3）、サンプル地点4（試料4）と、第4面の竈穴建物2竈炭層（試料5）、竈穴建物3炭層内（試料6）、竈穴建物3竈付近床直層内（試料7）、竈穴建物5竈付近床直層内（試料8）、54土坑（試料9）、80土坑（試料10）、81土坑（試料11）、87土坑（試料12）、103土坑（試料13）、203土坑（試料14）、257土坑（試料15）、63溝2層（試料16）から水洗別された大型植物遺体16点を対象に実施する（図8・83）。このうち、試料1～4は水生植物主体の種実が数千個確認されたことから、分類群を網羅しながら状態の良好な種実を抽出し同定試料とした。表2に種実分析試料の一覧を示す。

表2 大型植物遺体同定分析試料一覧

分析地点・抽出堆積物量など					試料情報			
検出面	遺構番号・遺構内層位	瓶数	土量(kg)	土量(cm ³)	試料番号	容量(cc)	備考	
第2面	6畝状遺構 サンプル地点1	2	56.7	30600	試料1	-1	25	植物片主体
						-2	4	植物片主体
第2面	7畝状遺構 サンプル地点2	3	52.4	28400	試料2	-1	1	種実多量(ホタルイ属主体)
						-2	10	種実多量(ホタルイ属主体)
						-3	35	種実多量(ホタルイ属主体)
第2面	サンプル地点3	4	47	34520	試料3	-1	1	植物片主体
						-2	20	種実多量(ホタルイ属主体)
						-3	5	植物片主体
						-4	30	種実多量(ホタルイ属主体)
第2面	サンプル地点4	4	59.3	38212	試料4	-2	4	植物片主体
						-3	6	種実多量(ホタルイ属主体)
						-4	5	種実多量(ホタルイ属主体)
						-5	6	種実多量(ホタルイ属主体)
第4面	竈穴建物2 竈炭層	1	2.0		試料5	<0.1	種実多量(ホタルイ属主体)	
第4面	竈穴建物3 炭層	2	40.4	24240	試料6	-1	1	
						-2	<0.1	
第4面	竈穴建物3 竈付近床直層	1	50.9	31712	試料7	<0.1		
第4面	竈穴建物5 竈付近床直層	1	46	37035	試料8	<0.1		
第4面	54土坑	1	29.5	22152	試料9	<0.1		
第4面	80土坑	2	34.2	21450	試料10	-1	<0.1	
						-2	5	
第4面	81土坑	1	31.1	19706	試料11	<0.1		
第4面	87土坑	1	33	23740	試料12	<0.1		
第4面	103土坑	1袋	—	—	試料13	6	乾燥状態(2.1g)	
第4面	203土坑	1	—	—	試料14	<0.1		
第4面	257土坑	1	—	—	試料15	<0.1		
第4面	63溝 2層	2	87.4	58355	試料16	-1	5	
						-2	<0.1	

2 分析方法

試料を粒径別にシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて同定が可能な大型植物遺体を抽出した。抽出された大型植物遺体を双眼実体顕微鏡下で観察し、現生標本および石川（1994）、中山ほか（2000）等の図鑑との対照から種類（分類群）と部位を同定し、個数を数えて表示した。分析後は、大型植物遺体等を種類別に容器に入れ、70%程度のエタノール溶液で液浸保管している。

3 結果

大型植物遺体同定分析結果を表3、大型植物遺体の記載を表4に示す。被子植物28分類群8416個（広葉樹1個、草本27分類群8415個）の種実が同定され、サンプル地点4からは不明種実1個が検出された。

栽培種は、イネの穎53個、胚乳9個、コムギの胚乳73個、ヒエ近似種の穎付着胚乳31個、マメ類の種子24個の計190個が確認され、イネの穎の一部を除いてすべて炭化している。このうち、出土マメ類の大きさの計測値を表5に示す。栽培種を除いた大型植物遺体群集は、第2面の地点では、ほとんどが水生植物からなる（全体の99%）。

以下に、各遺構面の遺構・地点における大型植物遺体の産状について述べる。

(1) 第2面

6畝状遺構サンプル地点1、7畝状遺構サンプル地点2、サンプル地点3、サンプル地点4の大型植物遺体群集は、類似した分類群から構成される。栽培種は、イネの穎が6畝状遺構サンプル地点1から9個、7畝状遺構サンプル地点2から8個、サンプル地点3から21個、サンプル地点4から11個、計49個確認され、1個（サンプル地点3）以外炭化している。栽培種以外は、水生植物12分類群（沈水植物のオオトリゲモートリゲモ、サガミトリゲモ、ホッスモ近似種、ムサシモ、沈水性浮遊植物のゴハリマツモ、沈水性～浮葉性植物のヒルムシロ属、浮葉植物のガガブタ、抽水植物のミズアオイ属、ウキヤガラ、ホタルイ属、抽水性～湿性植物のオモダカ科、イボクサ）8098個（生育形は角野,1994による）、湿生～中生植物7分類群（オヒシバ、イネ科、カヤツリグサ科A、カヤツリグサ科B、カヤツリグサ科、タデ属、セリ科）102個が確認された。7畝状遺構 サンプル地点2 でオモダカ科（1496個）、イボクサ（505個）、サンプル地点4でウキヤガラ（671個）、ホタルイ属（1071個）が多産するほか、6畝状遺構サンプル地点1、7畝状遺構サンプル地点2でガガブタとミズアオイ属が比較的多く確認された。

(2) 第4面

各遺構の大型植物遺体群集は、炭化した栽培種（イネ、コムギ、ヒエ近似種、マメ類）が特徴である。以下に、遺構別出土状況を述べる。

・ 竪穴建物2 竈炭層

栽培種のコムギ、ヒエ近似種が各1個確認された。

・ 竪穴建物3

炭層内からは、栽培種のコムギ4個、マメ類（B：小型）2個と、草本3分類群（ホタルイ属、カヤツリグサ科A、タデ属）4個が確認された。竈付近床直層内からは、落葉高木のアカメガシワが1個確認された。

表3 大型植物遺体同定結果(1)

分類群	部位	状態	1段目:検出面 2段目:遺構・地点名 3・4段目:試料名											
			第2面											
			6畝状遺構 サンプル地点1		7畝状遺構 サンプル地点2			サンプル地点3						
			試料1		試料2			試料3						
			1	2	1	2	3	1	2	3	4			
木本	アカメガシワ	種子	破片											
草本	オモダカ科	種子	完形	452	113	17	464	1015	1	95	152	366		
	オオトリゲモートリゲモ	種子	完形	1	1									
	サガミトリゲモ	種子	完形		1			1						
		破片												
	ホッソモ近似種	種子	完形	3	3		18	6			4			
		破片		3	1		3	6		2	2	2		
	ムサシモ	種子	完形	1			1	2					1	
		破片											3	
	ヒルムシロ属	果実	完形	1	28	39	24	1	8					
		破片		7	6	5	15	3						
	ミズアオイ属	種子	完形	73	47	1	259	177		10	13	20		
	イボクサ	種子	完形	61	10		63	442	1	44	5	37		
	イネ	穎	完形											
			破片									1		
			破片(基部)・炭化		9	1	6					20		
		胚乳	完形・炭化											
	破片・炭化													
	コムギ	胚乳	完形・炭化											
			破片・炭化											
	ヒエ近似種	穎・胚乳	完形・炭化											
		胚乳	完形・炭化											
	オセシバ	種子	完形				1							
	イネ科	果実	完形	2	1						1			
			破片	4			2	9		3		3		
	ミクリ属	果実	完形・炭化											
	ウキヤガラ	果実	完形		1	1	2		6					
			破片			4								
	ホタルイ属	果実	完形	16	142	62	172	33	83	3	62	11		
			破片											
	カヤツリグサ科A	果実	完形		4	2	6	3		1				
破片					1	1								
カヤツリグサ科B	果実	完形												
カヤツリグサ科	果実	完形	2	8		4				1	2			
		破片								1	1			
タデ属	果実	完形				1								
		破片												
ゴハリマツモ	果実	破片		1										
マメ類A	種子	完形・炭化												
		破片・炭化												
マメ類B	種子	完形・炭化												
		破片・炭化												
セリ科	果実	完形												
ガガブタ	種子	完形	34	297	6	271	7	13		107	1			
		破片	16	87	6	152	10	1		63	8			
イスコウジュ属	果実	完形												
キク科	果実	完形												
不明種実		完形												

表4 大型植物遺体同定結果 (2)

分類群		部位	状態	1段目:検出面 2段目:遺構・地点名 3・4段目:試料名									
				第2面 5-1層上面				第4面 5-2層下面					
				サンプル地点4				竪穴建物2 竪炭層	竪穴建物3 炭層内		竪穴建物3 竪付近 床直層内	竪穴建物5 竪付近 床直層内	
				試料4				試料5	試料6		試料7	試料8	
				2	3	4	5		1	2			
木本	アカメガシワ	種子	破片									1	
草本	オモダカ科	種子	完形	56	43	64	31						
	オオトリゲモートリゲモ	種子	完形										
	サガミトリゲモ	種子	完形										
			破片			1							
	ホッスモ近似種	種子	完形										
			破片		1								
	ムサンモ	種子	完形	1									
			破片										
	ヒルムシロ属	果実	完形		45		1						
			破片	1	1								
	ミズアオイ属	種子	完形	17		18	2						
	イボクサ	種子	完形	4	1	6	5						
	イネ	穎	完形										
			破片										
			破片(基部)・炭化	4	3	3	1						
			破片・炭化										
	胚乳	完形・炭化											
		破片・炭化											
	コムギ	胚乳	完形・炭化						1		3		
			破片・炭化							1			
	ヒコ近似種	穎・胚乳	完形・炭化										
		胚乳	完形・炭化						1				
	オセシバ	種子	完形										
	イネ科	果実	完形										
			破片										
	ミクリ属	果実	完形・炭化										
	ウキヤガラ	果実	完形	44	305	146	176						1
			破片										
	ホタルイ属	果実	完形	151	500	180	240		1				1
			破片						1				
	カヤツリグサ科A	果実	完形	2	7	18	7		1				
			破片										
カヤツリグサ科B	果実	完形			1	1							
カヤツリグサ科	果実	完形											
		破片											
タデ属	果実	完形				1							
		破片						1					
ゴハリマツモ	果実	破片	1	1									
マメ類A	種子	完形・炭化											
		破片・炭化											
マメ類B	種子	完形・炭化							1				
		破片・炭化						1					
セリ科	果実	完形			1								
ガガブタ	種子	完形	28	46	49	18							
		破片	15	22	31	9							
イスコウジュ属	果実	完形											
キク科	果実	完形											
不明種実		完形	1										

表5 大型植物遺体同定結果(3)

分類群		部位	状態	1段目:検出面 2段目:遺構・地点名 3・4段目:試料名								
				第4面								
				54土坑	80土坑		81土坑	87土坑	103土坑	203土坑	257土坑	63溝 2層
				試料9	試料10		試料11	試料12	試料13	試料14	試料15	試料16
		1 2								1・2		
木本	アカメガシワ	種子	破片									
草本	オモダカ科	種子	完形									
	オオトリゲモートリゲモ	種子	完形									
	サガミトリゲモ	種子	完形									
			破片									
	ホッスモ近似種	種子	完形									
			破片									
	ムサシモ	種子	完形									
			破片									
	ヒルムシロ属	果実	完形									
			破片									
	ミズアオイ属	種子	完形									
	イボクサ	種子	完形									
	イネ	穎	完形									1
			破片	1								1
			破片(基部)・炭化									
		破片・炭化									1	
		胚乳	完形・炭化				6					
	破片・炭化			1		1					1	
	コムギ	胚乳	完形・炭化	2		1	5		18	1	10	
			破片・炭化		6				8		17	
	ヒエ近似種	穎・胚乳	完形・炭化	1	1							
		胚乳	完形・炭化	9	19							
	オヒシバ	種子	完形									
	イネ科	果実	完形								1	
			破片									
	ミクリ属	果実	完形・炭化	1								
	ウキヤガラ	果実	完形		1							
			破片									
	ホタルイ属	果実	完形		4		1				4	
			破片			1						
	カヤツリグサ科A	果実	完形									
			破片									
カヤツリグサ科B	果実	完形										
カヤツリグサ科	果実	完形	1	2								
		破片										
タデ属	果実	完形										
		破片										
ゴハリマツモ	果実	破片										
マメ類A	種子	完形・炭化					9					
		破片・炭化					13					
マメ類B	種子	完形・炭化										
		破片・炭化										
セリ科	果実	完形										
ガガブタ	種子	完形										
イヌコウジュ属	果実	完形								1		
		破片										
キク科	果実	完形								1		
不明種実		完形										

表6 大型植物遺体の形態学的特徴

<p><木本></p> <ul style="list-style-type: none"> ・アカマガシワ(<i>Mallotus japonicus</i> (Thunb.) Muell. Arg.) トウダイグサ科アカマガシワ属 <p>種子は灰黒褐色、径3.5mm程度の歪な球体。基部のY字形の鈍稜に沿って割れた破片の大きさは3mm程度。種皮は硬く、表面には瘤状突起が密布する。断面は柵状組織が内側に湾曲する。</p> 	
<p><草本></p> <ul style="list-style-type: none"> ・オモダカ科(<i>Alismataceae</i>) <p>種子は淡-黒褐色、長さ1.3-1.5mm、幅0.8mm程度の倒U字状に曲がった円柱状で偏平。種皮は薄く膜状で柔らかい。表面には縦長の微細な網目模様が配列する。</p> ・オオトリゲモ-トリゲモ(<i>Najas oguraensis</i> Miki - <i>Najas minor</i> All.) イバラモ科イバラモ属 <p>種子は灰褐色、長さ3.2mm、径0.7mm程度の針状長楕円体。両端は細く尖る。種皮は薄く透き通り、表面には横長の網目模様が縦列する。</p> ・サガミトリゲモ(<i>Najas foveolata</i> A.Br.) イバラモ科イバラモ属 <p>種子は淡灰褐色、長さ2.2mm、径0.5mm程度の針状長楕円体。両端は細く尖る。種皮は薄く透き通り、表面には四角形の粗く大きな網目模様が縦列する。</p> ・ホッソモ近似種(<i>Najas</i> cf. <i>graminea</i> Del.) イバラモ科イバラモ属 <p>種子は淡-灰褐色、長さ1.9-2.2mm、径0.5mm程度の針状長楕円体。両端は細く尖る。種皮は薄く透き通り、表面にはやや縦長の粒状網目模様が縦列する。</p> ・ムサシモ(<i>Najas ancistrocarpa</i> A. Br.) イバラモ科イバラモ属 <p>種子は淡灰褐色、長さ2mm、幅0.5mm程度の三日月状に湾曲する針状長楕円体。両端は細く尖る。種皮は薄く透き通り、表面には四角形の粗く大きな網目模様が縦列する。背面にはT字状の薄い突起が縦列する。</p> ・ヒルムシロ属(<i>Potamogeton</i>) ヒルムシロ科 <p>果実は淡-灰褐色、長さ2-3mm、幅1.5-2mm、厚さ1.0mm程度のやや偏平な非対称卵形で、頂部に長さ0.8mm程度の嚙状の花柱基部がある。側面の正中線上に深い縦溝と稜があり、基部に1個の刺状突起がある。果皮は海綿状で表面は粗面。</p> ・ミズアオイ属(<i>Monochoria</i>) ミズアオイ科 <p>種子は淡-灰褐色、長さ1.0-1.2mm、径0.6mm程度の楕円体。種皮は薄く透き通り柔らかい。表面には10本程度の太い縦隆条と、その間に細い横隆条が密に配列する。</p> ・イボクサ(<i>Murdannia keisak</i> (Hassk.) Hand.-Mazz.) ツルクサ科イボクサ属 <p>種子は淡-灰褐色、長さ1.0mm、径1.5mm程度の歪な半長楕円体。背面は丸みがあり、腹面は平ら。臍は線形で腹面の正中線上にあり、胚は一側面の浅い円形の凹みに存在する。種皮は柔らかく、表面は円形の微小孔が散在する。</p> ・イネ(<i>Oryza sativa</i> L.) イネ科イネ属 <p>穎(果)は淡-灰褐色、胚乳と一部の穎は炭化しており黒色、やや偏平な長楕円体。胚乳は長さ4.5mm、幅2.8mm、厚さ1.5mm程度。基部一端に胚が脱落した斜切形の凹部がある。表面はやや平滑で、2-3本の隆条が縦列する。胚乳を包む穎(果)は、長さ6.5-7.5mm、幅3-3.5mm、厚さ2mm程度。基部に斜切状円柱形の果実序柄と1対の護穎を有し、その上に外穎(護穎と言う場合もある)と内穎がある。外穎は5脈、内穎は3脈をもち、ともに舟形を呈し、縫合してやや偏平な長楕円形の稲穂を構成する。果皮は柔らかく、表面には顆粒状突起が縦列する。</p> ・コムギ(<i>Triticum aestivum</i> L.) イネ科コムギ属 <p>胚乳は炭化しており黒色、長さ3.5-4.3mm、径2.5-2.9mm程度の楕円体。腹面は正中線上にやや太く深い縦溝があり、背面は基部正中線上に胚の痕跡があり丸く窪む。表面はやや平滑で、微細な縦筋がある。</p> ・ヒエ近似種(<i>Echinochloa</i> cf. <i>utilis</i> Ohwi et Yabuno) イネ科ヒエ属 <p>穎・胚乳は炭化しており黒色。穎(果)が付着した胚乳は長さ1.5mm、幅1.3mm、厚さ0.8mm程度の狭卵-半偏球体で、背面は丸みがあり腹面はやや平ら。基部正中線上に、胚乳の長さ1.0mm、最大幅0.7mm程度の馬蹄形の胚の凹みがある。胚乳表面は粗面で、穎の破片が付着する個体がある。穎は薄く、表面は平滑で光沢があり、微細な縦長の網目模様が縦列する。</p> ・オヒシバ(<i>Eleusine indica</i> (L.) Gaertn.) イネ科オヒシバ属 <p>種子は灰黒褐色、長さ1.2mm、径0.7mm程度の三稜状狭倒卵体。種皮は薄く、表面には20数個の細い隆条が基部の臍から放射状に配列する。</p> ・イネ科(<i>Gramineae</i>) <p>果実は淡-灰褐色、長さ2.1-3.7mm、径1.0-1.5mm程度の半狭卵体。背面は丸みがあり腹面は偏平。果皮表面は平滑で微細な縦長の網目模様が縦列する。</p> ・ミクリ属(<i>Sparganium</i>) ミクリ科 <p>果実は炭化しており黒色、長さ5.9mm、径4.8mm程度の広倒卵体。頂部はやや伸び、基部は切形。果皮表面には数本の縦隆条が配列する。</p> ・ウキヤガラ(<i>Scirpus fluviatilis</i> (Torr.) A. Grey) カヤツリグサ科ホタルイ属 <p>果実は灰黒褐色、長さ3.0mm、径1.8mm程度の三稜状狭倒卵体。頂部の柱頭部分はやや伸びて切形。断面は三角形。基部は切形で、灰褐色、果実とほぼ同長で下向きの逆刺をもつ刺針状花被片が伸びる個体がみられる。果皮はやや厚く表面は粗面。</p> ・ホタルイ属(<i>Scirpus</i>) カヤツリグサ科 <p>果実は黒褐色、長さ2-2.5mm、径1.8-2.2mm程度の片凸レンズ状倒卵体。頂部は尖り、基部は切形で刺針状の花被片が伸びる個体がみられる。背面正中線上は鈍稜。果皮表面は光沢があり、不規則な波状横皺状模様が発達する。</p> ・カヤツリグサ科A(<i>Cyperaceae</i> A) <p>果実は灰褐色、長さ2.0mm、径1.6mm程度のレンズ状倒卵体。頂部は切形で柱頭は尖る。基部は切形で淡灰褐色の花被片が伸びる個体がみられる。果皮表面は粗面。</p> ・カヤツリグサ科B(<i>Cyperaceae</i> B) <p>果実は灰-黒褐色、長さ1.2mm、径0.7mm程度の三稜状狭倒卵体。頂部は尖り、基部は切形。果皮表面は平滑。</p> ・カヤツリグサ科(<i>Cyperaceae</i>) <p>上記カヤツリグサ科以外の形態上差異のある複数種を一括している。果実は灰黒褐色、長さ1.8mm、径1.2mm程度のレンズ状倒卵体。背面正中線上は鈍稜。頂部の柱頭部分はやや伸び、基部は切形で刺針状の花被片が伸びる個体がみられる。果皮表面は平滑。</p> ・タデ属(<i>Polygonum</i>) タデ科 <p>果実は黒色、長さ3.0mm、径2.0mm程度のレンズ状広卵体。頂部は尖り、基部は切形で萼が残る個体もみられる。果皮表面は粗面。</p> ・ゴハリマツモ(<i>Ceratophyllum demersum</i> L. var. <i>quadrispinum</i> Makino) マツモ科マツモ属 <p>果実は灰褐色、長さ3.8-4.0mm、径2.3mm、厚さ1.5mm程度のやや偏平な長楕円体。破片は縦半分を割れ、果実頂部に1本、上下に各2本、計5本伸びる長さ2-3mm程度の細長い針状突起を欠損する。果皮表面は粗面。</p> ・マメ類(<i>Leguminosae</i>) マメ科 <p>形態上差異のある2型をA、Bと区別し、状態が良好な種子の計測値を表5に示した。種子は炭化しており黒色、やや偏平な長楕円体。種皮は薄く表面はやや平滑だが、焼け膨れており、状態が悪い。103土坑から確認されたAは、最大で長さ6.64mm、幅4.92mm、厚さ3.42mm、最小で長さ5.54mm、幅4.15mm、厚さ2.86mm。腹面の子葉の合わせ目上に長さ2.4mm、幅0.5mm程度の長楕円形で縁が隆起する臍が1個確認される。堅穴建物3の炭層内から確認されたBは、長さ3.26mm、幅2.37mm、厚さ1.74mm。</p> ・セリ科(<i>Umbelliferae</i>) <p>果実は淡灰褐色、長さ1.5mm、幅0.8mm程度のやや偏平な楕円体。背面は丸みを帯び、腹面は平ら。腹面と背面には数本の幅広い稜があり、その間に半透明で茶褐色の油管が配列する。</p> ・ガガブタ(<i>Nymphoides indica</i> (L.) O. Kuntze) ミツガシワ科アサザ属 <p>種子は黄褐色、径0.7-1.0mm、厚さ0.5mm程度のやや歪なレンズ状楕円体。基部はやや切形で臍がある。臍は暗褐色、線形で腹面の長さの約2/3を占める。種皮はやや厚く断面は柵状。表面は平滑で光沢があり、内奥まで通る微細な粒状網目模様がある。</p> ・イヌコウジュ属(<i>Mosla</i>) シン科 <p>果実は淡灰褐色、径1.3mm程度の倒広卵体。基部には臍点があり、舌状にわずかに突出する。果皮はやや厚く硬く、表面には大きく不規則な網目模様がある。</p> ・キク科(<i>Compositae</i>) <p>果実は淡褐色、長さ2.8mm、径0.7mm程度の広線状円柱体。両端は切形で頂部に円形の臍がある。果皮表面には数個の縦隆条が配列し、毛が密生する。</p> ・不明種実(Unknown) <p>灰黒褐色、長さ4.7mm、幅2.2mm、厚さ1.7mm程度のやや偏平な非対称狭倒卵体。表面は海綿状で微細な網目模様がある。2箇所に外面黒色、厚さ0.2mm程度で断面柵状の組織が付着し、果皮と思われる。</p> 	

表7 マメ類種子の計測値

試料番号	検出面	遺構番号・遺構内層序	計測値(mm)				備考
			長さ	幅	厚さ	臍の長さ	
試料13	第4面	103土坑	6.64	4.92	3.42	2.4	焼き膨れ:厚さは膨れが少ない中央付近を計測
			6.38	4.58	4.27	-	
			5.54	4.15	2.86		焼き膨れ
			6.49	4.45	3.54		
			5.97	4.41	3.27		
試料6	第4面	竪穴建物3炭層内	3.26	2.37	1.74		

- 竪穴建物 5 竈付近床直層内
抽水植物のウキヤガラ、ホタルイ属が各 1 個確認された。
- 54 土坑
炭化した抽水植物のミクリ属が 1 個確認された。
- 80 土坑
栽培種のイネの穎 1 個、胚乳 1 個、コムギ 8 個、ヒエ近似種 30 個と、草本 3 分類群（ウキヤガラ、ホタルイ属、カヤツリグサ科）9 個が確認された。
- 81 土坑
栽培種のコムギ 1 個、抽水植物のホタルイ属 1 個が確認された。
- 87 土坑
栽培種のイネの胚乳 7 個、コムギ 5 個が確認された。
- 103 土坑
栽培種のマメ類（A：大型）が 22 個確認された。
- 203 土坑
栽培種のコムギが 26 個確認された。
- 257 土坑
栽培種のコムギが 1 個確認された。
- 63 溝 2 層
栽培種のイネ穎 3 個（1 個炭化）、胚乳 1 個、コムギ 27 個と、草本 4 分類群（ホタルイ属、イネ科、イヌコウジュ属、キク科）7 個が確認された。

4 考察

各遺構面・遺構別の大型植物遺体の産状を表 6 に示す。以下に各時代別の大型植物遺体からみた植生および調査地点の古環境に関する検討を行う。

(1) 古墳時代中期から後期（第 4 面：第 5 - 2 層下面）

オーリーブ灰色極細砂～中砂混じりシルト質砂の第 5 - 2 層を除去して検出した第 4 面では、第 5 - 2 層段階の溝状の耕作痕と共に第 6 層形成期に構築された、古墳時代中～後期の竪穴建物、溝、土坑などの多くの遺構が検出されている。これらの遺構埋土から出土した大型植物遺体には、栽培種のイ

表8 遺構・地点別の大型植物遺体の産状

分類群	部位	1段目:検出面 2段目:年代 3段目:遺構・地点名											
		第2面					第4面						
		平安時代前半		5世紀 第3四半期	5世紀 第2四半期	5世紀 第3四半期	5世紀 中葉	5世紀 第3四半期	5世紀 第3四半期	5世紀 後半	5世紀代	5世紀 第3四半期	5世紀末～ 6世紀前半
6畝状遺構 カンパル 地点1	7畝状遺構 カンパル 地点2	カンパル 地点3	カンパル 地点4	5世紀 第3四半期 竪穴建物2 竪穴層	5世紀 第3四半期 竪穴建物3 竪穴層内	5世紀 第3四半期 竪穴建物5 竪穴層内	5世紀 中葉 土坑	5世紀 第3四半期 土坑	5世紀 第3四半期 土坑	5世紀 第3四半期 土坑	5世紀 第3四半期 土坑	5世紀 第3四半期 土坑	
木本													
落葉高木	アカメガンソウ	種子											
草本													
栽培種													
イネ	炭化類	9	8	1	11								
	炭化胚乳			20									
	炭化胚乳												
	炭化胚乳												
	炭化類・胚乳												
	炭化胚乳												
	炭化胚乳												
	炭化種子												
	炭化種子												
水生植物													
沈水植物													
オオトリゲモ	トリゲモ	2											
サガミドリガモ	種子	1											
ホツサモ	種子	10											
ムサシモ	種子	1											
沈水性浮遊植物													
コハリアマツモ	果実	1											
沈水性～浮葉性植物													
ヒルムシロ属	果実	42											
浮葉植物													
ガガブタ	種子	434											
抽水植物													
ミズアオイ属	種子	120											
ミドリ属	果実	1											
ウキヤガラ	果実	158											
ホタルイ属	果実	565											
抽水性～湿性植物													
オモダカ科	種子	71											
イボクサ	種子												
湿性～中生植物													
オヒシバ	種子												
イネ科	果実	7											
カヤツリグサ科A	果実	4											
カヤツリグサ科B	果実	10											
タデ属	果実												
セリ科	果実												
イヌコウジュ属	果実												
キク科	果実												
不明種実													

注)水生植物の生育形は角野(1994)による

ネ、コムギ、ヒエ近似種、マメ類などの炭化種実が認められた。

イネは、80 土坑、63 溝中層から穎が 4 個、80 土坑、87 土坑、63 溝 2 層から胚乳が 9 個確認された。コムギは最も多く（73 個）、63 溝 2 層（27 個）、203 土坑（26 個）をはじめ、竪穴建物 2 竈炭層、竪穴建物 3 炭層内、80 土坑、81 土坑、87 土坑、257 土坑から確認された。ヒエ近似種は、80 土坑、竪穴建物 2 竈炭層から 31 個確認された。マメ類は、竪穴建物 3 炭層内、103 土坑から 24 個確認された。

これらの穀類が当期に栽培・利用されていたことが推定される。竪穴式建物の竈近辺から出土した穀類は食用として利用したものの残滓に由来する可能性がある。一方、土坑から出土した穀類は、遺物の出土状況を考慮すると、土器などともに廃棄された生活残滓に由来すると判断される。なお、今回同定されたマメ類は、103 土坑の大型種子（22 個）と、竪穴建物 3 炭層内の小型種子（2 個）の形態が異なることから、当時は少なくとも 2 種以上のマメ類が利用されていたことが推定される。

讚良郡条里遺跡では、今回の調査区に隣接する 03-6 調査区において、古墳時代中期～後期の放棄流路堆積物から、コムギ・イネなどの栽培種の炭化種実が確認されており（奥村編,2008）、03-1 調査地では弥生時代末～古墳時代初頭の 205 井戸と建物 5 内 254 炉から、イネ、マメ類のほか、モモ、メロン類、ヒョウタン類などの栽培種の種実が確認されている（パリノ・サーヴェイ株式会社,2008）。また、本遺跡の南側に隣接する葺屋北遺跡でも、古墳時代中期～後期（5 世紀後半～6 世紀前半）の溝 11 から、多量のコムギをはじめ、イネ、マメ類のほか、アサ、エゴマ、メロン類、トウガン、ヒョウタン類、スモモ、モモなどの栽培種の種実が確認されている（パリノ・サーヴェイ株式会社,2006）。これらのことから、本地域では、古墳時代以降に多様な栽培植物が栽培・利用されていたことがうかがえる。また、コムギの利用が確認されるのは古墳時代中期～後期であり、それ以前には存在しないことから、当期に何らかの変化が起こっている可能性がある。この点については発掘調査成果を踏まえた複合的評価が必要と考える。

栽培種を除いた分類群をみると、木本種実は、竪穴建物 3 の竈付近床直層内からアカメガシワが 1 個のみ確認された。アカメガシワは、森林の林縁部などの比較的明るい林地を好み、伐採地や崩壊地などに先駆的に侵入する落葉広葉樹であることから、調査区近辺に生育していたものに由来すると考えられる。草本種実では、抽水植物のミクリ属や、ウキヤガラ、ホタルイ属、湿生～中生植物のイネ科、カヤツリグサ科、タデ属、セリ科、キク科などの人里植物に属する分類群が確認された。これらは調査区周辺域の水湿地を含む明るく開けた草地環境に生育していたものに由来すると考えられる。

（2）平安時代前半（第 2 面：第 5－1 層上面）

第 5－1 層は、中世の氾濫堆積物である第 4－2 層に覆われている、人為的に擾乱されたオリーブ黒色極粗砂から粗砂の混じる砂質シルトからなり、土壤発達する時期を挟在する後背湿地の堆積環境が推定される。

第 2 面から検出された 6 畝状遺構サンプル地点 1、7 畝状遺構サンプル地点 2、サンプル地点 3、サンプル地点 4 における大型植物遺体群集をみると、栽培種は、イネの穎が 49 個確認された。これらは当時の植物質食糧として利用されていた可能性がある。栽培種を除いた分類群は、木本種実の確認されず、すべて草本のみの種類構成を示すことから、調査区周辺域は明るく開けた草地環境で、人為的攪乱の影響が強かったことが考えられる。特に、水生植物が全体（8250 個）の 98%（8098

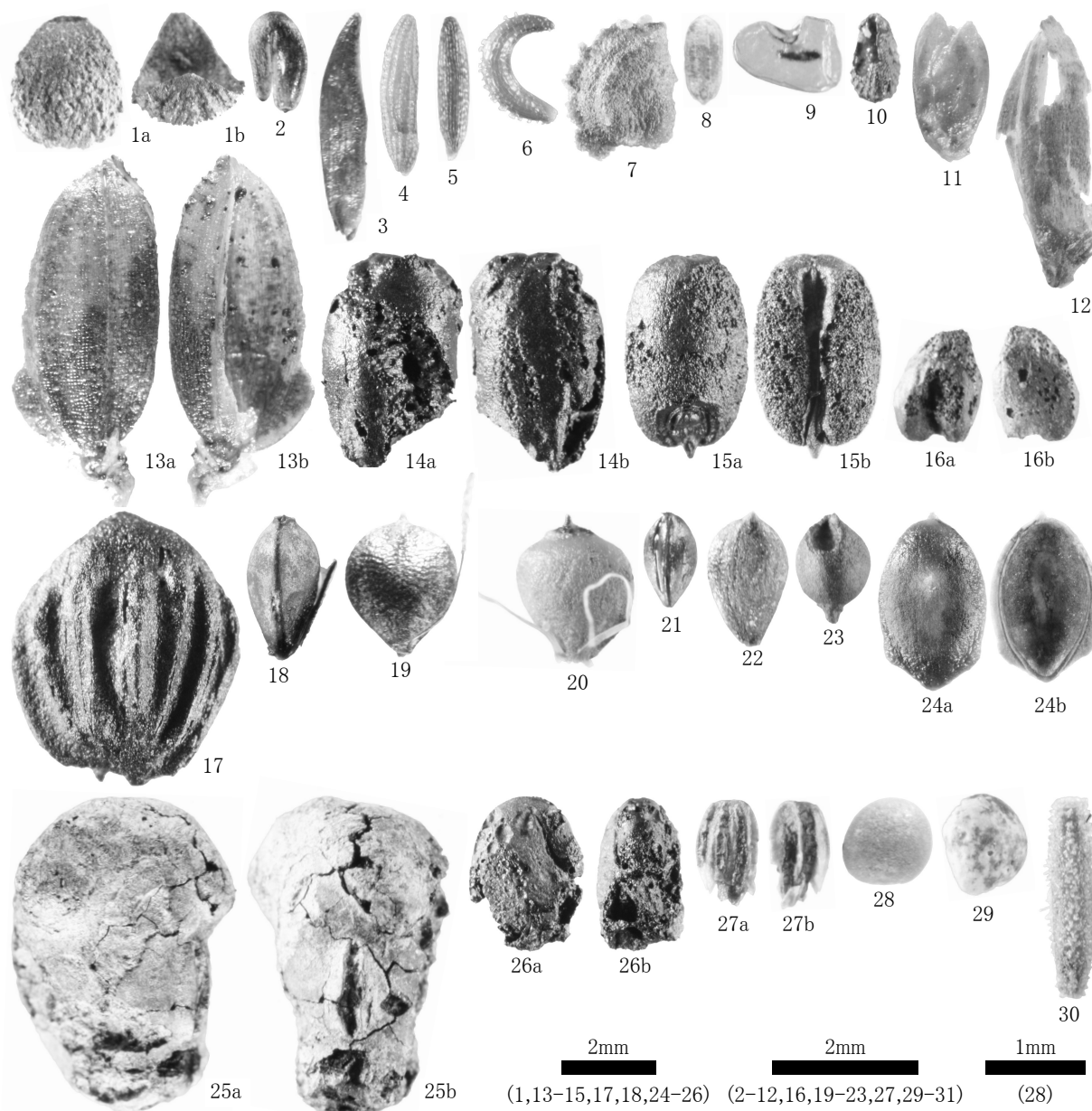
個)を占める。水生植物は、沈水植物のオオトリゲモ・トリゲモ、サガミトリゲモ、ホッスモ近似種、ムサシモ、沈水性浮遊植物のゴハリマツモ、沈水性～浮葉性植物のヒルムシロ属、浮葉植物のガガブタ、抽水植物のミズアオイ属、ウキヤガラ、ホタルイ属、抽水性～湿性植物のオモダカ科、イボクサが確認された。ムサシモ・ゴハリマツモは、現在極めて稀な種である。その他に、湿生～中生植物のオヒシバ・イネ科・カヤツリグサ科・タデ属・セリ科が確認された。

これらの水生植物主体の大型植物遺体群集から推定される第5-1層の堆積環境は、水深のある池沼のような水域である。ただし、上記したように層相からみた調査地点の堆積環境は、人為的擾乱が及ぶ後背湿地であり、多少異なる。第5-1層が比較的安定した堆積環境下で形成された堆積物であることを考慮すると、大型植物遺体群集より推定される堆積環境は人為的擾乱が及ぶ以前の第5-1層形成期の堆積環境を反映している可能性が考えられる。また、7畝状遺構サンプル地点2では抽水性～湿性植物のオモダカ科とイボクサが、サンプル地点4では抽水植物のウキヤガラとホタルイ属が多産し、6畝状遺構サンプル地点1、7畝状遺構サンプル地点2では浮葉植物のガガブタと抽水植物のミズアオイ属が比較的多く確認された。このような地点による多産種の差異は、人為的擾乱が及ぶ以前の水域環境の違いを反映している可能性もあるため、今後調査地点の微地形を踏まえた評価が必要である。

今回確認された第5-1層中の大型植物遺体群集は、本調査区に隣接する部屋北遺跡でも確認されている(パリノ・サーヴェイ株式会社,2006)。その結果をみると、古代～中世までの耕作土の大型植物遺体群集は、木本類が極めて少なく、水生植物や湿生草本主体の群集組成を示している。これは今回の結果と調和的であり、本遺跡近辺には類似する景観が広がっていた可能性がある。

引用文献

- 石川 茂雄 1994『原色日本植物種子写真図鑑』石川茂雄図鑑刊行委員会 328p.
- 角野 康郎 1994『日本水草図鑑』文一総合出版 178p.
- 中山 至大・井之口希秀・南谷 忠志 2000『日本植物種子図鑑』東北大学出版会 642p.
- 奥村 茂輝編 2008『讃良郡条里遺跡VII』(財)大阪府文化財センター 166p.
- パリノ・サーヴェイ株式会社 2006「部屋北遺跡発掘調査に伴う大型植物遺体分析」『部屋北遺跡発掘調査概要・IV-自然科学編』大阪府教育委員会 101-130p.
- パリノ・サーヴェイ株式会社 2008「種実同定」『讃良郡条里遺跡VI』(財)大阪府文化財センター 208-215p.



- | | |
|------------------------|----------------------|
| 1. アカマガシワ 種子(試料7) | 2. オモダカ科 種子(試料2) |
| 3. オオトリゲモートリゲモ 種子(試料1) | 4. サガミトリゲモ 種子(試料1) |
| 5. ホッサモ近似種 種子(試料2) | 6. ムサシモ 種子(試料3) |
| 7. ヒルムシロ属 果実(試料3) | 8. ミズアオイ属 種子(試料2) |
| 9. イボクサ 種子(試料2) | 10. オヒシバ 種子(試料2) |
| 11. イネ科 果実(試料1) | 12. イネ科 果実(試料1) |
| 13. イネ 穎(試料16) | 14. イネ 胚乳(試料12) |
| 15. コムギ 胚乳(試料14) | 16. ヒエ近似種 穎・胚乳(試料10) |
| 17. ミクリ属 果実(試料9) | 18. ウキヤガラ 果実(試料8) |
| 19. ホタルイ属 果実(試料4) | 20. カヤツリグサ科A 果実(試料4) |
| 21. カヤツリグサ科B 果実(試料4) | 22. カヤツリグサ科 果実(試料1) |
| 23. タデ属 果実(試料4) | 24. ゴハリマツモ 果実(試料4) |
| 25. マメ類A 種子(試料13) | 26. マメ類B 種子(試料6) |
| 27. セリ科 果実(試料4) | 28. ガガブタ 種子(試料2) |
| 29. イヌコウジュ属 果実(試料16) | 30. キク科 果実(試料16) |
| 31. 不明種実(試料4) | |

写真2 大型植物遺体

第6章 総括

今回の調査では古墳時代から近世までの4面の遺構面(図8・71・72・80)を検出し、各時代の土地利用の変遷を追うことができた。第4面は、5世紀中葉から6世紀後半にかけての竪穴建物5棟、掘立柱建物5棟、井戸1基、調査区を横断する溝や多数の土坑からなる集落を検出した(図84)。そして集落廃絶後、8世紀後半の掘立柱建物2棟を調査区北側で検出した。8世紀末から9世紀後半の第3面から第2面は調査区北側に高まりがつくられ、それより南は条里制地割に則った耕作地となる。この北側の高まりは第二京阪道路建設に伴う発掘調査の03-6、06-3調査区から続く8世紀前半から9世紀後半に掘立柱建物を中心とした集落の南限となることが明らかになった(図85)。中世には湿地のような景観が広がり、近世初頭には再び水田開発が行われ、全域が水田化されることが確認できた。

ここでは調査の大きな成果である第4面の古墳時代中期の集落について、北側に隣接する讃良郡条里遺跡03-6、06-3調査区、南東の葎屋北遺跡での調査成果と合わせて見ていきたい(図84・86)。

今回の調査地点と讃良郡条里遺跡03-6・06-3調査区との地形を見ると、第5-2層の耕作土による削平を受けてはいるが、北東側は第6層が残存しており、第7層上面の高さが地形復元の手がかりになると考えられる。調査地は南から北東側へ徐々に高くなり、北東端でT.P. + 1.3 mである。03-6・06-3調査区ではT.P. + 1.4 mとさらに高くなる。03-6調査区北側で検出された落ち込みは、今回の調査地までは広がらないことがわかった。しかし調査地の中でも北西側は遺構が少なく、北西端に向かって低くなることから、落ち込みに向かって下がっていくものと見られる。

各遺構の時期は、最も古い段階が5世紀第2四半期に廃絶する60・61溝である。その後、南側の竪穴建物3が廃絶する。平行する60・61溝は溝間は路として利用されていたと考えられる。1または2箇所途切れる箇所があり、これは南北両側への入り口であろう。この通路がどこへ通じていたかは、溝が落ち込みの西側縁に沿うように東西方向から北西方向に向きを変えていることから、この西側縁に向かい、落ち込みを挟んだ西側への路であると考えられる。

竪穴建物3は床面積が44.4 m²で今回検出した竪穴建物の中で最も規模の大きなものである。最も規模の小さい竪穴建物4との床面積差は4倍にもなる。このような規模の建物は、73棟の竪穴建物が検出された葎屋北遺跡でもこの規模以上の竪穴建物は3棟のみと少なく、大型の竪穴建物であると言える。この建物の廃絶時期は溝よりやや遅れるが、同時期に存在した可能性も考えられる。

5世紀後半では竪穴建物2・4・5、掘立柱建物5が検出された。竪穴建物2・4・5は竪穴建物3が長辺北東向きであるのに対し、北西向きで明らかに建物の向きが異なり、2列に並ぶように位置する。これらの中でも竪穴建物4・5は、廃絶時期も同時期で、建物の向きや北壁辺が揃っていることから、建物間隔が1.8 mと狭いが、同時期に東西に並んでいたと考えていいのではないだろうか。またこれら竪穴建物の北には82溝が竪穴建物に沿うように、南西から北東方向に掘られている。溝の廃絶時期は6世紀初頭で竪穴建物2・4・5の廃絶時期より新しい時期にはなるが、これら南側に広がる竪穴建物群を区画する溝の可能性が考えられる。

6世紀前半には南側の竪穴建物群は廃絶し、掘立柱建物1と62・63溝が存在する。この南東から北西に掘られる62・63溝と、両溝に先行する時期の96溝が、03-6・06-3調査区の750溝とその西に位置する2条の溝に接続すると考えられる。これら3条の溝は今回の調査地から03-6・06

— 3 調査区の落ち込みの縁辺をめぐっており、南東側に広がる集落を区画する溝であると考えられる。03—6 調査区では 5 世紀後半の船材を転用した井戸枠が出土した 754 井戸や土坑などが検出されている。北側の落ち込みからは南や東側に広がる集落から廃棄されたものと見られる、5 世紀中頃から 6 世紀代の須恵器・土師器・韓式系土器などの土器、輪鏡等の木製品など多くの遺物が出土している。この落ち込みの東側にも縁辺を囲むように数条の溝が掘られ、その内側に掘立柱建物が並ぶ集落が検出されている。溝の時期は 5 世紀後半とされており、今回の調査地と同時期の集落であると言える。

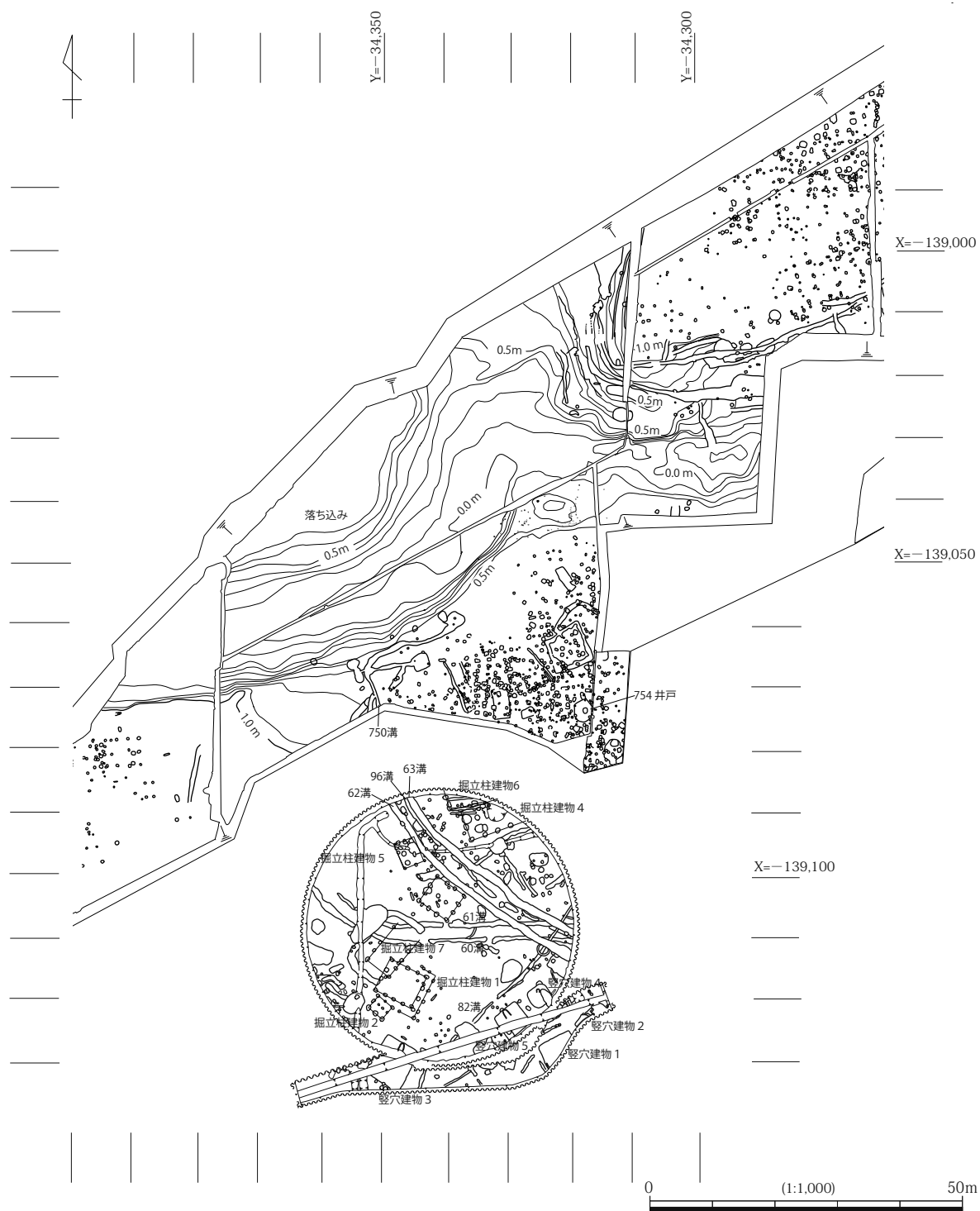


図 84 讃良郡条里遺跡古墳時代遺構全体図

6世紀後半には掘立柱建物7があるが、全体に遺構はかなり減少する。この掘立柱建物7はその周囲に「コ」形に囲む溝を伴う建物である。このような「コ」形の溝に囲まれた掘立柱建物は、長原遺跡NG 02-8次調査（大庭ほか 2005）で検出されている。その溝の埋土からガラス化した微細なスラグ状物質が出土しており、工房跡と考えられている。今回の調査では溝の埋土の一部を土壌洗浄したが、そのような工房の証拠となる遺物は検出されておらず、遺構の性格は掴めなかった。

そして動・植物資源利用の復元を目的として竪穴建物内の竈や土坑、溝の埋土の土壌洗浄を積極的に

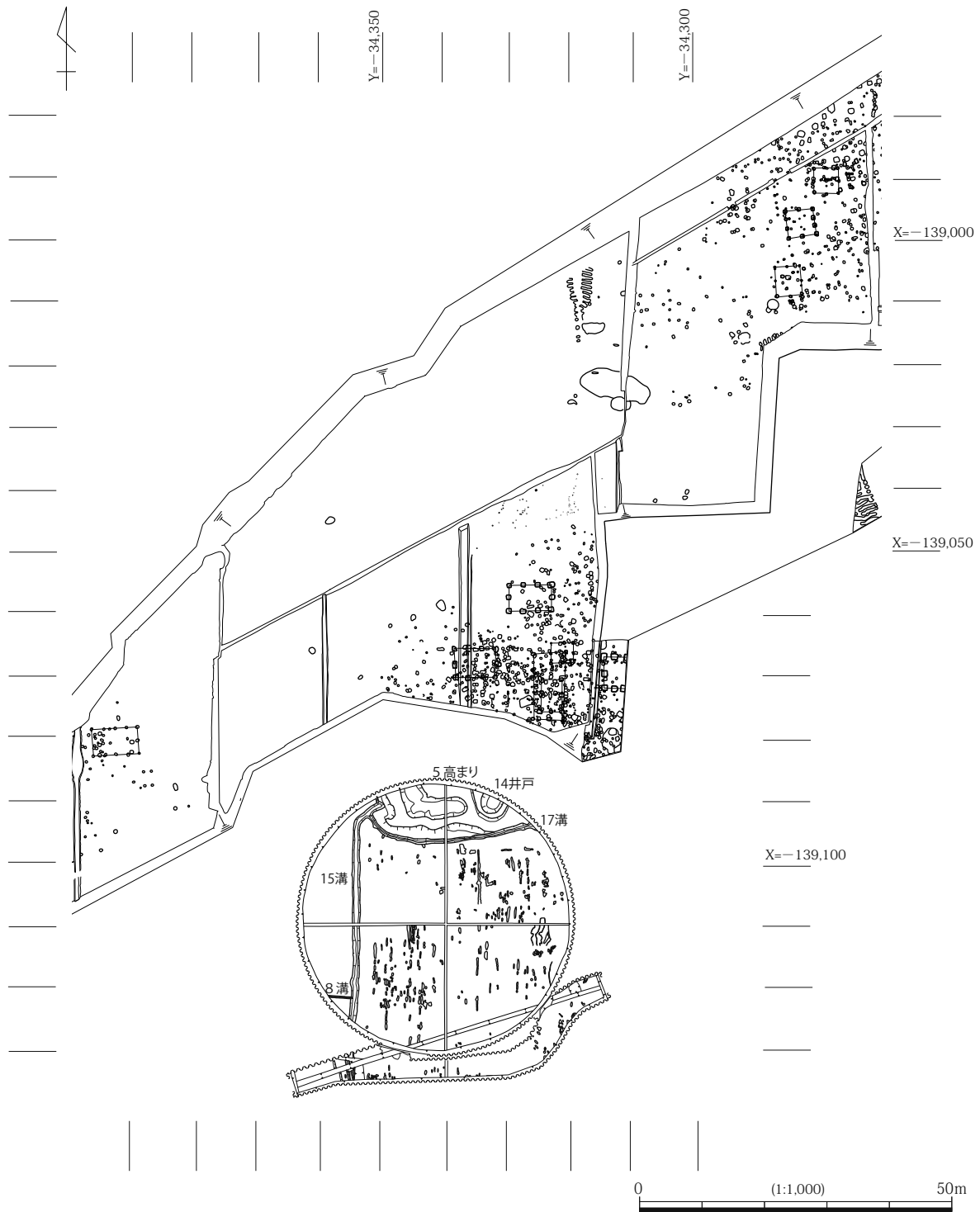


図 85 讃良郡条里遺跡奈良時代から平安時代遺構全体図

表9 イネ・コムギ・ムギ類出土数

遺跡名			讃良郡条里遺跡										讃良郡条里遺跡 03-6		部屋北遺跡				
分類群	部位	状態	竪穴 建物 2 竈	竪穴建物 3 炭層内	80 土坑		81 土坑	87 土坑	203 土坑	257 土坑	63 溝	落ち込み 11-2層 上部	落ち込み 11-2層 下部	大溝 1層	大溝 2層	大溝 3層	大溝 不明		
草本	イネ	完形									1	13	119						
		破片			1							1							
		炭化										1				9	7		
	胚乳	炭化				1		7			1			5	111	51	2		
	コムギ	胚乳	炭化	1	1	3	2	6	1	5	26	1	27	5	279	28	1603	454	11
	ムギ類	胚乳	炭化													10			

行った。その結果、13遺構の内10遺構から栽培植物ではイネ、コムギ、ヒエ近似種、マメ類が確認された。それらの植物遺体は竈から出土したコムギのみならず、土坑から出土したのも被熱し炭化しており、竈から出土したコムギと同じように竈で焚きつけとして燃やされ、炭化して残ったものが土坑や溝に廃棄されたと考えられる。また竪穴建物3竈からはナマズ目の骨片が出土した。ナマズ目については、部屋北遺跡大溝から海水魚と共に淡水魚はアコ・ナマズ・コイ科・ウナギ目出土しているが、特にナマズが群を抜いて多く出土している。これらは被熱しており、食料残渣を竈で焼却し、その灰を大溝に廃棄した可能性が指摘されている。今回の調査では竪穴建物内の竈から確認され、まさしくそのような状況にあったと考えられる。検出された栽培種の中では特にコムギが73点確認され、イネの13点を大きく上回った。これは隣接する讃良郡条里遺跡03-6調査区の落ち込みや部屋北遺跡大溝の埋土でもイネよりもコムギが多く検出されている(表9)ことと共通する。今回の調査成果では竪穴建物竈や土坑などといった遺構からの出土が注目され、土器や炭などと共に廃棄に伴い混入した生活残渣であったと考えられるためより生活に密着した出土状況が確認できた。コムギの出土量が多いことはこの時期に導入される竈や、甑などを用い生活様式の変化に伴うものであったのか、馬の飼育に伴う飼料としてコムギを栽培したかは、さらに突き詰めていく必要がある。

周辺遺跡での調査成果に目を向けると、調査地南東に位置する部屋北遺跡は、調査された範囲だけでも約18,900㎡に広がる、5世紀中頃から6世紀末の集落である。鍋・移動式竈・U字形板状土製品などの韓式系土器が多く出土し、大量の製塩土器を廃棄した土坑、馬が埋葬された土坑が検出されており、韓半島からの渡来集団を受け入れる拠点集落であり、馬飼技術集団の集落であったと推定されている。調査では溝によって区画された北西・北東・西・南西・南東の5箇所の居住域を、集落変遷から部屋北1期から5期までに分けられている。部屋1期では竪穴建物や掘立柱建物といった居住遺構は検出されておらず、部屋北2期から本格的に集落が成立し、その後5期までの各時期を通して竪穴建物・掘立柱建物・井戸といった居住遺構が多数重複して検出されている。西端では南北方向に南西居住域と西居住域の西限を示す大溝が掘削されている。この大溝は5世紀後半の部屋北3期の段階から徐々に埋まっていき、6世紀後半の部屋北5期の段階ではほぼ完全に埋没している。この大溝は讃良郡条里遺跡03-3・06-2で検出されている流路につながる可能性が考えられる。

讃良郡条里遺跡と部屋北遺跡の集落時期を見ると、集落が成立する部屋北2期は今回の調査地でも竪穴建物3や60・61溝といった遺構が見られ始める時期にあたり、その後の集落が廃絶する6世紀後半まで、同時期に集落が存在している。そして居住域周囲を取り囲む区画溝が存在する。特に北東居住域の南の区画溝である溝B130406等の溝では溝が途切れる箇所がありこれが集落への入り口と指摘さ



図 86 讃良郡条里遺跡・部屋北遺跡古墳時代遺構全体図

れており、本調査地の 60・61 溝と同様である。

これらのことから、集落の構成要素や出土遺物の性格、同時性など、部屋北遺跡と今回の調査地を含む讃良郡条里遺跡は、多くの共通点を見出すことができる。さらに今回の調査地に最も近接する、部屋北遺跡調査地北西端のH地区では大溝西側から遺物を廃棄された状況が指摘されており、大溝の西側にも集落が広がることが考えられる。H地区と本調査地は直線距離で約 150 m であり、部屋北遺跡が大溝に沿って南北に約 220 m にわたることから集落が本調査地に広がる可能性は十分あり、遺跡名は異なるけれども、部屋北遺跡と讃良郡条里遺跡の南西部は古墳時代中期から後期の一連の集落域が広がっていたと考えられる。この集落域を観察すると、溝や微地形（落ち込みや低地）に区画された、いくつかの小さなまとまりに分けることができる。この小さなまとまりは部屋北遺跡の調査成果では、5つの居住域として設定している。いくつかの居住域がまとまって、大きな集落域を形成しており、今回の調査地もその一角であったと考えられる。

引用・参考文献

大庭重信ほか 2005 『長原遺跡発掘調査報告XII』 財団法人大阪市文化財協会

白石耕治 1992 『陶邑古窯址群—谷山池地区の調査—』 和泉丘陵内遺跡発掘調査報告書IV 和泉丘陵内遺跡調査会

積山洋 1983 「律令制期の製塩土器と塩の流通」『ヒストリア』141号 大阪歴史学会

積山洋 2004 「大阪湾沿岸の古墳時代土器製塩」広瀬和雄編『季刊考古学 別冊14 畿内の巨大古墳とその時代』雄山閣

中野咲 2008 「接合技法からみた古墳時代中・後期の土師器高坏」『韓式系土器研究X』韓式系土器研究会

宮崎康史ほか 2010 『部屋北遺跡I』大阪府教育委員会

揭載遺物一覽表

挿図番号	遺物番号	写真図版番号	器種	遺構面・層序	調査区	遺構名	遺構層序	法量 (cm) 脚径の()内は現存率を示す。	調整・文様	特徴
10	1		土師器 高杯	第4面	2区 3L-3c	竪穴建物1	1層	脚径：24.4(1/8)	外：ハケ・ハケ後ナデ 内：板状工具によるナデ	
10	2		土師器 甕	第4面	2区 3L-3c	竪穴建物1	3層	口径：14.4(1/5)	外：ヨコナデ・ハケ・ハケ後ナデ 内：ヨコナデ・ハケ後ヨコナデ・ハケ	外：使用時のスス付着
12	3	22	須恵器 有蓋高杯	第4面	2区 3L-2c	竪穴建物2 21土坑	1層	口径：10.8(3/4)	外：回転ナデ・回転ヘラケズリ 内：回転ナデ	外：刻線有
12	4		須恵器 甕	第4面	2区 3L-2c	竪穴建物2 22土坑	1層		外：回転ナデ・櫛描波状文 内：回転ナデ	
12	5	22	土師器 鉢	第4面	2区 3L-2c	竪穴建物2	竈支脚	口径：17.4(4/5) 器高：14.7	外：ヨコナデ・ハケ後ヨコナデ・ユビオサエ後ナデ 内：板状工具によるナデ・ハケ・板ナデ・ナデ・ユビオサエ	
12	6		土師器 鉢	第4面	2区 3L-2c	竪穴建物2 22土坑	1層	口径：19.6(1/8) 器高：12.4	外：ヨコナデ・ハケ後一部ナデ 内：ハケ・ハケ後板ナデ・ユビオサエ後ナデ	
12	7		土師器 甕	第4面	2区 3L-2c	竪穴建物2 22土坑	1層	口径：17.2(1/4)	外：ヨコナデ・ハケ 内：ヨコナデ・ナデ	
12	8		土師器 甕	第4面	2区 3L-2c	竪穴建物2 22土坑	1層	口径：18.4(1/4)	外：ヨコナデ・ハケ後ヨコナデ 内：ハケ後ヨコナデ・ハケ・板状工具によるナデ	外：使用時のスス付着
17	9	22	須恵器 把手付椀	第4面	1区 3L-5c	竪穴建物3	床面直上	口径：11.9(1/2) 底径：8.0 器高：13.2	外：回転ナデ・ヘラ切り後ユビオサエ・櫛描波状文後ナデ 内：回転ナデ	内：自然釉付着
17	10		須恵器 壺	第4面	1区 3L-5c	竪穴建物3	竈袖部上	口径：20.2(1/10)	外：櫛描波状文・凸帯 内：回転ナデ	
17	11	22	土師器 高杯	第4面	1区 3L-5c	竪穴建物3	竈	口径：13.4(4/5)	外：ヨコナデ 内：ナデ・強いナデによる沈線	
17	12	22	土師器 高杯	第4面	1区 3L-6c	竪穴建物3	竈支脚	口径：14.0(完) 底径：9.7 器高：11.2	外：ヨコナデ・ナデ・ヘラミミガキ 内：ヨコナデ後暗文・ヨコナデ	
17	13		土師器 高杯	第4面	2区 3L-6d	竪穴建物3	1層		外：ナデ 内：ナデ・ユビオサエ・ヨコナデ	
17	14		土師器 高杯	第4面	2区 3L-6d	竪穴建物3	床面直上	脚径：8.0(1/2)	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	
17	15		土師器 高杯	第4面	2区 3L-6d	竪穴建物3	1層	口径：17.4(2/3)	外：ヨコナデ・ハケ 内：ヨコナデ	
17	16		土師器 甕	第4面	1区 3L-5c	竪穴建物3	竈袖部上	口径：19.4(1/4)	外：ヨコナデ・ハケ後ヨコナデ・ハケ 内：ヨコナデ・ユビオサエ後ナデ	
17	17		土師器 甕	第4面	2区 3L-6d	竪穴建物3	1層	口径：25.0(1/4)	外：ヨコナデ・タテハケ	
17	18		土師器 甕	第4面	1区 3L-5c	竪穴建物3	竈		外：タテハケ 内：ナデ・ユビオサエ	
17	19		土師器 甕	第4面	1区 3L-5c	竪穴建物3	竈			
17	20	27	石製品 紡錘車	第4面	1区 3L-3・4d	竪穴建物3	床面直上	径：3.6 孔径：0.5 厚：1.4 重さ：29.96g		滑石製
17	21	27	石製品 白玉	第4面	1区 3L-5c	竪穴建物3	竈	径：0.45 孔径：0.15 厚：0.2 重さ：0.06g		滑石製
17	22	27	石製品 白玉	第4面	1区 3L-5c	竪穴建物3	竈	径：0.45 孔径：0.15 厚：0.3 重さ：0.06g		滑石製
17	23	27	石製品 砥石	第4面	1区 3L-5c	竪穴建物3	1層	長：20.15 幅：11.3 厚：5.0 重さ：1425g		砂岩製
21	24	22	須恵器 杯蓋	第4面	1区 3L-3c	竪穴建物4	2層	口径：11.6(完) 器高：4.6	外：回転ナデ・回転ヘラケズリ 内：静止ナデ・回転ナデ	内：粘土接合痕跡
21	25		土師器 甕	第4面	1区 3L-3c	竪穴建物4	竈支脚	口径：13.0(完)	外：ハケ・ナデ 内：ユビオサエ・ナデ	
21	26		土師器 甕	第4面	1区 3L-3c	竪穴建物4	1層	口径：20.6(1/5)	外：ヨコナデ・ハケ後ナデ 内：ナデ	
25	27		須恵器 杯蓋	第4面	1区 3L-4c	竪穴建物5	床面直上	口径：12.3(1/6)	外：回転ナデ・回転ヘラケズリ 内：回転ナデ	
25	28		土師器 甕	第4面	1区 3L-4c	竪穴建物5	床面直上	口径：17.4(1/2)	外：ヨコナデ・ハケ 内：ヨコナデ・ユビオサエ後ナデ	
25	29		土師器 甕	第4面	1区 3L-4c	竪穴建物5	竈	口径：16.2(1/12)	外：ヨコナデ・ハケ 内：ヨコナデ・ナデ	
25	30		土師器 甕	第4面	1区 3L-3c	竪穴建物5 347土坑	1層	口径：15.5(1/4)	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	
25	31		土師器 甕	第4面	1区 3L-3c	竪穴建物5 347土坑	1層	口径：17.7(2/3)	外：ヨコナデ・ハケ 内：ヨコナデ・ハケ後ユビオサエ・ナデ	

挿図 番号	遺物 番号	写真図 版番号	器種	遺構面・ 層序	調査区	遺構名	遺構層序	法量 (cm) 脚径の()内は残存率を示す。	調整・文様	特徴
27	32	23	須恵器 杯身	第4面	1区 3L-6b	掘立柱建物1 113 柱穴	抜き取り痕	口径：12.2(3/4) 器高：5.9	外：回転ナデ・回転ヘラケズリ 内：回転ナデ・静止ナデ	外：自然細付着
27	33		土師器 甕	第4面	1区 3L-5c	掘立柱建物1 126 柱穴		口径：12.2(1/7)	外：ヨコナデ・ハケ 内：ハケ・板状工具によるナデ	
27	34		土師器 甕	第4面	1区 3L-5c	掘立柱建物1 126 柱穴		口径：12.0(1/7)	外：ヨコナデ・ハケ	
27	35		土師器 甕	第4面	1区 3L-5b	掘立柱建物1 125 柱穴		口径：22.0(1/7)	外：ヨコナデ・ハケ 内：ナデ	
33	36	23	須恵器 杯身	第4面	1区 3K-5j	掘立柱建物5 190 柱穴	柱痕	口径：10.6(1/4) 器高：4.8	外：回転ナデ・回転ヘラケズリ 内：回転ナデ	外：自然細付着
33	37		須恵器 杯身	第4面	1区 3K-5j	掘立柱建物5 191 柱穴	柱痕	口径：10.3(1/4)	外：回転ナデ・回転ヘラケズリ 内：回転ナデ	
33	38		土師器 直口壺	第4面	1区 3K-5j	掘立柱建物5 190 柱穴	柱痕	口径：9.8(1/2)	外：ハケ後ヨコナデ 内：ナデ	
33	39		土師器 甕	第4面	1区 3K-4j	掘立柱建物6 322 柱穴		口径：23.8(1/8)	外：ヨコナデ・タテハケ 内：ハケ後ナデ	
35	40		須恵器 杯蓋	第4面	1区 3L-6b	掘立柱建物7 72 溝	1層	口径：13.7(1/2) 器高：3.9	外：回転ナデ・回転ヘラケズリ・櫛状工具によるキザミ後ヨコナデ 内：回転ナデ	
35	41		須恵器 杯蓋	第4面	1区 3L-6b	掘立柱建物7 72 溝	1層	口径：14.9(1/10) 器高：3.6	外：回転ナデ・回転ヘラケズリ 内：回転ナデ・回転ナデ後ヨコナデ	
35	42		須恵器 杯蓋	第4面	1区 3L-6b	掘立柱建物7 72 溝	1層	口径：13.3(1/5)	外：回転ナデ・回転ヘラケズリ 内：回転ナデ	
35	43		須恵器 杯蓋	第4面	1区 3L-6b	掘立柱建物7 72 溝	1層 上部	口径：14.8(1/2) 器高：4.1	外：回転ナデ・回転ヘラケズリ 内：回転ナデ後ヨコナデ	
35	44		須恵器 杯身	第4面	1区 3L-6b	掘立柱建物7 72 溝	1層 下部	口径：11.6(1/7) 器高：3.6	外：回転ナデ・回転ヘラケズリ 内：回転ナデ・ナデ	
35	45		須恵器 杯身	第4面	1区 3L-6b	掘立柱建物7 72 溝	1層	口径：13.4(1/10)	外：回転ナデ・回転ヘラケズリ 内：回転ナデ	
35	46	23	須恵器 杯身	第4面	1区 3L-5a	掘立柱建物7 72 溝	1層	口径：12.7(3/4) 器高：4.4	外：回転ナデ・回転ヘラケズリ・ナデ 内：静止ナデ	
35	47	23	須恵器 杯身	第4面	1区 3L-6b	掘立柱建物7 72 溝	1層 上部	口径：12.6(1/10) 器高：4.1	外：回転ナデ・回転ヘラケズリ 内：回転ナデ・同心円状の当て具痕跡	外：一部自然細付着
35	48	23	須恵器 壺蓋	第4面	1区 3L-6b	掘立柱建物7 72 溝	1層	口径：5.1(完)	外：回転ナデ・回転ヘラケズリ・回転ナデ 内：回転ナデ	
35	49		須恵器 短頸壺	第4面	1区 3L-6b	掘立柱建物7 72 溝	1層	口径：8.1(1/5)	外：回転ナデ 内：回転ナデ	外：僅かに自然細付着
35	50		須恵器 壺	第4面	1区 3L-6b	掘立柱建物7 72 溝	1層 上部	口径：17.8(1/3)	外：タテハケ・タタキ後カキメ 内：同心円状の当て具痕跡	
35	51		土師器 高杯	第4面	1区 3L-6b	掘立柱建物7 72 溝	1層 下部		外：ナデ・ハケ後ナデ 内：ハケ状工具によるナデ	
35	52		土師器 高杯	第4面	1区 3L-6b	掘立柱建物7 72 溝	1層 下部		外：ハケ後ナデ 内：板状工具による回転ナデ	
35	53	23	土師器 鉢	第4面	1区 3L-6b	掘立柱建物7 72 溝		口径：18.8(1/2) 器高：10.2	外：ヨコナデ・ユビオサエ後タテハケ・ヨコハケ 内：ユビオサエ後板状工具によるナデ	
38	54		須恵器 杯蓋	第4面	1区 3K-5j	285 柱穴		口径：13.3(1/2) 器高：4.5	外：ナデ・静止ナデ・回転ナデ 内：ナデ・回転ナデ	
38	55		須恵器 杯蓋	第4面	1区 3L-4a	240 ピット		口径：12.0(1/10)	外：回転ナデ・回転ヘラケズリ 内：回転ナデ	
38	56		須恵器 杯蓋	第4面	1区 3L-7b	149 柱穴		口径：15.5(1/7)	外：回転ナデ・回転ヘラケズリ・櫛状工具によるキザミ 内：回転ナデ	
38	57	23	須恵器 甕	第5-2層	2区 3L-6d	47 ピット			外：回転ナデ・回転ヘラケズリ	外：ヘラ描き線有

挿図番号	遺物番号	写真図版番号	器種	遺構面・層序	調査区	遺構名	遺構層序	法量 (cm) 脚径の()内は現存率を示す。	調整・文様	特徴
38	58		須恵器 壺	第4面	1区 3L-3a	235ピット	口径：22.0	外：回転ナデ・カキメ 内：回転ナデ	外：自然軸付着	
38	59	27	石製品 有孔円盤	第4面	1区 3L-5a	286ピット	厚：0.4 重さ：3.01g		滑石製	
41	60		須恵器 甕	第4面	1区 3K-5j	54土坑	口径：20.0(1/5)	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ		
41	61		韓式系土器 平底鉢	第4面	1区 3K-5j	54土坑	底径：11.8(1/10)	外：格子タタキ・ヘラケズリ 内：ヨコナデ	外：底部がタタキ	
41	62	23	韓式系土器 平底鉢	第4面	1区 3K-5j	54土坑	底径：8.6(3/4)	外：平行タタキ・ユビオサエ 内：ヨコナデ・回転ナデ	外：底部がタタキ	
41	63		韓式系土器	第4面	1区 3K-5j	54土坑		外：細溝文タタキ		
41	64		韓式系土器	第4面	1区 3K-5j	54土坑		外：格子タタキ 内：ナデ		
41	65		製塩土器	第4面	1区 3K-5j	54土坑	口径：8.3(1/10) 重さ：14.43g	外：ヨコナデ・ユビオサエ後ナデ 内：ユビオサエ後ナデ		
41	66	27	石製品 白玉	第4面	1区 3K-5j	54土坑	径：0.6 孔径：0.2 厚：0.5 重さ：0.26g		滑石製	
41	67		須恵器 杯身	第4面	1区 3L-6a	71土坑	口径：13.0(1/5)	外：回転ナデ・回転ヘラケズリ	鉄製	
41	68		金属製品 刀子	第4面	1区 3K-5j	54土坑	幅：1.7 厚：0.4 重さ：3.07g			
43	69	24	黒色研磨土器 壺	第4面	1区 3K-4j	78土坑		外：ヘラミガキ 内：板状工具によるナデ		
43	70	24	黒色研磨土器 壺	第4面	1区 3K-4j	78土坑		外：ナデ・ヘラミガキ 内：ナデ		
43	71		韓式系土器	第4面	1区 3K-4j	78土坑		外：格子タタキ 内：ナデ		
43	72	24	韓式系土器	第4面	1区 3K-4j	78土坑		外：斜格子タタキ 内：ナデ		
43	73	24	韓式系土器	第4面	1区 3K-4j	78土坑		外：細溝文タタキ 内：ナデ		
43	74	24	韓式系土器	第4面	1区 3K-4j	78土坑		外：格子タタキ 内：ナデ		
43	75		韓式系土器 平底鉢	第4面	1区 3K-3j	80土坑	底径：6.4(1/8)	外：ナデ・ヘラケズリ 内：ナデ		
43	76	27	石製品 白玉	第4面	1区 3K-3j	80土坑	径：0.4 孔径：0.15 厚：0.3 重さ：0.07g		滑石製	
45	77	24	須恵器 高杯	第4面	1区 3L-3b	81土坑	脚径：8.4(1/3)	外：回転ナデ・ミカキ 内：回転ナデ・シボリ		
45	78		須恵器 壺	第4面	1区 3L-3b	81土坑	口径：19.9(1/3)	外：回転ナデ・櫛描波状文・凸帯・タタキ後カキメ 内：回転ナデ・同心円状の当て具痕跡		
45	79	24	韓式系土器 甕または鍋	第4面	1区 3L-3b	81土坑		外：ハケ・ナデ		
45	80		須恵器 杯蓋	第4面	1区 3K-4j	87土坑	口径：11.9(1/2)	外：回転ヘラケズリ・回転ナデ 内：回転ナデ		
45	81		須恵器 無蓋高杯	第4面	1区 3K-4j	87土坑	口径：17.2(1/4)	外：回転ナデ・凸帯・櫛描波状文・ヘラ描き沈線・脚部カキメ 内：回転ナデ	内：自然軸付着 長方形透かし	
45	82		須恵器 壺	第4面	1区 3K-4j	87土坑	口径：16.9(1/4)	外：回転ナデ・櫛描波状文後凸帯 内：回転ナデ		
45	83		土師器 甕	第4面	1区 3K-4j	87土坑	口径：18.3(1/6)	外：ハケ後ヨコナデ 内：ヨコナデ	口縁部内面～外面端部 ；使用時のスス付着	
45	84		製塩土器	第4面	1区 3K-4j	87土坑	口径：3.6(1/5) 重さ：4.52g	外：横方向タタキ 内：タタキ後ナデ・タタキ		
45	85		土師器 鉢	第4面	1区 3K-5j	90土坑	口径：22.6(1/7)	外：ヨコナデ・ハケ 内：板状工具によるナデ		
48	86		須恵器 無蓋高杯	第4面	1区 3L-4a	93土坑	口径：17.2(1/8)	外：回転ナデ・櫛描波状文 内：回転ナデ	外：自然軸付着	
48	87		須恵器 杯蓋	第4面	1区 3L-3a	103土坑	口径：10.4(1/5)	外：回転ナデ 内：回転ナデ		
48	88		須恵器 杯蓋	第4面	1区 3L-3a	103土坑	口径：10.6(1/5)	外：回転ナデ 内：回転ナデ		
48	89		須恵器 壺	第4面	1区 3L-3a	103土坑	口径：14.2(1/3)	外：回転ナデ 内：回転ナデ		
48	90		須恵器 甕	第4面	1区 3L-3a	103土坑	口径：19.3(1/4)	外：回転ナデ・櫛描波状文・平行タタキ・凸帯 内：回転ナデ・同心円状の当て具痕跡	外：自然軸付着	

挿図番号	遺物番号	写真図版番号	器種	遺構面・層序	調査区	遺構名	遺構層序	法量 (cm) 脚径の () 内は現在保存率を示す。	調整・文様	特徴
48	91	24	韓式系土器 甕または鍋	第4面	1区 3L-3a	103 土坑		外：ナデ		
48	92		須恵器 杯蓋	第4面	1区 3L-4c	181 土坑		口径：10.5(1/3)	外：回転ナデ・回転ヘラケズリ 内：回転ナデ	外：自然細付着
48	93		須恵器 把手付椀	第4面	1区 3L-4c	181 土坑		口径：7.1(1/3)	外：回転ナデ 内：回転ナデ	内・外面上部：自然釉付着
48	94	24	須恵器 高杯	第4面	1区 3L-4c	181 土坑		脚径：10.0(2/3)	外：回転ナデ 内：回転ナデ	
48	95		土師器 甕	第4面	1区 3L-4c	181 土坑		口径：23.1(1/10)	内：ヨコナデ・ヨコハケ後ナデ	
48	96		須恵器 壺	第4面	1区 3L-4c	182 土坑		口径：9.0(1/6)	外：回転ナデ 内：回転ナデ	外：自然細付着
48	97		土師器 甕	第4面	1区 3L-4c	182 土坑		口径：13.6(1/7)	外：ヨコナデ・ハケ後ナデ 内：ヨコハケ後ナデ	
48	98		韓式系土器	第4面	1区 3L-4c	182 土坑			外：格子タタキ・ナデ 内：ナデ	
50	99		須恵器 甕	第4面	1区 3L-4a	257 土坑		口径：9.8(1/3)	外：回転ナデ・櫛描波状文 内：回転ナデ	内：自然細付着
50	100	25	製塩土器	第4面	1区 3L-4a	257 土坑		口径：3.2(1/3) 重さ：4.78g	外：タタキ 内：シボリ	
50	101	25	製塩土器	第4面	1区 3L-4a	257 土坑		口径：3.9(1/4) 重さ：3.27g	外：タタキ 内：ナデ	
50	102	25	製塩土器	第4面	1区 3L-4a	257 土坑		口径：6.0(1/4) 重さ：4.79g	外：タタキ 内：シボリ	
50	103	25	製塩土器	第4面	1区 3L-4a	257 土坑		口径：4.0(1/4) 重さ：2.87g	外：タタキ 内：ナデ	
50	104	25	製塩土器	第4面	1区 3L-4a	257 土坑		重さ：5.0g	外：タタキ 内：ナデ	
50	105		製塩土器	第4面	1区 3L-4a	257 土坑		底径：1.7(1/4) 重さ：6.62g	外：タタキ 内：ナデ	
50	106		土師器 鉢	第4面	1区 3K-4j	263 土坑		口径：28.4(1/14)	外：ヨコナデ後暗文	内：自然細付着
50	107		須恵器 壺	第4面	1区 3K-5i	295 土坑		口径：15.0(1/14)	外：回転ナデ・凸帯 内：回転ナデ	
52	108		須恵器 杯蓋	第4面	1区 3L-3c	352 土坑		口径：12.8(1/8)	外：回転ナデ 内：回転ナデ	
52	109		須恵器 高杯	第4面	1区 3L-3b	331 土坑		脚径：10.4(1/6)	外：回転ナデ 内：回転ナデ	方形透かし
52	110		土師器 甕	第4面	1区 3L-3b	331 土坑		口径：19.6(2/3)	外：ヨコナデ・ハケ 内：ナデ	外：コガ付着
52	111		須恵器 有蓋高杯	第4面	1区 3L-3c	354 土坑		口径：10.0(1/3)	外：回転ナデ・回転ヘラケズリ 内：回転ナデ	長方形透かし
52	112		須恵器 壺	第4面	1区 3L-3c	354 土坑		口径：13.9(完)	外：櫛描波状文・凸帯・回転ナデ 内：回転ナデ・ナデ	外：自然細付着 内：自然細付着
52	113		須恵器 壺	第4面	1区 3L-3c	354 土坑		口径：15.5(1/2)	外：櫛描波状文・凸帯・回転ナデ 内：回転ナデ	
52	114		土師器 甕	第4面	1区 3L-3c	354 土坑		口径：19.6(1/2)	外：ハケ・ヨコナデ 内：ハケ後ヨコナデ・コビオサ工後ナデ 内：回転ナデ	
52	115	24	韓式系土器 平底鉢	第4面	1区 3L-3b・c	354 土坑			外：平行タタキ後回転ナデ 内：回転ナデ	
52	116		韓式系土器	第4面	1区 3L-3b	353 土坑			外：平行タタキ後ナデ 内：ナデ	
52	117	25	製塩土器	第4面	1区 3L-3c	354 土坑		口径：5.4(1/5) 重さ：4.54g	外：タタキ後ナデ 内：シボリ	
52	118	25	製塩土器	第4面	1区 3L-3c	354 土坑		口径：4.0 重さ：5.52g	外：タタキ	
52	119	25	製塩土器	第4面	1区 3L-3c	354 土坑		口径：3.9 重さ：7.58g	外：タタキ	
52	120		石製品 白玉	第4面	1区 3L-3b	331 土坑		径：0.4 孔径0.1 厚：0.15 重さ：0.01g		滑石製
54	121		須恵器 杯蓋	第4面	1区 3L-6・7b	363 土坑		口径：13.1(1/8)	外：回転ナデ・回転ヘラケズリ 内：回転ナデ	外：自然細付着
54	122		須恵器 杯蓋	第4面	1区 3L-7b	363 土坑		口径：13.4(1/6)	外：回転ナデ・回転ヘラケズリ 内：回転ナデ	
54	123		須恵器 甕	第4面	1区 3L-6・7b	363 土坑		口径：10.8(1/5)	外：回転ナデ・櫛描波状文 内：回転ナデ	外：自然細付着
58	124		須恵器 甕	第4面	1区 3L-5b	60 溝	1層	口径：26.2(1/14)	外：回転ナデ・凸帯 内：回転ナデ	
58	125		土師器 高杯	第4面	1区 3L-4b	60 溝	1層		外：板状工具によるナデ 内：ナデ	
58	126		土師器 高杯	第4面	1区 3L-4b	60 溝	1層	脚径：8.0(2/3)	外：ヘラミガキ 内：シボリ・ナデ	
58	127	26	土師器 高杯	第4面	1区 3L-5b	60 溝		脚径：13.2(完)	外：ミガキ・ナデ 内：ナデ後暗文・ナデ	円形透かし

挿図番号	遺物番号	写真図版番号	器種	遺構面・層序	調査区	遺構名	遺構層序	法量 (cm) 脚径の () 内は現存率を示す。	調整・文様	特徴
58	128		土師器 甕	第4面	1区 3L-6・7a	60溝	1層	口径：17.4(1/10)	外：ヨコナデ・ナデ 内：ハラケズリ	
58	129		土師器 甕	第4面	1区 3L-4b	60溝	1層	口径：20.8(1/5)	外：ハラケ後ヨコナデ・ハラケ	
58	130		土師器 甕	第4面	1区 3L-4b	60溝	1層		外：ハラケ 内：ナデ	
58	131	26	韓式系土器 平底鉢	第4面	1区 3L-5b	60溝		口径：11.8(4/5) 底径：7.15 器高：10.4	外：格子タタキ後口縁部～頸部ヨコナデ・底部ナデ 内：ヨコナデ・ナデ	
59	132		土師器 高杯	第4面	1区 3L-5a	61溝	1層		外：ナデ 内：ナデ	
59	133		韓式系土器 平底鉢	第4面	1区 3L-5a	61溝	1層	底径：7.9(1/2強)	外：格子タタキ・ハラケズリ 内：ナデ	
59	134	26	韓式系土器 平底鉢	第4面	1区 3L-5a	61溝	1層	口径：12.4(完) 底径：8.75 器高：12.0	外：格子タタキ後下端ヨコナデ・底部ナデ 内：ヨコナデ	外：底部がタ痕跡
62	135	26	須恵器 杯蓋	第4面	1区 3L-4a	62溝	1層	口径：14.0(3/4) 器高：4.3	外：回転ナデ・回転ハラケズリ 内：回転ナデ後ナデ	外：自然釉付着
62	136		須恵器 杯身	第4面	1区 3L-3b	62溝	2層	口径：13.6(1/5)	外：回転ナデ・回転ハラケズリ 内：回転ナデ	
62	137		須恵器 短頸壺	第4面	1区 3L-3b	62溝	2層	口径：12.5(1/8) 器高：15.5	外：回転ナデ 内：回転ナデ	
62	138		須恵器 甕	第4面	1区 3L-3b	62溝	2層	口径：22.0(1/2)	外：ヨコナデ・平行タタキ 内：ナデ	
62	139		須恵器 甕	第4面	1区 3L-3b	62溝	2層		外：回転ナデ・縞描波状文 内：回転ナデ	
63	140		須恵器 杯蓋	第4面	1区 3K-4j	63溝	3層	口径：14.6(2/3) 器高：4.4	外：回転ナデ・回転ハラケズリ 内：ヨコナデ・回転ナデ	
63	141		須恵器 杯身	第4面	1区 3K-5j	63溝	2層	口径：10.4(1/7)	外：回転ナデ 内：回転ナデ	
63	142		須恵器 杯身	第4面	1区 3K-5i	63溝	2層	口径：11.2(1/10)	外：回転ナデ・回転ハラケズリ 内：回転ナデ	
63	143		須恵器 高杯	第4面	1区 3L-3b	63溝	1層	脚径：8.6(1/4)	外：回転ナデ 内：回転ナデ	円形透かし
63	144		須恵器 高杯	第4面	1区 3K-5j	63溝	1層	脚径：11.0(1/7)	外：回転ナデ・凸帯 内：回転ナデ	長方形透かし
63	145		須恵器 広口壺	第4面	1区 3K-5i	63溝	1層	口径：17.6(1/7)	外：回転ナデ・縞描波状文・凸帯 内：回転ナデ	外：自然釉付着
63	146		須恵器 甕	第4面	1区 3L-3a	63溝		口径：22.2(1/10)	外：回転ナデ・カキ・凸帯	
63	147		須恵器 甕	第4面	1区 3L-3a	63溝	2・3層	口径：24.8(1/3)	外：タタキ後回転ナデ・平行タタキ 内：回転ナデ・ナデ	外：自然釉付着
63	148		土師器 甕	第4面	1区 3K-5j	63溝	1層	口径：14.6(1/4)	外：ヨコナデ	
63	149		韓式系土器 平底鉢	第4面	1区 3K-5j	63溝	1層	口径：11.5(1/8)	外：ナデ 内：ナデ	
63	150		韓式系土器 甕	第4面	1区 3K-5i	63溝	2層	口径：23.2(1/8)	外：ヨコナデ 内：ナデ	外：使用時のスス付着
63	151		韓式系土器 鍋	第4面	1区 3K-5i	63溝	2層		外：平行タタキ後ナデ・沈線 内：ナデ	
63	152		韓式系土器 鍋	第4面	1区 3K-5j	63溝	1層		外：タタキ後ナデ	
63	153		土師器 移動式壺	第4面	1区 3L-3a	63溝			外：ハラケ・キザミ 内：ナデ	
63	154		韓式系土器 移動式壺	第4面	1区 3K-5j	63溝	2・3層		外：タテハラケ後ナデ 内：回転ナデ・ナデ	
63	155		磨製石器 蔽石	第4面	1区 3L-3a	63溝		重さ：138.39g		砂岩製
67	156		須恵器 杯蓋	第4面	1区 3L-3b	82溝		口径：12.2(1/3) 器高：5.2	外：回転ハラケズリ・回転ナデ・凹線 内：回転ナデ	
67	157	26	須恵器 杯身	第4面	1区 3L-3a	85溝	1層	口径：11.5 器高：4.3	外：回転ナデ・回転ハラケズリ 内：回転ナデ	
67	158	26	須恵器 有蓋高杯	第4面	1区 3L-3a	85溝		口径：11.5(5/6) 脚径：9.9 器高：9.3	外：回転ナデ・回転ハラケズリ 内：回転ナデ・ナデ	
67	159		土師器 高杯	第4面	1区 3L-7b	64溝	1層		外：ハラケ後ナデ・ナデ 内：回転ナデ	
67	160		土師器 甕	第4面	1区 3L-3a	91溝		口径：25.0(1/5)	外：ヨコナデ・タテハラケ 内：ヨコナデ・ユビオサエ後ナデ	
67	161		韓式系土器 平底鉢	第4面	1区 3L-5a	67溝	1層		外：格子タタキ	
67	162		製塩土器	第4面	1区 3K-4i	76溝		口径：10.9(1/10) 重さ：78.7g	外：ユビオサエ 内：ナデ・ユビオサエ	
69	163		須恵器 杯蓋	第6層	1区 3L-5a			口径：12.4(1/5)	外：回転ハラケズリ・回転ナデ 内：回転ナデ	

插图番号	遺物番号	写真版番号	器種	遺構面・層序	調査区	遺構名	遺構層序	法量 (cm) 脚径の () 内は現在率を示す。	調整・文様	特徴
69	164		須恵器 杯身	第6層	1区 3L-3a			口径：11.2(1/20) 器高：4.7	外：回転ナデ・回転ヘラケズリ 内：回転ナデ	
69	165		須恵器 杯身	第6層	1区 3L-3a			口径：11.0(1/4)	外：回転ナデ・回転ヘラケズリ 内：回転ナデ	外：自然細付着
69	166		須恵器 有蓋高杯	第6層	1区 3K-3j			口径：11.0(1/4)	外：回転ナデ・回転ヘラケズリ 内：回転ナデ	外：刻線有
69	167		須恵器 高杯	第6層	1区 3K-3j			脚径：7.9(1/4)	外：回転ナデ 内：回転ナデ	円形透かし
69	168		須恵器 高杯	第6層	1区 3K-4j			脚径：9.6(1/6)	外：回転ナデ・カキス 内：回転ナデ	長方形透かし
69	169		須恵器 蓋	第6層	1区 3K-3j			口径：9.65(1/10) 器高：5.9	外：回転ナデ・回転ヘラケズリ 内：回転ナデ	
69	170		土師器 高杯	第6層	1区 3L-3a			口径：14.8(1/5)	外：ナデ・ハケ 内：シボリ	
69	171		土師器 甕	第6層	1区 3L-3a			口径：16.8(1/5)	外：ナデ 内：ハケ後ナデ	
69	172		土師器 移動式甕	第6層	1区 3L-3a				外：ハケ・キサミ 内：ナデ後ユビオサエ	
70	173		須恵器 杯身	第5-2層	1区 3K-3j			高台径：9.6(1/8)	外：回転ナデ 内：回転ナデ	
70	174		須恵器 杯蓋	第5-2層	1区 3L-4a			口径：12.0(1/6)	外：回転ナデ 内：回転ナデ	
70	175		須恵器 杯蓋	第5-2層	1区 3L-6c			口径：11.8(1/8)	外：回転ナデ・回転ヘラケズリ 内：回転ナデ	
70	176		須恵器 杯蓋	第5-2層	1区 3L-4b			口径：11.6(1/4)	外：回転ナデ・回転ヘラケズリ 内：回転ナデ	
70	177		須恵器 杯蓋	第5-2層	1区 3L-5b				外：回転ナデ・回転ヘラケズリ 内：回転ナデ	外：ヘラ記号有り
70	178		須恵器 甕	第5-2層	1区 3K-3j			口径：38.6(1/8)	外：回転ナデ 内：回転ナデ	
70	179		須恵器 鉢	第5-2層	2区 3L-3b			底径：14.4(1/6)	外：回転ナデ・平行タタキ 内：回転ナデ・ユビオサエ	内：底部に自然細付着
70	180		須恵器 無蓋高杯	第5-2層	1区 3L-7c			口径：13.9(1/6)	外：回転ナデ・回転ヘラケズリ 内：回転ナデ	内：自然細付着
70	181		須恵器 高杯	第5-2層	1区 3L-6b				外：回転ナデ・カキス 内：回転ナデ	長方形透かし
70	182		須恵器 高杯	第5-2層	1区 3L-6b			脚径：9.6(1/4)	外：回転ナデ 内：回転ナデ	長方形透かし
70	183		須恵器 蓋蓋または高杯	第5-2層	2区 3L-3c			口径：12.0(1/4)	外：回転ナデ・ヘラケズリ 内：回転ナデ	外：自然細付着
70	184		須恵器 器台	第5-2層	1区 3K-3j				外：回転ナデ・櫛描波状文・平行タタキ・凸帯 内：回転ナデ	
70	185		須恵器 壺	第5-2層	1区 3L-3c			口径：16.4(1/8)	外：回転ナデ・櫛描波状文後回転ナデ・凸帯 内：回転ナデ	
70	186		須恵器 甕	第5-2層	1区 3L-5a			口径：24.2(1/10)	外：回転ナデ・凸帯 内：回転ナデ	
70	187		須恵器 甕	第5-2層	1区 3L-4a			口径：22.4(1/8)	外：回転ナデ・カキス・凸帯 内：回転ナデ	内：自然細付着
70	188		須恵器 甕	第5-2層	1区 3L-4a				外：回転ナデ・櫛描波状文・洗線 内：回転ナデ	外：肩部自然細付着
70	189		土師器 高杯	第5-2層	1区 3L-4b			脚径：12.6(1/4)	外：ナデ 内：ナデ	
70	190		土師器 甕	第5-2層	1区 3L-7c			口径：22.9(1/4)	外：ヨコナデ・ハケ 内：ナデ	
70	191		土師器 甕	第5-2層	1区 3L-6c			口径：22.0(1/14)	外：ヨコナデ・ハケ 内：板状工具によるナデ	
70	192		土師器 甕	第5-2層	1区 3L-4c			口径：32.2(1/8)	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	外：使用時のスズ付着
70	193		土師器 甕	第5-2層	1区 3L-4a			口径：32.4(1/10)	外：ヨコナデ・ナデ 内：ナデ	
70	194		土師器 甕	第5-2層	1区 3L-3c			口径：17.3(1/8)	外：ハケ後ヨコナデ 内：ハケ	
70	195	27	韓式系土器	第5-2層	1区 3L-5b				外：平行タタキ 内：ユビオサエ後ナデ	
70	196		韓式系土器	第5-2層	1区 3L-3a				外：平行タタキ 内：ナデ	
70	197		韓式系土器	第5-2層	1区 3L-4b				外：平行タタキ 内：ユビオサエ・ナデ	
70	198	27	韓式系土器	第5-2層	1区 3L-7a				外：平行タタキ 内：ナデ	
70	199		製塩土器	第5-2層	2区 3L-4d			口径：7.0(1/3) 重さ：17.02g	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ・ユビオサエ	
70	200		製塩土器	第5-2層	1区 3L-3c			口径：8.2(1/5) 重さ：27.39g	外：ヨコナデ・ユビオサエ・ナデ 内：ユビオサエ後ナデ	
70	201	27	土製品 U字形板状土製品	第5-2層	1区 3L-5a				外：板状工具によるナデ 内：ナデ	
74	202		瓦 平瓦	第5-1面	1区 3K-4j	14 井戸	2層		凸：細叩き	

押図番号	遺物番号	写真図版番号	器種	遺構面・層序	調査区	遺構名	遺構層序	法量 (cm) 脚径の()内は残存率を示す。	調整・文様	特徴
74	203		瓦 丸瓦	第5-1面	1区 3K-4i	14 井戸	2層		凸：細叩き 凹：ヘラケズリ・布目痕跡	
75	204		須恵器 杯身	第2面	1区 3K-4j	5 高まり	1層	口径：16.2(1/7) 器高：3.3	外：回転ナデ 内：回転ナデ	
75	205	26	須恵器 杯身	第2面	1区 3K-4i	5 高まり	1層	口径：13.0(1/2) 器高：9.0 器高：4.0	外：回転ナデ・底部ヘラ切り後未調整 内：回転ナデ・ヨコナデ	
75	206		須恵器 杯身	第2面	1区 3K-5j	5 高まり	1層	高台径：10.0(1/10)	外：回転ナデ 内：回転ナデ	
75	207		須恵器 杯身	第2面	1区 3K-3j	5 高まり	2層	高台径：11.6(1/4)	外：回転ナデ 内：回転ナデ	
75	208		須恵器 高杯	第2面	1区 3K-5j	5 高まり	1層	脚径：8.2(1/4)	外：回転ナデ 内：回転ナデ	長方形透かし
75	209		須恵器 高杯	第2面	1区 3K-5j	5 高まり	2層	脚径：9.1(1/6)	外：回転ナデ 内：回転ナデ	長方形透かし
75	210		須恵器 壺	第2面	1区 3K-5i	5 高まり	2層	高台径：3.7(1/6)	外：回転ナデ 内：回転ナデ	
75	211		須恵器 壺	第2面	1区 3K-4j	5 高まり	1層	高台径：7.6(1/4)	外：回転ナデ 内：回転ナデ	
75	212		須恵器 壺	第2面	1区 3K-4j	5 高まり	2層	高台径：11.6(1/4)	外：板状工具によるナデ・ナデ 内：回転ナデ	外：自然釉付着
75	213		須恵器 壺	第2面	1区 3K-5i	5 高まり	2層	底径：11.6(1/4)	外：回転ナデ・縹波状文 内：回転ナデ	内：自然釉付着
75	214		須恵器 甕	第2面	1区 3K-4i	5 高まり	2層	口径：13.0(1/4)	外：回転ナデ・平行タタキ・沈線 内：回転ナデ・タテハケ	外：自然釉付着
75	215		須恵器 甕	第2面	1区 3K-4i	5 高まり	2層	口径：23.0(1/10)	外：回転ナデ 内：回転ナデ	
75	216		須恵器 甕	第2面	1区 3K-4i	5 高まり	1・2層	口径：18.2(1/10)	外：回転ナデ・縹波状文 内：回転ナデ	
75	217		須恵器 甕	第2面	1区 3K-5j	5 高まり	1層	口径：49.0(1/10)	外：回転ナデ ナデ：回転ナデ	
75	218		黒色土器 椀	第2面	1区 3K-3j	5 高まり	2層	口径：12.4(1/2)	外：ヘラミガキ	A類
75	219		土師器 椀	第2面	1区 3K-4i	5 高まり	2層	口径：13.2(1/8) 器高：3.5	外：回転ナデ・ユビオサエ後ナデ 内：回転ナデ・ナデ	
75	220	27	土師器 椀	第2面	1区 3K-5i	5 高まり	1層	口径：14.8(2/3) 器高：4.4	外：ヘラケズリ	
75	221		土師器 甕	第2面	1区 3K-5j	5 高まり	1・2層	口径：24.0(1/8)	外：ヨコナデ・オサエ後ナデ・ハケ後ナデ 内：ヨコナデ・板状工具によるナデ	
75	222		土師器 甕	第2面	1区 3K-4j	5 高まり	2層	口径：28.0(1/8)	外：ヨコナデ・ハケ 内：ハケ後ヨコナデ・板ナデ	
75	223		土師器 甕	第2面	1区 3K-4i	5 高まり	1層	口径：22.8(1/12)	外：ヨコナデ・ハケ 内：ハケ後ナデ	
75	224		韓式系土器 甕または鍋	第2面	1区 3K-5j	5 高まり	2層		外：ユビオサエ・ナデ	
75	225		土師器 甕または鍋	第2面	1区 3K-3j	5 高まり			外：ユビオサエ	
75	226		土師器 移動式甕	第2面	1区 3K-3j	5 高まり	2層	口径：25.0(1/10)	外：ヨコナデ・ハケ 内：ヘラケズリ・ナデ	
75	227		製塩土器	第2面	1区 3K-5j	5 高まり	1・2層	重さ：26.47g	外：ユビオサエ後ナデ 内：布目痕跡	
75	228		石製品 砥石	第2面	1区 3K-5i	5 高まり	1層	長：3.95 幅：5.15 厚：1.6 重さ：47.74g		流紋岩製
77	229		木製品 曲物	第3面	1区 3L-6a	15溝		径：14.4 厚：0.4		
78	230		緑釉陶器 椀	第5-1層	2区 3L-6d			口径：13.8(1/7)	外：ヨコナデ後海軸 内：ヨコナデ後海軸	
78	231		須恵器 杯蓋	第5-1層	1区 3L-7a				外：回転ナデ・回転ヘラケズリ 内：回転ナデ	
78	232		須恵器 杯蓋	第5-1層	1区 3L-3b			口径：14.4(1/5)	外：回転ナデ・回転ヘラケズリ 内：回転ナデ	
78	233		須恵器 杯蓋	第5-1層	1区 3K-4j			口径：14.0(1/6)	外：回転ナデ 内：回転ナデ	
78	234		須恵器 杯蓋	第5-1層	1区 3L-5a				外：回転ナデ・回転ヘラケズリ 内：回転ナデ	外：ヘラ記号有り
78	235		須恵器 杯身	第5-1層	1区 3K-4i			口径：12.5(1/5) 高台径：7.9 器高：3.9	外：回転ナデ 内：回転ナデ	
78	236		須恵器 杯身	第5-1層	1区 3K-4i			口径：9.0 高台径：8.3(1/4) 器高：3.8	外：回転ナデ・底部ヘラ切り後未調整 内：回転ナデ・ナデ	
78	237		須恵器 杯身	第5-1層	1区 3K-5i			高台径：8.5(1/4)	外：回転ナデ 内：回転ナデ	
78	238		須恵器 杯身	第5-1層	1区 3K-4j			高台径：10.4(1/4)	外：回転ナデ・底部糸切り後未調整 内：回転ナデ・ナデ	

挿図番号	遺物番号	写真図版番号	器種	遺構面・層序	調査区	遺構名	遺構層序	法量 (cm) 脚後の () 内は現在率を示す。	調整・文様	特徴
78 239			須恵器 杯身	第5-1層	1区 3K-4i			高台径：8.4(1/4)	外：回転ナデ・底部ナデ 内：回転ナデ・ナデ	
78 240			須恵器 杯身	第5-1層	1区 3K-5j			高台径：9.2(1/6)	外：回転ナデ・底部不定方向のナデ 内：回転ナデ	
78 241	27		須恵器 杯身	第5-1層	1区 3L-3b				外：ヨコナデ・底部ヘラ切り後未調整	外：底部墨書
78 242			須恵器 杯身	第5-1層	1区 3K-4j			口径：17.7(1/10) 器高：5.5 高台径：12.7	外：回転ナデ 内：回転ナデ	
78 243			須恵器 杯身	第5-1層	1区 3L-6b			口径：12.9(1/12)	外：回転ナデ・回転ヘラケズリ 内：回転ナデ	
78 244			須恵器 杯身	第5-1層	1区 3L-5a			口径：12.9(1/6) 器高：3.7	外：回転ナデ・回転ヘラケズリ 内：回転ナデ	
78 245			須恵器 高杯蓋	第5-1層	1区 3L-6b				外：回転ナデ・列点文 内：回転ナデ	
78 246			須恵器 高杯	第5-1層	1区 3L-6a			脚径：9.2(1/6)	外：回転ナデ 内：回転ナデ	
78 247			須恵器 無蓋高杯	第5-1層	1区 3K-4j			口径：18.4(1/4)	外：回転ナデ・縹描波状文・凸帯 内：回転ナデ	外：自然釉付着
78 248			須恵器 蓋	第5-1層	1区 3L-4a			口径：11.6(1/20)	外：回転ナデ 内：回転ナデ	
78 249			須恵器 短頸壺	第5-1層	1区 3L-6b			口径：7.8(1/5)	外：回転ナデ 内：回転ナデ	外：自然釉付着
78 250			須恵器 壺	第5-1層	1区 3L-3a			口径：19.8(1/9)	外：回転ナデ 内：回転ナデ	外：自然釉付着
78 251			須恵器 壺	第5-1層	1区 3K-6j			底径：13.9(1/7)	外：回転ナデ・回転ヘラケズリ 内：回転ナデ	
78 252			須恵器 甗	第5-1層	1区 3L-5a				外：回転ナデ・縹描波状文・縹状工具によるキザミ 内：回転ナデ	外：自然釉付着
78 253			須恵器 甗	第5-1層	1区 3L-5b				外：回転ナデ・縹描波状文 内：回転ナデ	
78 254			須恵器 甗	第5-1層	1区 3K-4j			口径：23.4(1/10)	外：回転ナデ 内：回転ナデ	
78 255			須恵器 甗	第5-1層	1区 3L-4c			口径：29.4(1/15)	外：回転ナデ・凸帯 内：回転ナデ	
78 256	27		須恵器 甗	第5-1層	1区 3L-4b				外：格子タタキ 内：ナデ	
78 257	27		須恵器 裝飾付蓋 または器台	第5-1層	1区 3L-6c				外：ナデ	外：自然釉付着
78 258			須恵器 甗	第5-1層	2区 3L-5d			口径：10.1(1/4)	外：斜格子タタキ 内：ナデ	
78 259			土師器 甗	第5-1層	1区 3L-4b				外：ヨコナデ・ナデ 内：ヨコナデ・ハケ	
78 260	27		韓式系土器 甗または鍋	第5-1層	1区 3L-3b				外：ナデ	
78 261	27		韓式系土器 甗または鍋	第5-1層	1区 3L-3a				外：ユビオサエ	
78 262			韓式系土器 甗または鍋	第5-1層	1区 3K-5j				外：ナデ	
78 263			韓式系土器 甗または鍋	第5-1層	1区 3L-3a				外：ユビオサエ	
78 264	27		韓式系土器 甗または鍋	第5-1層	1区 3L-3c				外：ナデ	
78 265			韓式系土器 甗または鍋	第5-1層	1区 3L-4b				外：格子タタキ 内：ナデ	
78 266	27		韓式系土器	第5-1層	1区 3K-5j				外：縹描文タタキ 内：ナデ	
78 267			製塩土器	第5-1層	1区 3K-4i			口径：6.0(1/4) 重さ：15.22g	外：ユビオサエ・ナデ 内：ナデ・ユビオサエ	
78 268			製塩土器	第5-1層	1区 3K-4i			口径：9.2 重さ：30.48g	外：ユビオサエ 内：ナデ	
78 269			瓦 丸瓦	第5-1層	1区 3K-5j				凸：タタキ 凹：布目痕跡	
78 270			石製品 砥石	第5-1層	1区 3L-3b			長：4.35 幅：3.65 厚：3.4 重さ：51.88g		砂岩製 二次焼成有り
78 271			金属製品 板状鉄片	第5-1層	1区 3L-6b			長：4.9 幅：3.5 厚：1.0 重さ：48.87g		鉄製
79 272			瓦器 甗	第4-2層	1区 3L-6a			口径：14.0(1/8)	外：ヨコナデ・ナデ・ユビオサエ 内：ヘラミガキ	

挿図 番号	遺物 番号	写真図 版番号	器種	遺構面・ 層序	調査区	遺構名	遺構層序	法量 (cm) 脚径の()内は残存率を示す。	調整・文様	特徴
79	273		瓦器 皿	第4-2層	2区 3L-3c			口径:9.2(完) 底径:5.1 器高:1.7	外:ヨコナデ・ユビオサエ 内:ヘラミガキ	
79	274		金属製品 髷先	第4-2層	1区 3L-4a			長:10.2 幅:3.3 重さ:39.03g		鉄製
82	275		陶磁器 天目茶碗	第2-2層	1区 3L-5a			高台径:3.6(完)	外:回転ナデ 内:施釉	瀬戸美濃
82	276		瓦器 椀	第2-2層	1区 3L-3a			口径:13.6(1/4)		
82	277		金属製品 髷先	第2-3層	1区 3K-4j			長:9.1 幅:5.5 重さ:81.40g		鉄製
278	27		須恵器 甕または壺	第4面	1区 3L-6b	竪立柱建物1 112 柱穴				浴着 自然釉付着
279	27		須恵器 甕	第5-1層	1区 3L-3a					浴着
280	27		須恵器 壺	第5-1層	1区 3L-5b					底部二次焼成有り
281	27		炉壁?	第4面	1区 3L-5a	63溝	2・3層	重さ:3.65g		
282	27		ガラス質滓	第5-1層	1区 3L-6b			重さ:15.79g		
283	写真1		ウマ 遊離燻	第5-1層	1区 3K-5j					上顎第3または 第4前臼歯
284	写真1		ウマ 遊離燻	第5-1層	1区 3K-5j					上顎第2前臼歯
285	写真1		ウマ 遊離燻	第5-1層	1区 3K-6j					上顎第3または 第4前臼歯
286	写真1		ウマ 遊離燻	第5-1層	1区 3K-5j					後臼歯